成田新線建設事業地内
埋蔵文化財発掘調査報告書

I

昭和55年3月

日本鉄道建設公団
千葉県文化財センター

成田新線建設事業地内
埋蔵文化財発掘調査報告書

I

昭和55年3月

日本鉄道建設公団
財団法人 千葉県文化財センター

序

新東京国際空港の開港に伴う交通網の整備の一環として、かねてから懸案となっていました新東京国際空港と都心とを鉄道で結ぶ成田新線が成田地区で一部具体化するに至りました。

一方、成田市周辺は北総台地と呼称され、平坦な台地上には埋蔵文化財が所在している場合が多く、事前に分布調査を実施してきたところであります。

その結果、今回の工事区域の中には3個所の埋蔵文化財包蔵地の所在が明らかとなり、とりあえずこのうちの2個所を発掘調査することになりました。

約半年に及ぶ発掘調査では1基の古墳と数十軒の古墳時代の住居跡及び中近世の土壙等が発見され、貴重な考古資料を提供することができました。

これらの資料は、今後学術資料としてはもとより、教育資料あるいは郷土の歴史に関する理解を深める資料として広く活用してもらいたいと考えています。

最後に、現地の発掘調査に終始協力をおしまなかった鉄道建設公団の諸氏、また、たえず調査に指導、助言をいただいた千葉県教育庁文化課、成田市教育委員会に厚く御礼申し上げるとともに、炎天下のもとで調査員に協力し、発掘作業に従事してくださった地元のみなさまに感謝する次第であります。

財団法人　千葉県文化財センター

理事長　今　井　　正

例　言

1. 本書は、千葉県成田市野毛平における、成田新線建設に伴う埋蔵文化財の発掘調査報告書である。遺跡コード番号は、浅間台古墳を211－001、野毛平高台遺跡を211－002とした。
2. 調査は、発掘を昭和54年３月１日より同９月30日まで、整理を同10月１日より昭和55年３月31日までとし、千葉県教育委員会指導の下に、日本鉄道建設公団との委託契約に基づき、財団法人千葉県文化財センターが実施したものである。
3. 発掘調査等、作業の分担は、現場運営・図面作成・遺構撮影を谷が、遺物の管理・実測・撮影を奥田が行った。
4. 本書の執筆は以下のように分担した。

   古内　第１章第２節１項　第３章第３節４項。

   谷　　第１章第１節　第２節２項　第２章　第３章第１節　第２節３・４項　第３節１～３項　第４節。

   奥田　第３章第２節１・２項。
5. 本書で使用した、地形図等は以下のとおりである。

   第１図　５万分の１地形図（NI－54－19－10）国土地理院著作発行　昭和53年６月

   第２図　２万分の１地形図（第一軍管地方迅速測図　佐倉近傍第７図－成田村）参謀本部陸軍部測量局著作、大日本測量（株）資料調査部発行　明治15年。
6. 発掘調査の実施および報告書刊行までに下記諸機関・諸氏の御指導・御協力を賜わりました。記して謝意を表します。（順不同）

   日本鉄道建設公団・千葉県教育庁文化課・成田市教育委員会、成田市野毛平・東金山・新妻・磯部・幡谷地区、大栄町奈土・臼作・稲荷山・松子・吉岡地区、また本部内勤の皆様、および、中村友彦・田村言行・高橋健一・小松　繁・豊田佳伸・半田堅三・岡川宏道・高木博彦・柿沼修平・越川敏夫・平岡和夫・野村幸希・池上　悟・大村　裕・大城康雄の諸氏。

目　　次

序
例　言
目　次
第1章　総　説…… 1
第1節　地理と環境…… 1
第2節　調査の経緯…… 4
1項　調査に至る経緯…… 4
2項　調査の方法と経過…… 5
第2章　浅間台古墳…… 7
第1節　立　地…… 7
第2節　遺　構…… 7
1項　古　墳…… 7
2項　住居跡その他…… 13
第3節　遺　物…… 15
1項　古　墳…… 15
2項　住 居 跡…… 15
第4節　ま と め…… 15
第3章　野毛平高台遺跡…… 17
第1節　立　地…… 17
第2節　遺　構…… 20
1項　住 居 跡…… 20
2項　土　壙…… 66
3項　火葬跡と土葬墓…… 80
4項　溝状遺構…… 85
第3節　遺　物…… 87
1項　住 居 跡…… 87
2項　土　壙…… 114
3項　火葬跡と土葬墓…… 118
4項　その他の遺物…… 119
第4節　ま と め…… 121

挿 図 目 次

第 1 図　遺跡周辺地形図(新)……2
第 2 図　遺跡周辺地形図(旧)……3
第 3 図　浅間台古墳周辺地形図……8
第 4 図　001 号跡(古墳)墳丘平面実測図……9
第 5 図　001 号跡(古墳)墳丘下平面実測図……10
第 6 図　001 号跡(古墳)墳丘断面実測図……11
第 7 図　001 号跡(古墳)内部施設実測図……12
第 8 図　002 号跡(住居跡)実測図……14
第 9 図　001・002 号跡出土遺物実測図……16
第 10 図　野毛平高台遺跡周辺地形図……付
第 11 図　野毛平高台遺跡全体図……18
第 12 図　野毛平高台遺跡全体図……付
第 13 図　東端崖面トレンチ(上Ｔｒ 1，下Ｔｒ 2)
断面実測図……19
第 14 図　001 号跡実測図……20
第 15 図　002 号跡実測図……22
第 16 図　002 号跡遺物出土状況図……23
第 17 図　003(上)・004(下)号跡実測図……25
第 18 図　005(上)・006(下)号跡実測図……27
第 19 図　007 号跡実測図……29
第 20 図　008(上)・009(下)号跡実測図……31
第 21 図　011 号実測図……33
第 22 図　012(上)・013(下)号跡実測図……34
第 23 図　014(上)・015(下)号跡実測図……35
第 24 図　016(上)・017(下)号跡実測図……37
第 25 図　018(右)・019(左)・020(中)号跡
実測図……39
第 26 図　022 号跡実測図……40
第 27 図　023(左)・025(右)号跡実測図……43
第 28 図　026(上)・028(下)号跡実測図……45
第 29 図　029(上)・052(右下)号跡実測図……47
第 30 図　030 号跡実測図……48
第 31 図　031(上)・032(下)号跡実測図……49
第 32 図　033(上)・034(下)号跡実測図……51
第 33 図　035(上)・036(下)号跡実測図……53
第 34 図　037(上左)・039(上右)・040(下)号跡
実測図……54
第 35 図　041(上)・042(下)号跡実測図……56
第 36 図　043 号跡実測図(1)……58
第 37 図　043 号跡実測図(2)……59
第 38 図　045 号跡実測図……60
第 39 図　046 号跡実測図……61
第 40 図　047 号跡実測図……62
第 41 図　049 号跡実測図……63
第 42 図　051(上)・053(下)号跡実測図……64
第 43 図　101 号跡実測図……67
第 44 図　102～107 号跡実測図……68
第 45 図　108～111 号跡実測図……71
第 46 図　112～119 号跡実測図……72
第 47 図　120～125 号跡実測図……75
第 48 図　126 号跡実測図……77
第 49 図　127～129 号跡実測図……78
第 50 図　132～141 号跡配置図……81
第 51 図　132～135 号跡実測図……82
第 52 図　136～139 号跡実測図……84
第 53 図　140(上)・141(下)号跡実測図……86
第 54 図　001 号跡出土遺物実測図……87
第 55 図　002 号跡出土遺物実測図(1)……88
第 56 図　002 号跡出土遺物実測図(2)……89
第 57 図　002 号跡出土遺物実測図(3)……90
第 58 図　002 号跡出土遺物実測図(4)……92
第 59 図　003・005・006・007 号跡出土遺物
実測図……94
第 60 図　008・009・011・012・014 号跡出土遺物
実測図……96
第 61 図　015・019 号跡出土遺物実測図……98
第 62 図　020・022・026 号跡出土遺物実測図……99
第 63 図　029・030 号跡出土遺物実測図……101
第 64 図　031・032・033・035 号跡出土遺物
実測図……103
第 65 図　036・037・039・041・042 号跡出土遺物
実測図……105
第 66 図　043 号跡出土遺物実測図(1)……105
第 67 図　043 号跡出土遺物実測図(2)……106

第 68 図　045・046 号跡出土遺物実測図 ……108
第 69 図　047・049 号跡出土遺物実測図 ……110
第 70 図　051 号跡出土遺物実測図 ……112
第 71 図　052・053 号跡出土遺物実測図 ……113
第 72 図　101 号跡出土遺物実測図 ……115
第 73 図　103・104・109・127 号跡出土遺物
実測図……117
第 74 図　135・137・138・140・141 号跡出土遺物
実測図……118
第 75 図　その他の出土遺物拓影図 ……120
第 76 図　出土遺物集成図(1) ……123
第 77 図　出土遺物集成図(2) ……124
第 78 図　出土遺物集成図(3) ……125

図 版 目 次

図版 1　成田新線関係遺跡航空写真

浅間台古墳

図版 2　調査前全景
図版 3　調査後全景
図版 4　墳丘断面
図版 5　周溝
図版 6　周溝内遺物出土状況
図版 7　内部施設検出状況，同　完了全景
図版 8　002 号跡完了全景，同　土層断面
図版 9　遺構出土遺物

野毛平高台遺跡

図版 10　調査前遠景，同　近景
図版 11　調査後遠景
図版 12　調査後全景
図版 13　東端崖面トレンチ
図版 14　遺構検出状況
図版 15　遺構検出状況
図版 16　調査後近景
図版 17　001 号跡完了全景，同　遺物出土状況
図版 18　002 号跡完了全景，同　遺物出土状況
図版 19　002 号跡遺物出土状況
図版 20　002 号跡遺物出土状況
図版 21　003・006 号跡完了全景
図版 22　007・008 号跡完了全景
図版 23　009・011 号跡完了全景
図版 24　012・013 号跡完了全景
図版 25　015～017 号跡完了全景
図版 26　018～020 号跡完了全景
図版 27　023・025・026 号跡完了全景
図版 28　028・029 号跡完了全景
図版 29　030～032 号跡完了全景
図版 30　033・035・037 号跡完了全景
図版 31　040・041 号跡完了全景
図版 32　043 号跡完了全景，同　掘形検出状況
図版 33　046・047 号跡完了全景
図版 34　049・051 号完了全景
図版 35　052・053 号跡完了全景
図版 36　101・109 号跡遺物出土状況，110・112・116 号跡土層断面
図版 37　126 号跡完了全景，同　土層断面
図版 38　127・130 号跡完了全景
図版 39　132・133 号跡遺物出土状況
図版 40　134～139 号跡遠景，134 号跡遺物出土状況
図版 41　135・136 号跡完了全景
図版 42　137 号跡完了全景，同　遺物出土状況
図版 43　138 号跡遺物出土状況　139 号跡完了全景
図版 44　140・141 号跡人骨出土状況
図版 45　002 号跡出土土器
図版 46　002 号跡出土土器
図版 47　002 号跡出土土器
図版 48　001～003 号跡出土土器
図版 49　006・008・009・011・012・014・019・026 号跡出土土器
図版 50　020・029・030・032・033 号跡出土土器
図版 51　036・041・043・045・046 号跡出土土器
図版 52　047・051 号跡出土土器
図版 53　053・101 号跡出土土器
図版 54　107・127 号跡出土土器，遺構出土土製品
図版 55　遺構出土土製品
図版 56　遺構出土石製品
図版 57　遺構出土古銭

第1章　総　説

第1節　地理と環境

成田市は千葉県北部中央、北に利根川が東流し、西に印旛沼が横たわる、下総台地上にある。市の中央で北流する根木名川は、その中流で、いずれも西流する取香川（第1図では尾羽根川となっている）・荒海川・尾羽根川を合せ、利根川に注ぐ。市の東半部は、これらの小河川により形成された支谷がさらに縦横に入り込み、極めて複雑な舌状台地を多数作り出している。舌状台地の発達は取香川流域でとくに顕著で、標高30～40mの台地上には遺跡の数も多い。

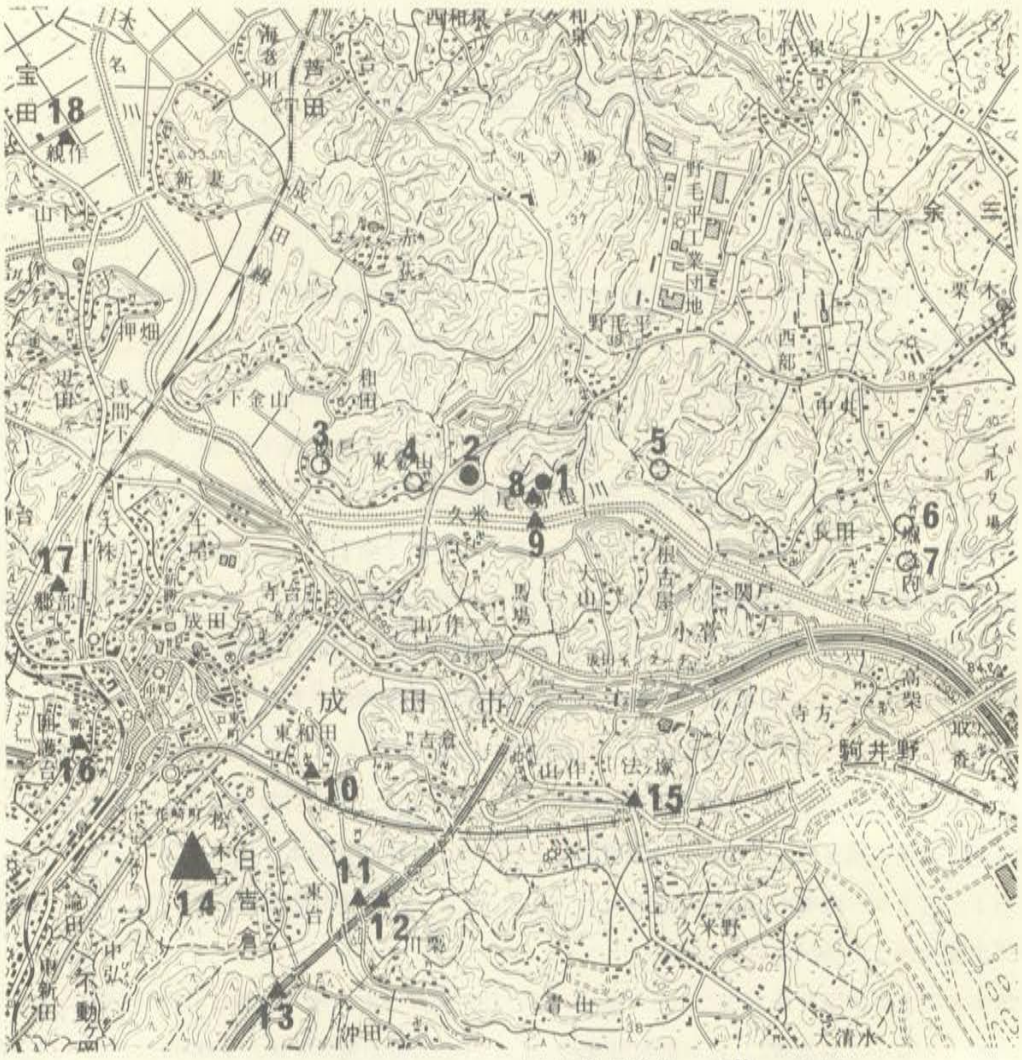
本遺跡もこのような地形のうちに立地する。第1図（以下略す）の1が浅間台古墳、2が野毛平高台遺跡である。成田新線建設に先立って行われた分布調査によると（註）、前者をNo.29、後者をNo.27遺跡として報告、他にも3＝No.24（弥生後期等）、4＝No.26（古墳群）、5＝No.30（縄文前期等）、6＝No.32・33（古墳等）、7＝No.34（土師晩期）等が確認されている。

1に隣接して8＝浅間台古墳があり、昭和28年に調査されている（註2）。これによると本台地上には消失したものも含め10基の円墳が群在していたらしい。調査対象は台地最先端の一墳で、墳丘直下に粘土棺を検出、棺内には頭椎大刀・直刀各1・鏃等10数本が納置されていたという。また1の直下9＝取香川低地も発掘された（註3）。縄文～土師時代遺物が出土するが、とくに国分式土器を伴う土壙が注目された。

根木名川上流に眼を転ずると、その東岸には、10＝東和田上人塚（古墳）、11＝川栗台古墳群（註4）（6基中2基調査）、12＝東和田遺跡（註5）（土師後期集落9軒）、西岸には、13＝日吉倉遺跡（註6）（土師前期方形周溝3基、同後期住居跡3軒等）、14＝日吉倉遺跡群（註7）（弥生～土師後期集落、古墳群）、さらに東岸奥部には、15＝法華塚遺跡（註8）（先土器時代・古墳等）がある。

一方、成田市街西側台地上には数多くの古墳・集落跡の存在することで知られる（註9）成田ニュータウンがあり、その東端に、16＝中囲護台遺跡（註10）（縄文中期住居跡3、土師晩期住居跡2軒等）、同北端に、17＝加定地遺跡（註11）（縄文～土師晩期の複合遺跡）があり、さらに根木名川本流低地に、18＝宝田上表低地遺跡（註12）（土師晩期・独木舟出土）がある。

これら既調査の遺跡に加え、種々の分布調査の成果（註13）により、本遺跡周辺の歴史的環境を考えるなら、土師前期～晩期に至る遺跡が主体となる。墓としては、13の方形周溝に初まり、8・10・11・14等の古墳、さらに15にみられる終末期古墳と続く。集落としては日吉倉遺跡群の弥生後期～土師前期の数軒の住居跡と、後期集落、12・16・17の後～晩期集落へと連なる。いずれ



第1図　遺跡周辺地形図（新）

第2図　遺跡周辺地形図（旧）

も取香川より南に位置する遺跡であるため、本遺跡も含め取香川北岸の遺跡との関連は不明であった。今回の調査はそうした意味で北岸の遺跡の性格を解明する一歩でもある。

（註１）中村恵次他『成田新幹線関係遺跡分布調査報告書』千葉県都市公社　昭和49年３月。

（註２）山田　厳「浅間台古墳」『成田史談』第５号　成田史談会　昭和34年、千葉県文化財センター研究部『研究紀要』4　千葉県文化財センター　昭和54年３月。

（註３）宮入和博「野毛平・同免取香川低地遺跡の調査」『成田市の文化財』第５輯　成田市教育委員会　昭和49年３月。
小川和博・工藤英行『埋蔵文化財調査報告書』２　成田市埋蔵文化財発掘調査団・成田市教育委員会　昭和50年。

（註４）工藤英行他「川栗台古墳群発掘調査報告（１）」『成田市の文化財』第10輯　成田市教育委員会　昭和54年３月。

（註５）栗本佳弘「成田市東和田遺跡」『東関東自動車道（千葉－成田線）関係埋蔵文化財発掘調査報告書』　千葉県文化財保護協会　昭和46年３月。

（註６）栗本佳弘「印旛郡富里村日吉倉遺跡」『東関東自動車道（千葉－成田線）関係埋蔵文化財発掘調査報告書』　千葉県文化財保護協会　昭和46年３月。

（註６）浜名徳永他『遺跡　日吉倉』　芝山はにわ館　昭和50年。

（註８）平野元三郎・内野美三夫『法華塚遺跡』法華塚遺跡調査団　昭和46年。

（註９）玉口時雄他『公津原－成田ニュータウン内遺跡の考古学的調査』　千葉県企業庁　昭和50年12月。

（註10）江森正義・藤下昌信他『成田市中囲護台遺跡発掘調査報告』　成田市教育委員会・中囲護台遺跡調査団　昭和48年３月。

（註11）小川和博他「成田市加定地遺跡報告－古墳・歴史時代編－」『成田市の文化財』第７・８輯　成田市教育委員会　昭和52年３月。
小川和博「成田市加定地遺跡発掘調査報告－縄文時代編－」『成田市埋蔵文化財調査特集－成田市の文化財』第９輯　成田市教育委員会・成田市文化財保護協会　昭和53年３月。

（註12）藤下昌信・宮入和博「宝田上表低地遺跡発掘調査概報」『成田市の文化財』第５輯　成田市教育委員会　昭和49年３月。

（註13）千葉県企画部企画課『千葉県埋蔵文化財分布図付千葉県埋蔵文化財包蔵地等一覧』千葉県広報協会 昭和53年９月。
大野政治他『成田市文化財分布調査報告書－埋蔵文化財編－』　成田市教育委員会・成田市埋蔵文化財分布調査団　昭和49年３月。
滝口　宏他『印旛手賀』　早稲田大学考古学研究室　昭和36年10月。

第２節　調査の経緯

１項　調査に至る経緯

本報告書は、成田市に所在する浅間台古墳（No.29遺跡）、野毛平高台遺跡（No.27遺跡）について所収したものである。調査は昭和54年に実施したわけであるが、それに至るまでの経過について若干触れておきたい。

現在、海外からの来日者にとって空の玄関口として機能している新東京国際空港は、都心からかなり遠距離にあたるため空港の開港と同時に、都心への足を確保するため新幹線の敷設が計画されていた。このため、日本鉄道建設公団ではその敷地にあたる部分について遺跡の分布調査を

千葉県教育委員会に依頼した。これを受けて昭和48年に財団法人千葉県都市公社では県教育委員会の指導に基づき、成田新幹線予定地内の分布調査を実施し、その成果を報告※した。

その成果に基づき日本鉄道建設公団では、事業地内に所在する埋蔵文化財について、その取扱いを県教育庁文化課と協議しつつ助言を求めた。その結果、昭和52年4月に入って県教育庁文化課から急拠財団法人千葉県文化財センターに2ヵ所の調査が依頼された。

しかし、昭和52年度当初において事業地内での土地買収状況が思わしくなく、発掘調査は延期せざる得ないこととなった。このため当センターでは昭和53年度まで調査を留保し、用地の取得状況にあわせた調査行程の変更を余儀なくされた。54年度に入り、発掘調査の条件が整備されたのに伴いNo.29遺跡の本格的調査が開始されることとなった。ついで、同年5月にはNo.27遺跡についても調査が開始された。No.27遺跡の遺構・遺物の出土状態から昭和54年9月までの調査期間を予定し、終了次第No.24遺跡へと計画したが、用地問題が未解決のため調査は不可能となった。そこで、昭和54年度についてはNo.27遺跡の調査終了後、引続きNo.29遺跡とNo.27遺跡の整理作業に移行し、このたび報告書刊行のはこびとなった。

※『成田新幹線遺跡分布調査報告書』昭和49年3月31日　財団法人千葉県都市公社

2項　調査の方法と経過

成田新線関係遺跡の発掘調査は、昭和54年3月より準備を開始、4月2日より本調査に入った。本調査は、面積的に短期間で行い得る浅間台古墳より開始することとした。

浅間台古墳の本調査に先行して墳丘の実測を行い、同4月2日には環境の整備を開始した。しかしこの間に、墳丘の北部分を破壊されてしまったことは残念である。

調査の方法は、東西南北に設定した基本杭に沿って幅1mの断面観察用の土手を残し、墳裾部分を掘り下げ、周溝の確認を行った。中央部分は表土除去ののち、内部施設の検出・精査をし、墳丘の掘り下げを継続した。墳丘の掘り下げは4月16日までにほぼ終了し、断面の実測・写真撮影の後、これを取り払い、5月に入ってから墳丘下平面の実測を済ませる。南西拡張部に発見された住居跡はこれと平行して調査をし、5月7日にはすべてを終了した。

野毛平高台遺跡は浅間台古墳と平行して、4月16日より環境整備を開始し、本格的に調査を開始したのは5月に入ってからである。

調査の方法はグリッド法を用い鉄道予定の中軸線を基準とした40mグリッドを想定、このなかに4mグリッドを設定した。大グリッドは中軸線を真中にA～C、その南端にわずかに突出した部分をD、北端部分に西からX～Zとする。小グリッドは00～99番までを基準とし、グリッド番号は北西隅に表記することとした。

調査は、原則として東西に幅2mのトレンチで確認を開始したが、遺構の重複が著しいため全

面発掘に切り換えた。6月15日までに表土除去作業を終え、住居跡40余軒、土壙約30基等の存在が予想された。土壙のうち101～129号跡から発掘を始め、7月に至って003・001・030～037号跡等重複の少ない住居跡に発掘を行う。8月には012～028号跡に至る調査区南半部に拡がる重複部分の住居跡に入り、とくに043号跡を中心とする022～025号跡は8月中旬に開始し、043号跡の床面下精査を終えたのは9月21日である。調査区西端に散在する火葬跡の調査は9月中旬より末日までを要し、9月28日には現場の撤収作業を行い、同月末日までにすべてを終了した。

第2章　浅間台古墳

第1節　立　地

本墳の位置する台地は西流する取香川の北岸にある。台地の東西には小支谷が深く入り込み、台地全体は南北に約1㎞の長さ、頂部の幅10ｍ弱の尾根状を呈す。台地先端は徐々に幅を増し、3,000㎡程の平坦面を形成する。台地の基部には国道51号線が走り、中間部分は雑木林、先端の平坦面は栗林となっている。

古墳は〝尾根〟と先端の連接する狭隘な部分に立地し、北西田地面との比高差22ｍ、標高32ｍ前後である。所在する地籍は、成田市野毛平字浅間684番地である。5万分の1の地形図　ＮＩ－54－19－10（成田）では、a（左上角よりの直線幅）＝20.05㎝、b（左下角同）＝32.80㎝を計る。

なお、本墳周辺の古墳群は過去に調査が行われ報告もなされており、これに準拠して、本墳を「浅間台古墳」001号跡と呼称した。

第2節　遺　構

1項　古　墳

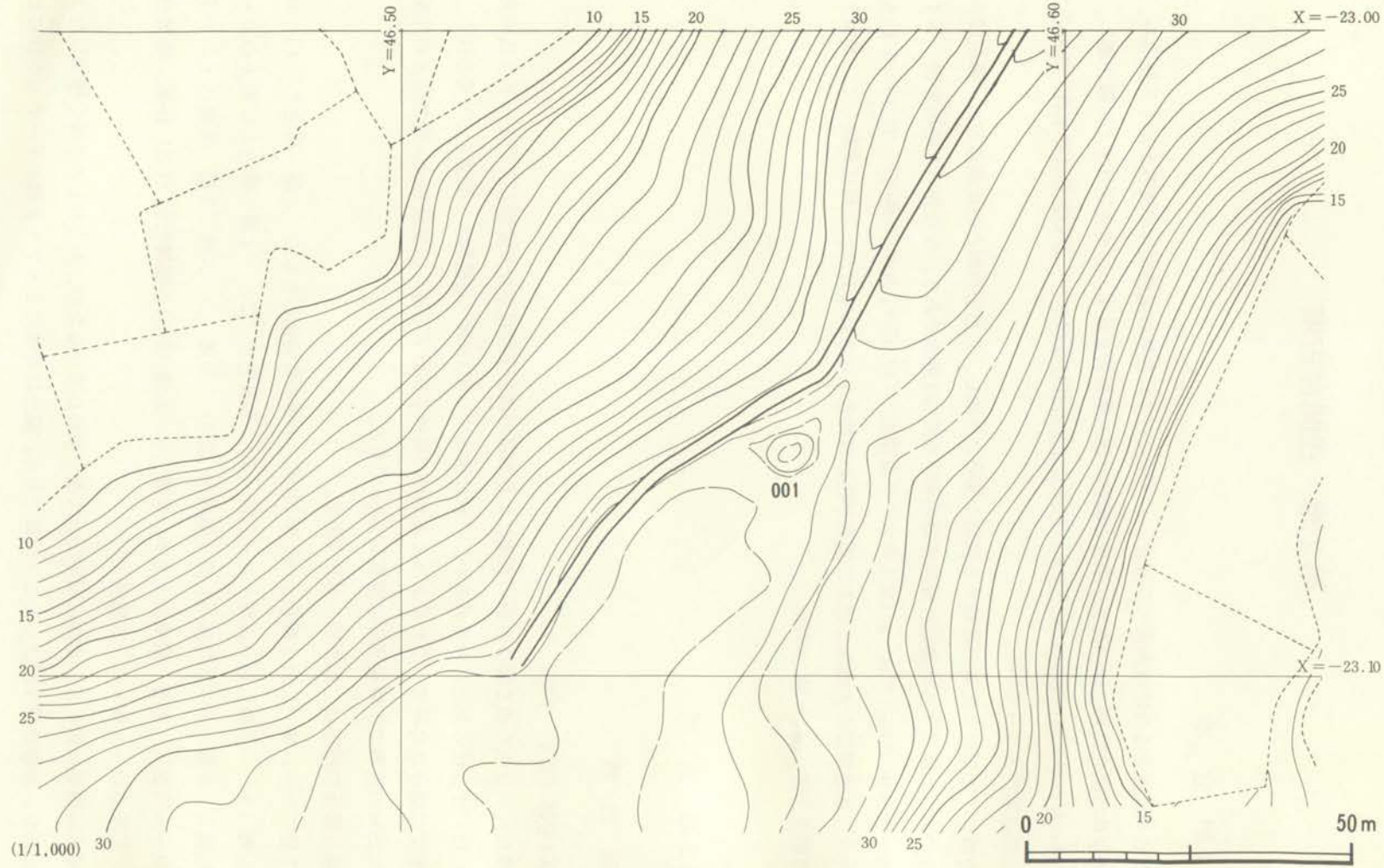
・001号跡（第4～7図）

（墳丘）　北側を通る幅2ｍ程の赤道により本跡の墳丘下部はかなり変形している。また北半東西には〝畔〟状の突出がみられるが、これは後述する003号跡（道路跡）と関連すると思われる。南半での遺存は良好で、これによってみかけの規模を推計するなら、直径10ｍ、現地面との比高差1.25ｍの円墳で、墳丘頂部は標高33.68ｍである。

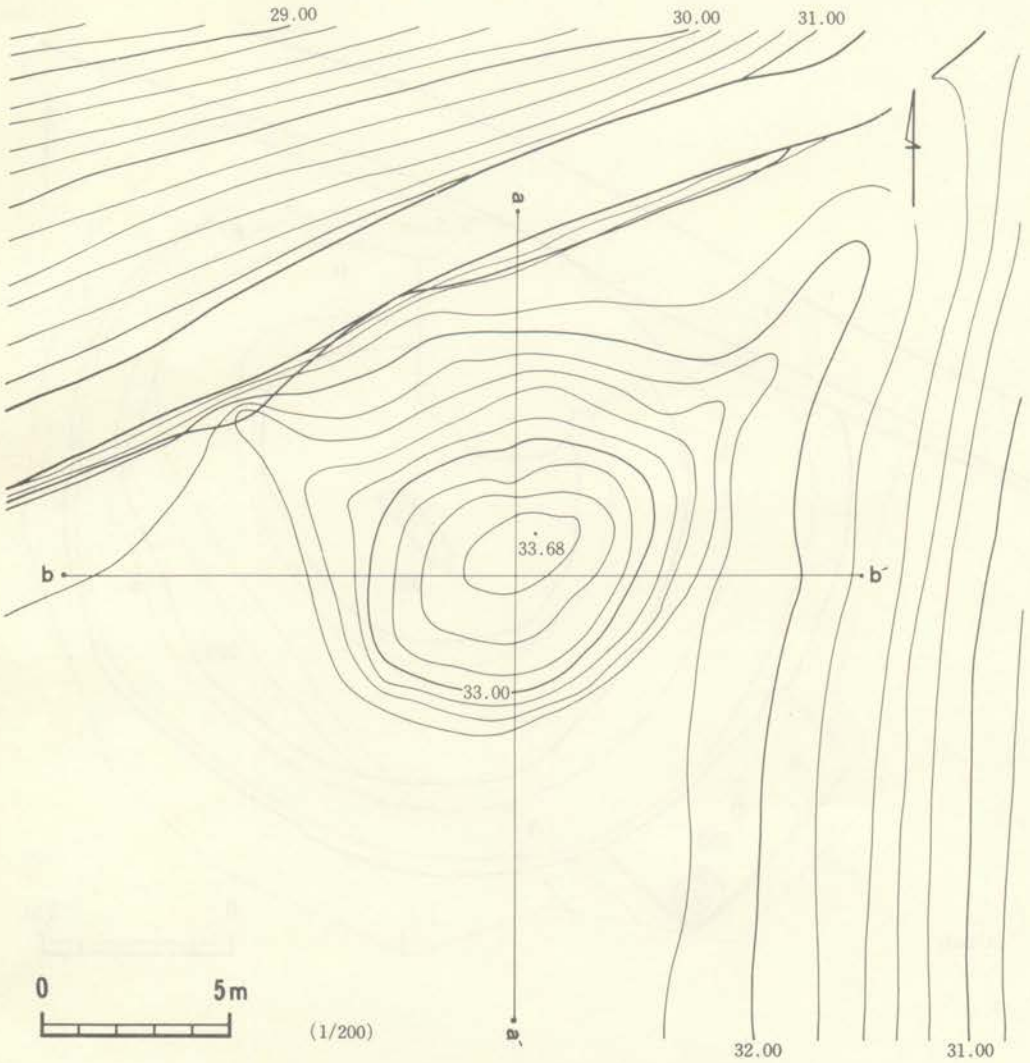
墳丘断面の層序は、以下のとおりである。

1層　ローム塊（3.5）：褐色土（1.5）1'層　1層が軟弱化したもの　2層　褐色土（4）：ローム塊（1）　3層　ローム塊・ローム粒（3）：黒褐色土（2）　4層　褐色土に若干のローム粒混入　5層　ローム粒等（2.5）：褐色土（2.5）　6層　ローム塊　7層　黒褐色土に若干のローム塊混入　8層　暗褐色土主体　9層　ローム塊（3.5）：明褐色土（1.5）10層　暗褐色土に若干のローム粒・ローム塊混入

墳丘の構築に際して、北側に旧地形が大きく傾斜しているため、あらかじめ9層を補塡したようであり、本層は盛土に比しかなり硬質である。盛土は周囲に5・7・8層がドーナッツ状にめ



第3図　浅間台古墳周辺地形図

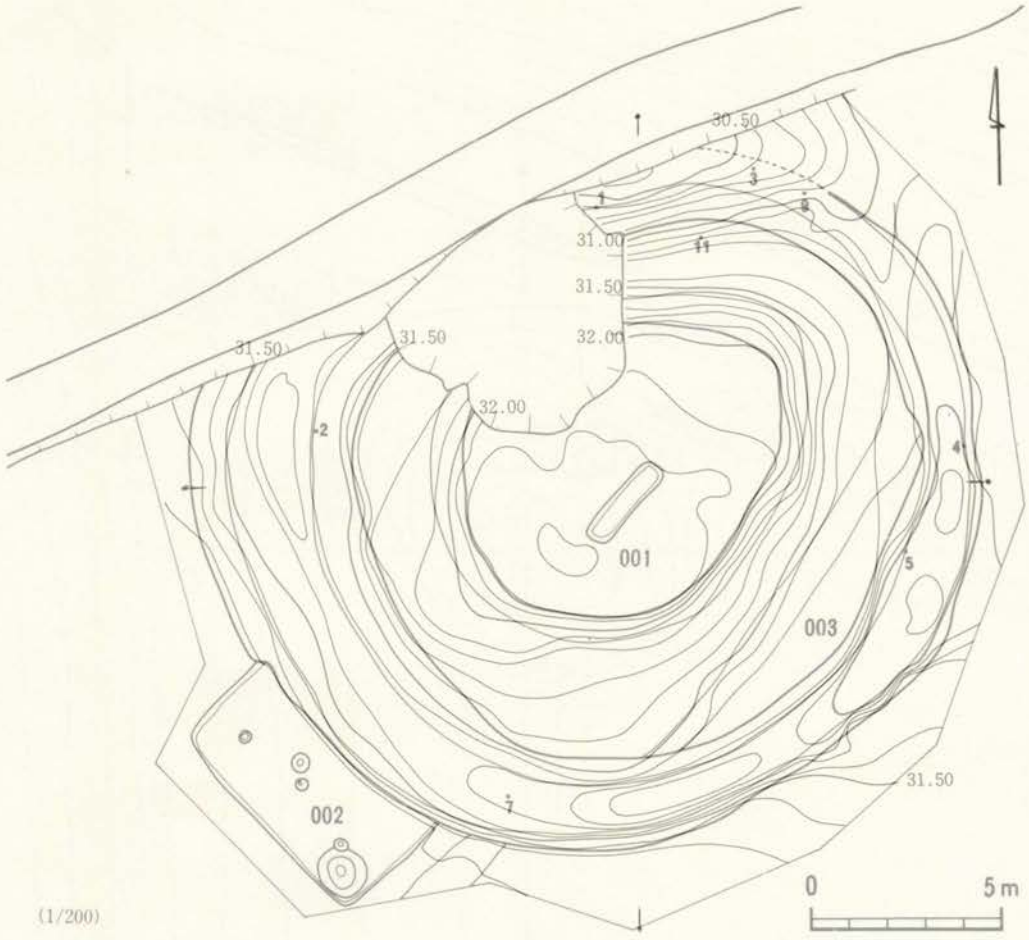


第4図　001号跡（古墳）墳丘平面実測図

ぐり、その内側に4・6層を積んで基段とする。各層は交互に盛り上げられている。さらにその上に1・2層を部厚に積み上げ墳丘としている。基段と上段の間には断続的に黒色薄層が認められる。旧表土面から、現表土化の進みつつある1'層上面まで1mである。なお10層は盛土の流失残存であろう。

（墳丘下の状態）　盛土除去の後の旧表土の残存する平面形は、不整な円形を呈す。とくに北東部分で歪みが著しく、北東－南西で径9.2m、南－北で径7.5mを計る。その面は前述の如く、整地しており、ほぼ平坦である。

盛土と周溝内縁の間には「テラス」状の緩斜面が作り出されている。全体に南で4mと幅広く北で2.5mと狭く傾斜も増す。また東半部には北東－南西に003号跡が重複している。



第5図　001号跡（古墳）墳丘下平面実測図

（周溝）　赤道下は調査できなかったが、全周すると思われる。埋没土は以下の如くである。

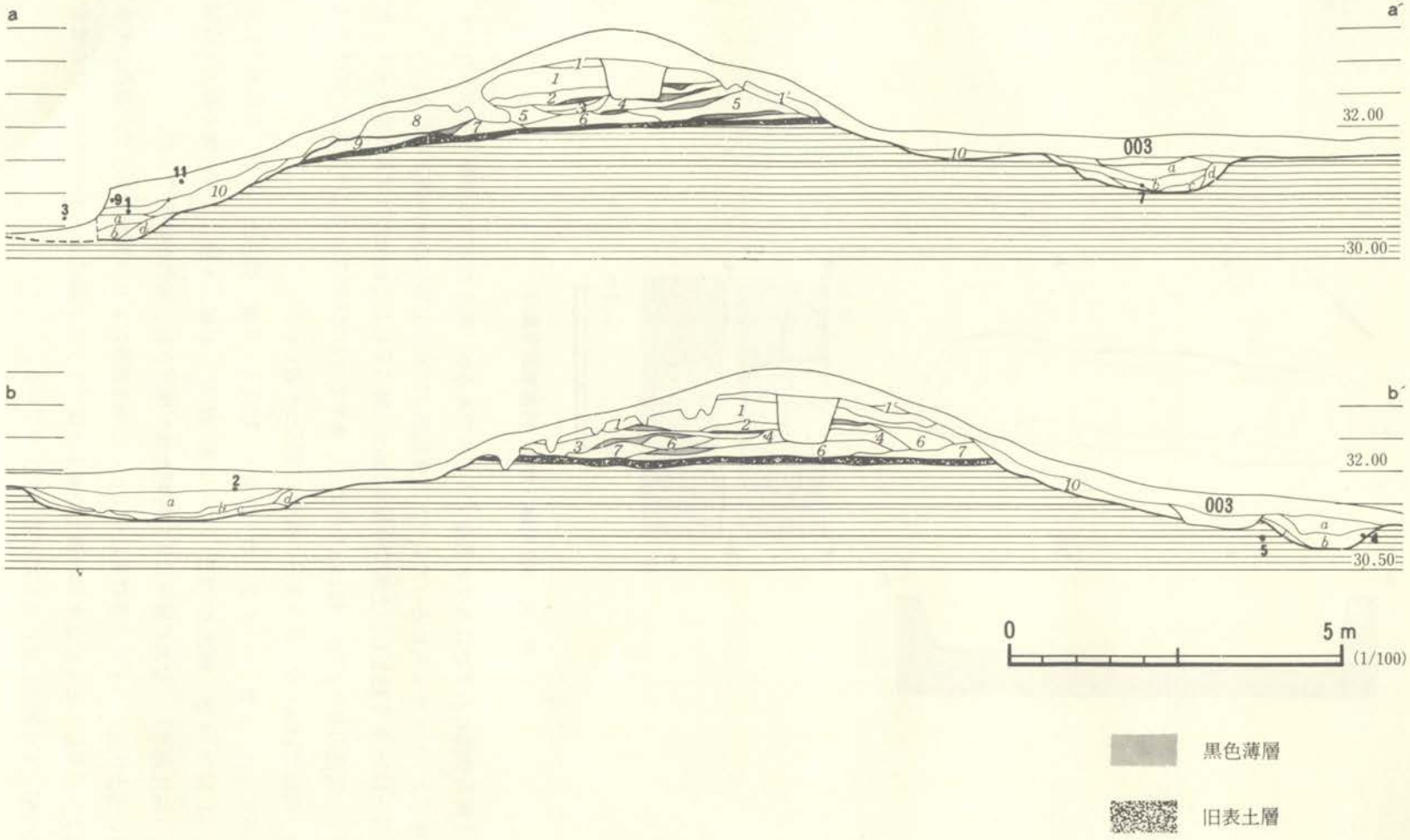
a層　真黒色土（4）：暗褐色土（1）　b層　暗褐色土（4）：真黒色土（1）　c層　ローム・ローム粒（2.5）：暗褐色土（2.5）　d層　ローム（4）：褐色土（1）

埋没土はいずれの部分でもほぼ一致するが、幅広となる西半ではとくにa層が部厚い。

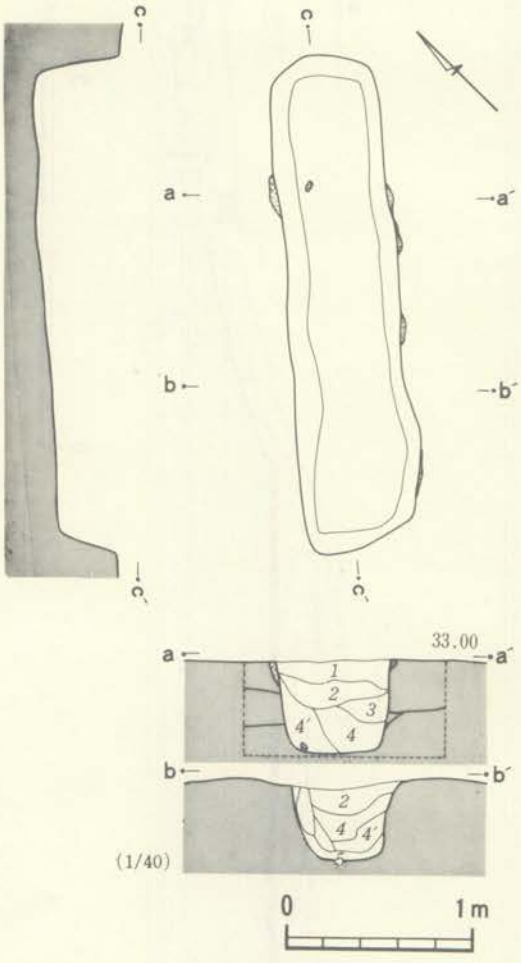
溝の幅は西側が最大で約4m、東側でわずか1.7mで、北側外端はすでに削平され不明瞭である。深さは全体に平均して約40cmであるが、東および南では溝底面が部分的に「U」字状に窪む。

周溝全体の規模は内縁で径15m、外縁で東西径20.5mを計り、墳丘部に比べ、全体に南に中心がずれるようである。

（内部施設）　墳頂部の盛土を掘り下げて構築された土壙である。検出の発端となった青白色



第6図　001号跡（古墳）墳丘断面実測図



第7図　001号跡（古墳）内部施設実測図

粘土は、土壙両側面にわずかに点々と遺存するのみであるが、幅を推定する手懸りとなった。その位置は中心よりわずかに南に寄っており、土壙底面は旧表土上20～30cmの高さにある。

土壙はN－40°－Eを軸とし、上面での長さ260cm、幅は平均して60cmのほぼ長方形を呈す。断面は箱型で、底面の長さ257cm、幅40cmを計るが、南半ではわずかに広がるようである。深さは北端で45cm、南端で30cmとなり北半部分の底面には凹凸が著しい。

土壙内埋没土は、1層　ローム塊に若干のローム粒混入　2層　褐色土　3層　黒色土（3.5）：褐色土（1.5）　4層　褐色土（2.5）：ローム粒（2.5）　4'層　4層にローム塊を混入　5層　黒色土（粘性あり）　なお4'層中に青白色粘土塊が検出され、底面が推定できた。

（遺物の出土状況）　全体に遺物量は少くとくに内部施設内よりは皆無であった。遺物の大半は周溝内より出土し、とくに北東部の覆土中層または「テラス」端にまとまっていた。さらに5・7は溝底面、2は側面に流れ込んだ状態で出土している。

いずれも本跡に直接関係するものとは言えないが、わずかに環境整備の際、墳頂より表採された管玉（13）が副葬品の一部の可能性がある。

2項　住居跡その他

・002号跡（第8図）

古墳の南西に位置する住居跡で、北東半部を周溝によって完全に破壊され、さらに中央部分および炉の存在すると思われる付近も攪乱を受けていた。

覆土は　1層　黒褐色土に若干のローム粒を混入　2層　暗褐色土にローム粒・ローム塊を混入　3層　暗褐色土にローム粒・焼土を混入　4層　暗褐色土（4）：ローム粒（1）　5層　褐色土（3）：ローム塊（2）。

残存する西壁の長さは6.0m、中央では6.4mを計り、わずかに膨らみのある方形と考える。主軸はN－42°－Wである。壁はやや傾斜し、軟弱、壁溝はない。床面は全体にやや軟弱で、凹凸も著しい。床面に密着して焼土・木炭片が検出され、被災跡の可能性もある。

主柱穴は4本である。径35～40cmの円形で、西半に遺存するものの深さは70cm・90cmとかなり深い。周溝内に検出された2本はわずかにその痕跡をのこすだけである。柱穴間隔はP_1-P_2 4.00m、P_2-P_3 3.00m、P_3-P_4 3.80m、P_4-P_1 3.15mで、P_1のみがわずかに外方にずれていることがわかる。その他に、床面中央部分に焼土の混入した2個の窪みがある。ともに深さ20cmたらずで本跡との関係は不明である。

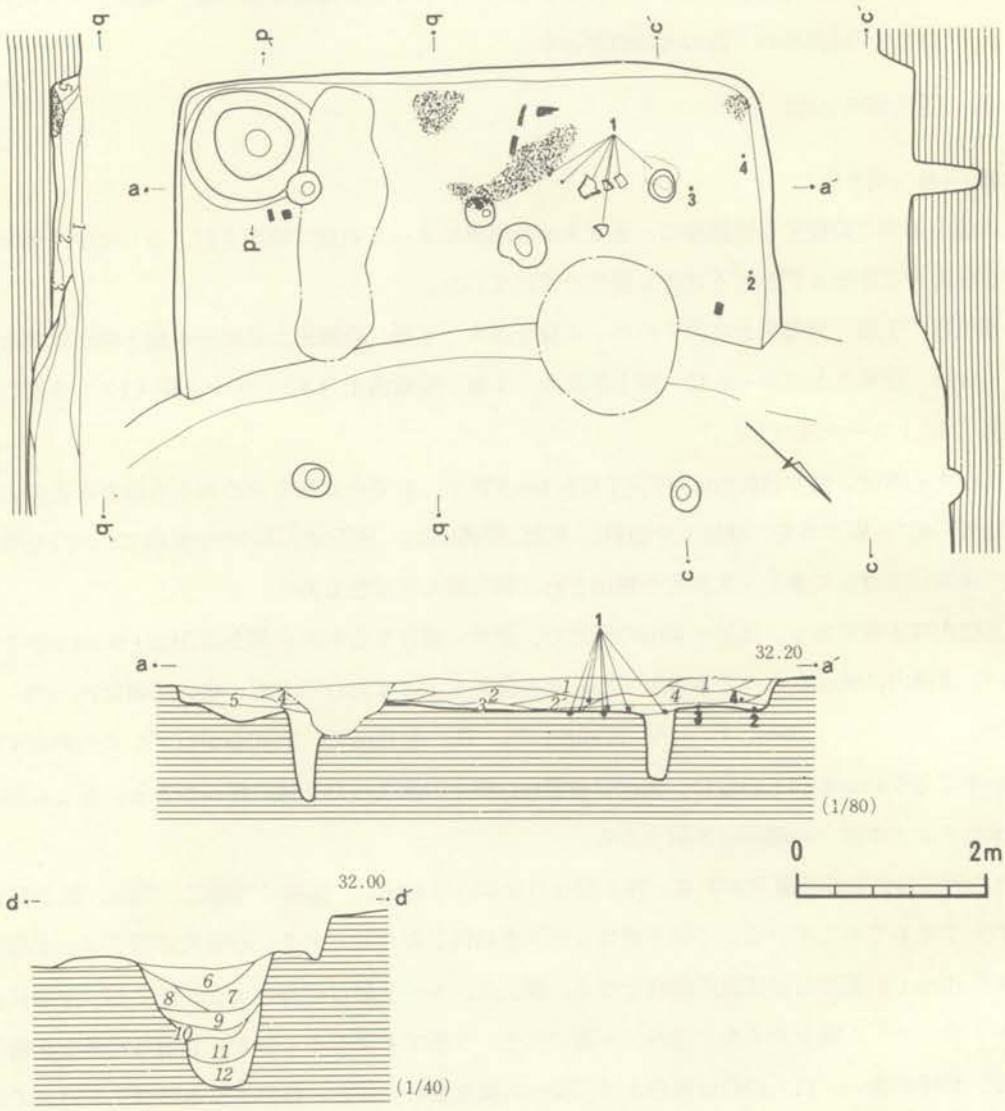
南西隅には大形の貯蔵穴がある。75×82cmのほぼ円形を呈し、周囲には幅25～30cm、高さ5cm程の土手をめぐらしている。この土堤はロームを貼付したものである。貯蔵穴の深さは、土堤上面より70cmで断面形はほぼ截円錘状となる。覆土は、6～9層は暗褐色土を主体とし、上層にはローム粒、ローム塊をやや多く含み、8層で焼土、9層で木炭を多く含む。10層は特異な灰褐色土で、粘性が強い。11・12層は褐色土で、ローム塊を含む。覆土の観察より本跡焼失の時点ではすでに10層が形成されていたことが知れる。

遺物の量はかなりであるが、破片が多く、とくに北半部分に集中して出土した。1はP_4付近の床面に密着して散乱し、石製品は北壁直下に流れ落ちたように出土した。

・003号跡（第5図）

古墳「テラス」東半を中心に発見された道路跡である。調査区内に約23mの長さで遺存し、古墳周溝の覆土にもその痕跡を残す。検出された部分での幅は一定せず、1m弱～2.5m程である。本来は溝状に窪んでいたものであろうか、底面は極めて堅緻であった。

道は墳裾をめぐるようにして、現赤道へ至っていたものであろう。遺物はなく、時期不明であるが、現地表面に全くその存在を認め得ず、近世以前と考える。



第8図　002号跡（住居跡）実測図

第3節　遺　物

1項　古　墳

・001号跡（第9図）　本跡出土の遺物は、土器と土・石製品であり、量的には僅少である。

土器はいずれも土師器である。1は口径15cm程の甕で、「く」字状に立上る口辺は中間でやや膨らむ、球形胴で全体に極めて丁寧なナデ調整される。全体に赤褐色を呈し、胎土・焼成とも良い。2～5は丸底の坏である。2・3はほぼ半球形を呈し、口縁付近にわずかな横ナデがみられる他は、ヘラナデ調整される。3も基本的には半球形であるが、4とともに、口辺部が明瞭となる。ともにヘラ削りの後ナデ調整される。胎土・焼成とも良く、2・5は灰褐色、他は褐色である。6・7は手捏ね土器で、高坏・鉢形である。ともに黄褐色で焼成は良い。8・9は土製品である。8は糸巻き形、9は紡錘車形を呈し、造りも焼成も良い。ともに全面に縄文原体をころがしている。前者は付加条縄文と「S」字結束文、後者は付加条縄文のようである。10～13は滑石製品で、各々紡錘車残欠・双孔円板・鏑ぎのない偏平な剣形模造品・管玉である。

2項　住居跡

・002号跡（第9図）　土師器片少量の他は石製品である。1は口径18.5cm、胴径約26cmの肉薄の甕である。「く」字状に開く口辺には一部にハケ目が遺存し、球形胴は丁寧なヘラナデが施され、内面一部には指頭による圧痕がみられる。胎土に砂粒を含むが、焼成とも良く、灰褐色を呈す。2は高坏である。脚部で裾の拡がりが顕著である。わずかにハケ目を残すが全体にナデ調整される。3・4は滑石製模造品で、とくに4の剣形品には鏑ぎがない。

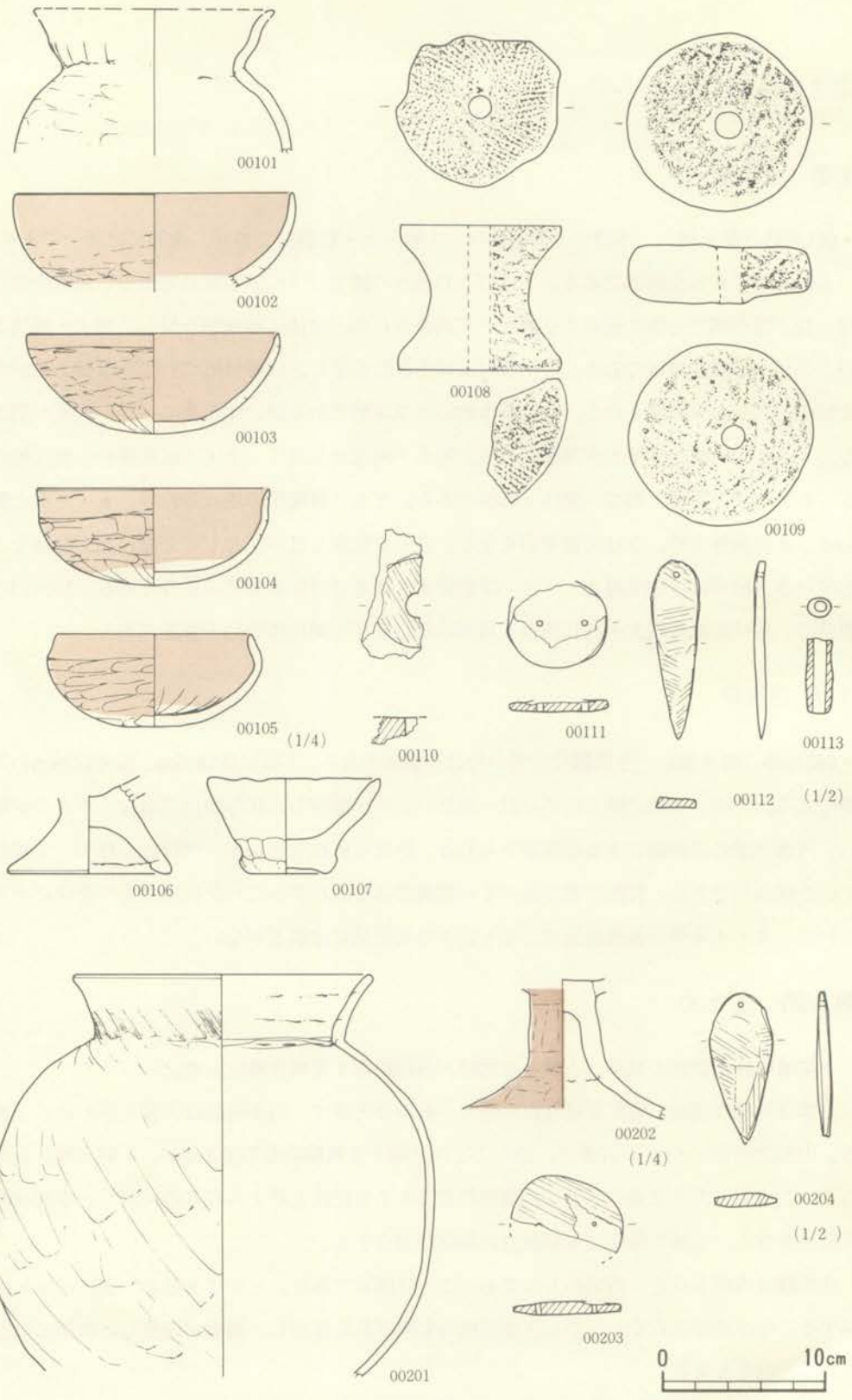
第4節　まとめ

本墳域の発掘調査の結果、古墳・住居跡・道路跡各1遺構を検出した。

古墳は外径20.5m、墳丘推定9mの極く一般的な円墳で、内部施設は直葬と思われる土壙である。山田氏報告（註1）の古墳は、恐らくこれに類する規模のものであるが、「粘土棺」を施設されていた点で、大きな違いがある。遺物の点でも7世紀代と考えられるのに対し、本墳は滑石製模造品を含み、土器の様相にも和泉式の特徴が遺存する。

住居跡は古墳より古い時期のものであることは確実である。とくに土器の一部にはハケ目が遺存することが注目される。しかし古墳同様石製模造品も伴出し、両者が連接した時期に位置付けられる可能性もある。

（註1）山田巌「浅間台古墳」『成田史談』第5号成田史談会昭和34年。



第9図　001・002号跡出土遺物実測図

第3章　野毛平高台遺跡

第1節　立　地

本遺跡は、浅間台古墳より西に500m程の台地上にある。この台地は南に取香川本流を、東西に支谷がめぐり、さらに西支谷より分岐した小支谷により北側までも分断され独立丘状を呈する。本来の台地全体は長さ400mで、東西側面は鋸歯の如く入り組んでいる。現状では西～北に国道51号線が走り、台地縁辺には杉・竹などの林がめぐり、頂部のみ畑地および荒地化している。

遺跡はこの頂部全体に渡ると思われるが、調査区は台地中央部分の幅50m、長さ80mに限られる。南面取香川低地面との比高差は約23m、標高32mである。所在する地籍は成田市野毛平字高台151番地外である。5万分の1の地形図では、浅間台古墳と同様、a＝19.10cm、b＝32.35cmを計る。

台地上面の調査に平行して、東斜面に2本のトレンチを入れ、断面を観察した（第13図）。

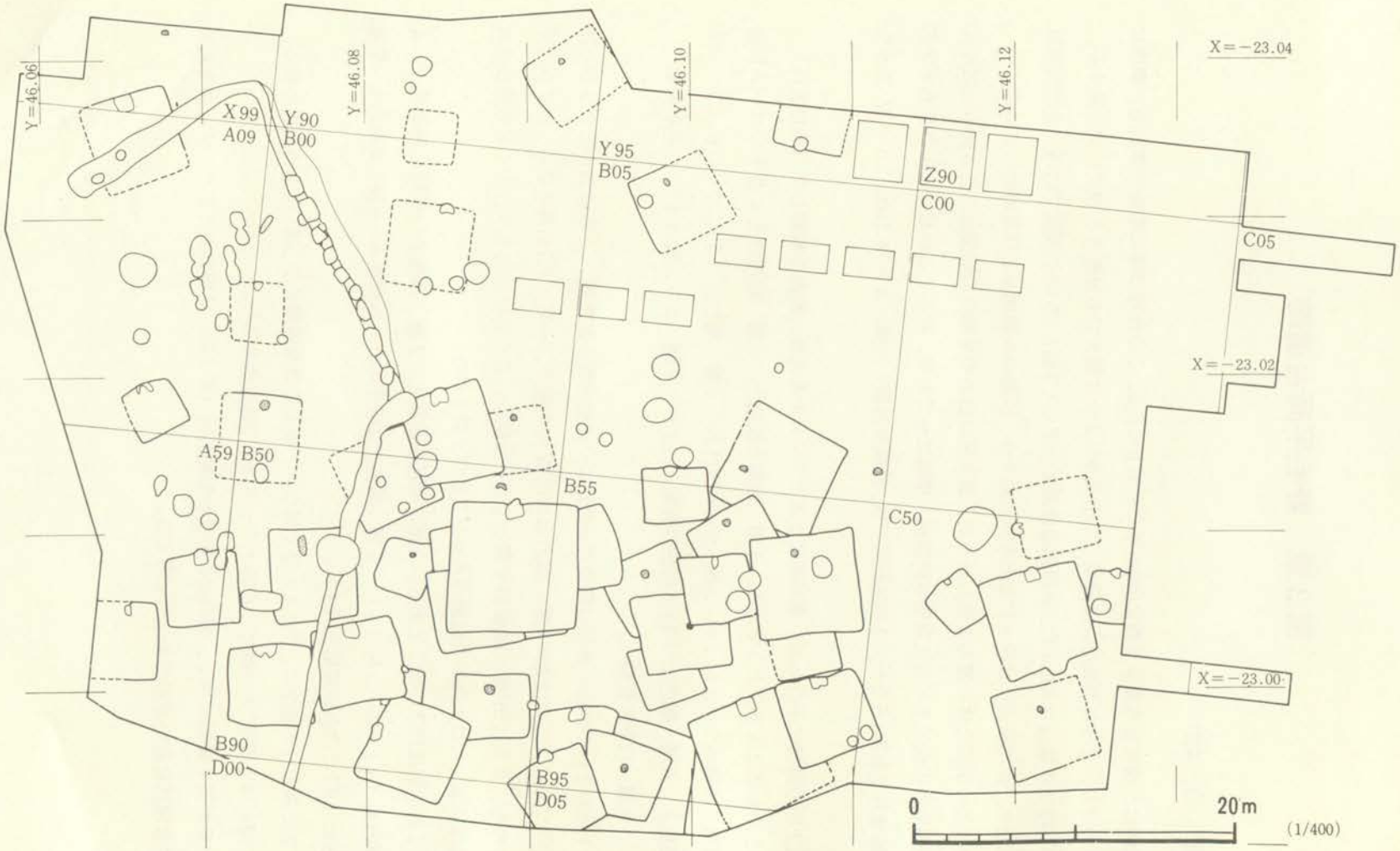
Tr.1の土層は以下のようである。1層　暗褐色粗粒土　2層　暗褐色土に若干のローム粒混入　3層　暗褐色土（3.5）：ローム塊・ローム粒(1.5)　4層　褐色土（3）：ローム粒（2）　5層　褐色土　6層　褐色土（3）：白色砂質粘土（2）　7層　ローム粒（3）：白色砂質粘土（2）　8層　白色砂質粘土。

Tr.1でみられた地山の推移は標高27m付近より白色砂質の粘土層、さらに24mあたりから砂層のようである。この付近の地形の傾斜はほぼ45°の角度で、一気に3.7m落ち込み、わずかな平坦面ののち、さらに20°程の緩傾斜を保って下へと続く。こうした状況より、少くとも過去において急傾斜部分には人為的な削減のあったことが予想される。

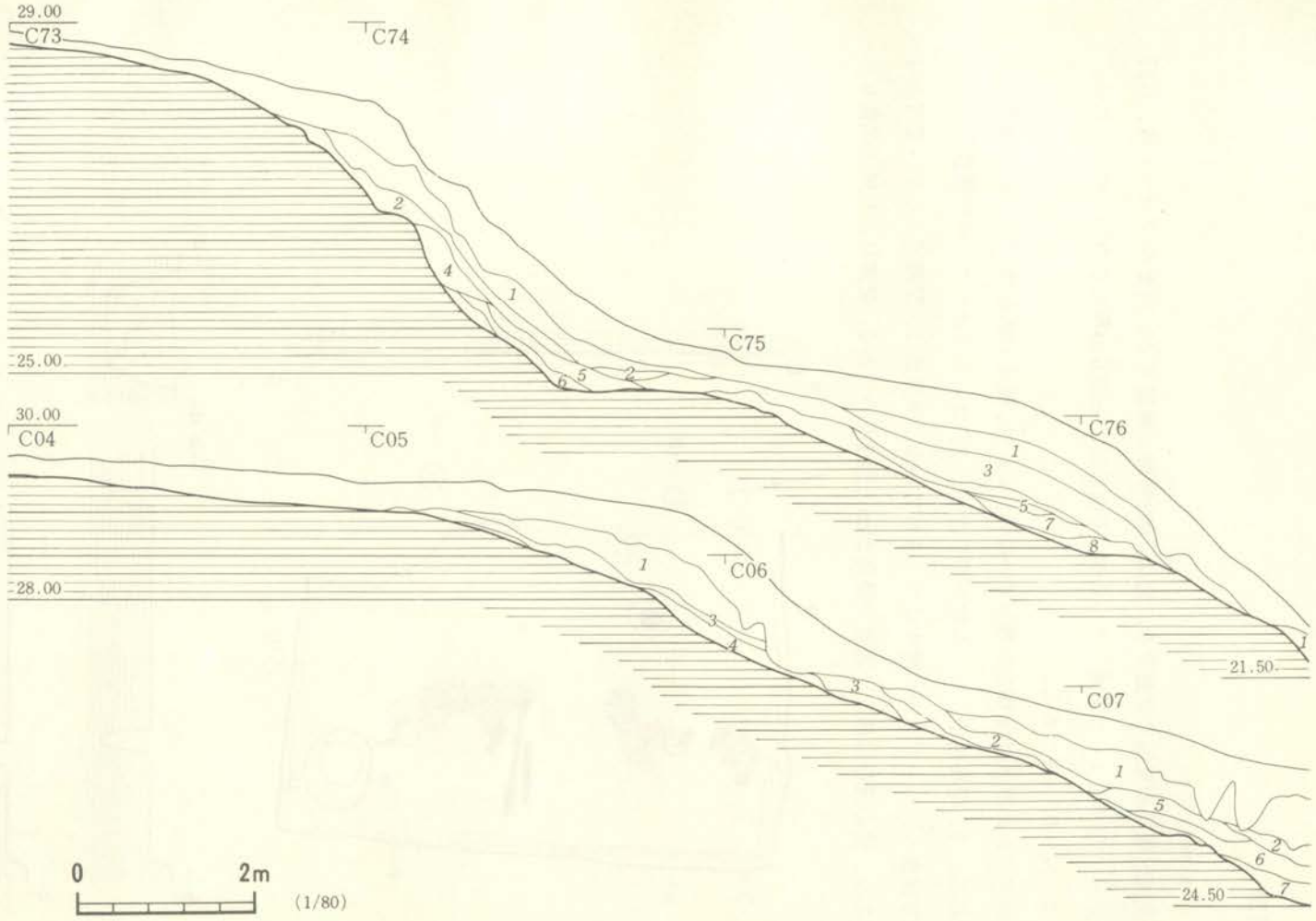
Tr.2の土層は以下の如くである。1層　暗褐色砂質土　2層　黒色土　3層　暗褐色土　4層　褐色土（4）：ローム粒（1）　5層　黒色土に若干のローム粒混入　6層　黒褐色土　7層　褐色土（4）：白色砂質粘土（1）。

Tr.2にみられる層序は、Tr.1と全く異なり、極く自然な堆積を示しているように思われる。地形の傾斜はほぼ25°と一様で、C80グリッド以下で急に落ち込む。

この東斜面の様相に加え、西斜面の形状も旧地形図（第2図）に現われており、少くとも近世以前には現状に近い地形であったと考える。



第11図　野毛平高台遺跡全体図



第13図　東端崖面トレンチ(上・Tr1. 下・Tr. 2)断面実測図

第2節　遺　構

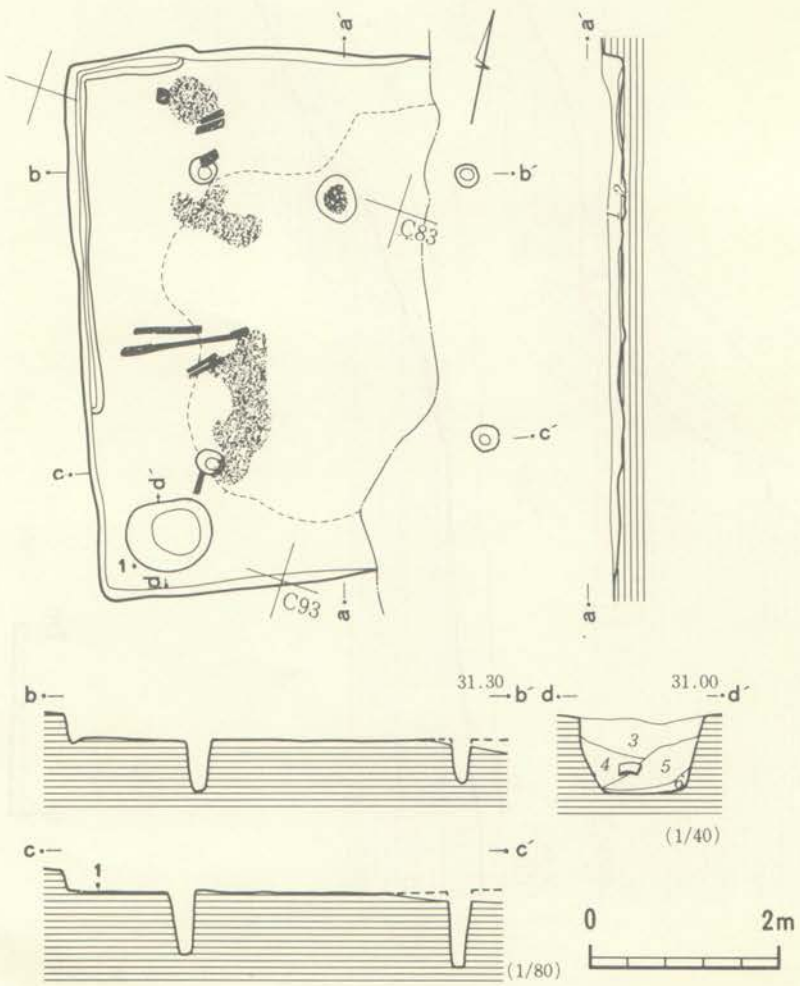
1項　住居跡

・001号跡（第41図）

本跡は、発掘区域の南東端に位置する。北は、002号跡と隣接する。主要なグリッドは、C83である。東側⅓が削平によって消滅しているが、平面形は、一辺6m程の正方形と考えられる。主軸の方向は、N－12°－Wである。

覆土は、削平のため厚さ20cm程しか残っていない。a a′は、覆土の断面図であるが、土層は次のとおりである。 1．暗褐色土、ローム粒を若干含む。 2．ロームブロック、やや硬質。

床面の遺存は良く、ハードローム層中につくられている。中央部は、堅緻であるが、壁付近はやや軟弱である。壁の遺存は悪く、北壁で最高20cmを残すのみである。壁溝は、北壁西端部から



第14図　001号跡実測図

西壁下に検出された。幅20cm、深さ5cmで、断面は「U」字形である。柱穴は、4個検出された。住居跡のほぼ対角線上に位置すると考えられる。一辺3m程の、やや歪んだ方形に配置される。平面形は、直径30cm程の円形である。深さは、床面より、50～80cmである。

北側柱穴間の中央で炉跡、住居跡の南西隅に貯蔵穴が検出された。炉跡の平面形は、50×40cmの楕円形で、床面への掘込みは、5cmである。火床の遺存は良い。貯蔵穴の平面形は、90×70cmの楕円形である。深さは40cmで、底面は平坦である。d d'は、貯蔵穴の覆土断面図である。土層は、次のとおりである。3．暗褐色土、ロームブロックを若干含む。4．木炭、焼土層。5．褐色土。6．ロームブロック。

住居跡内西部の床面上に、かなりの量の焼土、炭化材が堆積している。これは、本跡が火災をうけたことを示している。遺物は、全体に少ないが、その多くは、西壁付近から出土している。

・002号跡（第15・16図）

本跡は、発掘区域の南東部に位置する。南は、001号跡、北は004号跡と隣接する。東壁が、005号跡、西壁が、003号跡と重複している。主要はグリッドは、C62・C63・C72である。東半分がかなり削平されていたが、わずかではあるが壁が遺存していたので、平面形の確認ができた。一辺6.2mのほぼ正方形で、貯蔵穴による張出部をもつ大形の住居跡である。西壁が東壁より長く、やや歪んだ形を示す。主軸の方向は、N－17°－Wである。

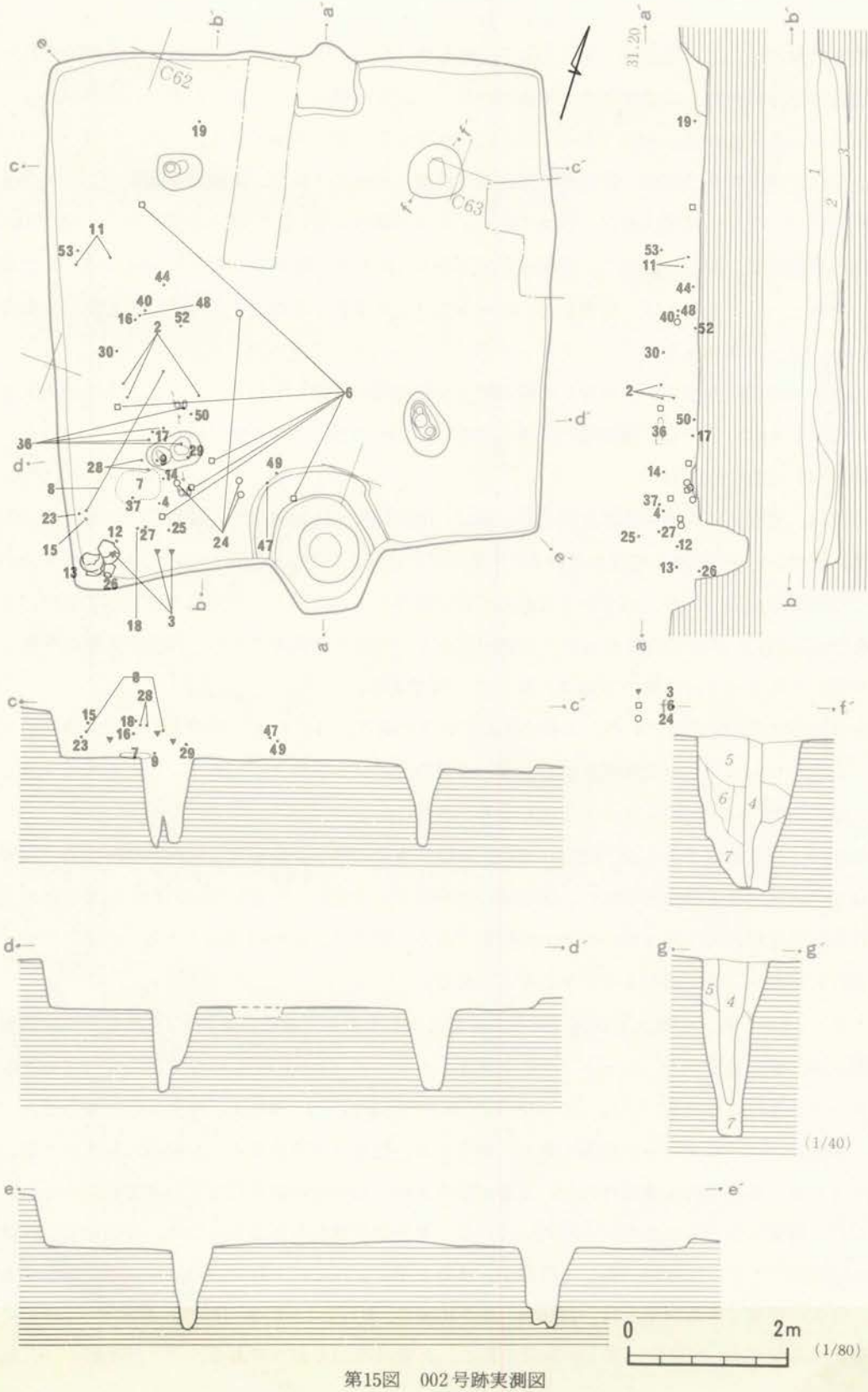
b b'は、覆土の断面図である。土層は次のとおりである。1．表土（耕作土）。2．暗褐色土、ローム粒・ロームブロックを若干含む。3．暗褐色土、ローム粒・ロームブロックを多く含む。4．暗褐色土、ローム粒・焼土・炭化粒を若干含む。

床面は、やや軟弱であるが、遺存は良い。壁は、西壁の残りが最も良く、高さ65cmである。壁溝はない。柱穴は4個検出された。住居跡の対角線上に位置し、一辺3.3mのほぼ正方形に配置される。平面形は60～80×40～70cmの楕円形である。深さは、1.0～1.1mである。底面に、2・3個の穴があり、柱の建替えを示すと考えられる。

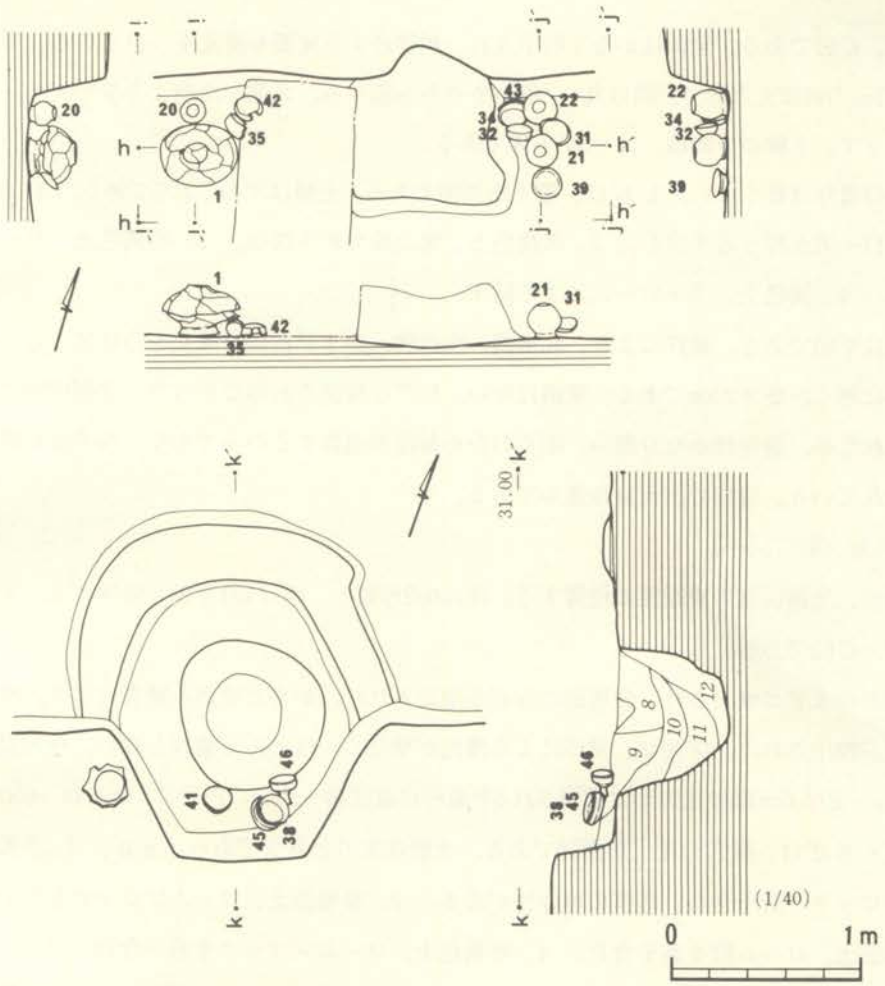
f f'、g g'は、柱穴の覆土断面図である。土層は次のとおりである。f f'、4．黒色土、有機質、軟弱。5．暗褐色土。6．ロームブロック（1）：ローム（2）、黒色土若干混入。7．ロームブロック（1）：ローム（2）。8．ロームブロック。g g'、4．黒色土、軟弱。5．褐色土、7．褐色土、ロームブロックを多く含む。両者とも、柱痕（土層番号4）が明瞭に観察される。

かまどは、北壁中央に検出された。上部が削平され、西半分が攪乱により破壊されている。貯蔵穴は、南壁につくられかまどと相対している。半分ほど壁から張出している。平面形は、直径70cmの円形である。住居跡内部の半円部が、低い土手によって囲まれている。深さは、65cmである。底面は平坦である。土手は、幅40cm、高さ10cmで、直径1.3mの半円形である。

第16図のk kは、貯蔵穴の覆土断面図である。土層は次のとおりである。8．炭化粒。9．暗



第15図　002号跡実測図



第16図　002号跡遺物出土状況図

□

褐色土、ローム粒を若干含む。10．暗褐色土、ロームブロックを多く含む、硬質。11.暗褐色土、ローム粒を多く含む。12．褐色土、ロームブロックを若干含む、軟弱。13．褐色土。14．褐色土（1）：ローム粒（1）。

遺物の出土量は、住居跡の中では最も多く完形品の数も多い。遺物の出土状態は、以下の4つに区分できると考えられる。覆土中、床直上、かまど両側、貯蔵穴上部である。覆土中の遺物は、住居跡の南西部に集中し、住居跡の端から流れ込んだ状態を示している。これは、この住居が廃棄された後、土器捨て場として使用された可能性を示すものである。床面上の遺物は、量としては少ないが、本跡に付属すると考えてよいと思う。かまど両側、貯蔵穴上部の土器は、まさに、この住居が廃棄された当時の状態を示しているものである。

・003号跡（第17図上）

本跡は、発掘区域の南東部に位置する。東壁の南半分が、002号跡と重複している。主要なグリ

ッドは、C61である。全体はかなり削平され、耕作により床面も攪乱をうけている。平面形は、一辺3.3mのほぼ正方形で四隅は丸い。壁がやや外へ張らみ、北壁が南壁より少し長く、やや歪んだ形を示す。主軸の方向は、N－35°－Wである。

覆土の遺存は良くない。b b'は、覆土断面図である。土層は次のとおりである。1. 暗褐色土、ローム粒・焼土粒を若干含む。2. 黒褐色土、焼土粒を若干含む。3. 暗褐色土、ローム粒を多く含む。4. 褐色土。5. ロームによる貼床。

床面は平坦である。耕作により、北東隅、南西隅、かまど西側が攪乱をうけている。壁の遺存は全体に悪く、高さ20cmである。壁溝はない。柱穴は検出され得なかった。北壁中央にかまどが検出されたが、遺存はかなり悪い。削平のため基部が遺存するのみであり、西半分が耕作により破壊されている。遺物の出土量は僅かである。

・004号跡（第17図下）

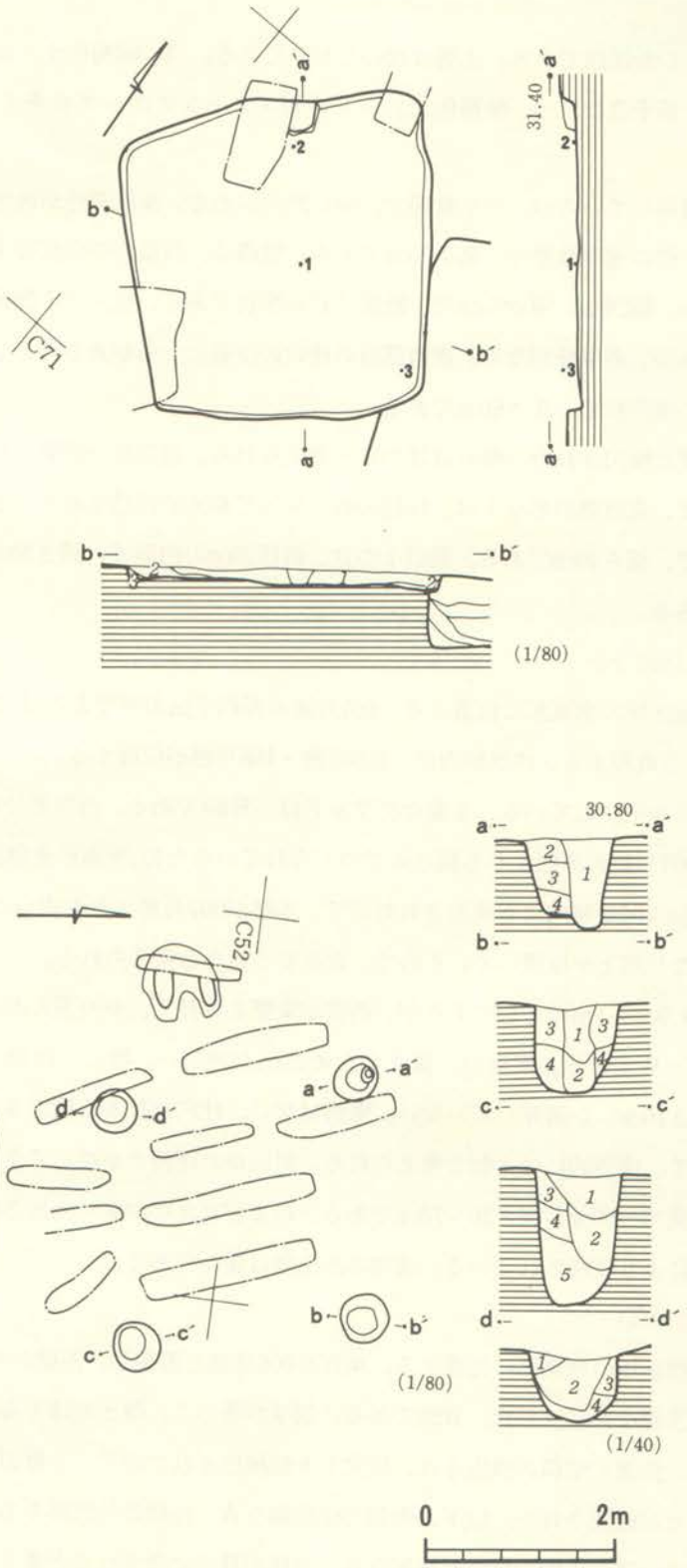
本跡は、発掘区域の東端部に位置する。南は002号跡と、西は101号跡と隣接する。主要なグリッドは、C52である。

最初にかまどが検出され、住居跡の存在が推定された。かまど周辺の精査により、柱穴、壁の一部分が検出された。床面は、耕作による攪乱が激しく、ほとんど遺存しない。柱穴は4個検出された。一辺2.6m程の正方形に配置される平面形は直径40～50cmの円形で、深さ40～65cmである。図a a'～d d'は、柱穴の覆土断面図である。土層は次のとおりである。a a'、1. 黒褐色土、ロームブロックを若干含む。柱痕の可能性がある。2. 暗褐色土、ロームブロックをやや多く含む。3. 褐色土、ローム粒を若干含む。4. 暗褐色土、ロームブロックを若干含む。1・2 は、柱痕の可能性がある。c c'、1. 暗褐色土、ローム粒を若干含む。2. 暗褐色土。3. 暗褐色土、ローム粒を多く含む。4. 褐色土、ローム粒を若干含む。5. 暗褐色土、ローム粒を若干含む。d d'、1. 褐色土、ローム粒を多く含む 2. 暗褐色土、ロームブロックを多く含む、焼土・炭化粒を若干含む。3. 暗褐色、ローム粒を若干含む。4. 暗褐色土、ロームブロックを多く含む。かまどはやや南寄りに位置し、袖の基部が検出された。方向はN－90°－Wである。遺物はほとんど検出されなかった。

・005号跡（第18図上）

本跡は、発掘区域の南東端に位置する。南西隅が、002号跡と重複している。東半分は斜面になり、遺存していない。これは、この住居が使用されていた時は、台地が、現在よりもさらに東へ延びていたことを示すと思われる。後世、何らかの理由で、おそらく人為的に、台地が削られたと考えられる。主要なグリッドは、C63である。以下、遺存部分について述べる。

遺存している西半分もかなり削平されている。平面形は、一辺3mほどの正方形と考えられる。隅は丸い。主軸の方向は、N－4°－Eである。



第17図　003（上）・004（下）号跡実測図

c c'は、覆土の断面図である。土層は次のとおりである。 1．暗褐色土、ローム粒を多く含む、焼土・炭化粒を若干含む。 2．暗褐色土、ローム粒・ロームブロックを多く含む。 3．攪乱。 4．排土。

床面はよく遺存しているが、やや軟弱で、少し凹凸がある。南西部分が後世の土壙により攪乱をうけている。壁の遺存は悪く、高さ20cmである。壁溝は、西壁の中央部で1m程途切れるが、壁下を全周する。幅20cm、深さ5cmで、断面「U」字状である。柱穴は1個検出された。本来は、4個と思われるが、東半分がなく、南西部分の柱穴の位置に土壙があるため1個である。平面形は、50×30cmの楕円形で、深さ60cmである。

かまどは北壁に検出された。壁のほぼ中央と考えられる。遺存部の両隅にピットが1個づつ検出された。特に、北西隅のピットは、住居の外へ向って斜めに掘込まれている。平面形は、30×20cmの楕円形で、深さ40cmである。他の1つは、直径20cmの円形で、深さ30cmである。遺物の出土量は僅かである。

・006号跡（第18図下）

本跡は、発掘区域の南東部に位置する。001号跡の西約7mの所である。北は、008号跡と接し、西は、007号跡と重複する。住居跡内に、105号跡・106号跡が位置する。

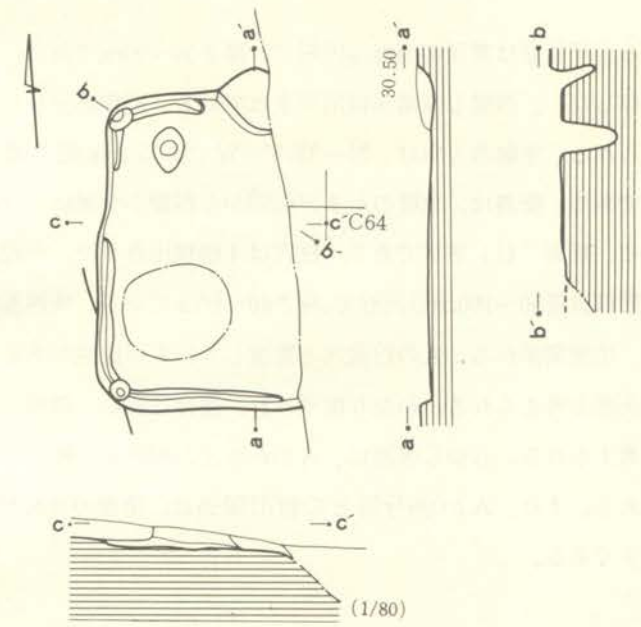
全体にかなり削平されている。主要なグリッドは、B89である。西側部分が、007号跡と重複しているが、007号跡の床面よりも掘込んでつくられているため、平面形を確認することができた。007号跡の床面が006号跡内にも検出されたので、本跡が007号跡よりも古いことが明らかになった。床面にかなり焼土が堆積しているので、火災をうけたと考えられる。

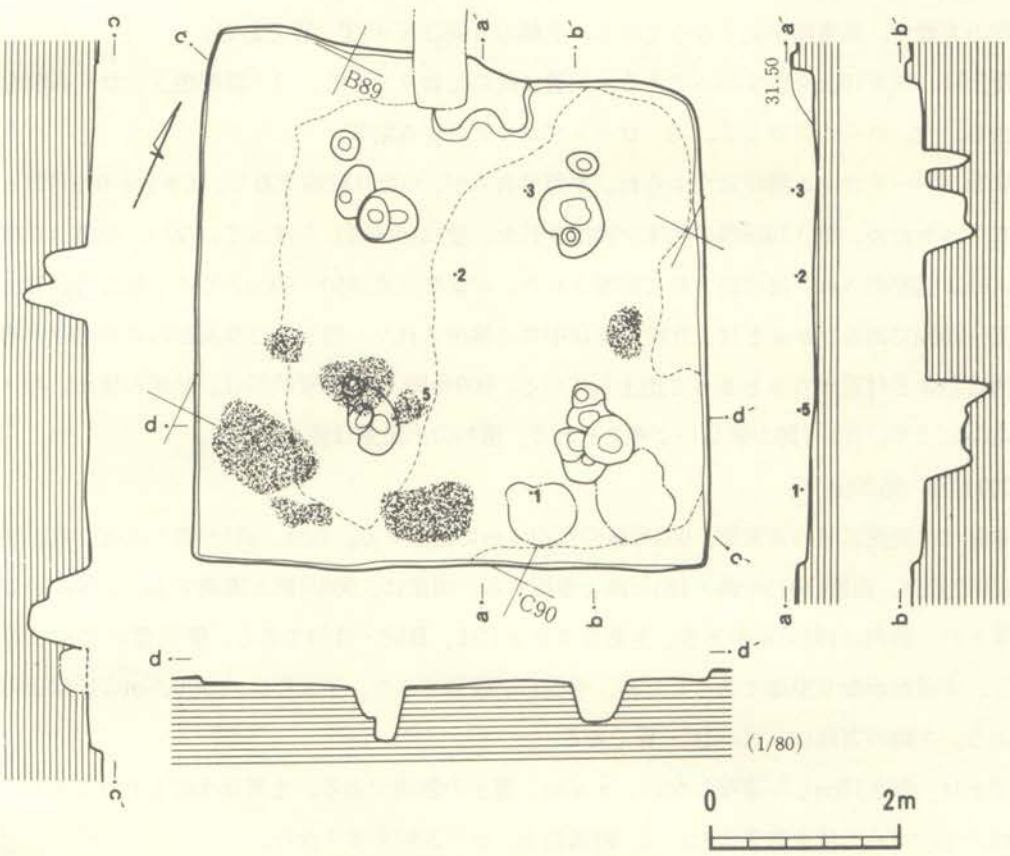
平面形は、5.0×5.4mの方形であるが、西壁が東壁より長く、やや歪んだ形を示す。主軸の方向は、N－25°－Wである。床面は、攪乱のため凹凸が激しい。特に、西側の柱穴付近は遺存が悪い。壁は高さ10cmしか遺存していない。壁溝はない。柱穴は数多く検出されたが、4か所に集中しているので、構造的には4個と考えられる。何回かの建替えが推定できる。平面形は円形と思われる。直径30～60cm、深さ30～70cmである。かまどは北壁中央に検出された。削平が著しく、西半分が耕作により破壊されている。遺物の出土量は僅かである。

・007号跡（第19図）

本跡は、発掘区域の南東部に位置する。東部が006号跡と重複し、西壁が018号跡の北東隅と重複している。主要なグリッドは、B98である。削平が著しく、覆土もほとんど遺存していなかった。精査時に、床面に壁溝が検出され、柱穴も8個検出されたので、1軒の住居跡全体が重複をうけていることが確認された。以下、内側の住居跡をA、外側の住居跡をBとして述べる。

Aは、壁溝の一部と4個の柱穴が検出され、全体がB内に含まれると考えられる。壁溝は北壁部から隅を経て西壁部にかけて遺存している。幅20cm、深さ10cmで、断面は「U」字状である。





第18図　005（上）・006（下）号跡実測図

柱穴は3.2×3.7mの方形に配置される。平面形は直径40cm程の円形で、深さ50～90cmである。

Bは、かなり削平され、南壁は遺存しない。西壁も南端部は削平されている。遺存部分から、平面形は一辺7m程の正方形と考えられる。主軸の方向は、N－33.5°－Wである。床面の遺存は良い。壁の遺存は悪く、最高15cmである。壁溝は、北壁のかまど西側から西壁下全体にかけて検出された。幅20～30cm、深さ10cmで、断面「U」字状である。柱穴は4個検出された。一辺4mのほぼ正方形に配置される。平面形は直径50～100cmの円形で、深さ60～80cmである。南西部の柱穴は、他と比べて直径が大きいが、位置関係から、Aの貯蔵穴と重複している可能性がある。かまどは、北壁に検出され、ほぼ中央部と考えられる。かなり削平され、遺存は悪い。壁溝、柱穴の位置関係から、BはAの拡張と考えられる。しかし床面に、Aのかまどの掘込みが検出されず、同時期のものかどうかは不明である。また、Aと006号跡との新旧関係は、遺存の状況が悪く、不明である。遺物の出土は、僅少である。

・**008**号跡（第20図上）

本跡は、発掘区域の南東部に位置する。南は、006号跡に接し、北は、009号跡と重複する。かなり削平されており、西壁が消滅している。主要なグリッドは、B79である。平面形は、一辺4m程の方形で、北東隅が丸くなっている。主軸の方向はN－13°－Wである。

覆土は、厚さ10cmを残すのみである。土層は次のとおりである。 1．暗褐色土、ローム粒を若干含む。 2．ロームブロック。 3．ロームブロックによる貼床。

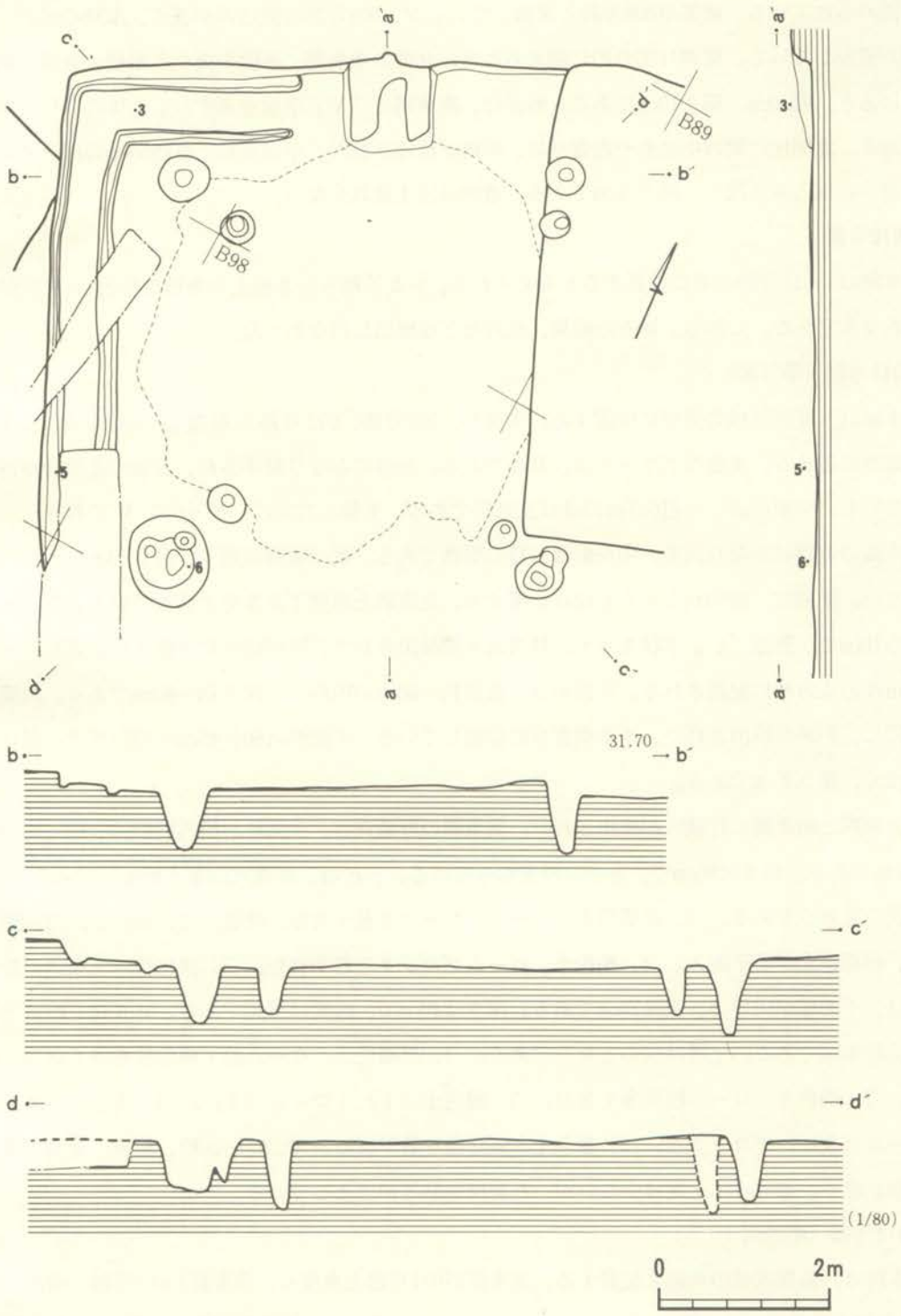
床面はハードローム層中につくられ、平坦であるが、かなり軟弱である。北半分が009号跡と重複していたため、厚さ10cm程の貼床が検出された。壁は10cm弱しか残っていない。壁溝はない。柱穴は4個検出され、ほぼ正方形に配置される。平面形は直径50～60cmのやや不整な円形で、深さ50～70cmである。かまどは、北壁のほぼ中央に検出された。削平のため基部のみが遺存する。遺物はかまど付近からまとまって出土している。009号跡との重複関係は、貼床の検出、かまどの遺存により、008号跡が新しいと考えられる。遺物の出土量は僅かである。

・**009**号跡（第20図下）

本跡は、発掘区域の南東部、003号跡の西約4mに位置する。北は、011号跡と重複する。北西部は012号跡、西壁は015号跡・103号跡と重複する。南部は、008号跡と重複する。全体にかなり削平され、跡内に102号跡がある。主要なグリッドは、B68・B69である。壁が僅かであるが遺存し、床面がかなり堅緻であったため、平面形が確認できた。平面形は、一辺6.5mのほぼ正方形である。主軸の方向は、N－11°－Wである。

覆土は、厚さ10cmしか遺存しない。a a′は、覆土の断面である。土層は次のとおりである。1．暗褐色土、ローム粒を若干含む。 2．暗褐色土、ローム粒を多く含む。

床面は、ハードローム層中につくられる。遺存は良く、全体に堅緻である。特に、中央部がよ



第19図　007号跡実測図

く固められている。南部が008号跡と重複しているが、008号跡の掘込みが浅く、本跡の床面、壁溝が遺存している。壁溝は部分的に認められる。北壁の中央部、西壁中央から南壁、東壁の南端部にある。幅20cm、深さ10cmである。断面は、南東隅で「V」字状を示すが、全体に「U」字状である。北側柱穴間の中央やや西寄りに、炉跡が検出された。平面形は、直径55cmの円形である。床面への掘込みは浅く、深さ5cmである。遺物の出土量は少ない。

・010号跡

本跡は、011号跡の東に位置すると考えられる。かまど跡らしき焼土の集積を検出し、住居跡の存在を推定した。しかし、精査の結果、柱穴などは検出し得なかった。

・011号跡（第21図）

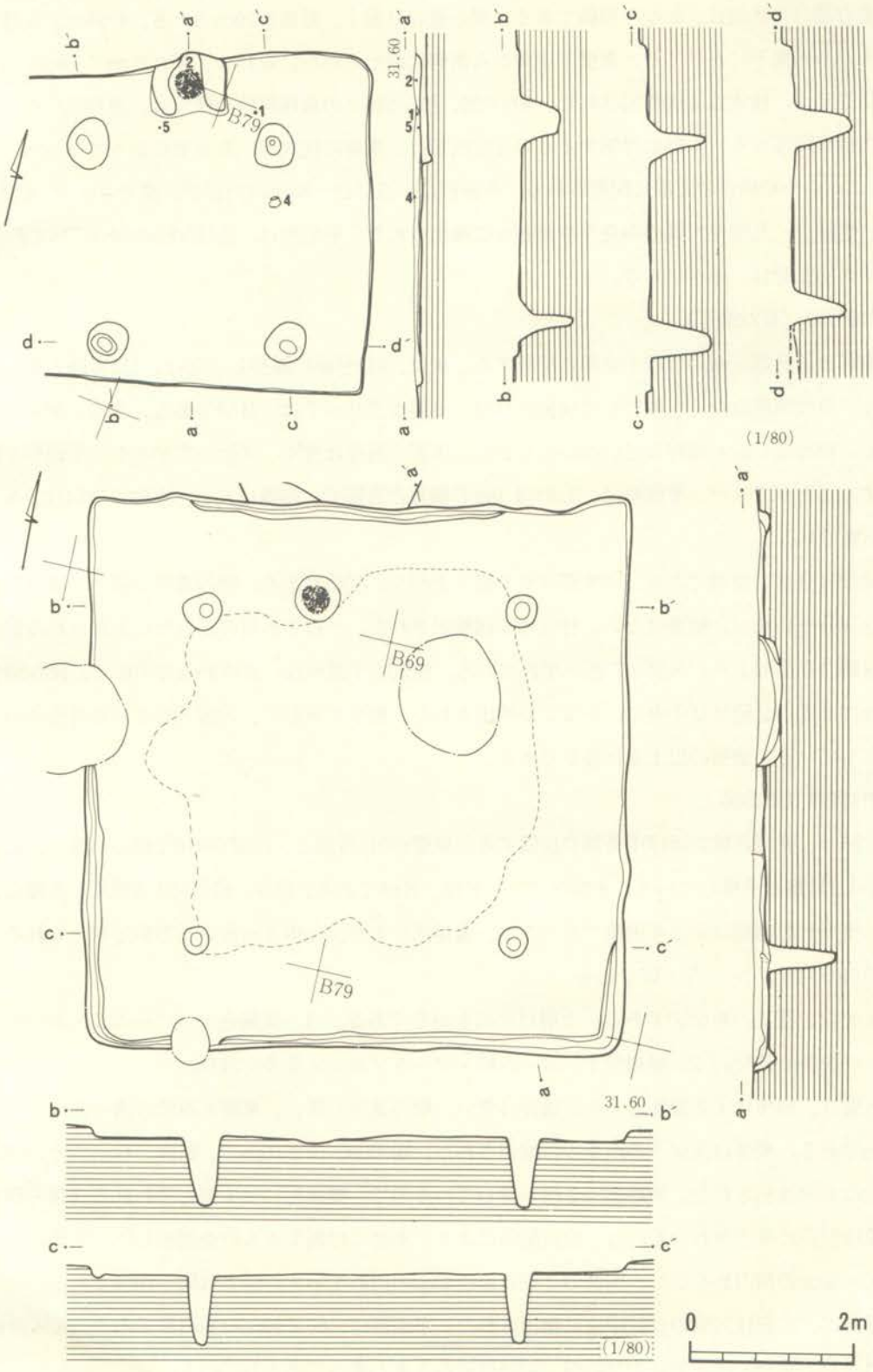
本跡は、発掘区域の東部に位置する。南壁が、009号跡、012号跡と重複している。東に、010号跡が位置する。主要なグリッドは、B48である。全体にかなり削平され、西壁の北半分が消滅している。平面形は、一辺6.7mのほぼ正方形である。主軸の方向は、N－62°－Wである。

床面の遺存はかなり良く、中央部は、特に堅緻である。壁の遺存は悪く、高さ10cmしか残っていない。壁溝は、途切れながらもほぼ全周する。北東隅と西壁下北半分で切れている。幅15cm、深さ10cmで、断面「U」字状を示す。柱穴は4個検出された。住居跡の対角線上に位置し、一辺4m程の正方形に配置される。平面形は、直径40～60cmの円形で、深さ70～80cmである。西側柱穴間に、炉跡が検出された。やや南寄りに位置している。平面形は60×45cmの楕円形で、掘込みは浅く、深さ5cmである。

北東隅と南東隅に貯蔵穴が検出された。南東隅の貯蔵穴は、平面形が楕円形で、大きさは1.3×1.0mである。深さは65cmで、途中に段をもっている。c c'は、貯蔵穴の覆土断面図である。土層は次のとおりである。 1．暗褐色土、ロームブロックを若干含む、硬質。 2．褐色土。 3．焼土塊、暗褐色土が若干混入。 4．褐色土、ロームブロックを若干含む。 5．炭化物。北東隅の貯蔵穴は、平面形が円形で、直径70cmである。深さは40cmで、底面は平坦である。d d'は、貯蔵穴の覆土断面図である。土層は次のとおりである。 1．黒褐色土、ローム粒・炭化粒を多く含む、軟弱。 2．褐色土、ローム粒を多く含む。 3．褐色土（1）：ローム（1）。 4．褐色土（2）：ローム（3）、ブロック状。 5．褐色土、炭化粒を若干含む。 6．ローム粒、粘質。遺構の遺存状態が悪く、遺物の出土量は少ないが、石製模造品等が出土している。

・012号跡（第22図上）

本跡は、発掘区域の東部に位置する。北東部が011号跡と重複し、南東部が009号跡、南西部が015号跡と重複する。主要なグリッドは、B57である。全体にかなり削平され、特に、011号跡との重複部分の削平が著しい。南半分が重複をうけているため、全体の平面形の確認はできなかったが、遺存部分より、一辺5m程の正方形と考えられる。主軸の方向は、N－30°－Wである。



第20図　008（上）・009（下）号跡実測図

遺存部分の床面は、かなり堅緻である。壁の遺存は悪く、最高が20cmである。壁溝は、北壁下中央から西壁下にかけてと、東壁下中央から南側に検出された。幅15cm、深さ5cmで、断面「U」字状を示す。柱穴は4個検出された。009号跡、015号跡との重複部分の柱穴は、遺存部分のものとの位置関係から、本跡に付属するものを選択した。南東の柱穴が、やや壁に寄っているが、3.0×2.5mのやや横長の方形に配置される。平面形は、直径20～30cmの円形で、深さ30～40cmである。炉跡が、北側柱穴間の中央やや東寄りに検出された。平面形は、直径50cmのほぼ円形である。遺物の出土量は、僅かである。

・**013**号跡（第22図下）

本跡は、発掘区域のほぼ中央部に位置する。東は、011号跡に隣接し、北は、112号跡と接している。重複関係はなく、独立して検出された。主要なグリッドは、B57である。全体に削平が著しく、壁はほとんど遺存していない。しかし、床面の遺存は良く、床面の広がりから平面形を確認することができた。平面形は、3.5×4.0mの横長の方形で、四隅は丸い。主軸の方向は、N－1°－Wである。

床面は全体に堅緻である。中央部はやや盛り上がり、凹凸がある。壁の遺存は悪く、高さ10cmしか残っていない。壁溝はない。柱穴は4個検出された。一辺2m程の正方形に配置されるが、住居跡の平面形より、角度が7°西へずれている。柱穴の平面形は、直径30cmの円形で、深さ50～60cmである。北壁ほぼ中央に、かまどが検出された。削平が著しく、火床と思われる焼土のみが遺存している。遺物の出土量は僅かである。

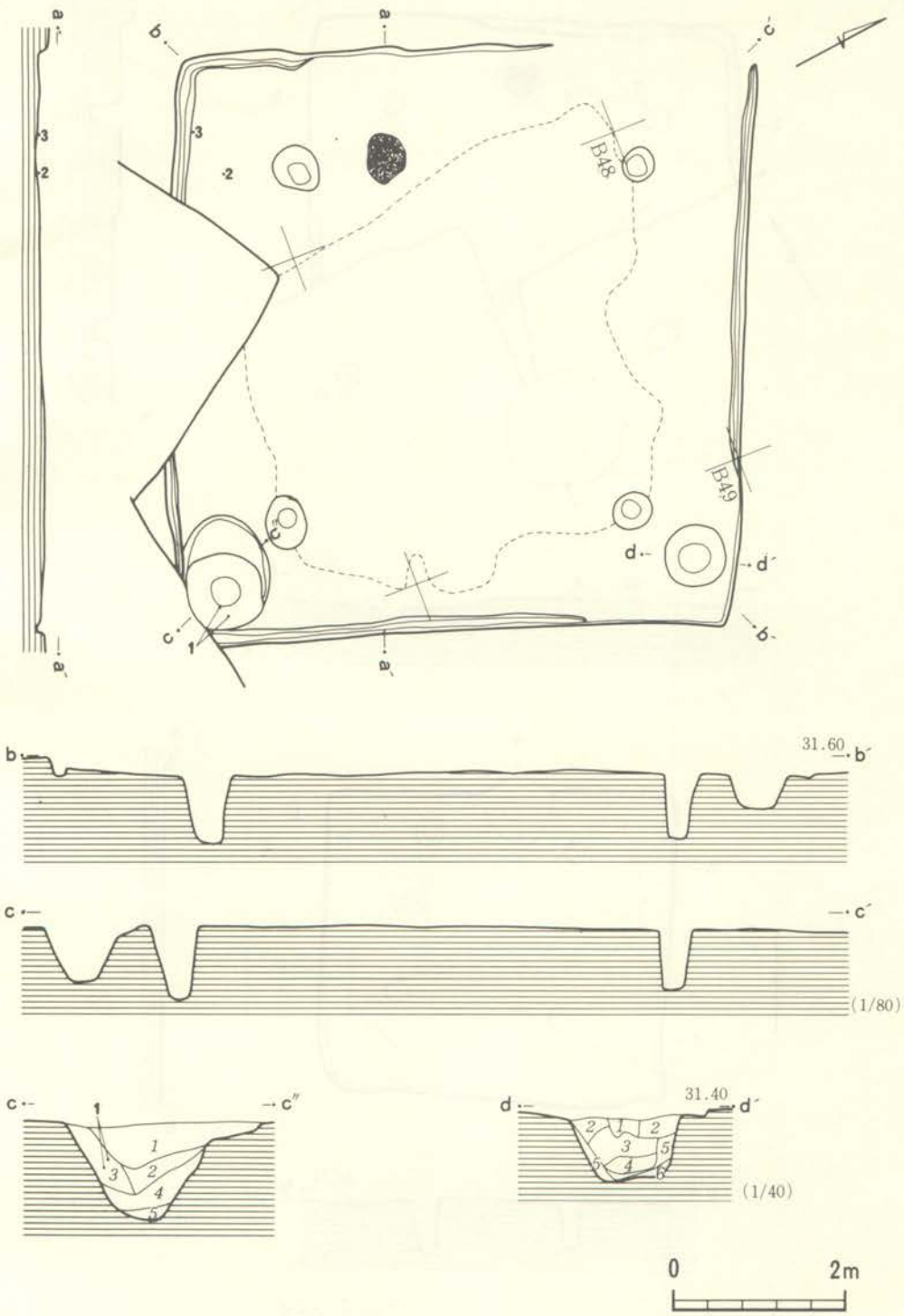
・**014**号跡（第23図上）

本跡は、発掘区域のほぼ中央部に位置する。東壁が015号跡と、南壁が016号跡と重複し、北西隅が022号跡と重複している。主要なグリッドは、B66である。削平、耕作による攪乱と重複により、平面形の確認はかなり困難であったが、遺存部分より、一辺5m程の正方形と考えられる。主軸の方向は、N－25°－Wである。

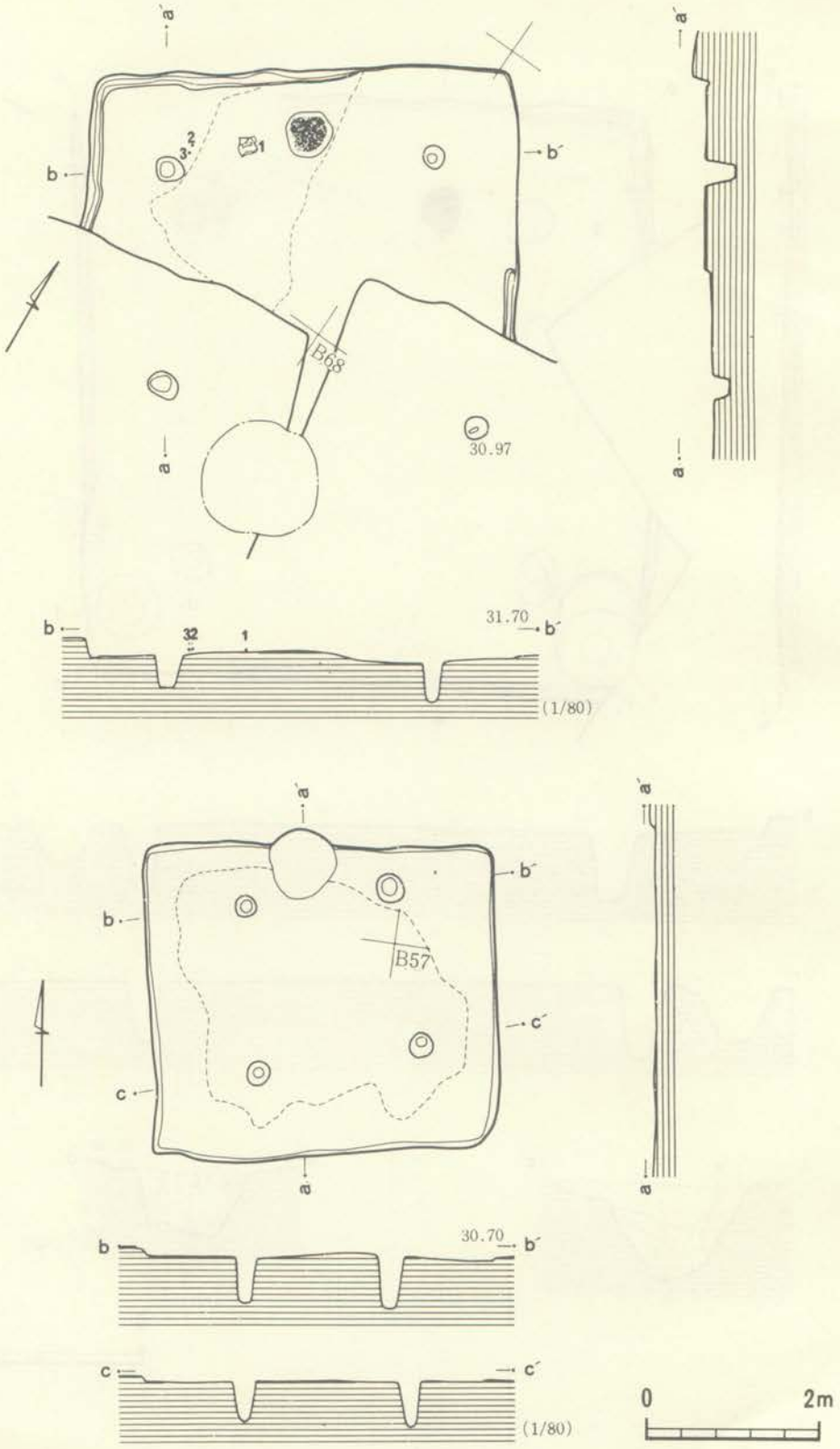
a a'は、覆土の断面図である。土層は次のとおりである。 1．黒褐色土、ローム粒・ロームブロックを多く含む。 2．暗褐色土、ローム粒・ロームブロックを多く含む。

床面は、耕作による攪乱のため、遺存は悪い。壁の遺存も悪く、東壁と西壁の遺存部分で高さ25cmである。壁溝は南壁下の西半分に検出された。幅20cm、深さ10cmで、断面「U」字状である。柱穴は5個検出された。南西部で2個が接しているので、構造的には4個と思われる。016号跡との重複部分に検出されたものは、位置関係により、本跡に付属するものを選択した。北側の2個は60×40cmの楕円形を示し、南側の3個は直径40cmの円形を示す。深さは50～70cmである。

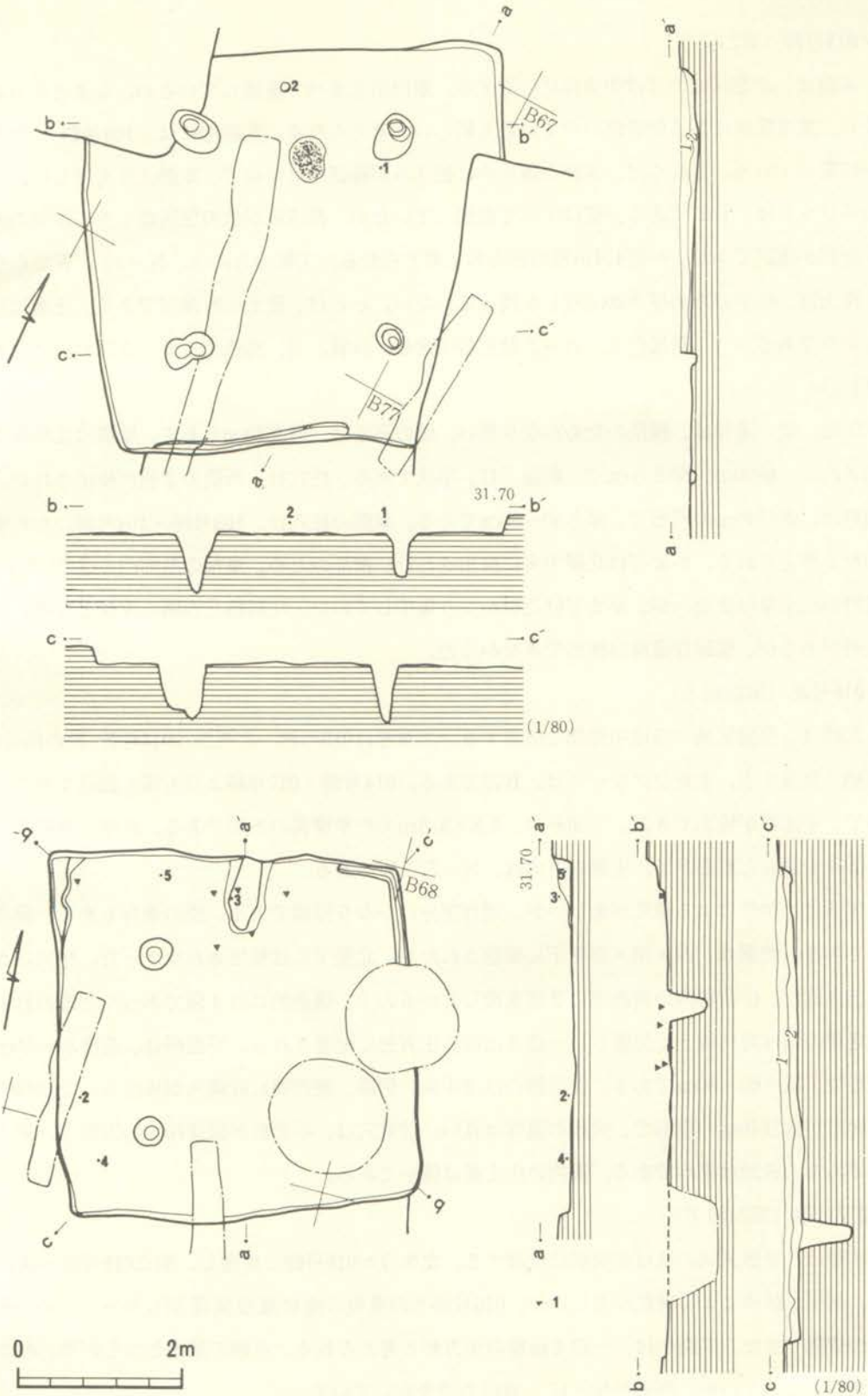
炉跡が、北側柱穴間のほぼ中央に検出された。平面形は、60×40cmの楕円形である。火床の遺存は良い。遺物の出土量は少ないが、炉跡付近からまとまって出土している。



第21図　011号跡実測図



第22図　012（上）・013（下）号跡実測図



第23図　014（上）・015（下）号跡実測図

・015号跡（第23図下）

本跡は、発掘区域のほぼ中央部に位置する。東西南北すべて重複しているが、かまどの有無により、重複関係にある住居跡の中では最も新しいと考えられる。本跡内には、103号跡・104号跡が位置している。これらは、本跡の覆土中に掘込みが確認されたので、本跡よりも新しい。主要なグリッドは、B67である。壁はすべて重複していたが、掘込みが他の住居跡よりも深いため、平面形が確認できた。一辺4.4m程の正方形と考えられる。主軸の方向は、N－10°－Wである。

覆土は、削平のため厚さ20cm程しか残っていない。c c'は、覆土の断面図である。土層は次のとおりである。 1．暗褐色土、ローム粒を若干含む、砂質。 2．褐色土、ロームブロックを多く含む。

床面、壁の遺存は、攪乱のためかなり悪い。壁の高さは、最高20cmである。壁溝は北東隅に検出された。幅20cm、深さ5cmで、断面「U」字状である。柱穴は、西側の2個が検出された。平面形は、直径40cmの円形で、深さ50～60cmである。東側の柱穴は、103号跡・104号跡のため消滅したと考えられる。かまどは北壁中央に検出された。攪乱のため、東袖の基部のみ遺存している。遺物の出土量は少ないが、かまど付近にかなり集中していた。住居跡北西隅に重複とも考えられる所があるが、明確な遺構は検出できなかった。

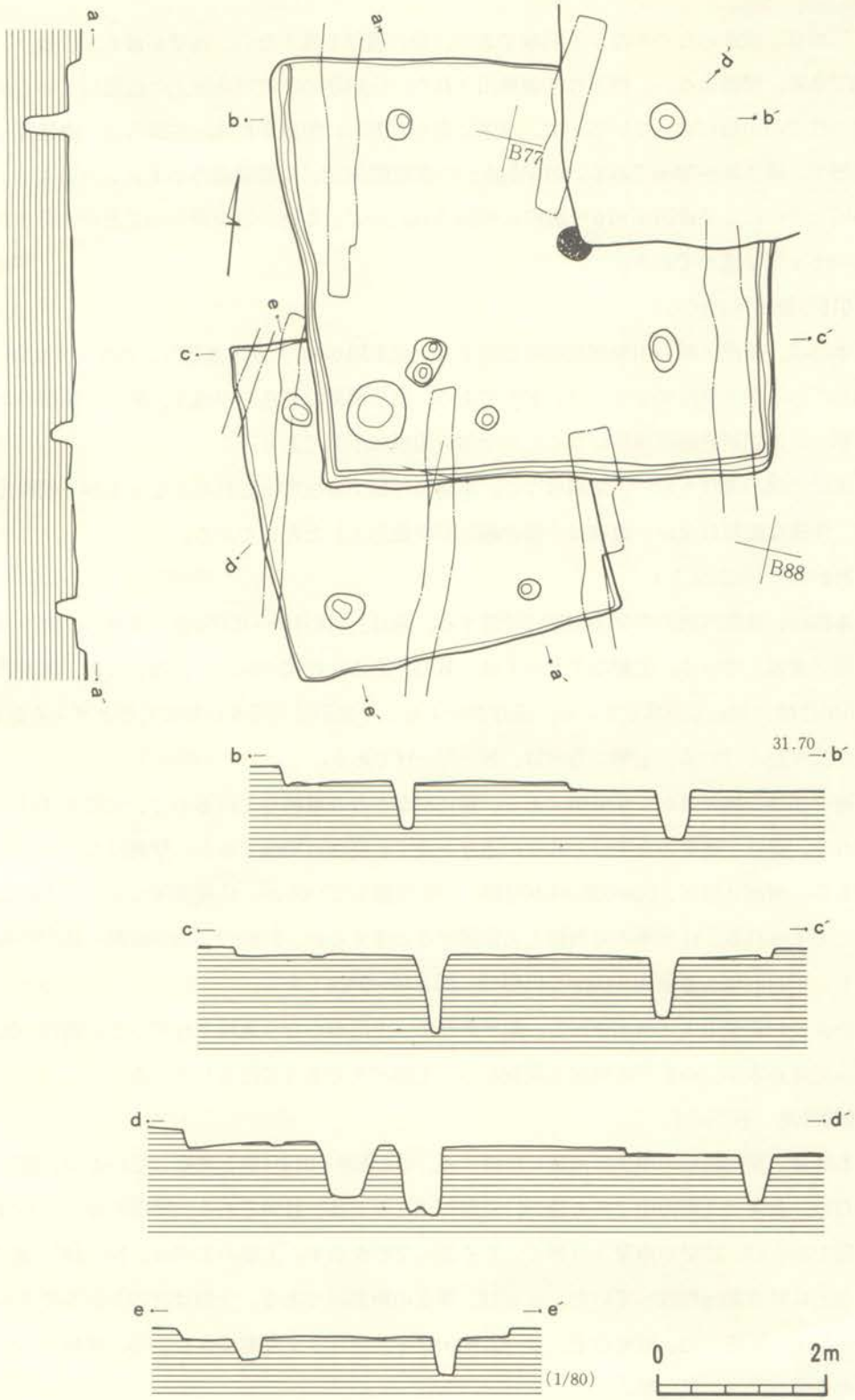
・016号跡（第24図上）

本跡は、発掘区域のほぼ中央部に位置する。北東部は015号跡、北西部は014号跡、南西部は077号跡と重複する。主要なグリッドは、B77である。014号跡・017号跡よりも深く掘込まれていたので、平面形が検出できた。平面形は、4.8×5.5mのやや横長の方形である。北壁が南壁より長く、やや歪んだ形を示す。主軸の方向は、N－7°－Wである。

床面は、耕作による攪乱が激しいが、遺存部分はかなり堅緻である。壁の遺存も悪く、最高20cmである。壁溝は、西・南・東壁下に確認されたが、北壁下には検出されなかった。柱穴は5個検出された。住居跡内の南西部に2個重複しているので、構造的には4個であったと思われる。住居跡のほぼ対角線上に位置し、一辺3m程の正方形に配置される。平面形は、直径30～50cmの円形で、深さ60～80cmである。住居跡のほぼ中央に炉跡、南西隅に貯蔵穴が検出された。炉跡は、平面形が直径40cmの円形で、火床の遺存は良い。貯蔵穴は、平面形が直径70cmの円形で、深さ65cmである。底面は平坦である。遺物の出土量は僅かである。

・017号跡（第24図下）

本跡は、発掘区域のほぼ中央部に位置する。北半分が016号跡と重複し、南に018号跡が隣接する。削平、耕作による攪乱が著しいが、016号跡との重複の他に重複関係がなかったため、平面形が確認できた。平面形は、一辺4m程の正方形と考えられる。主軸の基準となる炉跡、かまどは遺存していないが、西壁がN－17°－Wの方位を向いている。



第24図　016（上）・017（下）号跡実測図

床面は、攪乱のためかなり不明瞭である。壁の遺存も良くない。西壁が最もよく残り、高さ20cmである。壁溝はない。柱穴は4個検出された。住居跡のほぼ対角線上に位置しているが、北東部の柱穴が中央に寄っているので、全体に歪んだ方形に配置される。平面形は、直径30～40cmの円形で、深さ30～50cmである。016号跡との重複関係は、土層調査の小トレンチにより、本跡の貼床と思われる堅緻面が016号跡内に検出されたので、本跡の方が新しいことが確認された。遺物の出土量は僅かである。

・018号跡（第25図右）

本跡は、発掘区域の中央部南端に位置する。北東隅が007号跡と重複し、西半分が020号跡と重複している。主要なグリッドは、B97である。住居構築の掘込みが浅く、削平や重複のため遺存は悪い。南部が発掘区域外になるため全体の規模は不明である。

床面、壁の遺存も悪い。壁溝はない。本跡に付属する柱穴と思われるピットが2個検出されたが、明確な証拠はない。遺物は土器の細片が少量出土しただけである。

・019号跡（第25図左）

本跡は、発掘区域の中央部南端に位置する。東は、018号跡・020号跡と重複し、南半分が、046号跡と重複している。主要なグリッドは、B95である。住居の掘込みが浅いため、床面の南半分は046号跡によって消滅している。遺存部分より、平面形は一辺5m程の方形と考えられるが、形はかなり歪んでいる。主軸の方向は、N－7°－Wである。

遺存部分の床面はかなり堅緻である。炭化材がかなり堆積しているので、火災をうけたと考えられる。壁は、西壁の北半分と北壁の遺存が良く、高さは30cmである。壁溝はない。柱穴は4個である。南側2個が、020号跡・046号跡の中に位置しているが、位置関係により、本跡に付属すると考えられる。住居跡の対角線上に位置すると考えられ、3.0×2.5mの縦長の長方形に配置される。平面形は、直径50～60cmの円形で、深さ40～50cmである。

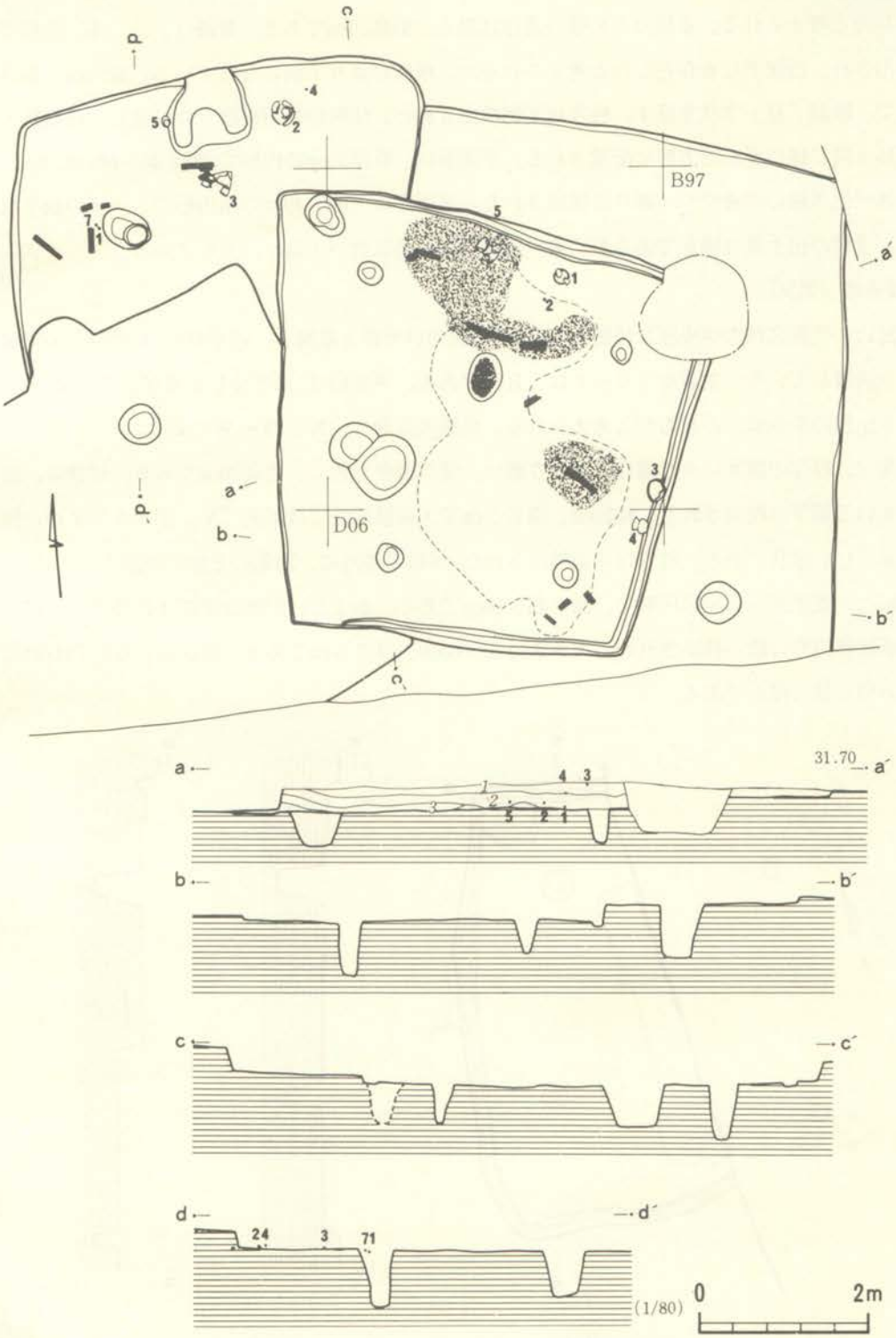
かまどが北壁中央に検出された。削平のため、上部がかなり破壊されている。遺物の出土量は僅かではあるが、かまどの前面と両側から、土器がまとまって出土している。

・020号跡（第25図中）

本跡は、発掘区域の中央部南端に位置する。018号跡・019号跡と重複しているが、掘込みが深いため、遺存は3跡の中で最も良い。主要なグリッドは、B96である。平面形は、5.0×4.0mの方形であるが、北壁が南壁より長く、やや歪んだ形を示す。主軸の方向は、N－18°－Eである。

覆土は厚さ30cm程残っていた。a a'は、覆土の断面図である。土層は次のとおりである。1．暗褐色土、砂質。2．暗褐色土、ローム粒・ロームブロックを若干含む。3．黒色土、ローム粒を若干含む。4．炭化物。

床面の遺存は良く、特に中央部は堅緻である。焼土・炭化材がかなり堆積しているので、火災



第25図　018（右）・019（左）・020（中）号跡実測図

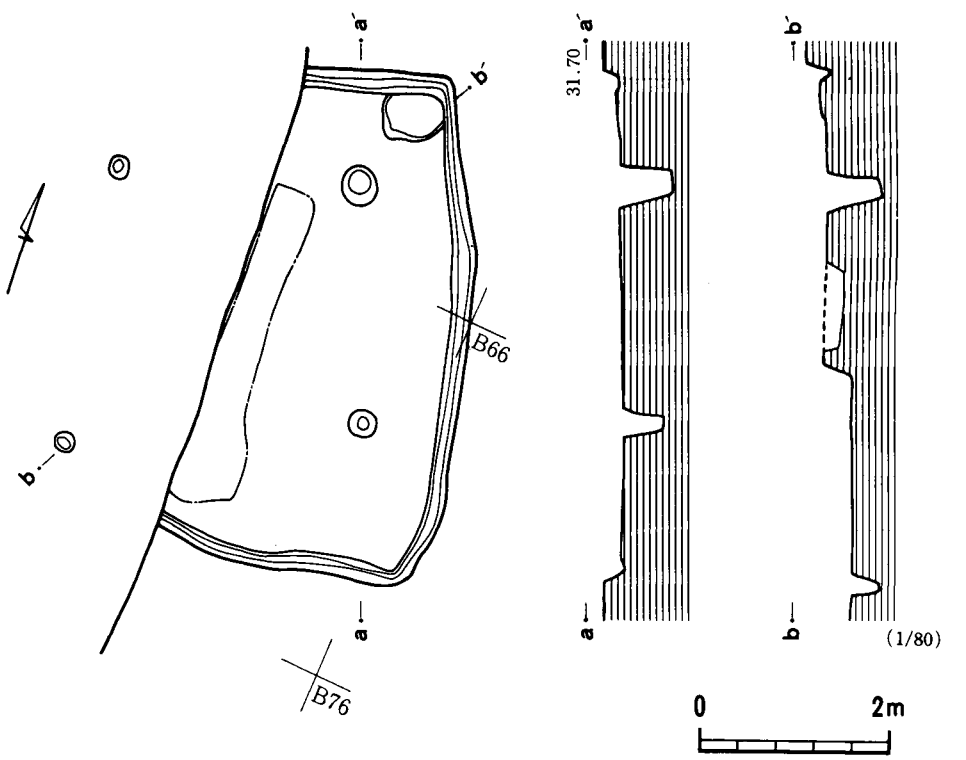
をうけたと考えられる。重複のため壁の遺存は悪く、最高20cmである。壁溝は、北、東、南壁下に検出され、西壁下にも存在したと考えられるが、重複により不明になっている。幅20cm、深さ10cmで、断面「U」字状を呈す。柱穴は4個検出された。住居跡の対角線上に位置し、住居跡の平面形と同じ様に歪んだ方形に配置される。平面形は、直径30cmの円形で、深さ40～60cmである。

炉跡が住居跡の中央やや北寄りに検出された。平面形は、60×40cmの楕円形で、火床の残りは良い。遺物の出土量は僅かであるが、東半部分で完形品に近い土器が出土している。

・**022**号跡（第26図）

本跡は、発掘区域の中央部に位置する。南東隅が014号跡と重複し、西半分が043号跡との重複により消滅している。主要なグリッドは、B65である。平面形は、東半分しか遺存していないが、一辺5m程のややゆがんだ方形と考えられる。東壁の方向は、N－29°－Wである。

床面は、耕作の攪乱により遺存はかなり悪い。壁の遺存も悪く、最高20cmである。壁溝は、遺存している壁下に検出された。幅20cm、深さ5cmで、南壁部分では断面「V」字状を示すが、他は断面「U」字状である。柱穴は4個検出された。043号跡内に、西側の2個が確認されている。平面形は、直径30～40cmの円形で、深さ45～60cmである。かまど、炉跡は確認され得なかった。北東隅に楕円形の段が検出された。大きさは70×60cm、厚さ5cmである。用途は明らかではない。遺物の出土量は僅かである。



第26図　022号跡実測図

・023号跡（第27図左）

本跡は、発掘区域のほぼ中央に位置する。北西隅が、026号跡と重複し、全体に、043号跡が北東方向から重複している。また、025号跡とも、043号跡と同じ様な形で重複している。043号跡は、本跡よりも新しく、掘込みも深いため、本跡の遺存は、かなり悪い。削平も著しく、遺存部分の壁の残りも悪い。主要なグリッドは、B73である。043号跡との重複により、西壁から南壁に沿って、幅0.5～1.2mの帯状に遺存している。西壁、南壁の遺存により、平面形は、一辺5mほどの正方形と考えられる。西壁の方向は、N－7°－Wである。

覆土は、重複のため、残りは悪い。a a′は、覆土の断面図である。土層は、次のとおりである。1．暗褐色土、ローム粒・焼土粒を若干含む。2．暗褐色土、ローム粒・ロームブロックを若干含む。3．黒色土、ローム粒・焼土・炭化粒を多く含む。4．ロームブロック。

遺存部分の床面は、やや軟弱であり、焼土・木炭の堆積がかなりみられた。壁は、高さ30cmを残すのみである。壁溝はない。柱穴は5個と思われる。図中のｃｃ′、ｄｄ′、ｅｅ′、ｆｆ′である。これは、平面形との位置関係から推定した。ｆｆ′は、2個の重複であるので、構造的には4個であろう。

柱穴の土層は次のとおりである。ｃｃ′、1．043号跡の貼床。2．褐色土。3．褐色土、ロームブロックを多く含む。ｄｄ′、1．043号跡の貼床。2．暗褐色土、硬質、3．暗褐色土、ロームブロックを多く含む。4．褐色土。5．褐色土、硬質。ｅｅ′、1．褐色土、ローム粒・炭化粒を若干含む。2．褐色土、ローム粒を若干含み、炭化粒を多く含む。3．褐色土、ローム粒を若干含む、硬質。4．暗褐色土、ロームブロックを多く含む。1・2は柱痕と思われる。ｆｆ′、1．褐色土、ローム粒・炭化粒を若干含む。2．暗褐色土、ロームブロックを多く含む、硬質。3．黒色土、ローム粒を若干含む。4．2に同じ。5．3に同じ。6．暗褐色土、ローム粒・焼土粒を若干含む。7．暗褐色土、ロームブロックを多く含む。8．褐色土、やや硬質。1は柱痕と思われる。平面形は、直径30～40cm、深さ50～80cmである。ｇｇ′は、位置関係からみて、本跡の貯蔵穴の可能性があるので、ここに述べておく。平面形は、直径90cmほどの、やや不整な円形で、深さ70cmである。覆土の土層は次のとおりである。1．043号跡の貼床。2．暗褐色土、ローム粒を若干含む。3．暗褐色土（1）：ロームブロック（1）。4．暗褐色土（3）：ロームブロック（1）。5．褐色土、ローム粒を若干含む。6．褐色土。遺物の出土は、僅かである。

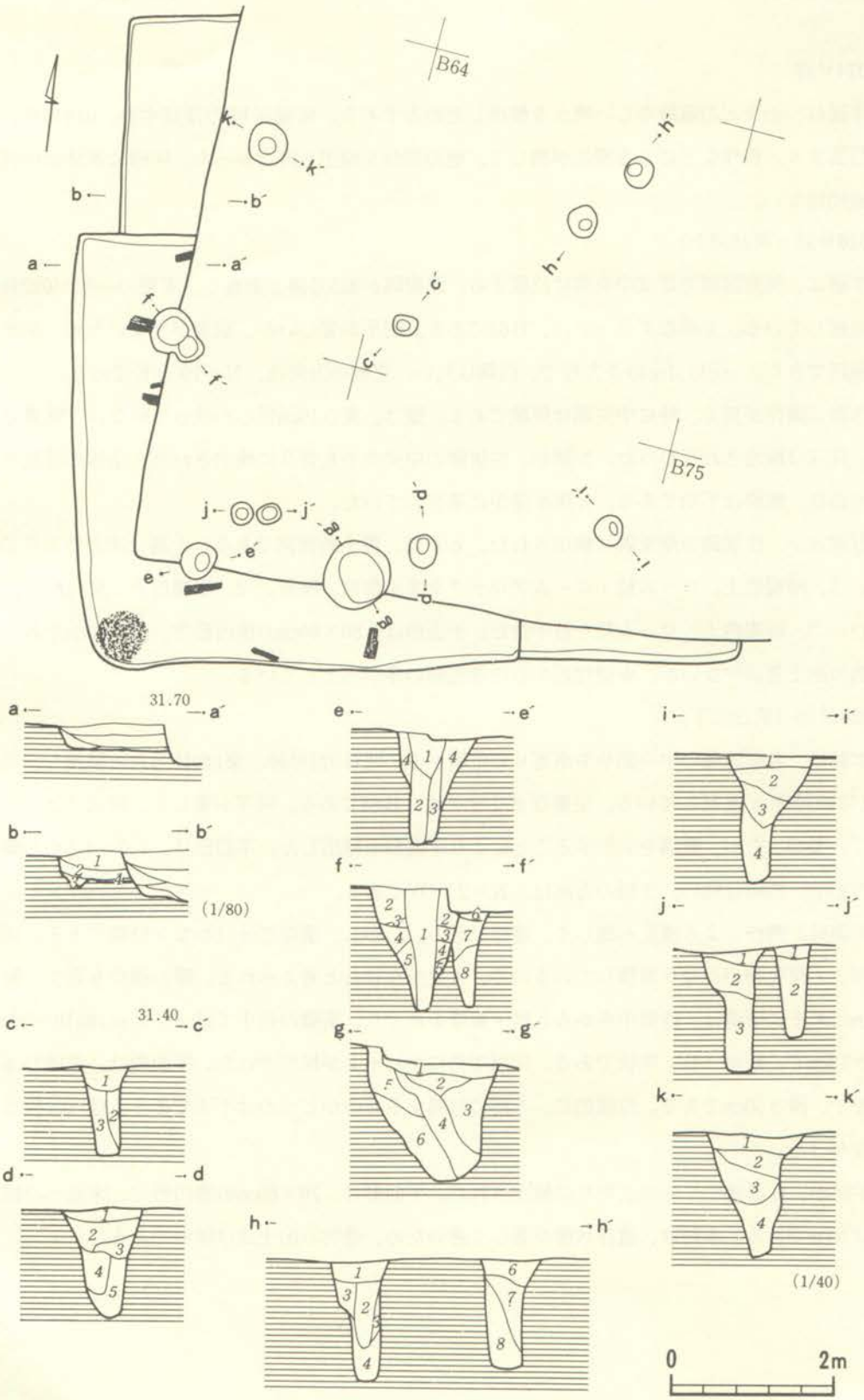
・025号跡（第27図右）

本跡は、発掘区域のほぼ中央に位置する。023号跡と043号跡により、大部分が重複し、重複のない部分は、北西隅と、南壁東半分である。削平により、壁の遺存も悪い。主要なグリッドは、B63である。北西隅と南東隅が残っていたため、平面形を推定することができた。一辺7.5mほどの程正方形と考えられる。かまどまたは炉跡は、遺存しない。西壁の方向は、N－7°－Wであ

る。

壁は、高さ30cmである。壁溝はない。柱穴は6個と思われる。図中のｈｈ′、ｉｉ′、ｊｊ′、ｋｋ′である。ｈｈ′、ｊｊ′には、2個ずつ検出されたので、構造的には4個と思われる。平面形は、直径30～50cmのほぼ円形で、深さ60～80cmである。深さはすべて043号跡の床面からのものである。柱穴の土層は次のとおりである。ｈｈ′、1．043号跡の貼床、2．褐色土、ローム粒を多く含む。3．褐色土、ロームブロックを多く含む。4．褐色土。2は、柱痕と思われる。6．043号跡の貼床。7．褐色土、ローム粒を多く含む。8．褐色土。7、8ともに硬質で、人為的に埋められたと考えられる。ｉｉ′、1．043号跡の貼床。2．暗褐色土（2）：ロームブロック（1）、硬質。3．黒色土。4．褐色土、ローム粒を若干含む。ｊｊ′、1．043号跡の貼床。2．暗褐色土（2）：ロームブロック（1）、硬質。3．黒色土。ｋｋ′、1．043号跡の貼床。2．黒色土、焼土粒を多く含む。4．褐色土、ロームブロックを若干含む。

覆土は、023号跡、043号跡の重複により、壁付近のみ残っている。ｂｂ′は、覆土の断面図である。土層は次のとおりである。1．暗褐色土。2．褐色土（2）：暗褐色土（2）：ロームブロック（1）、やや砂質。3．ロームブロック。確実に本跡に属すると思われる遺物はほとんどない。



第27図　023（左）・025（右）号跡実測図

・024号跡

本跡は、かまどの痕跡らしい焼土を検出したのみである。発掘区域のほぼ中央、043号跡の北に位置する。耕作などによる攪乱が激しく、他の部分を検出し得なかった。明確に本跡に付属する遺物はない。

・026号跡（第28図上）

本跡は、発掘区域のほぼ中央部に位置する。北東隅が025号跡と重複し、東壁の一部が023号跡と重複している。主要なグリッドは、B62である。削平が著しいが、重複が少ないため、平面形が確認できた。一辺3.4mの正方形で、四隅は丸い。主軸の方向は、N－19°－Eである。

床面は遺存が良く、特に中央部は堅緻である。壁は、高さ10cm程しか残っていない。壁溝はない。柱穴は検出されなかった。炉跡が、住居跡の中央やや北寄りに検出された。全体が攪乱をうけており、規模は不明である。火床が僅かに遺存していた。

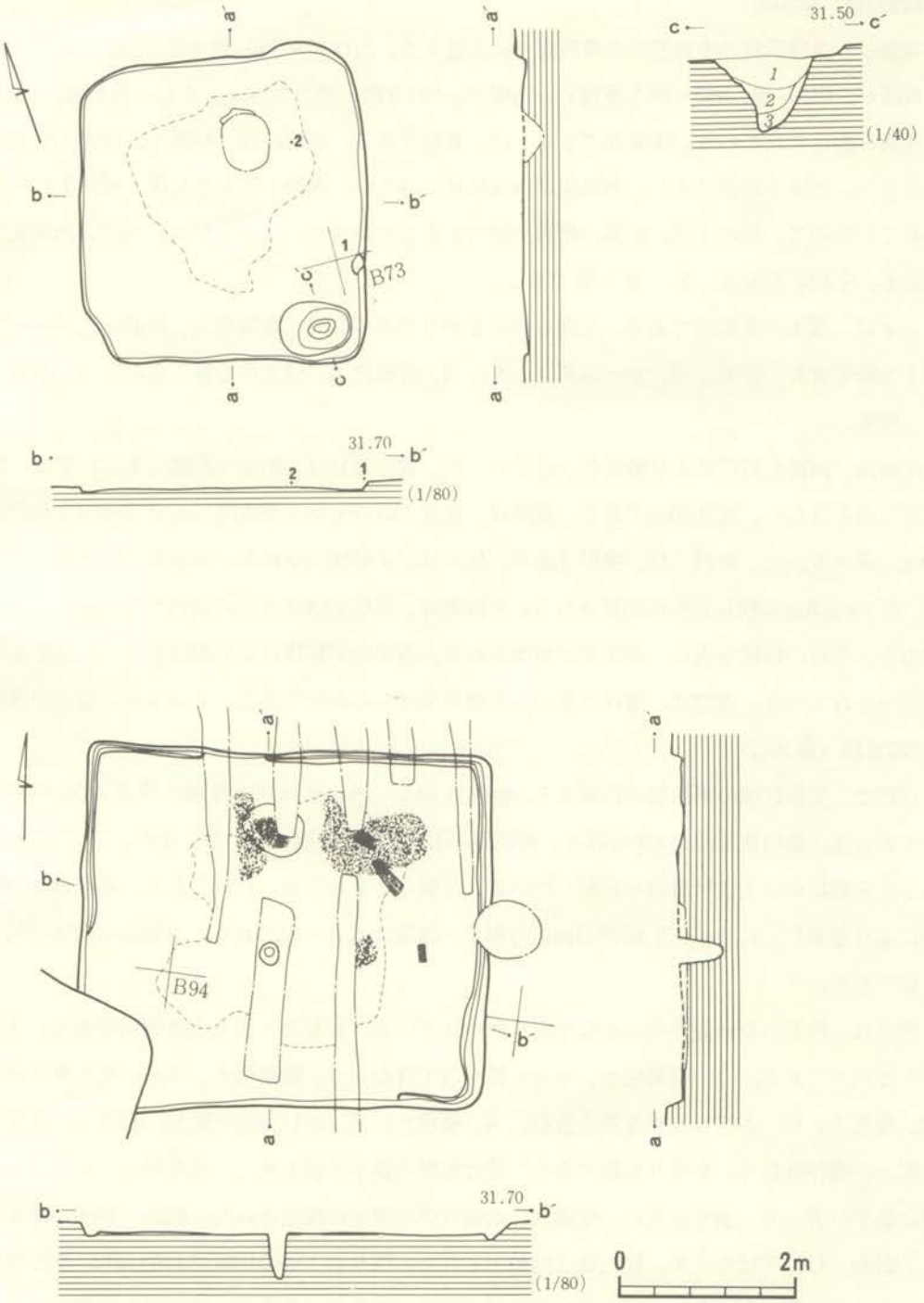
貯蔵穴が、住居跡の南東隅に検出された。c c'は、覆土断面図である。土層は次のとおりである。 1．暗褐色土、ローム粒・ロームブロックを多く含む、硬質。 2．暗褐色土、炭化粒を多く含む。 3．暗褐色土、ローム粒を若干含む。平面形は、80×60cmの楕円形で、深さ40cmである。遺物の出土量は少ないが、東壁付近からほぼ完形の坏が出土している。

・028号跡（第28図下）

本跡は、発掘区域の中央部やや南寄りに位置する。北は023号跡、東は019号跡と隣接し、南西隅が049号跡と重複している。主要なグリッドは、B84である。削平が著しく、壁はほとんど残っていなかったが、壁溝を追跡することにより平面形を検出した。平面形は、4.0×4.6mの横長の方形で、四隅は丸い。主軸の方向は、N－2°－Wである。

床面は、耕作による攪乱が激しく、遺存は悪い。しかし、遺存部分はかなり堅緻である。床面に焼土・炭化物がかなり堆積しているので、火災をうけたと考えられる。壁の遺存も悪く、最高20cmである。壁溝は、西壁中央から北壁・東壁をめぐり、南壁の途中で終っている。幅10～30cm、深さ10cmで、断面「U」字状である。床面中央に小ピットが検出された。平面形は、直径25cmの円形で、深さ50cmである。位置的に、本跡に付属するものかどうかは不明である。柱穴は検出されなかった。

炉跡が、住居跡やや中央北寄りに検出された。平面形は、70×60cmの楕円形で、床面への掘込みは10cmである。本跡は、遺存状態が著しく悪いため、遺物の出土量は僅かである。



第28図　026（上）・028（下）号跡実測図

・029号跡（第29図）

本跡は、発掘区域の中央部やや南西寄りに位置する。北は026号跡、東は023号跡と隣接する。南東隅が、049号跡、052号跡と重複し、西壁が、031号跡と接している。また、201号跡により、北西隅が掘込まれている。主要なグリッドは、B82である。西壁の残りが悪く、わずかな遺存部分により、全体を確認できた。南東隅は重複部分であるが、本跡が他よりも深く掘込まれてつくられていたので、壁の下部、床面、壁溝を検出することができた。平面形は、一辺5.1mの正方形である。主軸の方向は、N－12°－Wである。

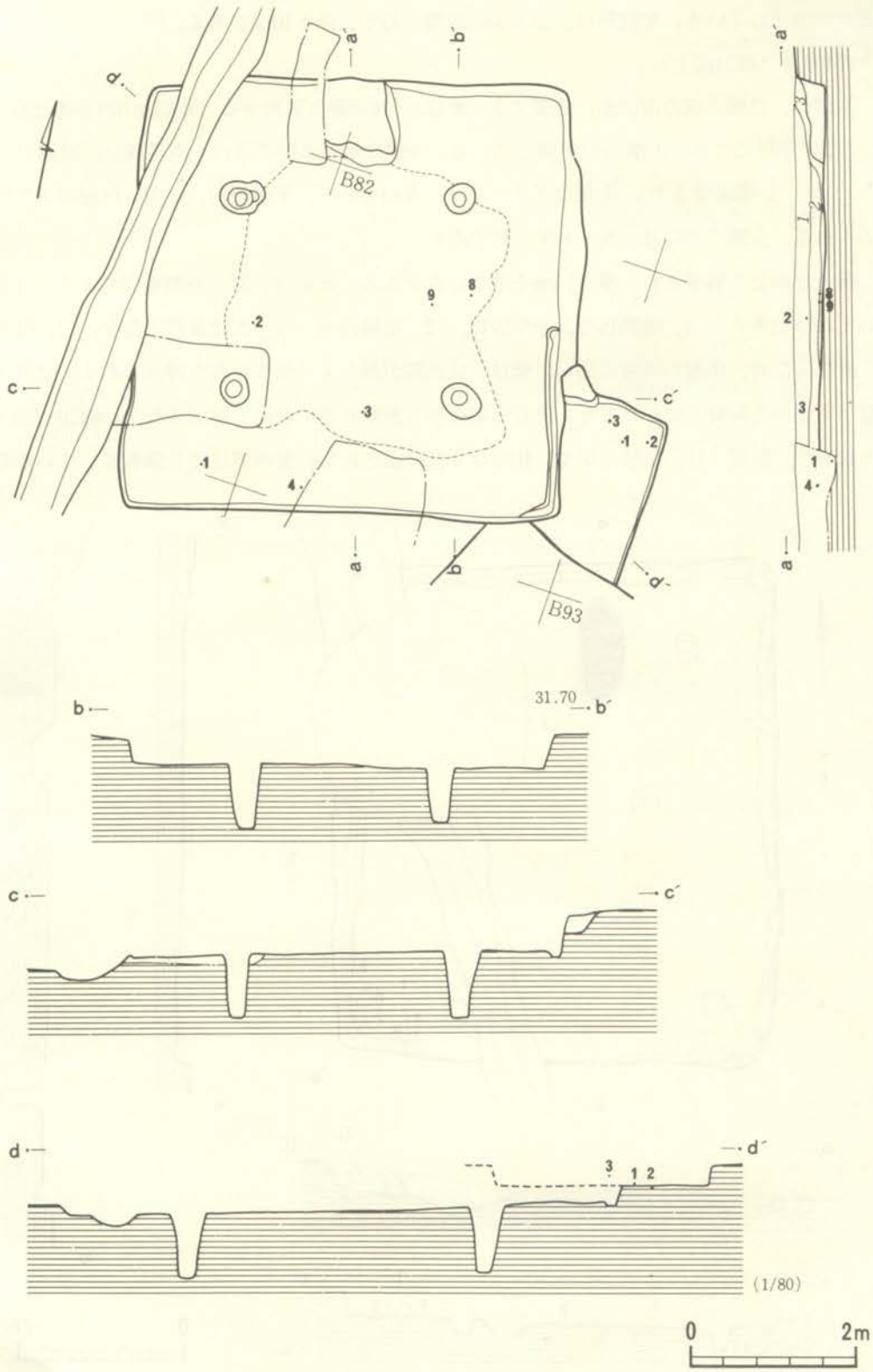
a a'は、覆土の断面図である。土層は次のとおりである。 1．暗褐色土、砂質。2．暗褐色土、焼土を若干含む、砂質。 3．ロームブロック。 4．暗褐色土、焼土粒を多く含む。 5．かまど。 6．攪乱。

床面は、南部が耕作により攪乱をうけているが、遺存部分は、かなり堅緻である。壁は、西壁以外の遺存は良く、高さ40cmである。壁溝は、東壁下の中央から南東隅にかけて検出された。幅20cm、深さ5cmで、断面「U」字形である。柱穴は、4個検出された。住居跡の対角線上に位置し、2.8×2.3mの横長方形に配置される。平面形は、直径40cmほどのほぼ円形で、深さ65～80cmである。北壁のほぼ中央に、かまどが検出された。西半分が耕作により攪乱をうけ、上部もかなり削平されている。遺物は、遺存の良い住居跡東半分からかなり出土しているが、細片が多い。

・030号跡（第30図）

本跡は、発掘区域の南西部に位置する。北東は045号跡、東は026号跡、南東は029号跡と隣接する。住居跡内東部分が126号跡と、南西隅が127号跡と重複している。また、201号跡が北東隅から南壁にかけて住居跡内を縦断している。主要なグリッドは、B71である。北東隅が201号跡により消滅しているが、5.8×5.3mの方形で、四隅は丸いと思われる。主軸の方向は、N－3°－Wである。

覆土は、削平のため西半分がかなり削り取られている。b b'は、覆土の断面図である。土層は次のとおりである。 1．暗褐色土、ローム粒を若干含む。 2．暗褐色土、ローム粒を多く含む。 3．褐色土、ロームブロックを多く含む。 4．褐色土。 5．201号跡の覆土。床面は、重複以外の部分の遺存は良く、かなり堅緻である。壁は東壁の残りが最も良く、高さ30cmである。他の3壁は削平が著しく、遺存は悪い。壁溝は、南壁以外の壁下に検出された。幅20～40cm、深さ10cmで、断面「U」字状を示す。柱穴は3個検出された。残りの1個の位置に126号跡があるため、構造的には4個であったと思われる。南東部の柱穴がやや西に寄るが、住居跡の対角線付近に位置し、4.3×3.0mの方形に配置されると考えられる。平面形は、直径30cmの円形で、深さ20～50cmである。炉跡が、北側柱穴間のほぼ中央付近に検出された。かなり大形の炉跡で、1.2×0.6mの楕円形を示す。床面への掘込みはほとんどない。南東隅に浅い窪みが検出され、土器の大きな



第29図　029(上)・052(右下) 号跡実測図

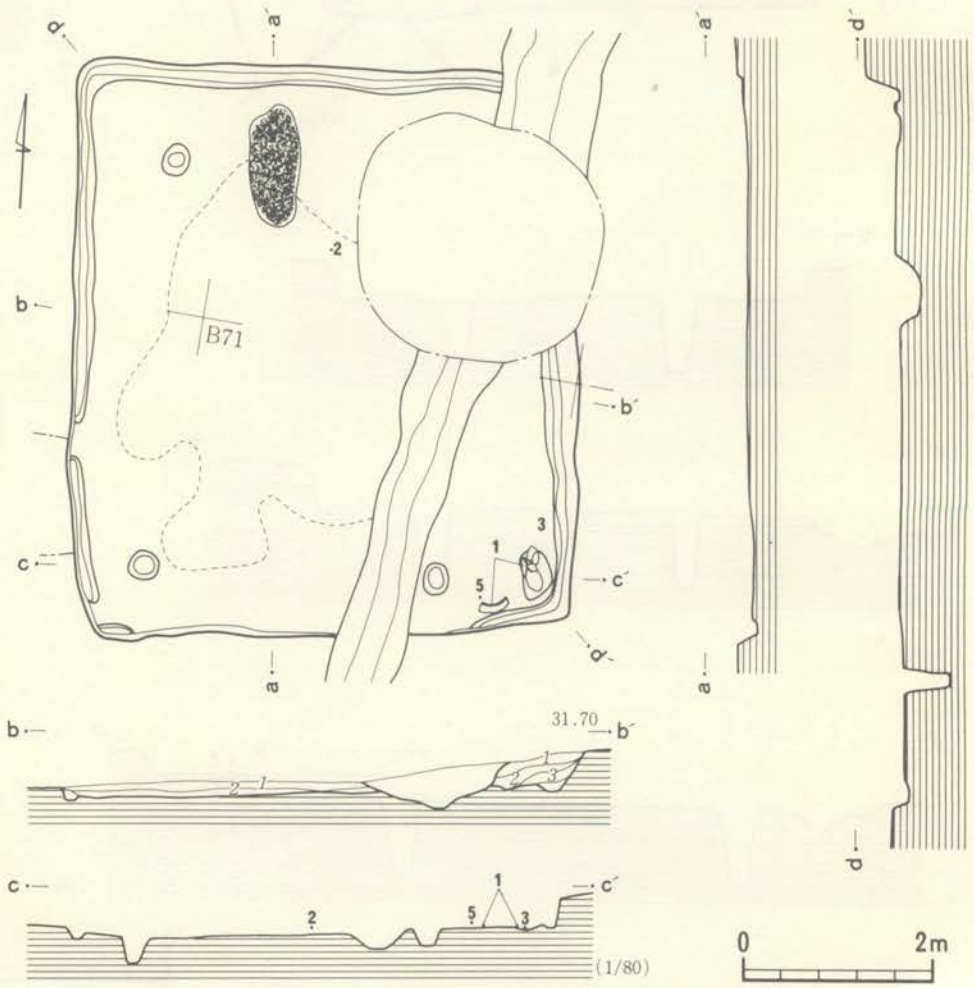
破片が出土している。平面形は、50×30cmの楕円形で、深さ10cmである。

・031号跡（第31図上）

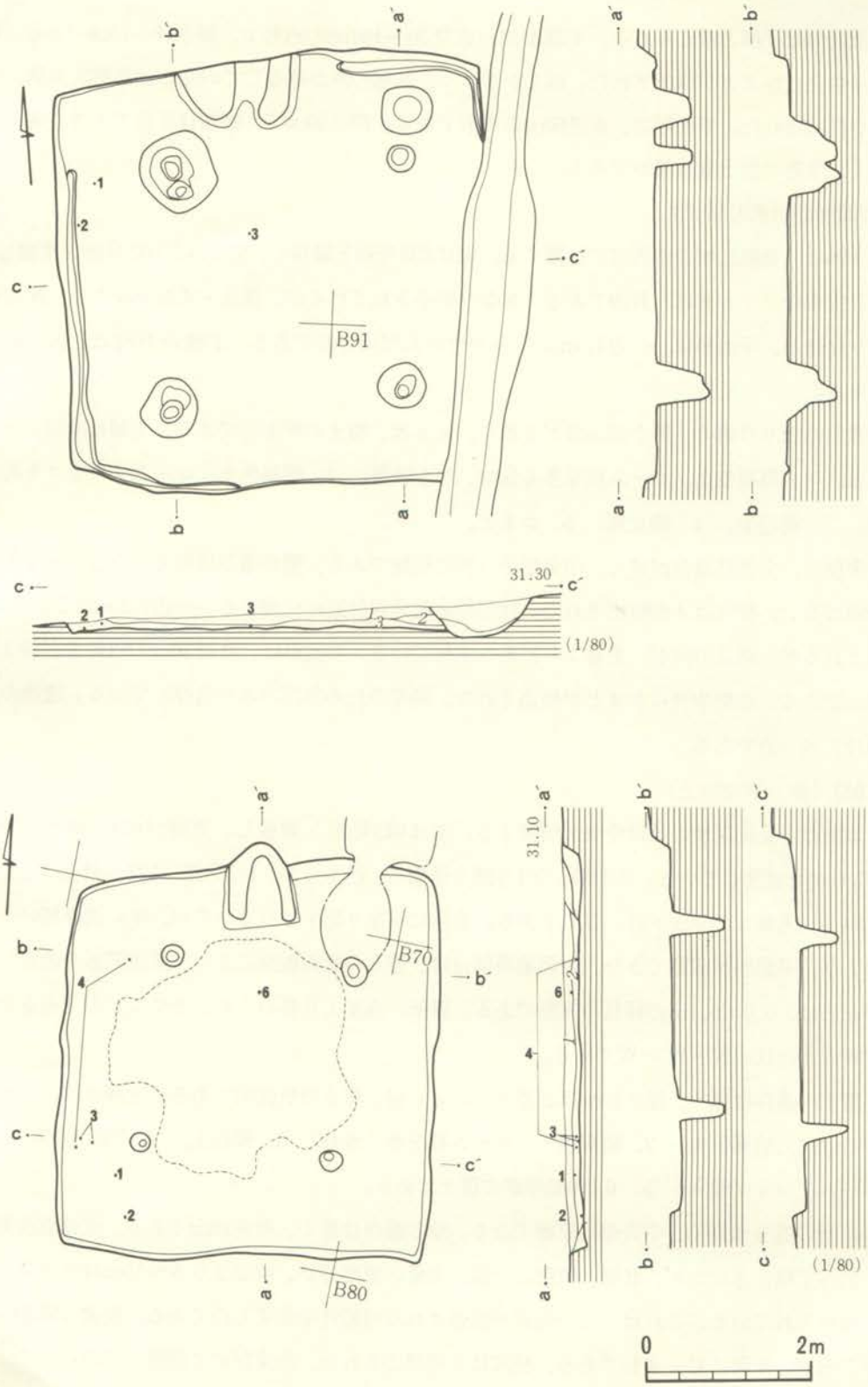
本跡は、発掘区域の南西部に位置する。北は、030号跡と隣接する。東壁が029号跡と接し、また、201号跡により、大部分が消滅している。全体にかなり削平され、南西隅は、壁溝により、かろうじて確認できた。主要なグリッドは、A89である。平面形は、一辺5m程の正方形と考えられる。主軸の方向は、N－4.5°－Eである。

覆土はかなり削平され、厚さ15cmを残すのみである。c c′は、覆土の断面図である。土層は次のとおりである。 1．暗褐色土、やや砂質。 2．暗褐色土、ローム粒を若干含む。 3．褐色土。

攪乱のため、床面の遺存は悪い。壁は、北西隅が最もよく残り、高さ20cmである。壁溝は、北壁下中央から東壁下にかけてと、南壁下中央から西壁北端にかけて検出された。幅20～30cm、深さ10cmで、断面「U」字状を示す。柱穴は5個検出された。北西部分に2個重複しているので、



第30図　030号跡実測図



第31図　031（上）・032（下）号跡実測図

構造的には4個と考えられる。平面形は、直径30～100cmの円形で、深さ50～70cmである。北壁ほぼ中央にかまどが検出された。削平が著しく、基部のみが遺存している。住居跡北東隅に貯蔵穴が検出された。平面形は、直径60cmの円形である。深さ50cmで、底面は平坦である。削平が著しく、遺物の出土量は僅かである。

・032号跡（第31図下）

本跡は、発掘区域の南西部に位置する。東は030号跡と隣接し、北東隅が033号跡と重複している。主要なグリッドは、B79である。かなり削平されているが、攪乱・重複が少なく、平面形の残りは良い。平面形は、一辺4.5mの、ややゆがんだ正方形である。主軸の方向は、N－4°－Wである。

覆土の残りは悪く、厚さ20cmほどである。a a'は、覆土の断面図である。土層は次のとおりである。 1．黒褐色土、ローム粒を多く含む、やや砂質。 2．暗褐色土、ロームブロックを若干含む。 3．褐色土。 4．焼土塊。 5．かまど。

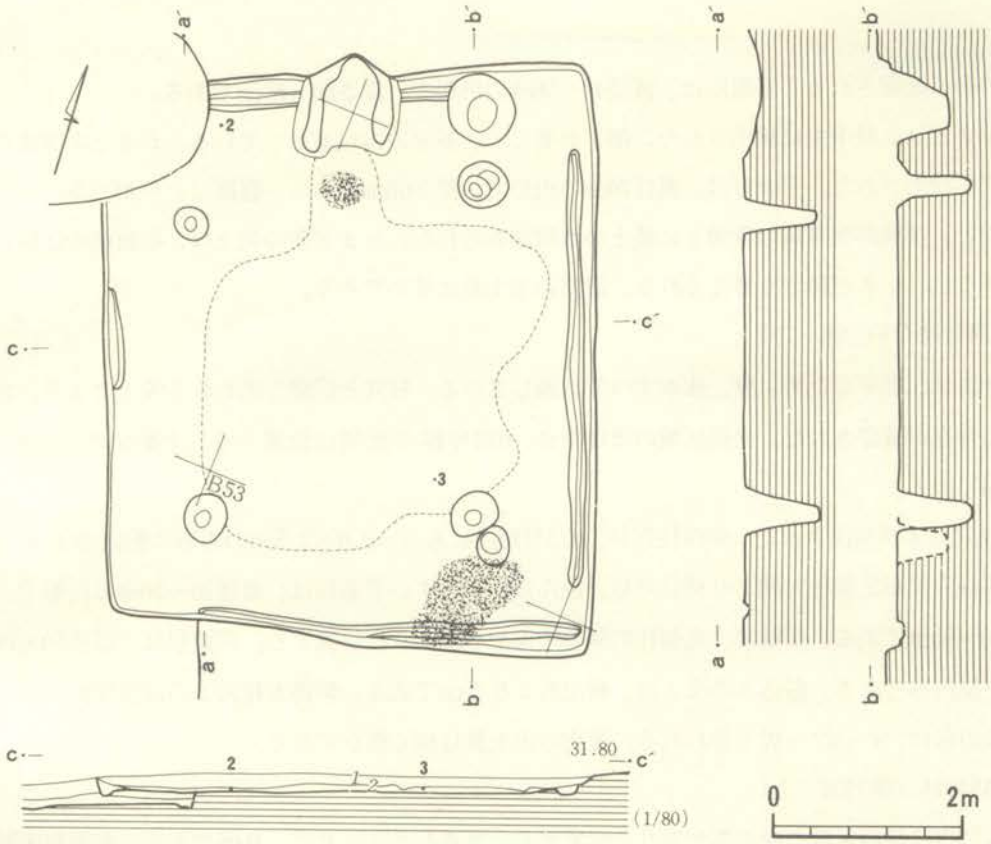
床面は、全体に遺存が良く、中央部分は特に堅緻である。壁の遺存は悪く、高さ25cmである。壁溝はない。柱穴は4個検出された。住居跡の対角線付近に位置する。一辺2.2mの正方形に配置されるが、南北方向が、主軸より8°東へずれている。平面形は、直径30cmの円形で、深さ50～70cmである。北壁中央にかまどが検出された。削平のため基部のみが遺存している。遺物の出土量は、多い方である。

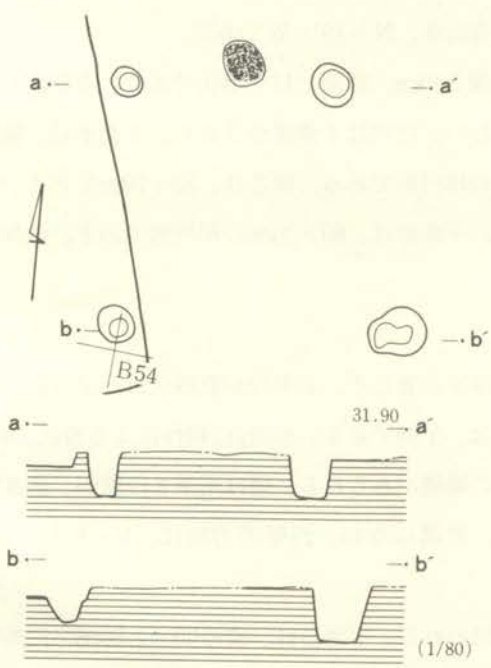
・033号跡（第32図上）

本跡は、発掘区域のほぼ中央に位置する。南は043号跡と隣接し、東壁が034号跡と、西壁が045号跡と重複している。北西隅が201号跡と重複し、西半分が、121号跡、122号跡全体と重複している。主要なグリッドは、B43である。全体にかなり削平されているが、壁の遺存部分、壁溝により、平面形が確認できた。西側重複部分は、覆土の断面観察により、重複関係を確認した。平面形は、6.0×5.1mの縦長の方形である。東壁が西壁より長いため、ややゆがんだ形を示す。主軸の方向は、N－17°－Wである。

覆土の遺存は悪く、厚さ20cmほどである。c c'は、覆土の断面図である。土層は次のとおりである。 1．暗褐色土。 2．暗褐色土、ローム粒を多く含む。 3．褐色土。 4．033 号跡の貼床、ロームブロック混入。 5．6 は045号跡の覆土である。

床面の遺存は良く、中央部は堅緻である。壁の遺存は悪く、最高20cmである。壁は東西南北壁に沿って検出されたが、北壁、東壁の全部、南壁の東半分が、壁面より5～10cmほど内側の床面に検出されている。これは、この住居が拡張された可能性を示すものである。壁溝は幅20cm、深さ10cmで、断面「U」字形である。柱穴は5個検出された。南東部に2個接しているので、構造的には、4個と思われる。住居跡の対角線上に位置し、一辺3m程の、北東から南西方向に歪ん





第32図　033（上）・034（下）号跡実測図

だ方形に配置される。平面形は、直径40～50cmの円形で、深さ50～80cmである。

かまどは北壁中央に検出された。削平が著しく、基部のみが遺存している。かまどの東側に貯蔵穴が検出された。平面形は、直径70cmの円形で、深さ60cmである。底面は、平坦である。かまど前と、住居跡南東隅の床面上に焼土の堆積がみられた。かまど前の焼土は、拡張前の住居の炉跡または、かまど跡とも考えられる。遺物の出土量は僅かである。

・**034**号跡（第32図　下）

本跡は、削平のため、壁、床がすべて消滅している。柱穴と炉跡と思われる焼土により、住居跡の存在が確認された。発掘区域のほぼ中央、033号跡の東側に位置する。主要なグリッドは、B44である。

柱穴は4個検出された。南西柱穴が、033号跡内にある。2.0×2.5mの方形に配置されるが、南側柱穴間が北側柱穴間より長いため、歪んだ形を示す。平面形は、直径30～50cmの円形で、深さ40～60cmである。炉跡は、北側柱穴間の中央やや北よりに位置する。平面形は、直径50cmほどの不整円形である。掘込みの深さは、検出面より5cmである。炉跡と柱穴との位置関係より、主軸の方向は、N－50°－Wと思われる。遺物の出土量は極く僅かである。

・**035**号跡（第33図　上）

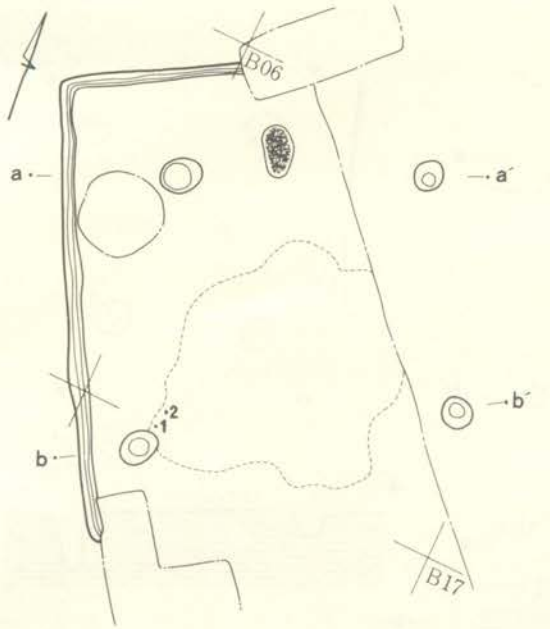
本跡は、発掘区域の中央部北寄りに位置する。主要なグリッドは、B06である。削平が床面直上まで達し、東半分は全く削り取られ、柱穴のみ遺存している。115号跡が、本跡内に位置している。壁溝により、北壁西半分と西壁の位置が確認された。平面形は、一辺5mほどの正方形と考えられる。炉跡と柱穴の位置により、主軸の方向は、N－19°－Wである。

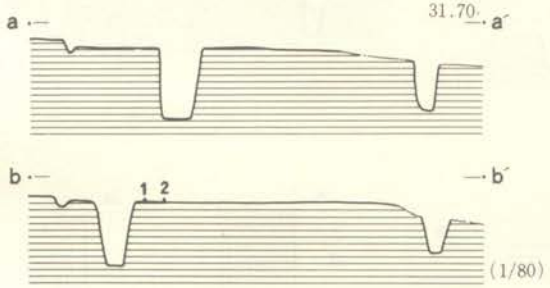
壁はほとんど遺存しない。壁溝は、幅15cm、深さ10cm、断面「U」字状である。遺存部分の床面はかなり堅緻であるが、攪乱による凹凸が激しい。柱穴は4個検出された。平面形は、東側2個が、直径30cmの円形、西側2個が、40×30cmの楕円形である。深さは、50～70cmである。北側柱穴間の中央やや北寄りに、炉跡が検出された。平面形は、60×30cmの楕円形である。全体に遺存状態は悪く、遺物の出土量は僅かである。

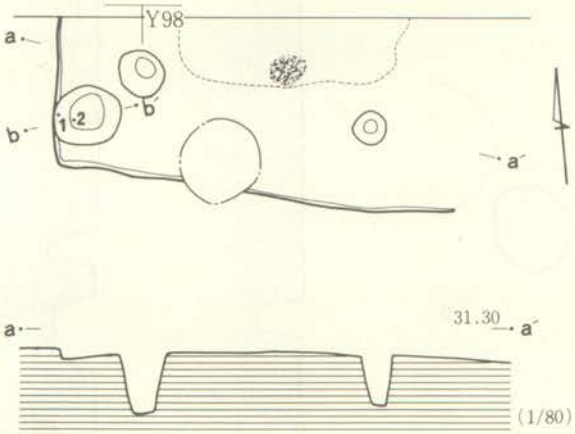
・**036**号跡（第33図　下）

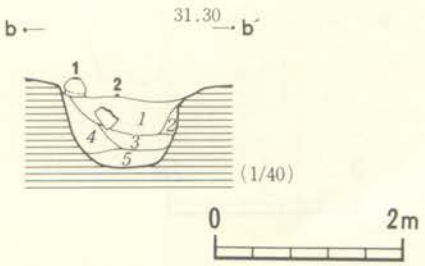
本跡は、発掘区域の中央部北端に位置する。削平が著しく、北半分が発掘区域外に位置するため、全体の規模は不明である。主要なグリッドは、Y98である。床面は、耕作による攪乱のため、遺存は悪い。検出部分ほぼ中央に、少量の焼土の堆積がみられる。壁は南壁と西壁が、高さ10cmほど残っているが、東壁は全く削平されている。壁溝はない。西壁の方向は、N－5.5°－Eである。

柱穴は2個検出されたが、構造的には4個と思われる。平面形は、直径30cmと50cmの円形で、深さ50cmと60cmである。住居跡南西隅に貯蔵穴が検出された。平面形は、直径70cmほどの不整円









形である。深さは40cmで、底面は平坦である。

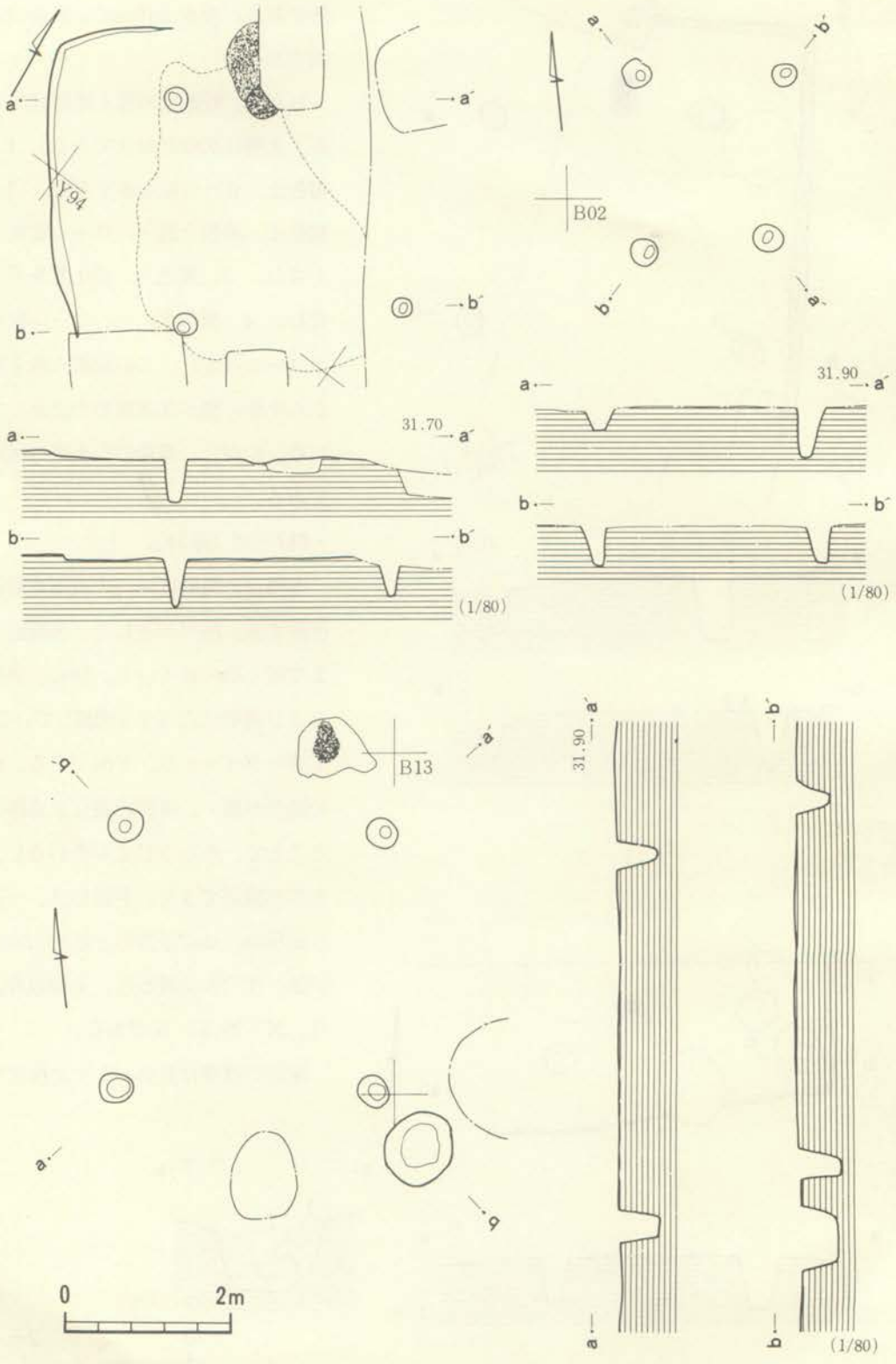
b b'は、貯蔵穴の覆土断面図である。土層は次のとおりである。 1. 褐色土、ローム粒を多く含む。 2. 褐色土、黒色土混入、ローム粒を多く含む。 3. 褐色土、炭化粒を若干含む。 4. 褐色土。 5. ローム粒(2)：ローム（1）。この貯蔵穴の上部から小形の甕がほぼ完形で出土している。しかし、遺物の出土量は僅かである。

・037号跡（第34図　上左）

本跡は、発掘区域の中央部北端に位置する。削平が著しく、床面直上まで削り取られている。特に、東壁および南壁付近は全く消滅している。主要なグリッドは、Y84である。壁の遺存が悪く、床面の遺存を追跡することで、かろうじて平面形らしきものが確認できた。平面形は、一辺5m程の、ほぼ正方形と考えられる。炉跡、柱穴の位置から、主軸の方向は、N－29.5°－Wである。

床面の遺存は良い。とくに柱穴で

第33図　035（上）・036（下）号跡実測図



第34図　037(上左)・039(上右)・040(下) 号跡実測図

囲まれた部分は竪緻である。壁は、北壁および西壁の一部のみが遺存する。高さは10cmである。壁溝はない。柱穴は3個検出された。北東部分の柱穴は、攪乱のため消滅しているので、構造的には4個であろう。平面形は、直径30cm程の円形で、深さ50～60cmである。住居跡中央部北寄りに、炉跡が検出された。平面形は、110×80cmの楕円形で、床面への掘込みは10cmである。北壁にまで達しているが、掘込みが浅い。全体に遺存状態は悪く、遺物の出土量は僅かである。

・039号跡（第34図　上右）

本跡は、削平のため床面までが消滅し、柱穴のみが遺存している。遺構検出のための精査時に小ピットが検出され、位置関係から、かろうじて住居跡と認められたものである。発掘区域の北西部に位置し、040号跡の北に隣接する。主要なグリッドは、Y92である。柱穴は、2.5×2.0mのやや歪んだ方形に配置される。柱穴の平面形は、直径40cmほどのやや不整な円形である。検出面からの深さは、30～60cmである。遺物は、柱穴の覆土から極く少量出土している。

・040号跡（第34図　下）

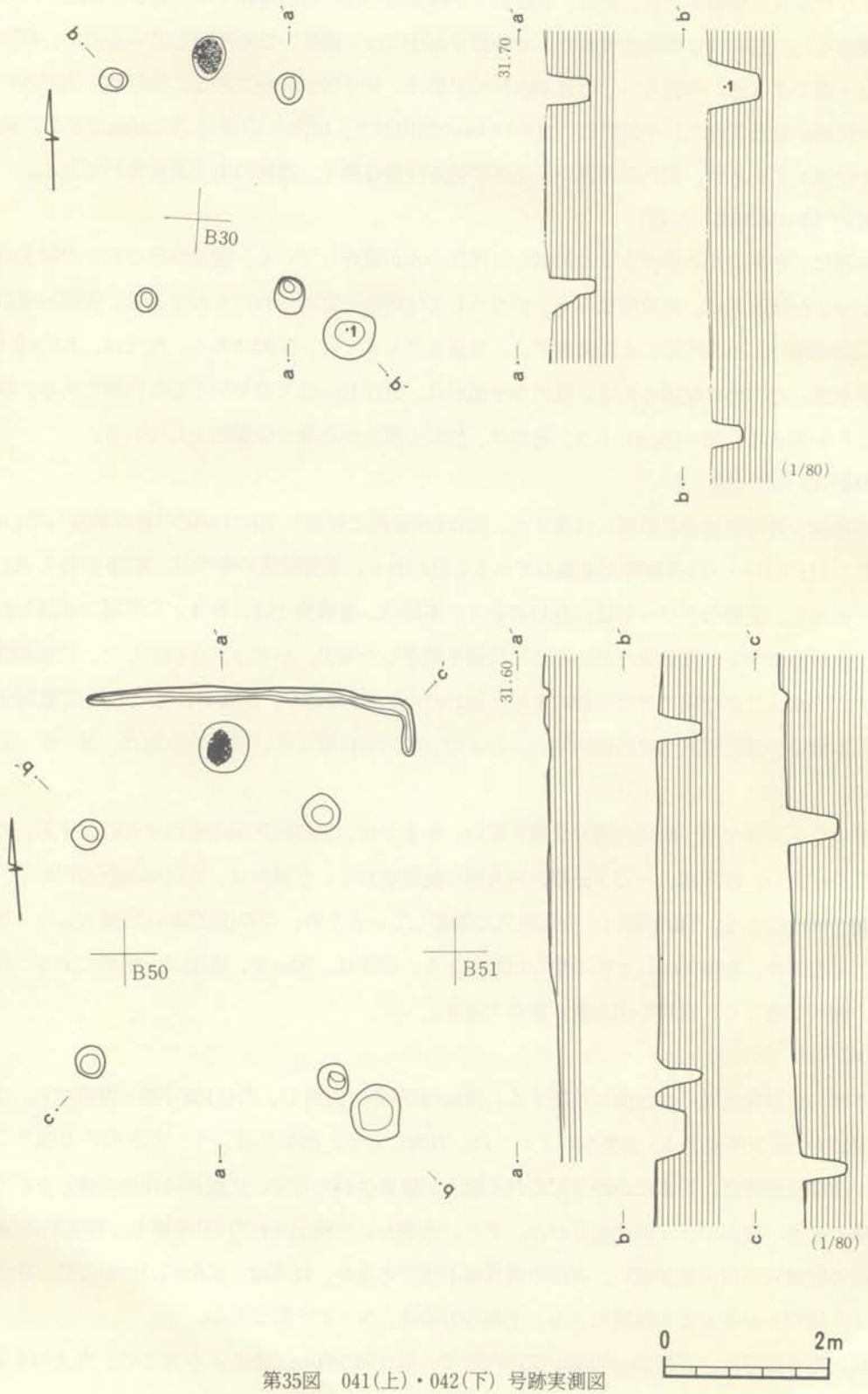
本跡は、発掘区域の北東部に位置する。北は039号跡に近接し、西には202号跡が隣接している。また、118・119・120号跡等と重複していると思われる。重複関係の中では、本跡が最も古いと考えられる。主要なグリッドは、B12である。本跡は、遺構検出時にかまどの基部を確認したため、住居跡の存在が推定された。かまど周辺を精査した結果、小ピットを検出した。位置関係から、このかまどが付属する住居跡のものと思われた。119号跡も、かまど、柱穴との位置関係より、本跡の貯蔵穴である可能性が強い。かまど、柱穴の位置より、主軸の方向は、N－6°－Eである。

壁は全く遺存せず、床面の遺存状態も悪い。かまどは、北側柱穴間の東寄りに位置する。火床の残りは良い。柱穴は、一辺3m程の正方形に配置される。平面形は、直径40cm程の円形で、深さ40～50cmである。119号跡は、南東柱穴に隣接しているため、この住居跡の貯蔵穴として述べる。平面形は、直径90cmほどの不整な円形である。深さは、50cmで、底面は、平坦である。本跡は、削平が著しく、遺物の出土量は僅かである。

・041号跡（第35図　上）

本跡は、発掘区域の北西部に位置する。南は042号跡と近接し、西は138号跡と隣接する。北西には137号跡が隣接する。主要なグリッドは、B30である。削平が著しく、床面まで消滅している。遺構検出時に、かまどの跡と思われる焼土が確認されたので、住居跡の存在が推定された。精査の結果、柱穴が、4個検出された。また、土壙として検出された131号跡も、位置関係から、本跡の貯蔵穴の可能性が強い。本跡の規模は不明であるが、柱穴は、2.6×2.1mの方形に配置される。柱穴とかまどとの位置により、主軸の方向は、N－2°－Eである。

柱穴の平面形は、直径30～50cmのほぼ円形で、深さ50～60cmである。かまどは、火床のみ遺存



第35図　041(上)・042(下) 号跡実測図

している。北側柱穴間の中央やや北に位置し、構造上は北壁中央につくられていたと考えられる。貯蔵穴（131号跡）は、直径60cmほどのやや不整な円形である。深さ70cmで、底面は平坦である。遺物の出土量は僅かである。

・042号跡（第35図　下）

本跡は、発掘区域の東部に位置する。北は041号跡と近接し、南は140号跡と隣接している。主要なグリッドは、B50である。遺構検出時に、炉跡と思われる焼土が確認され、住居跡の存在が推定された。精査の結果、柱穴4個、貯蔵穴と思われるピット1個、北壁の壁溝と思われる小溝が検出された。本跡の規模は不明であるが、柱穴は、3.1×2.8mのやや歪んだ方形に配置される。柱穴の配置と炉跡の位置により、主軸の方形は、N－5°－Eである。

柱穴の平面形は、直径40cmほどのやや不整な円形で、深さ60cmほどである。壁溝と思われる小溝は、炉跡の北側を東西に走り、東端でほぼ直角に南へ折れ曲って終っている。幅20cm、深さ10cmである。炉跡は、北側柱穴間のほぼ中央北寄りに位置する。火床のみ遺存しているので、かまどの可能性もあるが、北側を壁溝が走っているため、炉跡とした。平面形は、直径60cmの円形で、掘込みは、深さ10cmである。貯蔵穴と思われるピットは、住居跡の南東隅の位置にある。平面形は、直径60cmほどのやや不整な円形である。深さ40cmで、底面は平坦である。本跡は、遺存状態が悪く、遺物の出土量は僅かである。

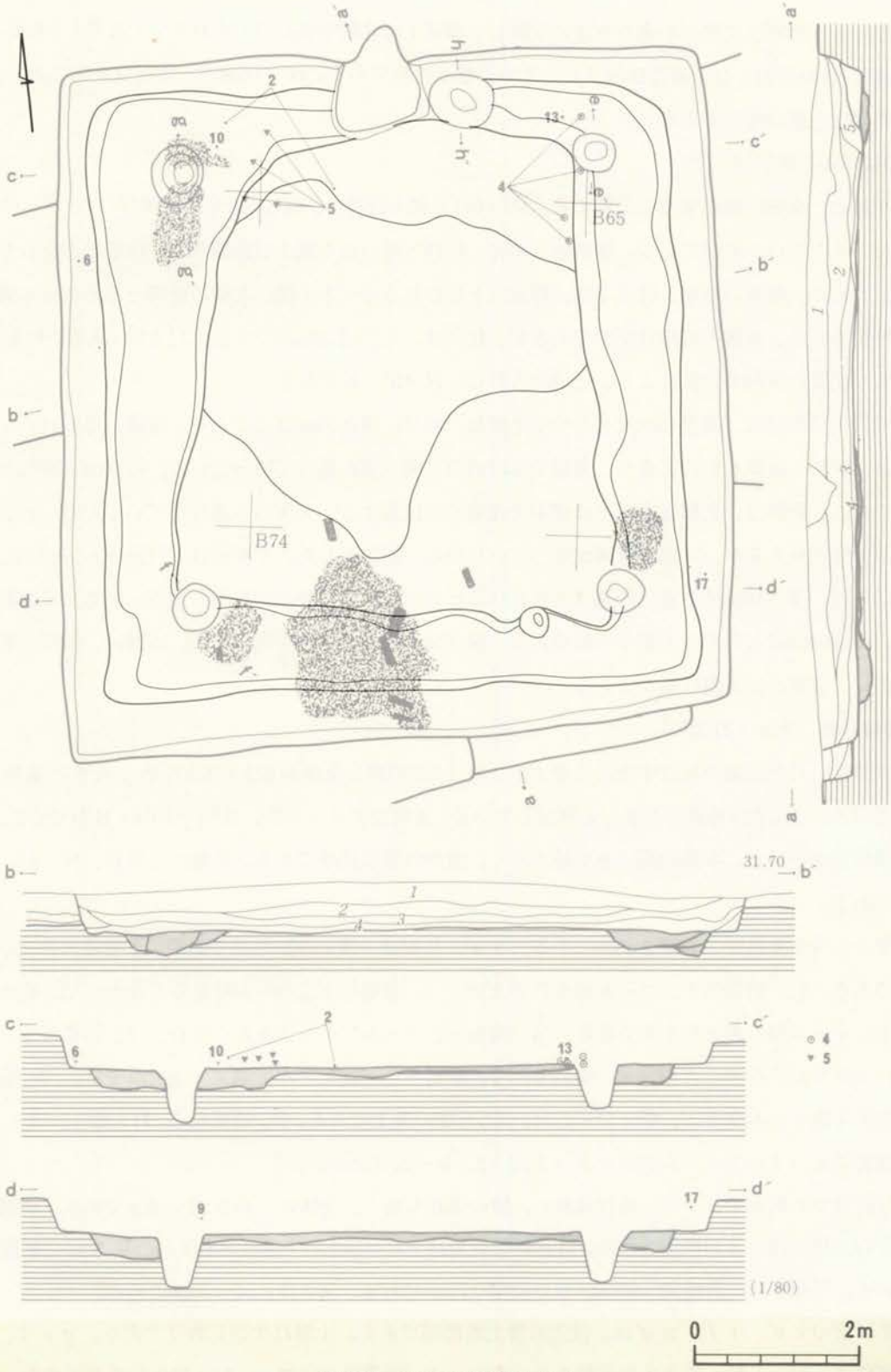
・043号跡（第36・37図）

本跡は、発掘区域のほぼ中央に位置する。東は022号跡と全体が023・025号跡と大きく重複している。北は024号跡のかまどと隣接している。主要なグリッドは、B54・B64・B74である。重複関係が多いが、本跡の掘込みが最も深く、遺存状態は良好である。主軸の方向は、N－6°－Eである。

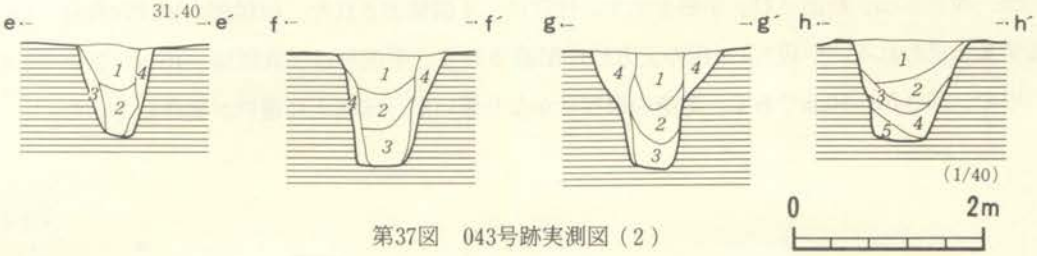
覆土の遺存も良好で、厚さ60cmである。a a′、b b′は、覆土の断面図である。土層は次のとおりである。1．暗褐色土、ローム粒を若干含む。 2．暗褐色土、ローム粒を多く含む。 3．暗褐色土、ローム粒・焼土粒を多く含む。 4．褐色土、ロームブロックを多く含む。 5．暗褐色土、ロームブロックを多く含む。 6．褐色土。 7．暗褐色土、焼土・木炭混入。 8．かまど。 9．暗褐色土・焼土・木炭混入。10・11・12は、025号跡の覆土である。10．暗褐色土、11．褐色土（2）：暗褐色土（2）：ロームブロック（1）。12．ロームブロック。

床面はやや軟弱であるが、遺存は良い。壁の遺存も良く、全体に、高さ30～40cmである。壁溝はない。柱穴は、4個検出された。住居跡の対角線上に位置し、一辺5.2mほどの正方形に配置される。平面形は、直径50～60cmのやや不整な円形である。深さは、50～70cmである。

第37図のｅｅ′、ｆｆ′、ｇｇ′は、柱穴の覆土断面図である。土層は次のとおりである。ｅｅ′1．暗褐色土、ローム粒・焼土・炭化粒を多く含む。 2．暗褐色土、ローム粒・炭化粒を若干含む。



第36図　043号跡実測図（1）



第37図　043号跡実測図（2）

3．黄褐色土、硬質。ｆｆ′、 1．暗褐色土、ロームブロック・焼土粒を若干含む、炭化粒を多く含む。 2．暗褐色土、ローム粒・炭化粒を若干含む。 3．暗褐色土。 4．暗褐色土、ローム粒を多く含む。ｇｇ′、 1．暗褐色土、ローム粒を多く含む。 2．暗褐色土、ローム粒を多く含む、炭化粒を若干含む。 3．暗褐色土、ロームブロックを若干含む。 4．暗褐色土、ローム粒・ロームブロックを多く含む。 5．黄褐色土、硬質。ｅｅ′、ｆｆ′、ｇｇ′の3個とも、断面に柱痕が観察される（土層番号　1．2．3）。

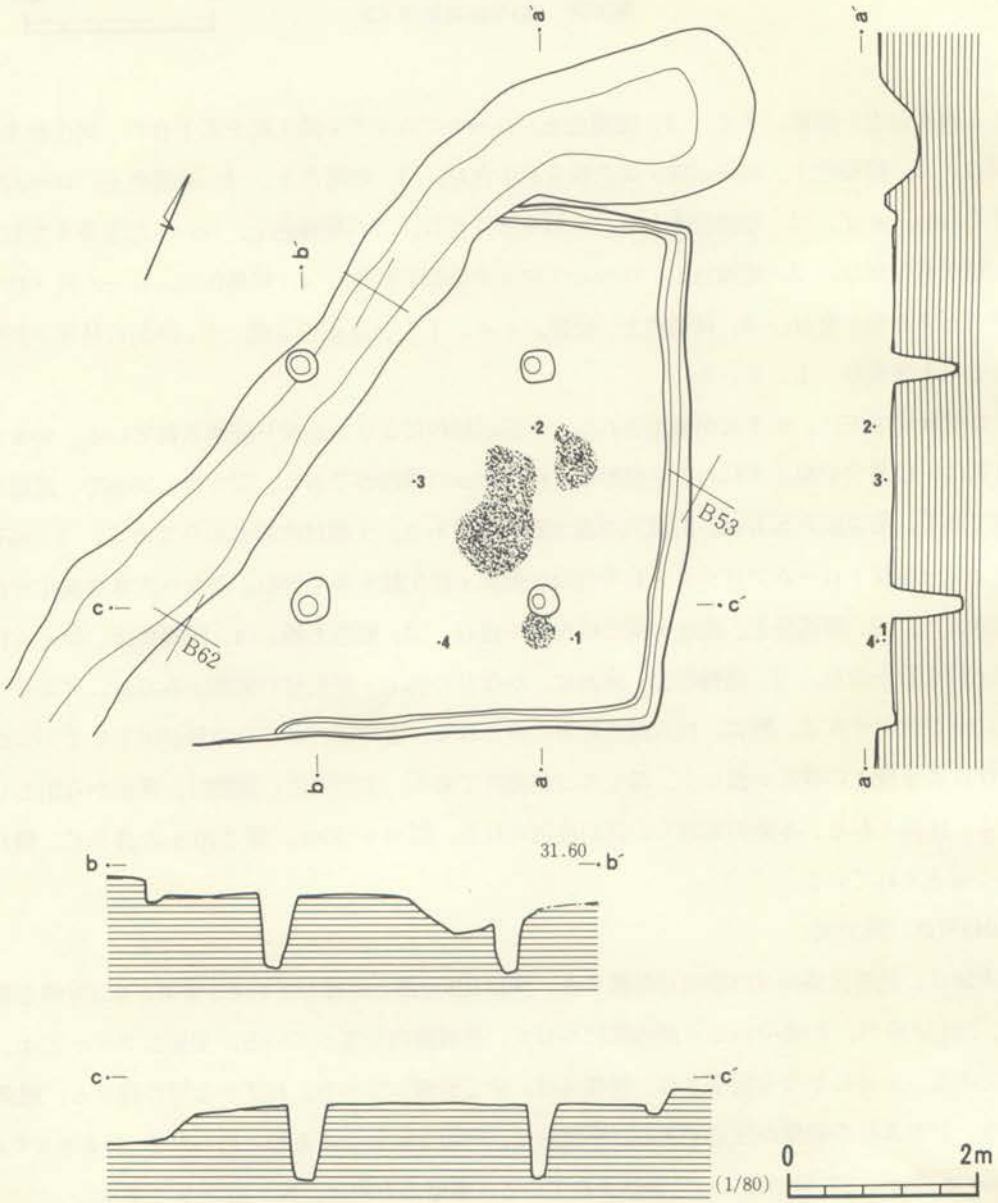
北壁ほぼ中央に、かまどが検出された。上部が耕作により、かなり破壊されている。かまどの東側に、貯蔵穴が検出された。平面形は、80×60cmの楕円形である。深さは、50cmで、底面は平坦である。第37図のｈｈ′は、貯蔵穴の覆土断面図である。土層は次のとおりである。 1．暗褐色土、ローム粒・ロームブロックを若干含む、焼土・炭化粒を多く含む。かなり大きな炭化材が検出された。 2．暗褐色土、焼土・炭化粒を多く含む。 3．褐色土層。 4．暗褐色土、ローム粒・焼土粒を若干含む。 5．暗褐色土。床面に、かなりの焼土・炭化材の堆積がみられ、火災をうけたことが推定される。特に、柱穴付近に多くみられる。遺物は、かなりの量が出土しているが、耕作による覆土の攪乱が激しく、ほとんどが細片である。完形に近い遺物は、床面から出土している。床面下から、本跡の素掘りの跡が検出された。幅80～150cm、深さ20cmの溝状に、壁に沿って掘込まれている。

・045号跡（第38図）

本跡は、発掘区域のほぼ中央に位置する。南は026号跡と近接している。東壁が033号跡と重複し、201号跡が、北壁中央から南西隅にかけて、住居跡内を走っている。主要なグリッドは、B52である。全体にかなり削平され、西側⅓は、全く消滅している。わずかな壁の残りと、壁溝により、おおよその規模が推定できる。平面形は、一辺5ｍ程の正方形と思われる。かまどまたは、炉跡の位置が、201号跡によって掘込まれている。東壁の方向は、Ｎ－23°－Ｗである。

覆土はほとんど遺存していない。床面は、東半分にのみ遺存しているが、やや軟弱である。かなりの量の焼土の堆積がみられるので、火災をうけたと考えられる。壁の遺存は悪く、北壁の東半分、東壁・南壁が、高さ15cm程のこるのみである。壁溝は、遺存している壁下にあり、幅20～

30cm、深さ5cm、断面「U」字形を示す。柱穴は、4個検出された。住居跡のほぼ対角線上に位置すると思われる。一辺2.4m程の正方形に配置される。平面形は、直径30～40cmのやや不整な円形で、深さ70～80cmである。遺構の遺存はかなり悪いが、床面上に遺物が散在していた。



第38図　045号跡実測図

・**046**号跡（第39図）

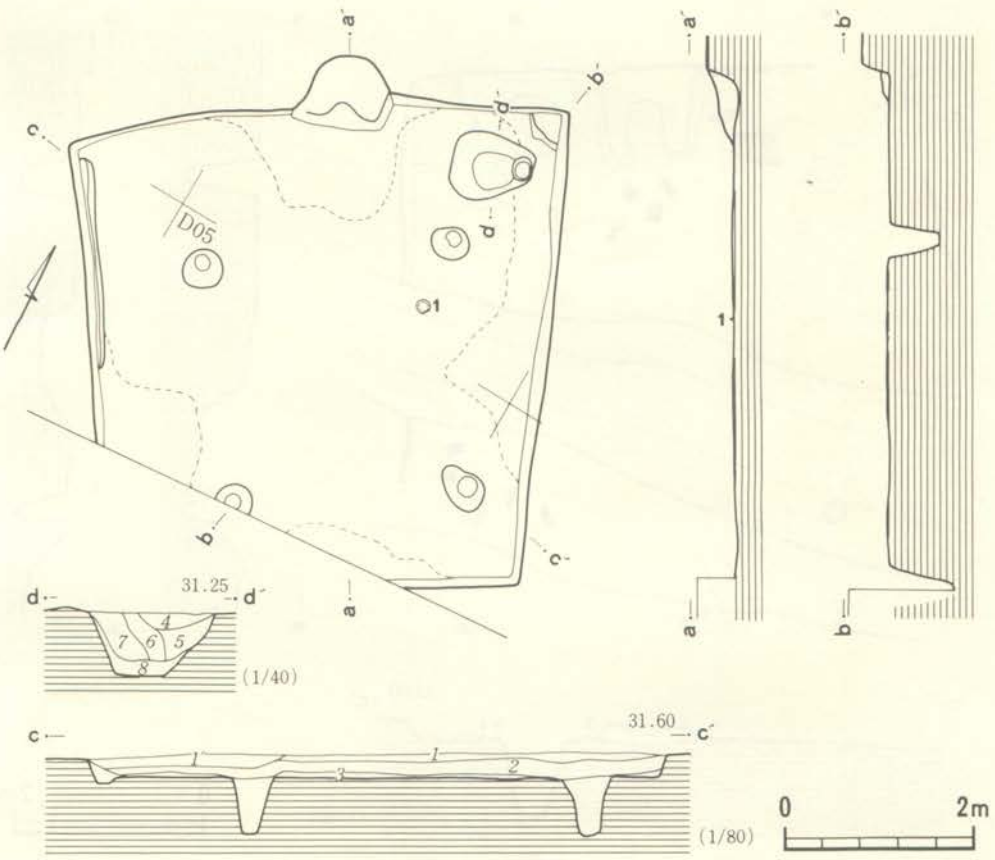
本跡は、発掘区域の中央部南端に位置する。東壁が020号跡と重複し、北東部分が019号跡と重複している。また、南西隅が発掘区域外にある。重複している遺構の中で掘込みの深さが最も深く、床面の遺存は良い。壁は全体に黒壁となる。主要なグリッドは、D 05である。

平面形は、5.1×4.8mの方形であるが、北壁が南壁より長く、やや歪んだ形を示す。主軸の方向は、N－26°－Wである。

覆土は厚さ30cm程残っている。ｃ c'は、覆土の断面図である。土層は次のとおりである。1．暗褐色土、ローム粒・焼土粒を若干含む。 2．黒褐色土、ローム粒・ロームブロック若干含む。 3．暗褐色土、ローム粒を多く含む。 4．褐色土、ロームブロックを多く含む。

床面はかなり堅緻である。壁は全体に高さ25cm程遺存している。壁溝は、西壁下の北半分に検出された。幅20cm、深さ10cmで、断面「U」字状を示す。柱穴は4個検出された。住居跡のほぼ対角線上に位置すると思われる。一辺2.6m程の正方形に配置される。平面形は、直径40cm程のやや不整な円形で、深さ60～70cmである。

かまどが北壁のほぼ中央に検出された。上部がかなり削平されているが、壁面に40cm程掘込ん



第39図　046号跡実測図

でつくられている。

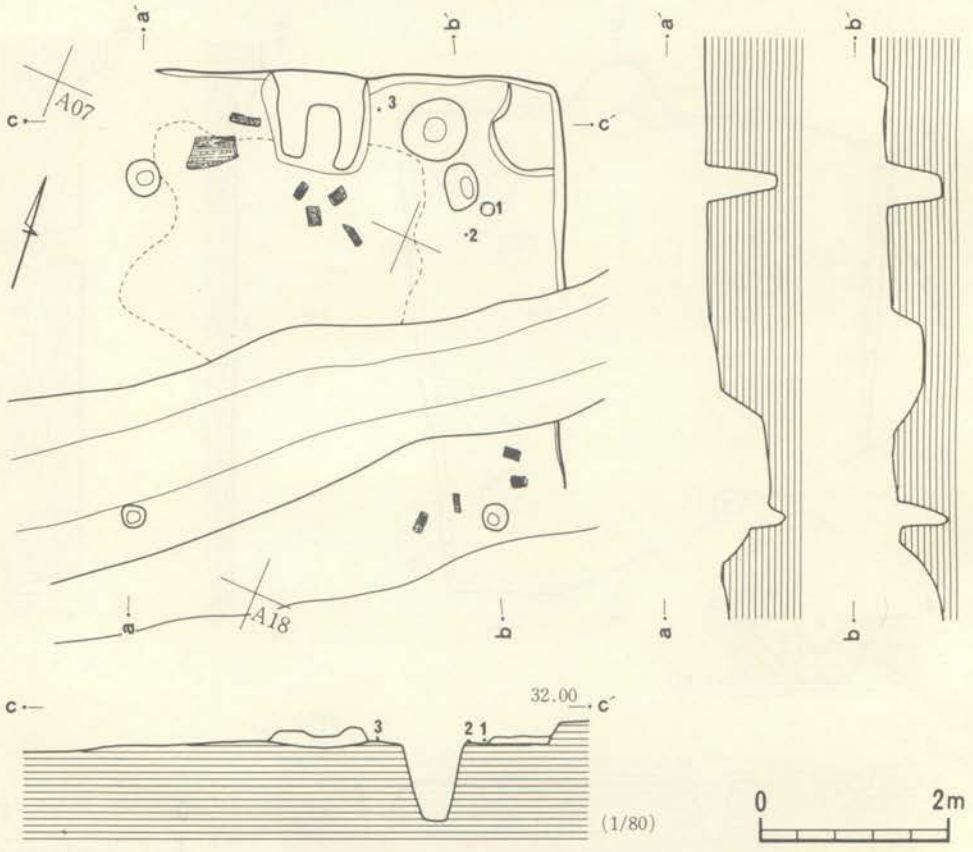
住居跡の北東隅に貯蔵穴が検出された。平面形は、90×70cmの卵形で、深さ40cmである。底面に、直径20cmの内形の小ピットがあり、他の住居跡の柱穴と重複している可能性がある。dd'は、貯蔵穴の覆土断面図である。土層は次のとおりである。1．暗褐色土、ローム粒を多く含む、硬質。 2．暗褐色土、ローム粒・炭化粒を若干含む。 3．暗褐色土、軟弱。 4．暗褐色土。 5．暗褐色土（1）：ロームブロック（1）。

住居跡の北東隅にロームブロック混りの堅緻な段が検出されたが、他の住居跡の貼床の可能性が強い。全体に遺存状態はかなり良く、遺物の出土量も多いが、ほとんどが細片である。

・047号跡（第40図）

本跡は、発掘区域の北西端に位置する。北は、048号跡と近接している。本跡のほぼ中央を202号跡が東西に横切っている。主要なグリッドは、A08である。全体に削平が著しく、遺存は悪い。西跡と南壁が、削平と攪乱により消滅しているので、本跡の規模は不明である。柱穴とかまどの位置により、主軸の方向は、N－17.5°－Wと考えられる。

床面は攪乱をうけ、遺存は悪いが、遺存部分はかなり堅緻である。東壁と北壁が遺存している



第40図　047号跡実測図

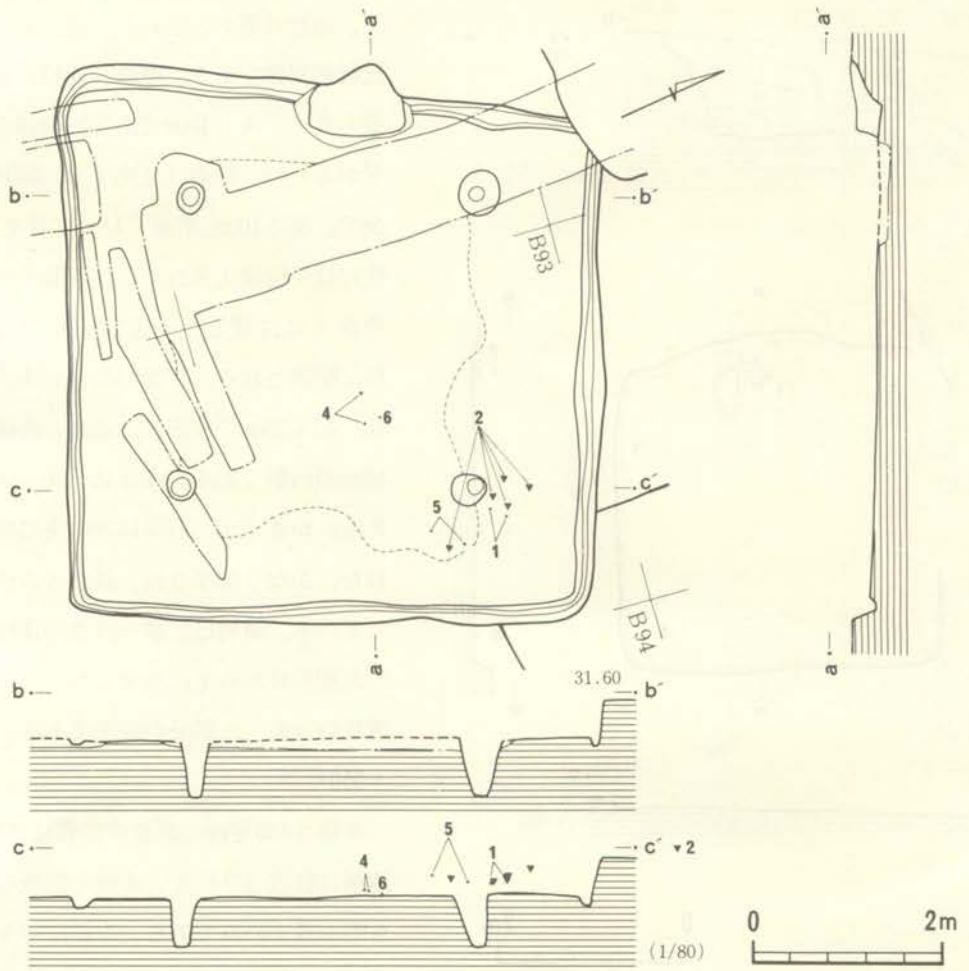
が、高さは25cmしかない。壁溝はない。柱穴は4個検出された。202号跡内に検出された柱穴は、位置関係より本跡に付属するものを選択した。平面形は、直径20～30cmのやや不整な円形であるが、北東部の柱穴は、30×50cmの楕円形を示す。深さは60～80cmである。

かまどは、北壁のほぼ中央に検出された。削平が著しく、基部のみが遺存している。かまど東側に貯蔵穴が検出された。平面形は、直径70cmの円形である。深さ80cmで、底面は平坦である。

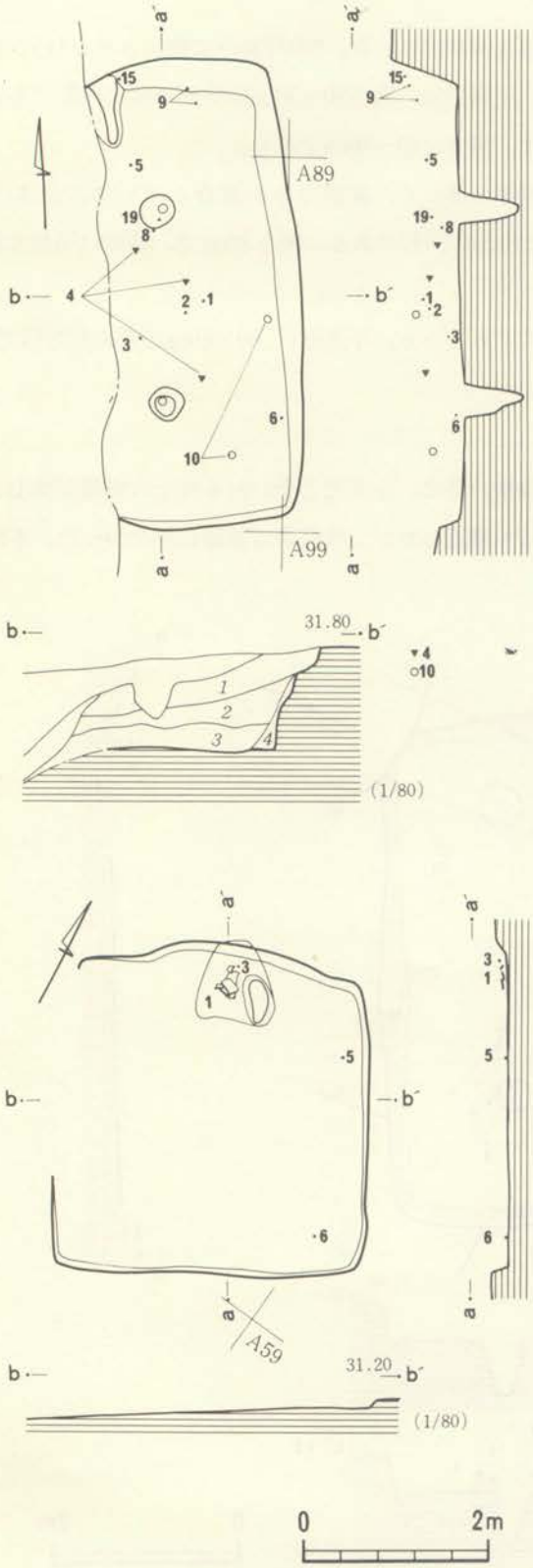
住居跡の北東隅に、白色粘土による段がつくられている。平面形は、80×60cmの歪んだ方形で、厚さ10cmである。遺物の出土量は僅かである。

・048号跡

本跡は、発掘区域の北西端に位置する。遺構検出時に、かまどと思われる焼土の集積が検出され、住居跡の存在が推定された。しかし、周辺を精査したが、柱穴等は確認し得なかった。本跡に付属すると思われる遺物はない。



第41図　049号跡実測図



第42図　051(上)・053(下) 号跡実測図

・049号跡（第41図）

本跡は、発掘区域の中央部南端に位置する。北東隅が028号跡と北西隅が、029号跡、052号跡と重複している。主要なグリッドは、B93である。削平のため、南壁はほとんど消滅し、壁溝の検出によって、住居跡の平面形を確認した。平面形は、一辺5.5mのほぼ正方形で、四隅は丸い。西壁が東壁より長く、やや歪んだ形を示す。主軸の方向は、N－60°－Wである。

床面は、耕作による攪乱がかなり激しく、遺存は悪い。しかし、遺存部分は、比較的堅緻である。壁は、北壁の遺存が最も良く、高さ40cmである。南側ほど削平が著しい。壁溝は全周する。幅15～25cmで、深さ10cm、断面「U」字状を示す。柱穴は4個検出された。住居跡のほぼ対角線上に位置し、一辺3.2mのほぼ正方形に配置される。平面形は、北東部柱穴は、40×30cmの楕円形、他は、直径30～40cmの円形である。深さは、50～60cmである。かまどが、西壁ほぼ中央に検出された。かなり削平され、基部のみが遺存している。遺物は、遺存状態の比較的良い北側部分から主に出土した。しかし、攪乱のため、大部分が細片である。

・050号跡

本跡は136号跡の調査中に発見された。遺構は柱穴（？）と、床面の堅緻な部分を若干残すのみである。本跡に伴う遺物はない。

・051号跡（第42図　上）

本跡は、発掘区域の南西端に位置する。北東は、032号跡と隣接している。主要なグリッドは、A88である。西側半分が、斜面になり、消滅している。遺存部分より、平面形は、一辺５ｍ程の正方形と思われる。主軸の方向は、かまどの右半分が遺存していたため、Ｎ－1.5°－Ｅである。

ｂｂ'は、覆土の断面図である。土層は次のとおりである。１．表土。２．黒色土。３．暗褐色土。４．暗褐色土、ローム粒を若干含む。５．暗褐色土、ロームブロック・炭化粒を若干含む。６．ロームブロック。

床面は、遺存はかなり良いが、やや軟弱である。壁の遺存は良く、高さ70cmである。南壁は、削平のためやや低くなる。壁溝はない。柱穴は、遺存部分に２個検出された。ほぼ対角線上に位置すると思われる。平面形は、直径40cmほどのやや不整な円形で、深さ65cmである。かまどは、北壁に検出された。壁のほぼ中央に位置すると思われる。遺構の遺存に比べて、遺物の量は多い。住居跡の西半分が、斜面により全く消滅しているので、住居使用時には、台地が現在よりも西へ続いていたと考えられる。これは、台地東側と同様な状況である。

・052号跡（第29図　右下）

本跡は、発掘区域の中央部南端に位置する。西半分が029号跡、南壁が049号跡と重複している。主要なグリッドは、Ｂ82である。時期的には、他の２住居跡よりも新しいが、検出時に、攪乱が激しかったため、住居跡として確認し得なかった。029号跡・049号跡の発掘が進んだ段階で、両跡の壁に本跡の覆土がみられたので、ようやく確認された。掘込みが浅いため、貼床の存在が推定されるが、029号跡・049号跡の発掘時には検出できなかった。検出し得たのは、かまど、北壁東半分、東壁である。平面形は、一辺2.5m程の正方形と考えられる。主軸の方向は、Ｎ－3.5°－Ｗである。

遺存部分の床面は、かなり軟弱である。壁は削平が激しく、最高26cmを残すのみである。壁溝はない。柱穴は検出し得なかった。かまどは北壁のほぼ中央に位置すると考えられる。削平が著しく、基部のみ遺存している。遺物の出土量は僅かである。

・053号跡（第42図　下）

本跡は、発掘区域の西端に位置する。東は、042号跡と近接する。主要なグリッドは、Ａ58である。全体に削平が著しい。平面形は、一辺3.5mのほぼ正方形である。主軸の方向は、Ｎ－28°－Ｗである。床面の遺存は、比較的良いが、かなり軟弱である。壁は、最高20cmを残すのみである。壁溝はなく、柱穴も検出し得なかった。かまどが、北壁中央に検出された。削平が著しく、基部のみ遺存している。遺物の出土はほとんどないが、かまど内から、かなり大きな破片が出土している。

2項　土　壙

本遺跡より40基の土壙が確認された。このうち10基は火葬または土葬墓のため項を改めて記すこととする。土壙は調査区内に散在し、形態的にも種々である。このうちの119・131号跡は各々040・041号跡（住居跡）の貯蔵穴の可能性がある。

・101号跡（第43図）

本跡は調査区東端中央付近、C51に発見された。当初本跡付近は相当範囲黒色土が拡がり、南北に長いトレンチを入れて初めて確認できたものである。

覆土は30層程に分かれるが、均質で短期的な流れ込みを示す層をまとめ、11層に大別した。1. 暗褐色（3.5）：ローム粒（1.5）に若干の焼土・炭化粒を混入　2. 暗褐色土に若干のローム粒・焼土・炭化粒を混入　3. 暗褐色土（3）：ローム粒・ローム塊（1）：焼土・炭化粒（1）　4. 黒褐色土（3）：暗褐色土（2）に若干ローム塊等を混入　5. 褐色土に若干のローム粒を混入　6. 褐色土（3）：ローム粒・ローム塊（2）　7. 褐色土（2.5）：ローム塊（2.5）　8. ローム塊（3）：粘土塊（2）　9. 黒色土　10. ローム塊（2.5）：黒色土（2.5）。

堆積の順序は大きく分けて、ハードロームの崩落が短期に続き、8～10層がこの間に堆積、5～7層の流入ののち一部からローム崩壊、2～4層の流入と続く。

土壙は上面で、3×2.5mの卵形を呈し、断面は袋状、底面は極めて不定形で一部は50～70cm程横方に入り込む。底面は南～北に向って傾斜し、南側面の一部には段状の緩斜面が認められる。深さは北端で2.0m、南端で約1mを計る。

遺物は2～5層までの間に集中し、いずれも南側より流入した状態で出土している。とくに2・7・9は5層内で斜倒立状態で出土した。他に10・11・15等完形品は3・4層内に比定できる。

・102号跡（第44図）

本跡は、発掘区域の東部、009号跡内に検出された。009号跡の覆土中に黒色土の落込みが確認され、遺構の存在が推定された。009号跡と同様に、かなり削平され遺存は悪い。

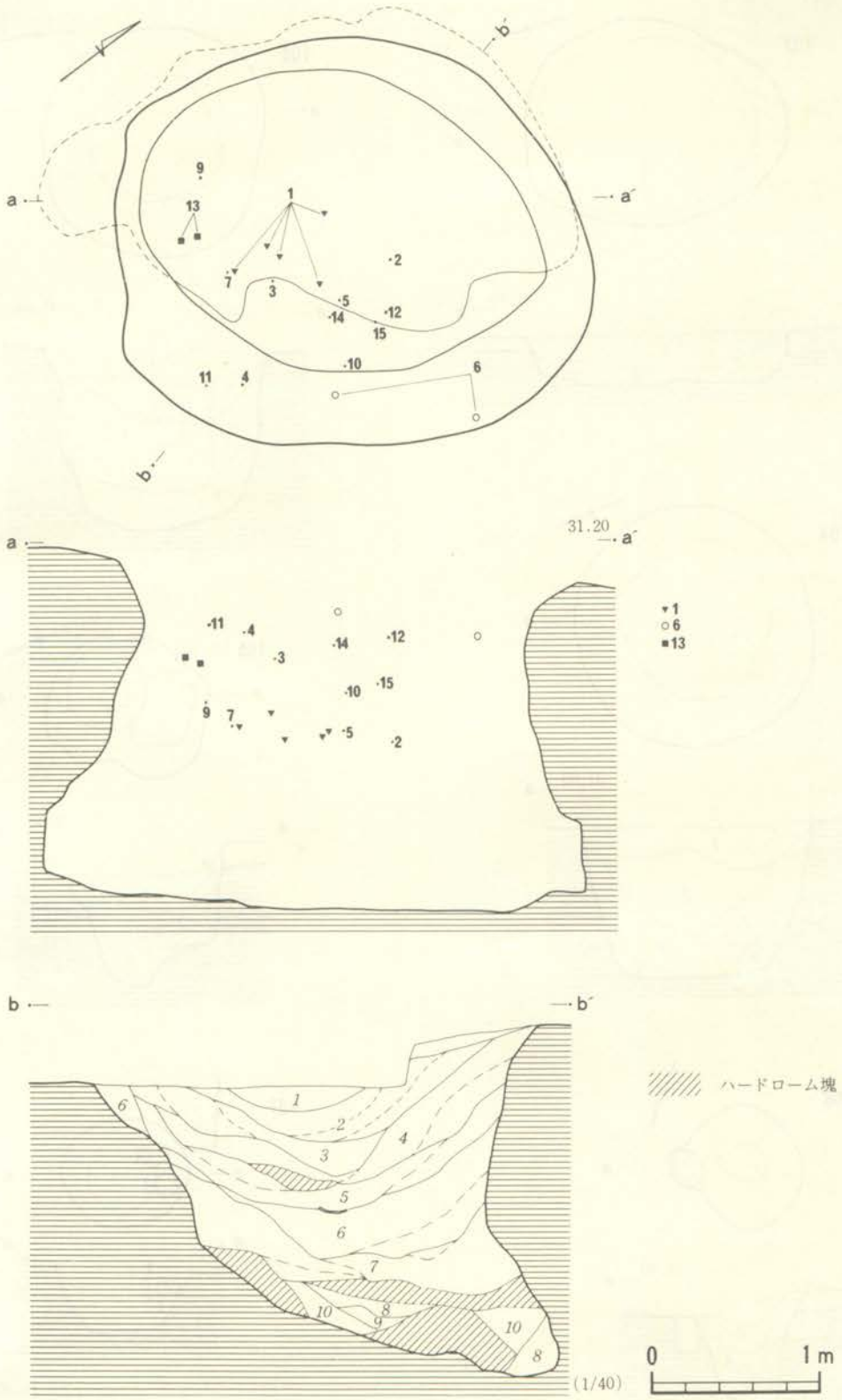
覆土の土層は次のとおりである。1.黒色土。2.　黒色土、ローム粒を若干含む。3.　褐色土。

平面形は、検出面で、155×120cmの楕円形を示す。深さは、009号跡の検出面から30cmである。底面は平坦である。遺物はほとんどなく、時期は不明であるが、009号跡よりは新しい。

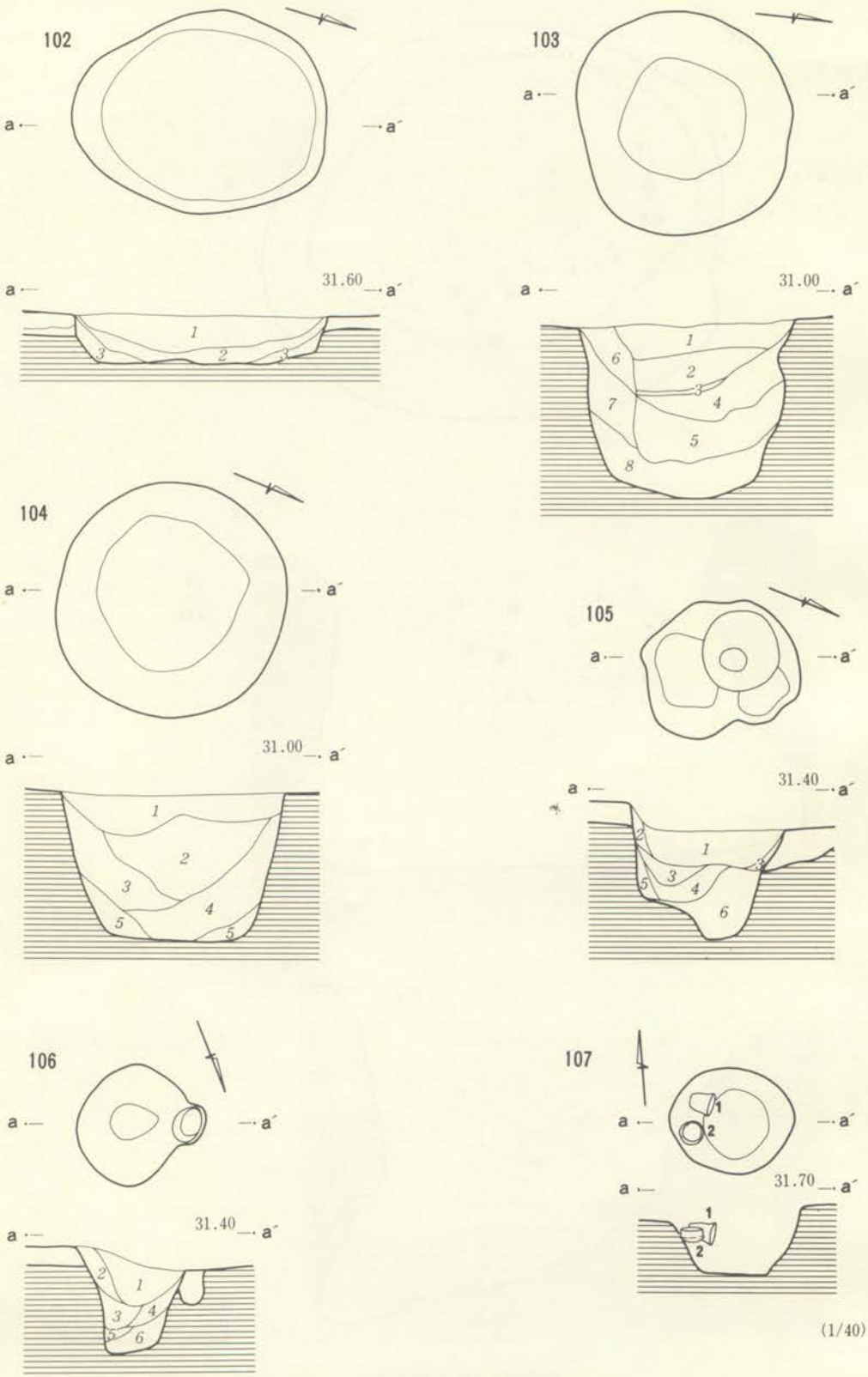
・103号跡（第44図）

本跡は、発掘区域のほぼ中央部に位置する。009号跡と015号跡との中間にあり、両者の覆土中に黒色の落込みが検出され、土壙の存在が推定された。

覆土の土層は次のとおりである。1.　黒色・褐色土、ローム粒子を多く含む。2.　黒褐色土、



第43図　101号跡実測図



第44図　102～107号跡実測図

ローム粒・ロームブロック・焼土・炭化粒を若干含む。 3．山砂。 4．黒褐色土。 5．黒褐色土、焼土・炭化粒を多く含む。 6．黒褐色土、ローム粒・ロームブロックを多く含む。 7．黒褐色土、ローム粒・ロームブロックを若干含む。 8．黒褐色土、ローム粒・ロームブロックを多く含む。

平面形は、直径130cm程のやや不整な円形である。深さは100cmで、底面はわずかに摺鉢状を示す。土層の観察により、土壙が重複している可能性があったが、平面形には、重複の跡はみられない。4層から鉄製利器が出土しているが、遺物の出土量は少なく、土器はほとんどが細片である。

・104号跡（第44図）

本跡は、015号跡の中に位置し、103号跡の南西に隣接する。103号跡と同様に、015号跡の覆土中の黒色の落込みから、土壙の存在が推定された。

覆土の土層は次のとおりである。 1．黒褐色土、ローム粒・ロームブロックを多く含む。 2．黒褐色土、ローム粒・ロームブロックを若干含む。 3．黒褐色土、ロームブロックを多く含む、焼土粒を若干含む。 4．黒褐色土・ローム粒、ロームブロックを若干含む。 5．暗褐色土、ローム粒・ロームブロックを多く含む。

平面形は、直径190cmの円形である。深さは80cmで、底面は平坦である。周辺の遺構の状況から、かなり削平されていると考えられる。遺物の出土量は少ない。

・105号跡（第44図）

本跡は、発掘区域の南東部、006号跡の中の南東隅に位置する。南西に106号跡が隣接する。006号跡の覆土中に、黒色の落込みが検出され、土壙の存在が推定された。006号跡と同様、かなり削平されていると考えられる。

覆土の土層は次のとおりである。 1．黒褐色土、ローム粒・ロームブロック・焼土粒を若干含む。 2．暗褐色土。 3．暗褐色土、ローム粒・ロームブロックを若干含む。 4．暗褐色土、ロームブロックを若干含む。 5．褐色土、ローム粒を若干含む。 6．褐色土。

平面形は、100×80cmのやや不整な楕円形で、東側が少しくびれている。深さは、006号跡の床面から60cmである。底面はかなり不整である。直径45cmの円形のピットがみられる。遺物はほとんど出土していない。

・106号跡（第44図）

本跡は、105号跡の南面に隣接し、006号跡内に位置する。105号跡と同様にして、土壙の存在が推定された。

覆土の土層は次のとおりである。 1．黒褐色土、ローム粒・ロームブロックを多く含む。 2．黒褐色土、ローム粒を若干含む。 3．黒褐色土。 4．暗褐色土、ローム粒・焼土粒を若干含む。 5．黒褐色土、ロームブロックを若干含む。 6．暗褐色土。

平面形は、70×60cmの丸味をもった長方形である。深さは006号跡の床面より50cmである。北西隅が小ピットと重複している。小ピットは住居跡の柱穴と考えられるが、位置的に、006号跡のものとは思われない。遺物の出土量は極く少量である。

・107号跡（第44図）

本跡は、発掘区域のほぼ中央部、028号跡の東に接して位置する。攪乱が激しく、上面がかなり削平されていると考えられる。覆土は、ほとんど単一層で、暗褐色土に、焼土粒を多く含んでいた。

平面形は、80×60cmの楕円形である。深さは、検出面より40cmで、底面は平坦である。本跡内から、ほぼ完形の坏と甑が各々1点づつ出土している。他の遺物は細片が多い。形状および本跡周囲の状況より、住居跡の貯蔵穴の可能性がある。

・108号跡（第45図）

本跡は、発掘区域の中央部北端、036号跡内に位置する。覆土の土層は次のとおりである。 1. 暗褐色土、砂質。 2. 暗褐色土、ローム粒を若干含む。3. 黒色土（1）：ロームブロック（1）。 4. 黒色土（3）：ロームブロック（1）。 5. 褐色土。

平面形は、直径90cmの円形である。深さは、検出面より50cmで、中途に段をもつ。遺物の出土量は極く少量である。

・109号跡（第45図）

本跡は、発掘区域の中央部やや北寄り、011号跡の北に近接する。平面形は直径70cmの円形で、深さ30cmである。甕のかなり大きな破片が出土している。住居跡の貯蔵穴とも思われる。

・110号跡（第45図）

本跡は、発掘区域の中央部やや北寄りに位置する。覆土の土層は次のとおりである。 1. 木根痕。 2. 黒褐色土、ローム粒子を多く含む。 3. 黒褐色土。 4. 暗褐色土。 5. 黒褐色土、ロームブロックを若干含む。 6. 褐色土。

平面形は、170×100cmの卵形で、深さ60cmである。底面は平坦であるが、小ピットが検出された。遺物は僅かである。

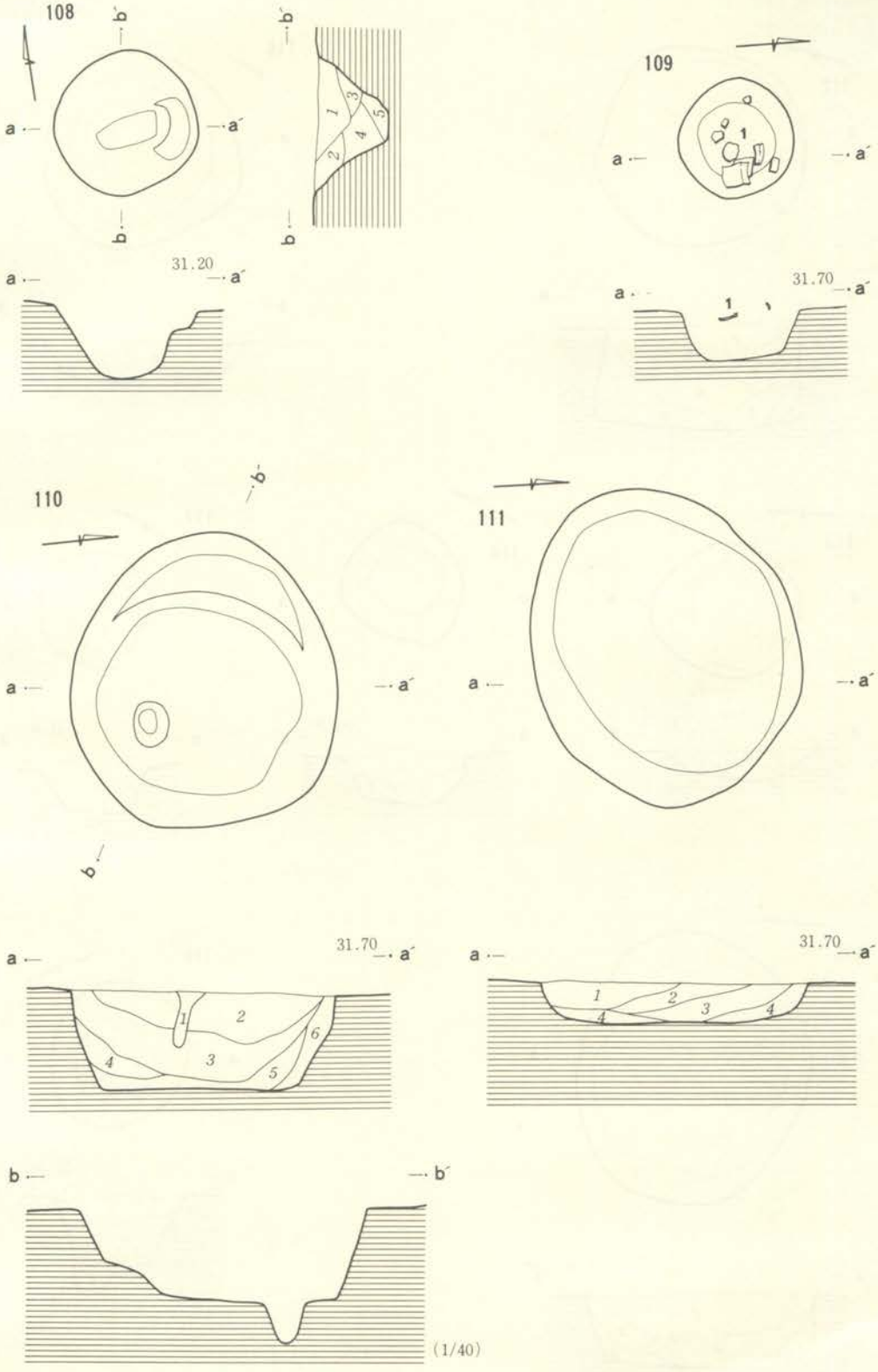
・111号跡（第45図）

本跡は、発掘区域の中央やや北寄り、110号跡の南に隣接する。覆土の土層は次のとおりである。 1. 褐色土。 2. 暗褐色土。 3. 黒褐色土。 4. 黒褐色土、ローム粒を若干含む。

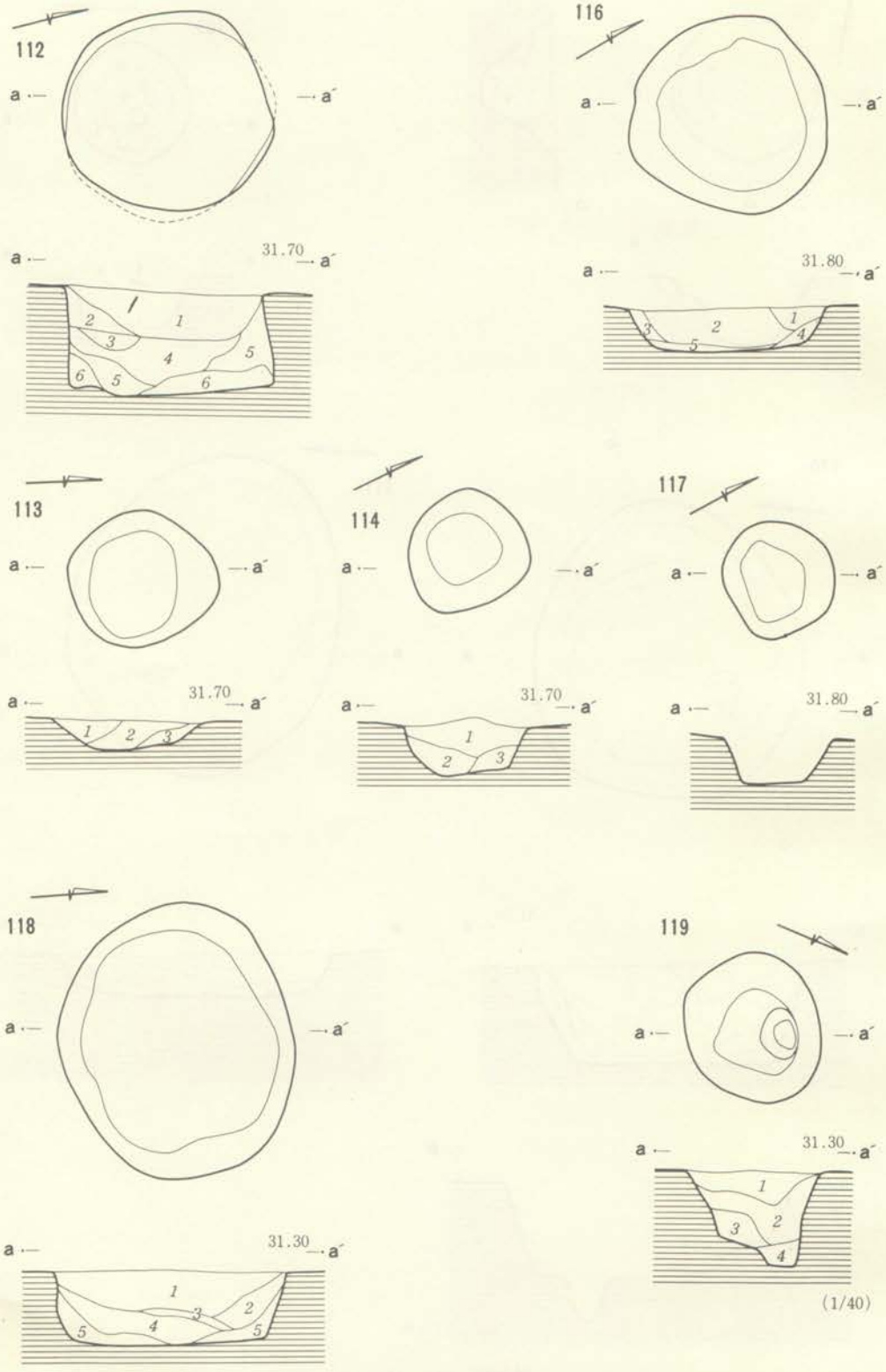
平面形は、180×160cmの楕円形で、深さ25cmである。底面は平坦である。遺物は僅かである。

・112号跡（第45図）

本跡は、発掘区域の中央部、013号跡の北に接して位置する。覆土の土層は次のとおりである。 1. 暗褐色土、砂質。 2. 暗褐色土、ロームブロックを若干含む。 3. 暗褐色土。 4. 暗褐色土



第45図　108～111号跡実測図



(1/40)

第46図　112～119号跡実測図

（1）：ロームでロック（3）。 5．褐色土（1）：ロームブロック（1）。 6．褐色土（1）：ロームブロック（2）。

平面形は、120×110cmの楕円形で、深さ60cmである。底面は平坦である。やや袋状を呈す。遺物の出土は僅かである。

・113号跡（第46図）

本跡は、発掘区域の中央部やや北寄り、022号跡の北に位置する。114号跡が西に隣接する。覆土の土層は次のとおりである。 1．暗褐色土、ローム粒を若干含む。砂質。 2．褐色土（1）：ロームブロック（1）。 3．ロームブロック。

平面形は、90×80cmの玉子形で、深さ20cmである。かなり削平されていると考えられる。遺物の出土は僅かである。

・114号跡（第46図）

本跡は、発掘区域の中央やや北寄りに位置し、113号跡の西に隣接する。覆土の土層は次のとおりである。 1．暗褐色土、ローム粒を若干含む、砂質。 2．暗褐色土（2）：ロームブロック(1)。 3．褐色土、ローム粒を多く含む。

平面形は、直径70cmのやや不整な円形で、深さ30cmである。底面は平坦である。住居跡の貯蔵穴とも思われる。遺物の出土量は僅かである。

・116号跡（第46図）

本跡は、発掘区域の中央部北端に位置する。南に117号跡、039号跡が隣接する。土層の断面図は次のとおりである。 1．ロームブロック。 2．暗褐色土、ローム粒を多く含む、砂質。 3．黒色土。 4．黒色土、ローム粒を多く含む。 5．褐色土。

平面形は、直径120cmのやや不整な円形で、深さ25cmである。底面は平坦である。全体にかなり削平されていると思われる。遺物の出土量は僅かである。

・118号跡（第46図）

本跡は、発掘区域の北西部、040号跡の東に隣接している。覆土の土層は次のとおりである。

1．黒褐色土、焼土・炭化粒を多く含む。 2．黒褐色土、砂質。 3．灰白色粘土。 4．暗褐色土、ローム粒を多く含む。 5．褐色土、ロームブロックを多く含む。

平面形は、160×140cmの楕円形で、深さ40cmである。底面は平坦である。遺物の出土量は僅かである。

・119号跡（第46図）

本跡は、発掘区域の北西部、040号跡の南東に接して位置している。位置関係から、040号跡の貯蔵穴の可能性がある。覆土の土層は次のとおりである。 1．暗褐色土、砂質。 2．褐色土、ローム粒を多く含む。 4．褐色土（1）：ローム粒（1）。

平面形は、直径85cmのやや不整な円形で、深さ55cmである。底面に段をもち、北部が深くなっている。遺物の出土量は僅かである。

・120号跡（第47図）

本跡は、発掘区域の北西部、040号跡の南に接して位置する。覆土の土層は次のとおりである。1．暗褐色土、ロームブロックを多く含む、砂質。 2．暗褐色土、ローム粒を多く含む。 3．褐色土。 4．褐色土、ローム粒を多く含む。

平面形は、100×80cmの楕円形で、深さ65cmである。中途に段をもち、底面は平坦である。遺物の出土量は僅かである。

・121号跡（第47図）

本跡は、発掘区域のほぼ中央部、033号跡内に位置する。033号跡の覆土中に落込みが確認され、土壙の存在が推定された。覆土は次のとおりである。 1．暗褐色土、ローム粒を多く含む。 2．暗褐色土、ローム粒・ロームブロックを若干含む。 3．褐色土、ローム粒・ロームブロックを多く含む。 4．暗褐色土、ロームブロックを多く含む。 5．暗褐色土、ロームブロック・焼土・炭化粒を若干含む。 6．褐色土。 7．ロームブロック。

平面形は、95×80cmの楕円形で、深さ85cmである。底面は平坦である。遺物の出土量は少ない。

・122号跡（第47図）

本跡は、発掘区域のほぼ中央部、033号跡内に位置する。北に121号跡が隣接している。覆土の土層は次のとおりである。 1．暗褐色土、焼土・炭化粒を若干含む。 2．暗褐色土、ローム粒・ロームブロックを多く含む。

平面形は、155×135cmの円に近い楕円形と思われる。033号跡の南西部の柱穴と重複しているため、南側が出張っている。深さは、033号跡の床面より35cmである。全体にかなり削平されていると考えられる。遺物の出土量は僅かである。

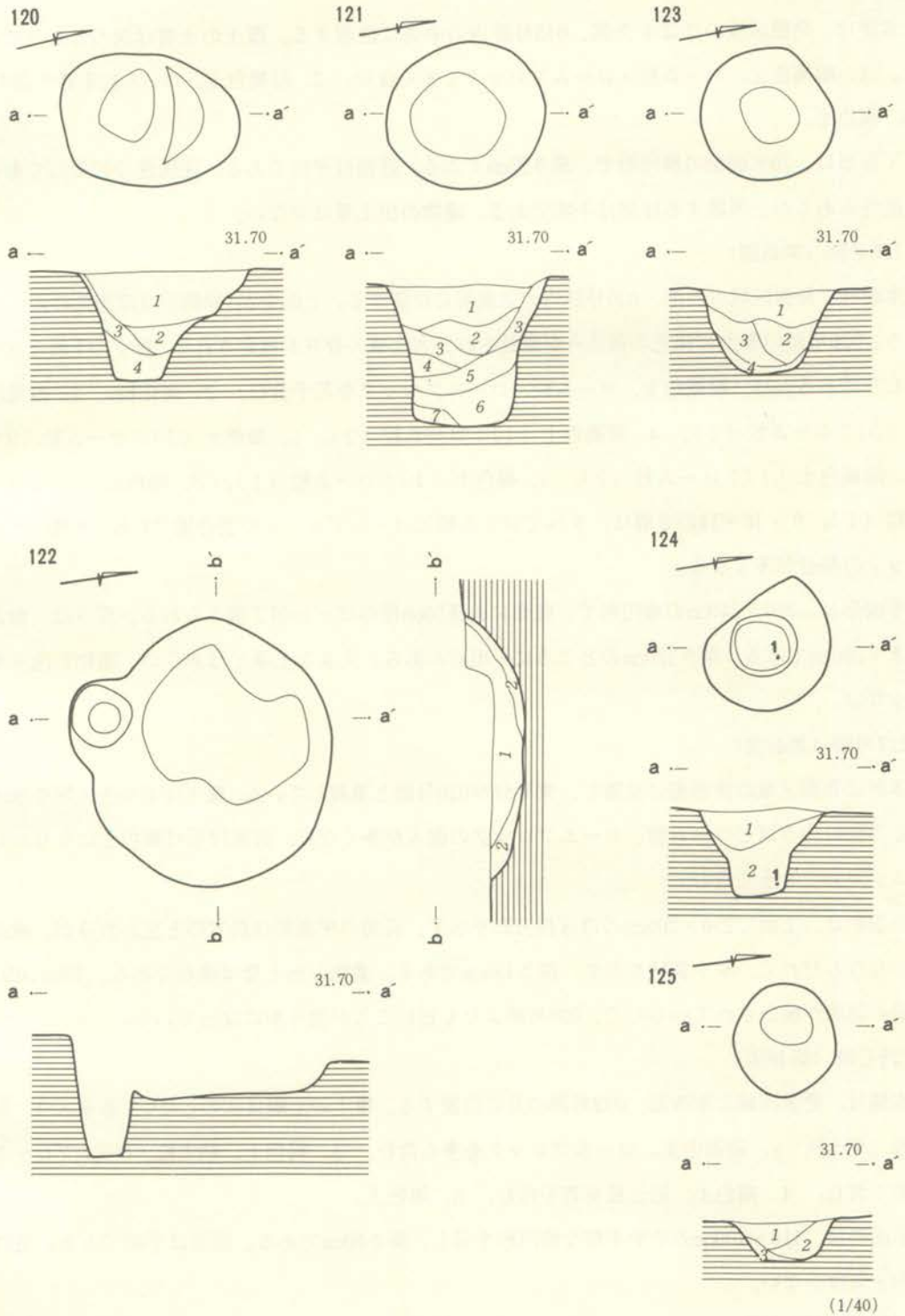
・123号跡（第47図）

本跡は、発掘区域のほぼ中央部、045号跡内の南東隅に位置する。位置関係から、045号跡の貯蔵穴の可能性もある。覆土の土層は次のとおりである。 1．褐色土、ローム粒を多く含む。 2．暗褐色土、ローム粒・ロームブロックを少量含む。 3．暗褐色土、ローム粒を多く含む。 4．褐色土。

平面形は、直径80cmのやや不整な円形で、深さ50cmである。平面はわずかに摺鉢状を示す。遺物の出土量は僅かである。

・124号跡（第47図）

本跡は、発掘区域のほぼ中央部、045号跡内の南部に位置する。土層は次のとおりである。 1．暗褐色土、ローム粒を若干含む。 2．暗褐色土、ローム粒・ロームブロックを多く含む。



第47図　120～125号跡実測図

平面形は、85×60cmのやや不整な楕円形で、深さ50cmである。中途に段をもち、底面は平坦である。遺物の出土量は僅かである。

本跡は、発掘区域のほぼ中央部、045号跡内の中央に位置する。覆土の土層は次のとおりである。 1．暗褐色土、ローム粒・ロームブロックを多く含む。 2．暗褐色土、ローム粒を若干含む。 3．褐色土。

平面形は、70×60cmの楕円形で、深さ25cmである。底面は平坦である。住居跡の貯蔵穴である可能性もあるが、所属する住居は不明である。遺物の出土量は少ない。

・126号跡（第48図）

本跡は、発掘区域の西部、030号跡内の北東部に位置する。上面を201号跡がほぼ南北に走っている。030号跡の覆土に黒色の落込みが確認され、大土壙の存在が推定された。覆土の土層は次のとおりである。 1．暗褐色土、ローム粒、ロームブロックを若干含む。 2．炭化物。 3．暗褐色土（3）：ローム粒（2）。 4．暗褐色土（1）：ローム粒（2）。 5．褐色土（1）：ローム粒（3）。 6．暗褐色土（1）：ローム粒（2）。 7．褐色土（1）：ローム粒（1）。 8．褐色土（3）：ローム粒（1）。 9・10・11の3層は、すべてローム粒とロームブロックの混合層である。下層ほどブロックの割合が多くなる。

平面形は、260×240cmの楕円形で、底面に直径50cm程のピットが2個みられる。深さは、最深部まで200cmである。深さ120cmのところに平坦面がある。大きな土壙ではあるが、遺物の出土量は少ない。

・127号跡（第49図）

本跡は発掘区域の南西部に位置し、東半分が030号跡と重複している。覆土は暗褐色土層を基調とし下部に向うほどローム粒、ロームブロックの混入が多くなる。底面付近は褐色土になり、ロームブロックを多く含む。

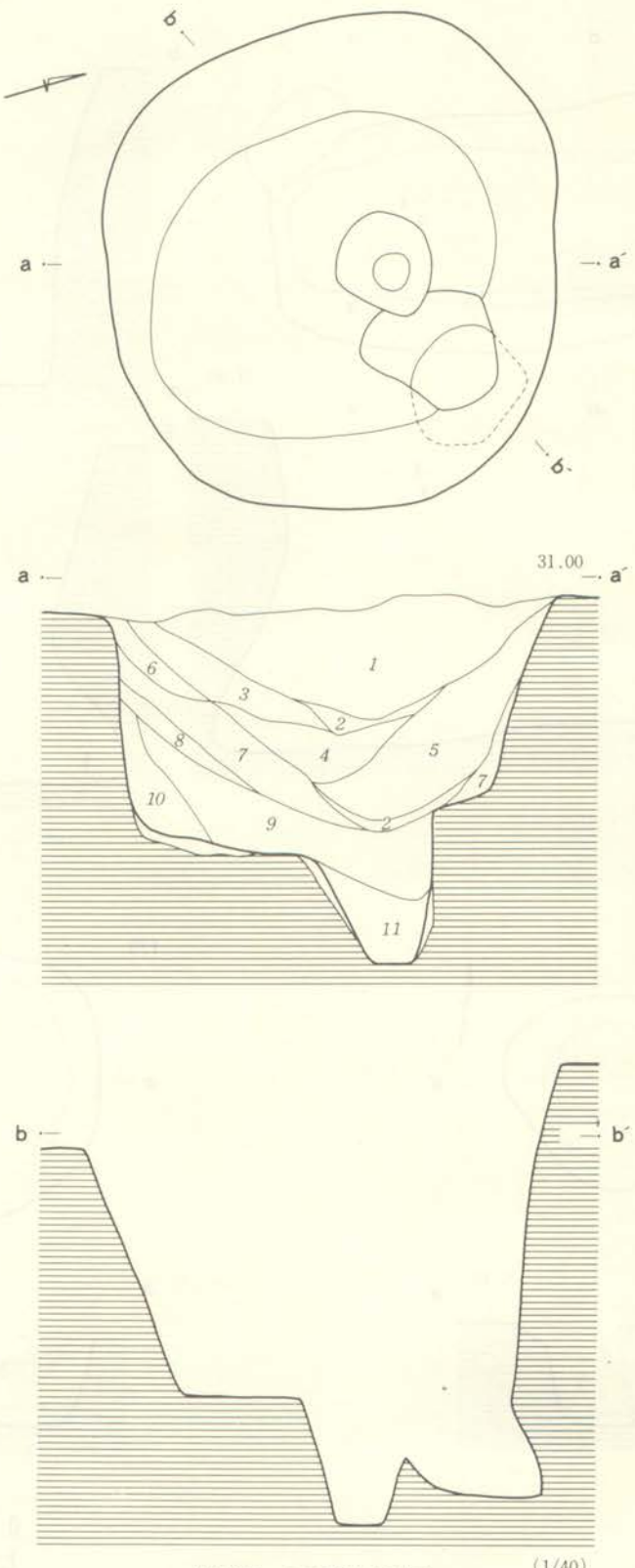
平面形は、上面で250×200cmのほぼ長方形を示す。底面の平面形は長方形と思われるが、東部がかなりみだれて、やや袋状を示す。深さ155cmである。遺物の出土量は僅かである。上面に030号跡の貼床が検出されているので、030号跡よりも古いことが明らかになっている。

・128号跡（第49図）

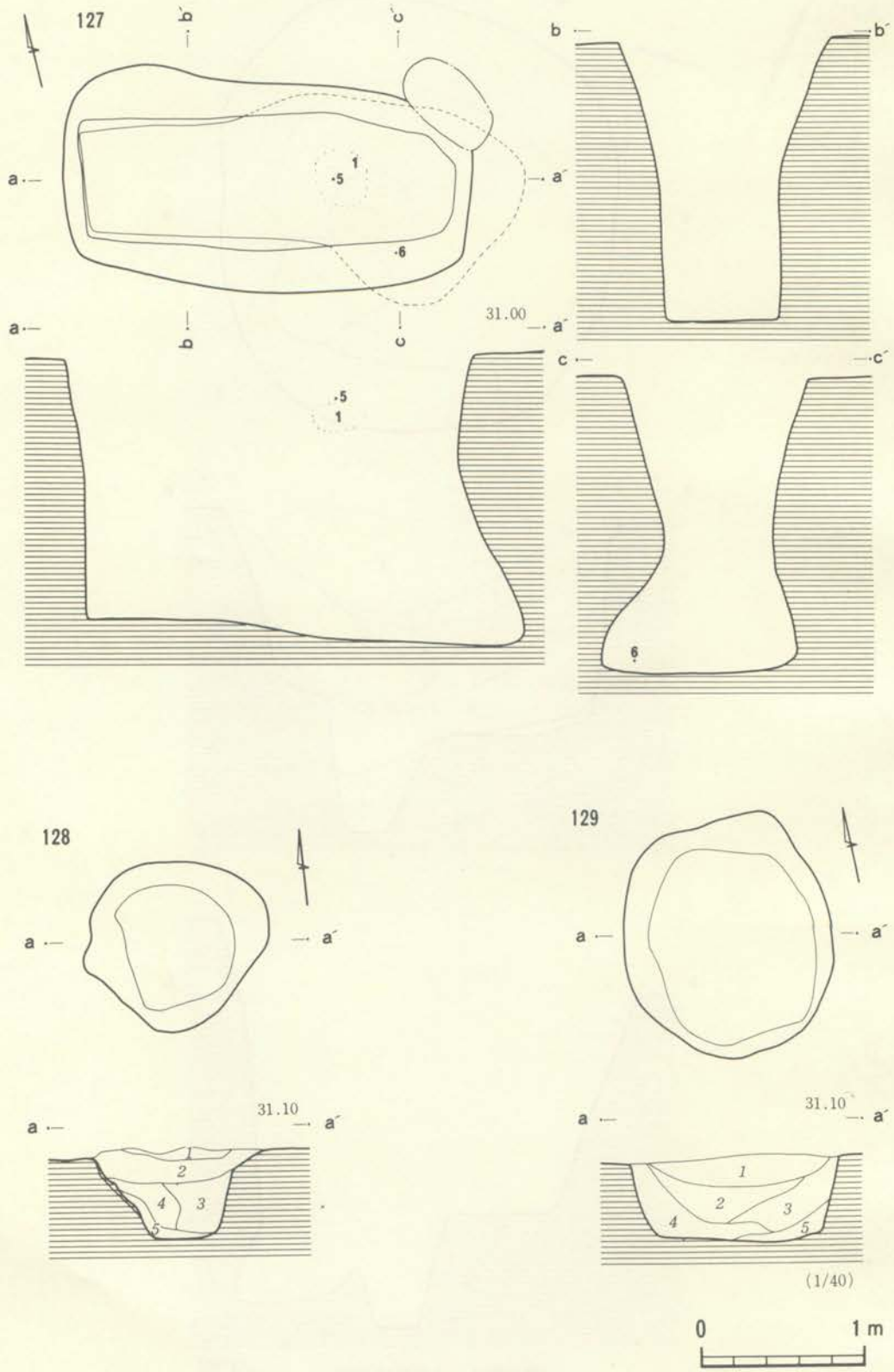
本跡は、発掘区域の南西部、032号跡の北に位置する。覆土の土層は次のとおりである。 1．炭化粒（ワラ灰）2．暗褐色土、ロームブロックを多く含む。 3．褐色土、粘土粒・ロームブロックを多く含む。 4．褐色土、粘土粒を若干含む。 5．黒色土。

平面形は、110×100cmのやや不整な楕円形を示し、深さ50cmである。底面は平坦である。遺物の出土量は少ない。

・129号跡（第49図）



第48図　126号跡実測図



第49図　127～129号跡実測図

本跡は、発掘区域の南西部、128号跡の北西に位置する。覆土の土層は次のとおりである。1. 暗褐色土・ローム粒を若干含む、やや砂質。 2. 暗褐色土、ロームブロックを若干含む。 3. 暗褐色土。 4. 褐色土。 5. 褐色土、ローム粒を若干含む。

平面形は、150×130cmの楕円形で、深さ50cmである。底面は平坦であるが、やや凹凸がある。遺物の出土量は僅かである。

・130号跡

本跡は、調査区西端の攪乱の多い部分に検出された。土層中にはローム、粘土を多く含む。平面形は240×200cmの円形で、深さは50cm程である。全体に摺鉢状を呈し、遺物はない。

・131号跡

041号跡貯蔵穴と思われ、第35図に詳しい。

3項　火葬跡と土葬墓

これらは調査区西端の中央部分、南北23m、東西８mの範囲に集中して検出された。総数10基のうち８基が火葬跡、他が土葬墓である。火葬跡と呼称したのは、人骨１体分が検出される例がなく、わずかに骨片が残るのみで、墓と考えがたいためである。木炭の詰め込まれた部分を主体部、これに連接する部分を焚出部と仮称して記述を進めることとする。

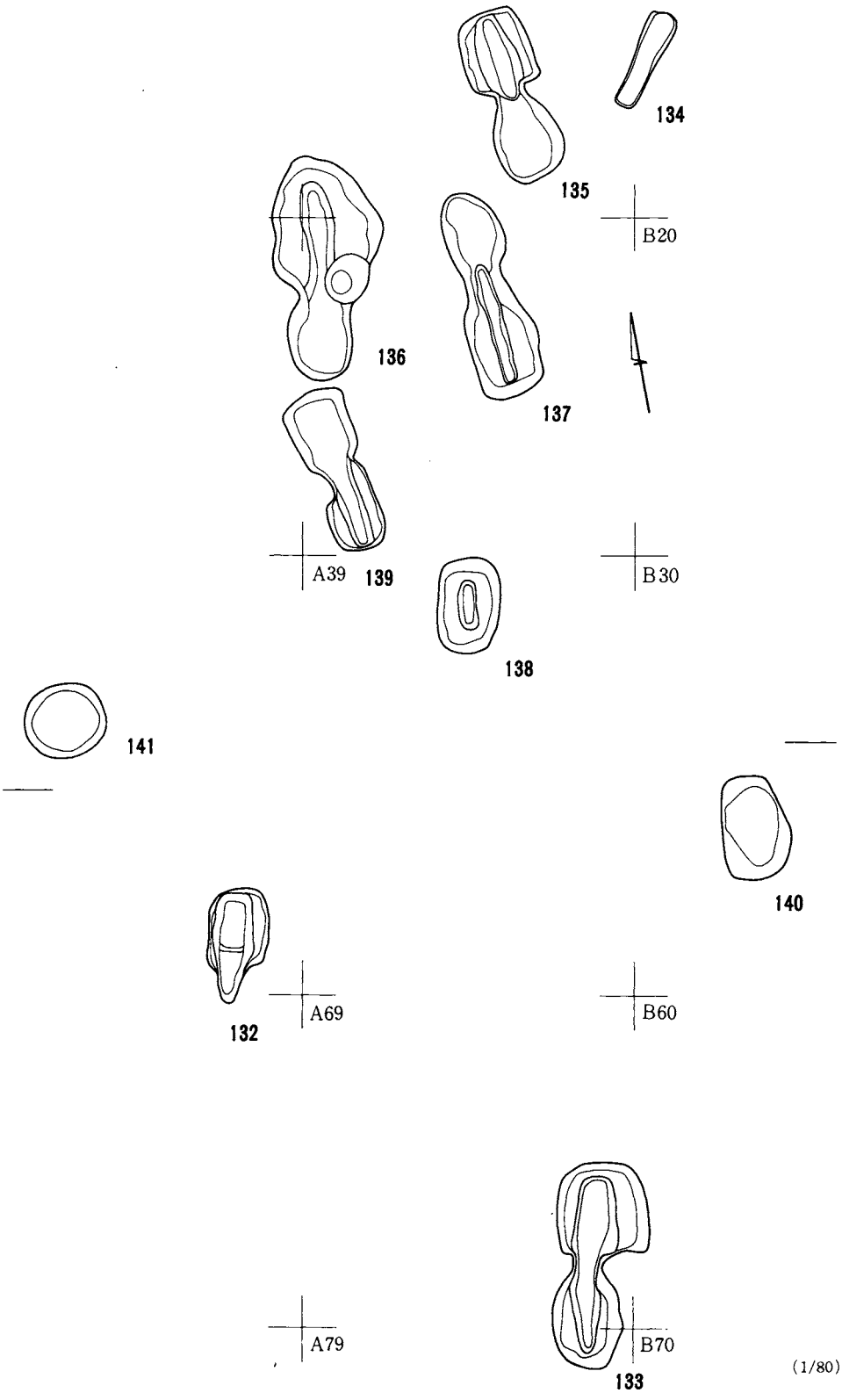
その配列には一定の方向性があるようである。まずA29グリッドを中心とした北群は、南北両端の底面のみ遺存する136・138号跡を除き、ほぼ磁北と平行に相並ぶ。さらに135・137号跡では主体部の向きが逆となり、136・139号跡でも同様のことがいえる。各々50～80cm程の間隔をおいて配置しているが、136・139号跡は相接している。次に138号跡より南に約11m離れて、A69グリッド周辺に132・133号跡がある。ともに磁北に対し５～６°西に偏り、両者は北西－南東に５mの間隔をもつ。土葬墓は140号跡が南群の北端に、141号跡が北群の南西隅に位置し、両者は北西－南東に約10m離れている。いずれも遺物の出土状態の把握を平面的に行ったため土層観察は記述のみに留めた。

・132号跡（第51図）

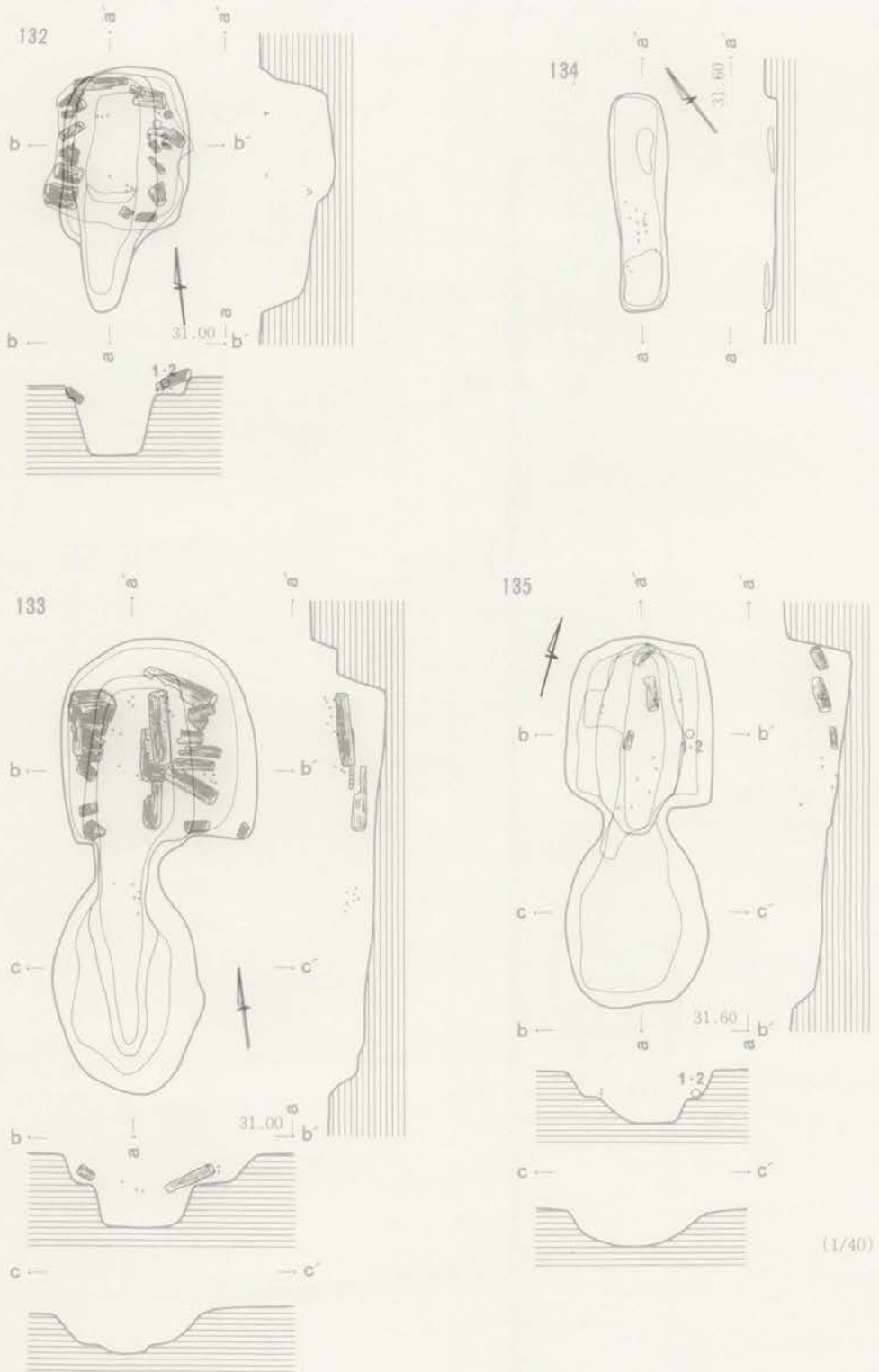
本跡は調査区西端、A58Gr．内に検出された。上面精査の結果木炭の集中がみられたため遺構と判断した。土壙は隅丸の方形部分と柄状に突出する部分に別れる。前述のとおり、前者を主体部、後者を焚出部とした。全長135cm、主体部長約100、幅70、最深で45cmを計る。主体部はわずか10cmの深さの“テラス„（以下同）が周囲をめぐり、中央は幅45cmの溝状の窪みがある。中央溝の底面は主体部内で段をもち、焚出部へと向ってゆるやかに上昇し、これと連接する。焚出部は幅30、深ち25cm。埋土は褐色土を主とし、多量の焼・灰・炭化粒土を含む。木炭は主体部全体にみられ、主軸に直交してテラスから中央溝にかけて差し込んだ状態で出土した。図の黒点は人骨片・粉である（以下同）。これはテラス上またはこれと同一平面に多くみられる。古銭も同様である。

・133号跡（第51図）

本跡はAGr．内に、032号跡を切って作られる。主体部はややくずれた形で、全体に半円形を呈し、溝を通じ楕円形の焚出部に連接する。全長250cmで、主体部長115、幅110、最深45cm。浅いテラスがめぐり、中央溝の幅は約60cm。溝は焚出部にまで及び、その底面面は３～５°とゆるやかに上昇する。焚出部幅85、深さ20cm。木炭は中央溝内に詰め込み、さらにテラスから溝内に差し込んでいる状態である。骨片は主体部全体に散乱し、また連接部分にもみられるが、ともに中層に位置する。



第50図　132～141号跡配置図



第51図　132～135号跡実測図

・134号跡（第51図）

本跡は北群の北端、B10Gr．内に位置する。他に比し最も遺存が悪く、中央溝底面のみである。溝長120、幅20cm。両端付近にはわら灰・炭化粒が集中し、骨片は中央付近に散乱するが、全体に良く焼けていた。

・135号跡（第51図）

本跡は北群北端、A19Gr．内に検出された。当初は木炭等認められず連接した単なる土壙と思われた。覆土は軟弱な褐色土でローム粒が多量に混入する。全長200cmで主体部は比較的整った100×80cmの方形を呈し、最深37cm、広いテラスは深さ15cm。中央溝は幅30～50cmで浅く焚出部には認められない。焚出部は幅80cmの卵形を呈し、深さは基部で20、先端で10cmと浅い。底面は主体部で7°、焚出部で3～4°の傾斜をもつ。木炭は中央溝内に2・3出土したに過ぎないが、テラス底面のレベルで、全体にわら灰等がみられる。骨片は主体部内の上へ下層に散乱し、テラス上より古銭が出土した。

・136号跡（第52図）

本跡は北群中のA29Gr．内に検出された。全長265cmを計り、両部とも不整の楕円形を呈す。主体部は180×130cm程で、中央溝幅37cmと細く、広いテラスをもつ。最深で30、テラス底面で10cmまでである。焚出部は幅75、深さ15cmで底面は平坦となる。なお連接部分の右横には050号跡の柱穴と思われるピットがある。木炭は主体部および連接部分に散乱し、わら灰の範囲は広い。骨片はわずかである。

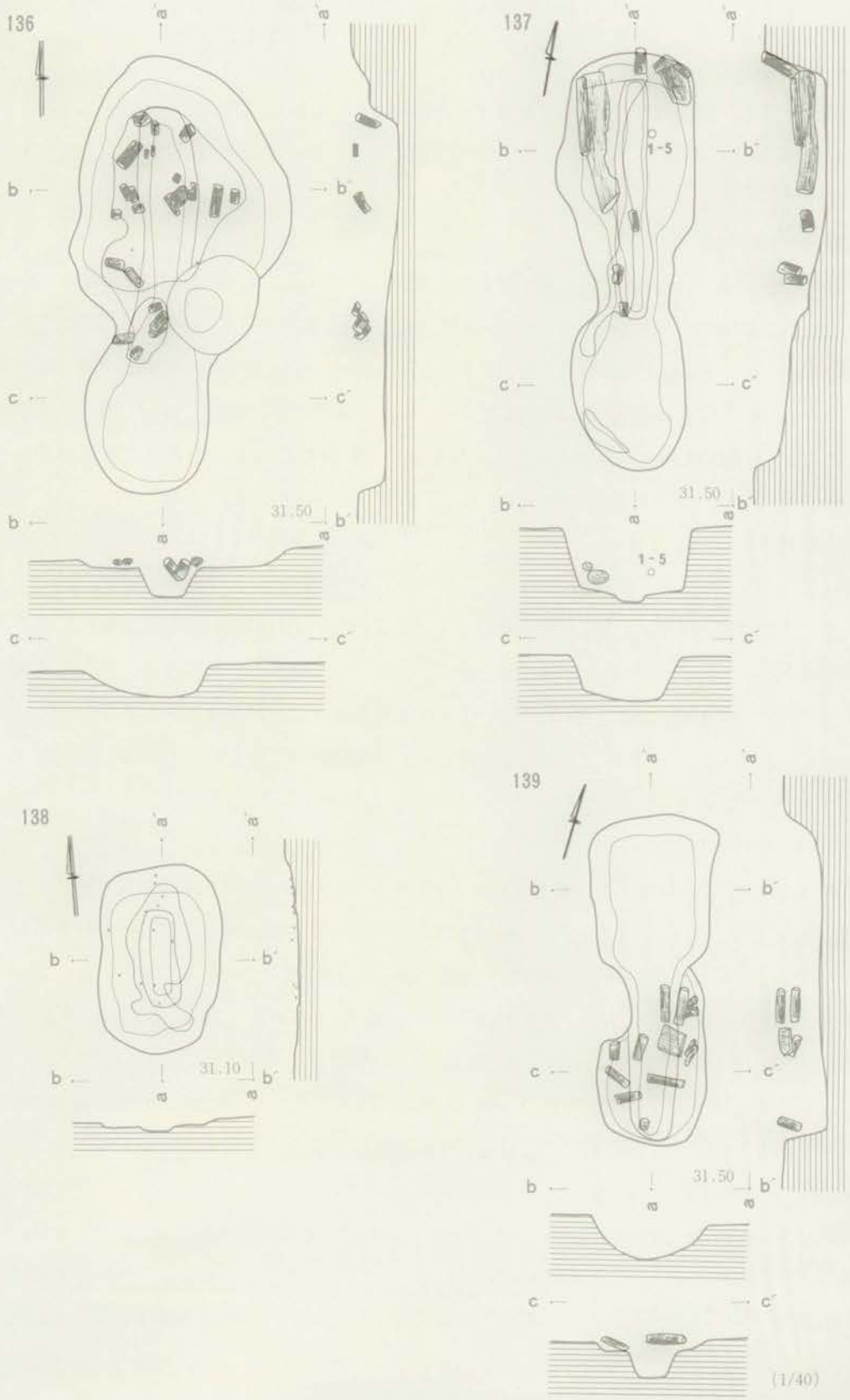
・137号跡（第52図）

本跡は北群中のA29Gr．内に検出された。136号跡とは東－西に約1mの間隔である。土壙は全長250cmを計る。主体部は130×70～80cmのほぼ長方形を呈すが、西側に若干くずれた部分がある。中央溝は幅わずがに20cmで、連接部分を含み長さ145cm、テラスは広く平坦で、深さ40cm、溝はわずかに5cmの深さしかない。焚出部は100×70cmの楕円形で深さ20cm、底面は7～10°の傾斜である。木炭はテラス側面に沿って、長さ80cmのものなどが詰め込まれ、焼土・わら灰もこれに添うようにみられる。なお焚出部分の一部にも焼土が遺存していた。全体に焼化が良く骨粉が中央溝付近に検出されたのみである。古銭は5枚が一括して中層より出土した。

・138号跡（第52図）

本跡は、北群南端、A39Gr．内に検出された。主体部の底面のみが遺存するに過ぎない。主体部は各辺とも丸味をもった長方形で110×70cm、深さはわずかに5cmである。底面の中央には長さ60、幅20cmの溝が遺存する。わら灰を中心として焼土などが中央付近にみられ、骨片も底面付近に散在していた。

・139号跡（第52図）



第52図　136～139号跡実測図

本跡は北群南端のA29Gr．内に検出された、050号跡を切って作られていると考える。土壙は全長195cmを計る。主体部は不整形で東壁約100、幅65cm。テラスは比較的広く、深さ15cm、中央溝は幅30、深さ15cmで焚出部へと続く。焚出部は幅70～80cmの方形で、北壁に向って幅を増す。全体に「U」字形にくぼみ、深さは25cm、底面はほぼ平坦となる。木炭はテラス面のレベルに散在するが、いずれも未焼化であり、骨片等は殆んどみられなかった。

・140号跡（第53図）

本跡は南群中に発見された土葬墓である。042号跡と重複すると思われ、B50Gr．内に位置する。土壙はほぼ北向きの長方形を呈すが東壁は大きくくずれている。長さ120、幅80、深さ85cmを計り、底面は平坦である。

底面より北向きの人骨1体分が検出された。遺存状態は悪く、頭骨・大腿骨その他である。北壁面に後頭部が接し、顔面はやや右向きとなる。大腿骨は左右平行に遺存する。顎と大腿骨上端とは20cmの間隔があり、おそらく横臥位の状態で屈葬されたと考えられる。古銭は一括して大腿骨上より出土した。

・141号跡（第53図）

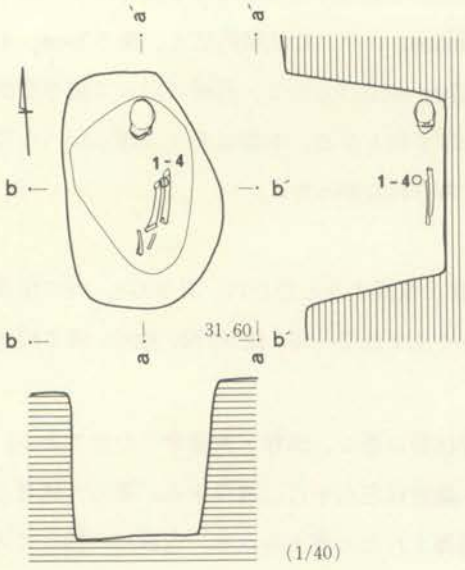
本跡は調査区最西端のA38Gr．内に検出された。周辺には攪乱が多く、その上半部は不明な点が多い。土壙は径100cmの円形でほぼ垂直に130cm掘り込まれた“樋„形のものである。底面はほぼ平坦で径75cm程となる。

深さ100cm程の所から人骨1体分が確認され始めた。遺存状態は良いが、調査中の事故で頭側部分を損壊してしまったのが残念である。両大腿骨、脛骨は折り曲げた状態で併せ直立し、腕骨の上・下にみられ右腕直下に肩甲骨がある。頭骨は右横向きで、足下に落ち込んでいる。すなわち座位で納置された後に、上半身がくずれ落ちた状態を示すものと思われた。古銭は人骨の直下、底面に密着して出土した。

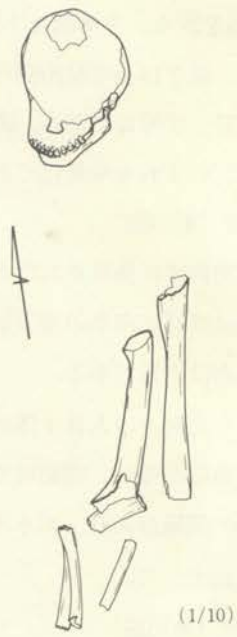
4項　溝状遺構

調査区西半部に、南－北に走る溝が確認された。溝はB43Gr．内で、性格が異なる南溝、北溝に分かれる。南溝はすべて遺構を切って作られ、長さ25m、幅平均2m、深さは一定しない。北溝はB00Gr．付近で西に折れ、047号跡を切る。その方向はN－30°－E前後で、東溝部分は、12個の土壙状の窪みが連続する。全長約35m、幅の平均は約70cm深さは一定しない。

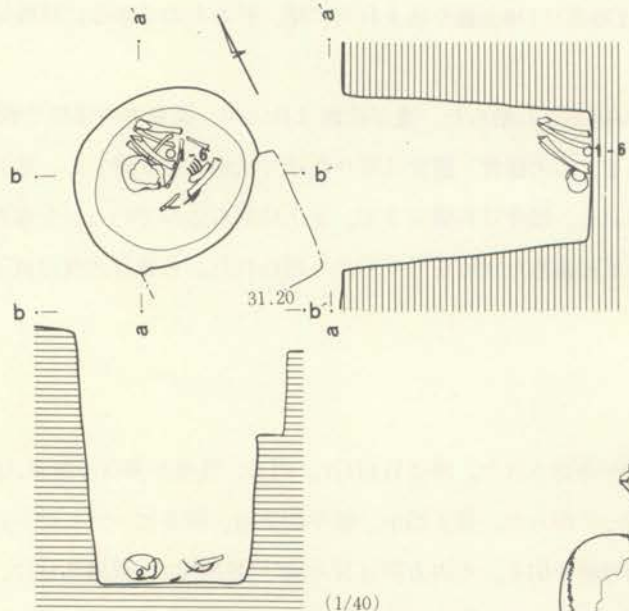
なお南溝を201号跡、北溝を202号跡とした。



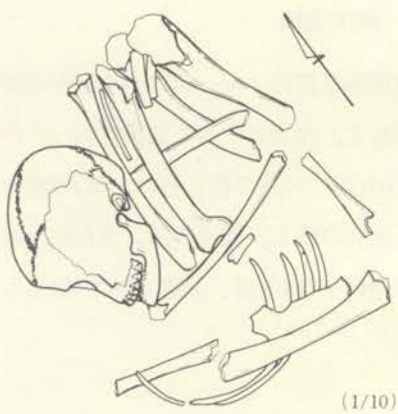
(1/40)



(1/10)



(1/40)



(1/10)

第53図　140（上）・141（下）号跡実測図

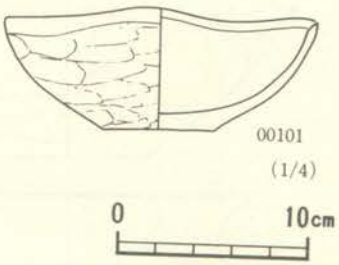
第3節　遺　物

本遺跡よりは、土器・陶器・土製品・石製品・鉄製品・古銭等の人工遺物が出土した。土器のうちには縄文式・弥生式・須恵器などがあるが、遺構に伴いかつ最も量の多いのは土師器である。完形品またはそれに近い状態のもの約120点、その他の破片は整理箱約100個分である。自然遺物としては、木炭・人骨などがあるが量的には僅少である。

1項　住居跡

・001号跡（第54図）　本跡よりはわずかな土器片が出土したに留まる。このうちにはハケ目の遺存するものもある。

1は埦である。口径16.5～14.5cmの楕円形を呈し、器高も6.3～5.7と歪みが著しい。全体に丸味をもち、底径5.6cm、口唇内縁には稜が明瞭である。荒いヘラ削りの後ヘラナデを施す。胎土・焼成とも良く、黄褐色を呈す。



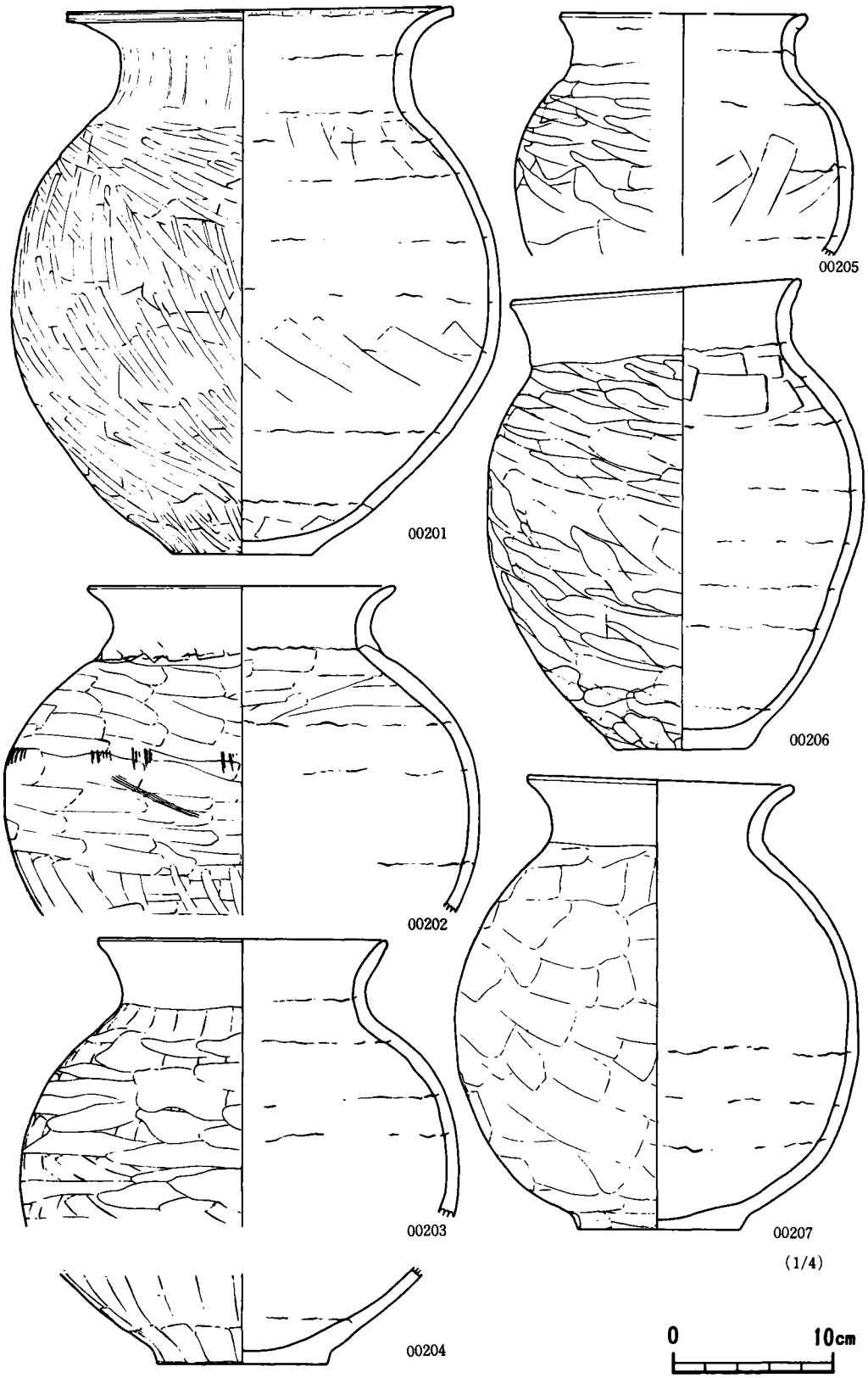
第54図　001号跡出土遺物実測図

・002号跡（第55図～第58図）　本跡よりは多量の土器と若干の土製品が出土した。土器の総量は約200個体分と考えられすべて土師器である。それらの出土状態をみると、本跡廃棄時の原位置を保つものと、南西部分に投棄されたものに大別できることは前述のとおりである。ここでは両者を区別して記述を行うこととする。なお個々の詳細は別表を参照されたい。

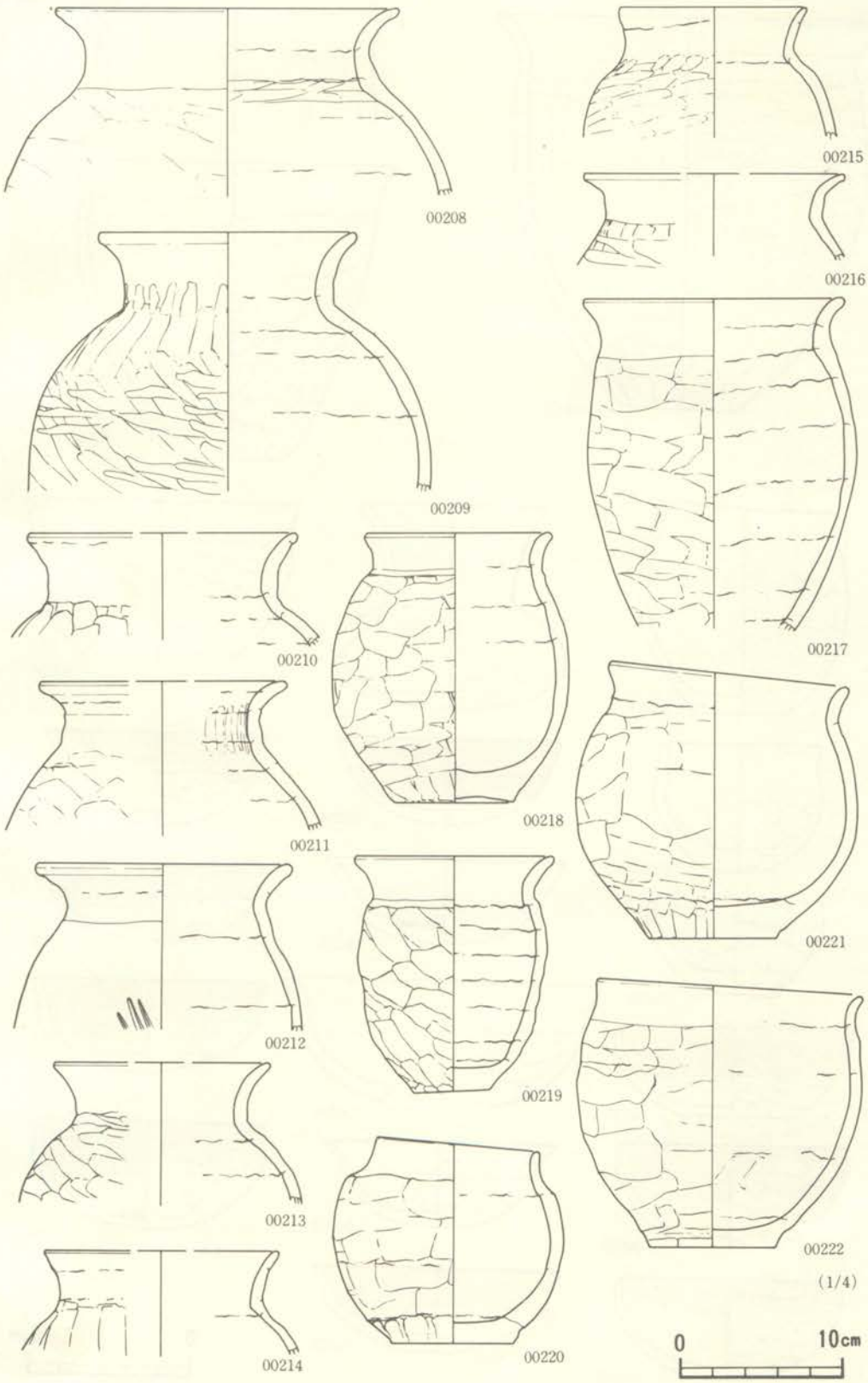
前者の例としては、カマド脇・貯蔵穴上出土の1・20～22・31・32・34・35・38・39・41～43・45・46の15点と、P_3付近よりの7、南西壁直下の26等がこれにあたる。1・7は土圧により押し潰された状態で、35・42は攪乱を受けたために一部を欠くが、他は全くの完形品である。

1は大形甕である。長めの頸はほぼ直立し、口縁で大きく開き、口唇は喰み出すように成形され中央に一本の沈線がめぐる。球形の胴部はやや下脹れで、底部は7.5cmと小さいが、全体に安定感のある器形である。胴部はヘラ削り整形の後、極く丁寧な細ナデにより全面調整される。胎土中に長石粒を多く含むことも加え本遺跡中でも特異な土器である。7はやや小形の甕である。下脹れの球形胴は大きな底部で支えられ、口辺は短かく開く。全体にヘラ削りの後、簡単にナデ調整される。20～22は小形甕である。いずれも広口丸胴で底部が大きい。口辺の造りには各々特徴があり、20は無頸に近く、22は鉢形となる。胴部の整形は比較的荒いヘラ削りで、内面は丁寧にヘラナデされる。いずれにも外面に二次的な黒斑がみられ、20の内壁には炭化物が付着している。

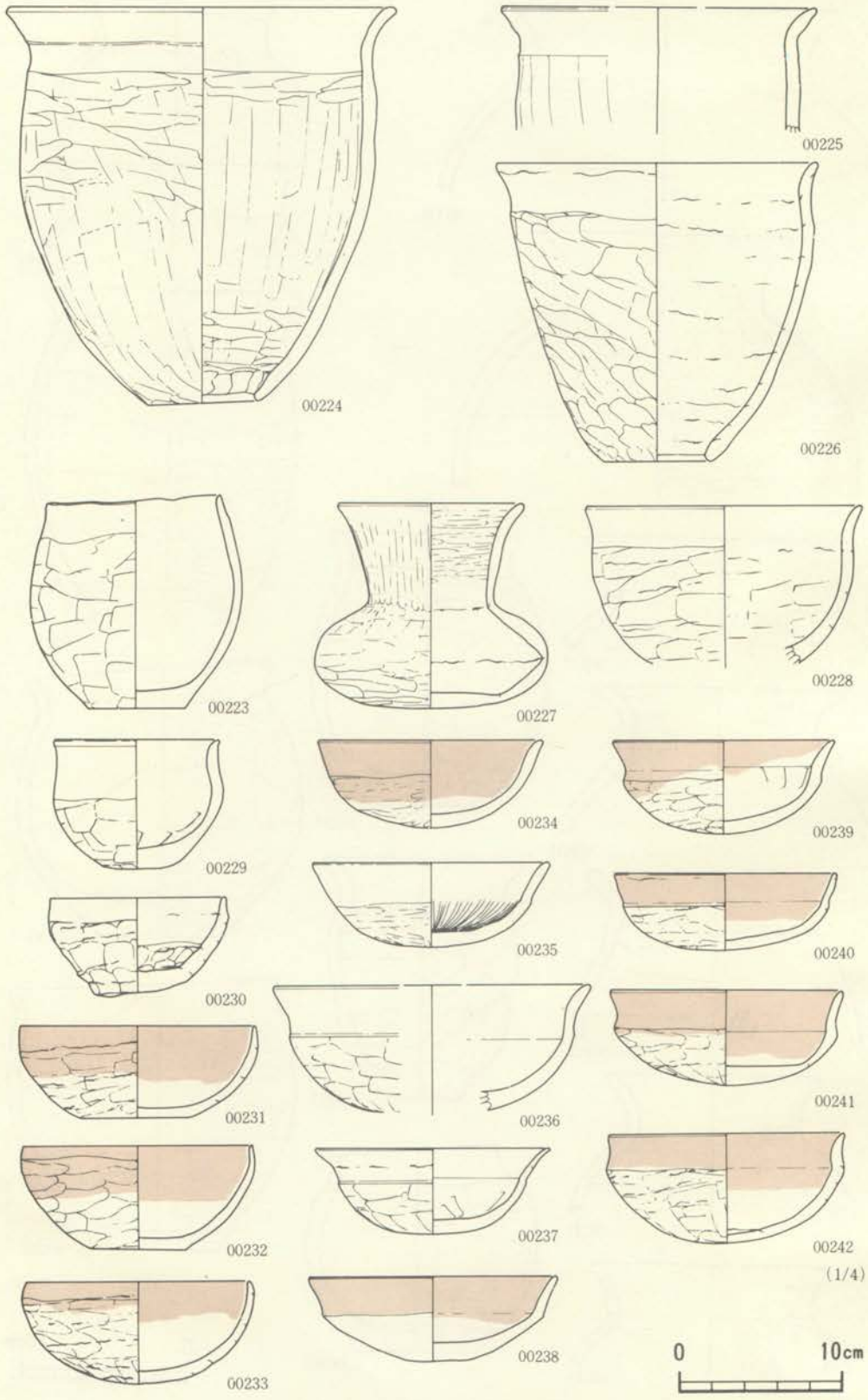
26は甑である。全体に深鉢形を呈し、胴の脹りが少なく、歪みも著しい。荒いヘラ削り整形痕はそのままで、内面には巻き上げ成形の痕が明瞭である。



第55図　002号跡出土遺物実測図（1）



第56図　002号跡出土遺物実測図（2）



第57図　002号跡出土遺物実測図（3）

31・32は平底の深い坏である。全体に丸味が強く、32では口唇にわずかな細工がみられる。口縁は横ナデ、腹部はヘラナデ調整され、31は巻き上げ成形の痕が残る。34・35はほぼ半球形の坏で、口辺の横ナデによりわずかに稜線が形作られる。丁寧なナデ調整が施され、35の内面には暗文様が認められる。38・39・41～43・45は、口辺と腹部が稜によって画される坏である。いずれも比較的深い丸底形であるが、口辺の造りに若干の違いがみられる。38・39は外弯、41～43は直立し口縁のみ外反し、45は「く」字状に極端に内傾する。38を除き、横のヘラナデが施され、40などには巻き上げ痕ものこる。46は肉厚な高坏である。坏部には稜が残り、口辺は大きく開く、脚部は短かく小さい。調整は他と同様である。

次に投棄されたものについて述べる。2～6・8～19・23は甕である。2は扁平球形胴に短かい口辺の付く器形で、3～5・8・9も同類であろう。いずれもヘラ削りの後丁寧にナデ調整を行っている。6はやや長胴になり、口辺の開きはゆるやかである。17もこれに類し、ともにヘラ削りの後ナデ調整されるが全体として荒い造りである。10～16は中～小形の甕で、ほぼ球形胴となる一群である。口辺は直立気味のものと、「く」字に外反するものがある。18・19は広口の小形甕である。胴の脹りは異なるが、荒いヘラ削りのままである。

27は堅緻な造りの壺である。口辺は長くラッパ状に開き、扁平な丸胴となる。全体に丁寧にナデ調整される。29・30は鉢形を呈すが、全体に荒い造りで、手捏土器の類とも思われる。

33は半球形の深い坏でヘラナデが施される。36・37・40・44は、稜を有す坏である。いずれも前述の坏より浅い器形で、口辺の造りには、大きく開くもの、直立に近いもの、内傾するものが混在する。いずれもヘラナデ調整が施されるが、とくに37は肉薄・堅緻である。47～50は高坏脚部で、いずれも短かく小さい。

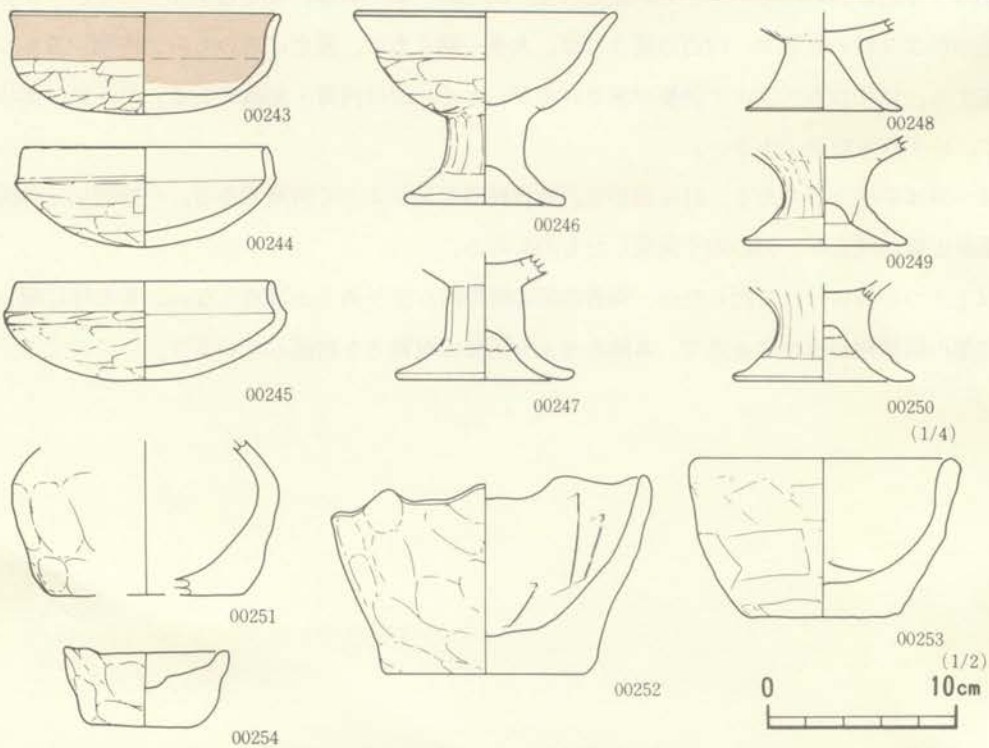
51～54は手捏土器である。51は壺形を、他は鉢形を呈すようで肉厚である。一般的には外面には指頭庄痕が残るが、53の如く調整したものもある。

以上2つの群に分けて記したが、両者の間に時期的な差があるとは思えない。また坏に関し、口辺部の諸様相が混在する点で、本跡のセット関係の複雑さを物語っていよう。

002号跡

番号	法量 cm 器高	口径	胴径	観察 胎土	焼成	(外) 色調 (内)
1	33.5	24.8	30.5	密	優	灰褐・灰黒
2	(20.0)	19.2	29.5	密	良	灰黒・灰褐
3	(17.5)	18.2	27.4	密	良	褐
4	(4.8)	?	底10.4	密	良	褐
5	(15.0)	15.4	21.0	密	良	赤褐・黒褐
6	28.8	18.6	23.4	密	良	赤褐・ 褐
7	27.6	16.7	25.2	密	良	茶褐
8	(11.4)	21.2	?	密	良	灰褐
9	(15.5)	15.8	24.6	やや密	良	黒褐・ 褐
10	(6.4)	16.6	?	密	良	灰褐・黒褐
11	(8.8)	15.2	?	密	良	赤褐
12	(10.0)	15.8	?	粗	良	赤褐・ 黒
13	(8.5)	13.2	?	やや密	良	赤褐
14	(6.0)	14.4	?	やや密	良	赤褐
15	(8.0)	11.6	?	密	良	褐
16	(5.0)	16.0	?	やや密	良	赤褐
17	(21.0)	16.0	16.4	やや密	良	赤褐
18	16.3	11.6	14.6	やや密	良	灰褐・黒褐
19	14.5	12.3	11.8	密	良	灰褐
20	約12.0	10.1	14.3	やや密	良	茶褐・黒褐
21	約16.0	14.9	17.3	やや密	良	赤褐
22	約16.0	16.3	17.5	密	良	赤褐・ 褐
23	約12.5	10.7	12.8	やや密	良	褐
24	24.1	23.6	底 6.4	やや密	良	褐
25	(7.5)	19.0	?	密	良	褐
26	18.0	19.6	底 6.6	やや密	良	赤褐
27	12.2	11.5	14.4	緻密	優	赤褐

番号	法量 cm 器高	口径	胴径	観察 胎土	焼成	(外) 色調 (内)
28	(9.5)	16.8	16.0	密	良	赤褐・ 赤
29	7.8	10.0	10.3	密	良	褐
30	約 6.0	10.7	10.9	やや密	良	灰褐・赤褐
31	5.5	14.4	14.5	やや密	良	赤褐
32	6.2	13.8	14.2	やや密	良	黒褐・ 褐
33	6.1	13.5	14.1	やや密	良	赤褐
34	5.3	13.8	—	密	良	褐
45	5.1	14.6	—	やや密	良	赤褐
36	(7.5)	19.4	17.5	粗	良	褐 ・灰褐
37	5.1	14.2	11.6	密	良	褐 ・灰褐
38	5.1	15.2	13.6	やや密	良	褐
39	5.7	13.6	12.1	やや密	良	赤褐
40	4.6	13.4	12.5	粗	良	灰褐
41	5.7	14.2	13.7	密	良	褐
42	6.5	14.3	14.5	密	良	灰褐・ 褐
43	5.2	14.2	13.9	密	良	灰褐・茶褐
44	5.2	12.8	13.6	やや密	良	褐
45	5.1	13.4	14.8	密	良	灰褐・赤褐
46	10.0	14.0	底 8.6	やや密	良	赤褐
47	(6.4)	?	底 9.5	やや密	良	赤褐
48	(4.5)	?	底 8.3	密	良	灰褐・ 黒
49	(4.7)	?	底 8.6	やや密	良	赤褐
50	(4.8)	?	底 9.7	やや密	良	褐
51	(4.0)	?	7.0	やや密	良	褐 ・灰褐
52	約 5.0	8.5	底 5.2	やや密	良	赤褐
53	4.1	7.1	底 4.0	密	良	褐
54	約 2.0	4.3	底 2.6	密	良	褐 ・灰褐



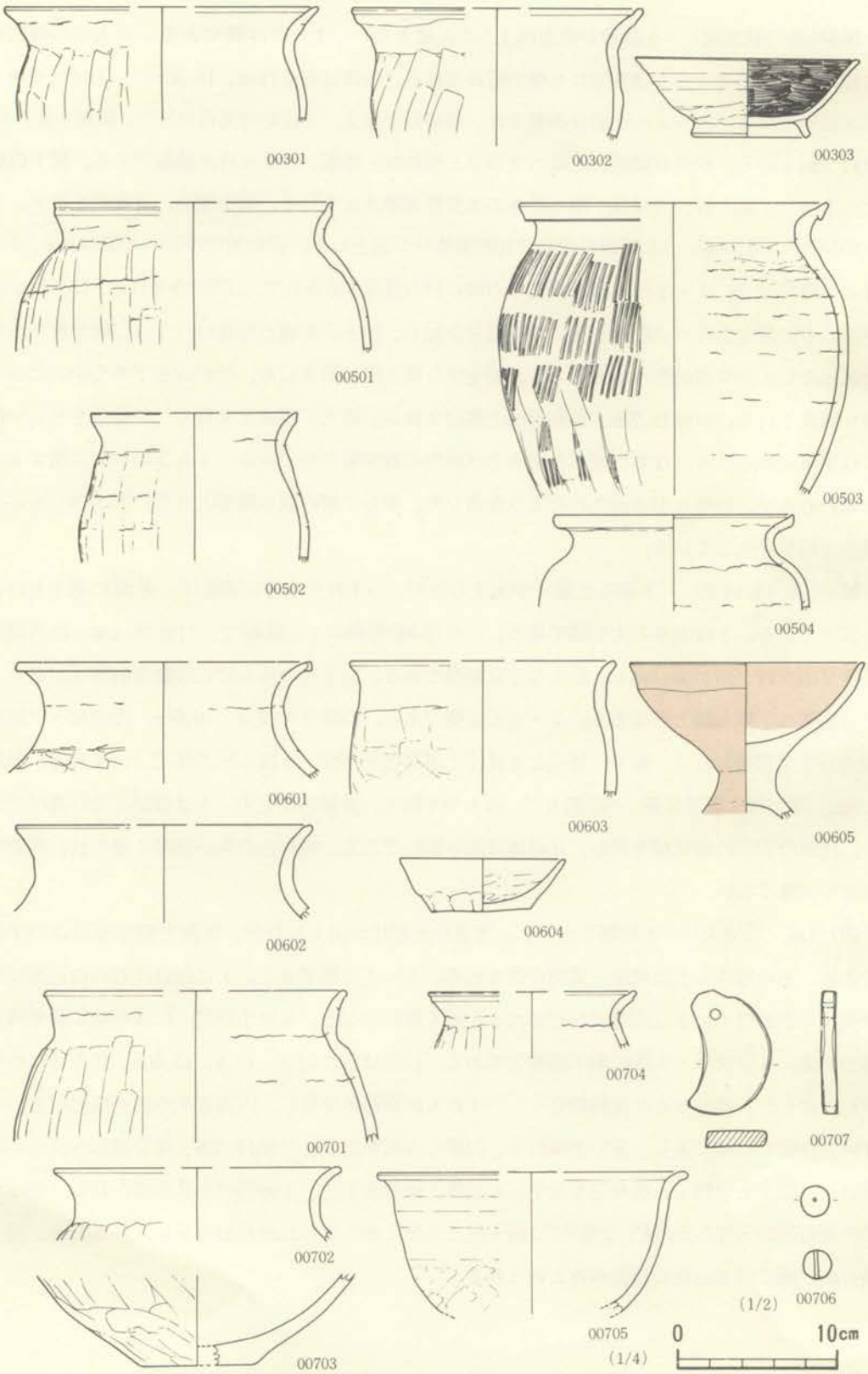
第58図　002号跡出土遺物実測図（4）

・003号跡（第59図）　土師器が数点出土したに過ぎない。1・2は甕である。ともに口縁内側に段を残すもので、2では外面にも稜が認められる。口径は各々19.6、18.3cmで、1はやや肩の張る器形となる。ともにヘラ削り調整され、黄褐色を呈す。3は貼付高台付坏で、器高4.9、口径14.0cmを計る。ロクロ成形、回転ヘラ切りと思われ、外面にロクロ目が顕著である。腹下部静止ヘラ削りが施され、内面は丁寧な磨きの後黒色処理されている。胎土緻密、黄褐色を呈す。

・005号跡（第59図）　土師器を中心に10数個体分が出土した。図の他に坏3～4個がある。1～4とも甕である。1・2は口縁が直立し内縁に段の遺存する器形で、口径は各々17.2、12.8cmと推定される。胴全面にヘラ削りが施され、褐色を呈し、胎土、焼成とも良い。3は口縁を折り返し、帯状となし、やや肩の張る器形である。胴全体を横方向に叩きしめ、そののち下半を中心にヘラ削り調整される。口径19.2cm、器高24cmと推計される。胎土・焼成とも良く、赤褐色を呈し一部には黒斑がみられる。なお内面には巻き上げ成形の痕が明らかである。4も3の系統に属すものと思われるが、口縁は引き出されたような造りで、著しく肩の張る器形となる。内・外とも二次焼化を受け赤化している。

・006号跡（第59図）　多量の土器片が出土したが、いずれも小片に過ぎず、実測に適すものはわずかである。1は肉薄の大形甕である。これは002号跡の1と同類で、口径18.4cm、口唇帯状に造り出され、頸が長い点と、胎土などは酷似である。出土片のうちにこの甕の胴部片があり、その調整は丁寧な細ナデである。2・3とも甕である。口径各々18.4、16.6cm。後者はヘラ削りののちナデ調整される。胎土・焼成とも良く、黒褐色を呈す。4は小形の坏で、口径10.4、器高3.3cm。腹下端～底部は荒いヘラ削りで、胎土やや粗く、黄褐色を呈す。5は脚部の長い高坏である。坏部口辺との境に稜を残し、坏自体は深い器形である。極彩色の朱が部厚く塗られ、調整等は余り明瞭でない。

・007号跡（第59図）　土師器を主とし、多量の土器片が出土したが、実測可能なものはわずかである。図の他にも土師晩期の遺物が含まれる。1～4は甕である。1は直立に近い口辺部にやや長めの胴が付く。2は肉薄で口辺が大きく開く器形となる。3は小形で、口縁内端に段を残す類である。4は肉厚・丸胴の胴下部残欠である。口径は各々18.8、17.8、13.0cm。胎土にはやや砂粒を含むが、焼成ともに比較的良く、いずれも表面褐色を呈し、内面はやや黄気味となる。5はロクロ整形の鉢である。深い半球形で、口縁のみ反り返る。口径19.4cm、腹下部はヘラナデ調整され、胎土やや粗く、淡褐色を呈す。6は径9㎜の土玉で、1㎜弱の小孔が穿たれる。7は大形の滑石製勾玉である。扁平な造りで、頭・尻とも形に差のない三日月形を呈す。長さ32㎜、最大幅21㎜。頭には3㎜程の穿孔がみとめられる。



第59図　003・005・006・007号跡出土遺物実測図

・008号跡（第60図）　土師器が少量出土している。このうち甕の破片が10余個体分と多く、土製品も２～３点ある。１は甕である。口径15.0、胴径18.2、器高13.5cmと推計される扁平球形胴で、短かい口辺は内傾しつつ、口縁で開く。全体にヘラナデ調整され、胎土はやや粗く、赤褐色を呈す。２～４は坏である。２は半球形、３は浅い半球形で口縁のみ内傾、４は浅く、強い張出しの稜を境に口辺が内傾する器形である。口径は各々14.8、13.2、13.5cmを計る。ヘラ削りののち３・４は比較的丁寧にナデ調整され、胎土・焼成とも良く、黄褐～褐色を呈す。５は土製支脚で、頭部を欠くが長さ12cm程であろう。

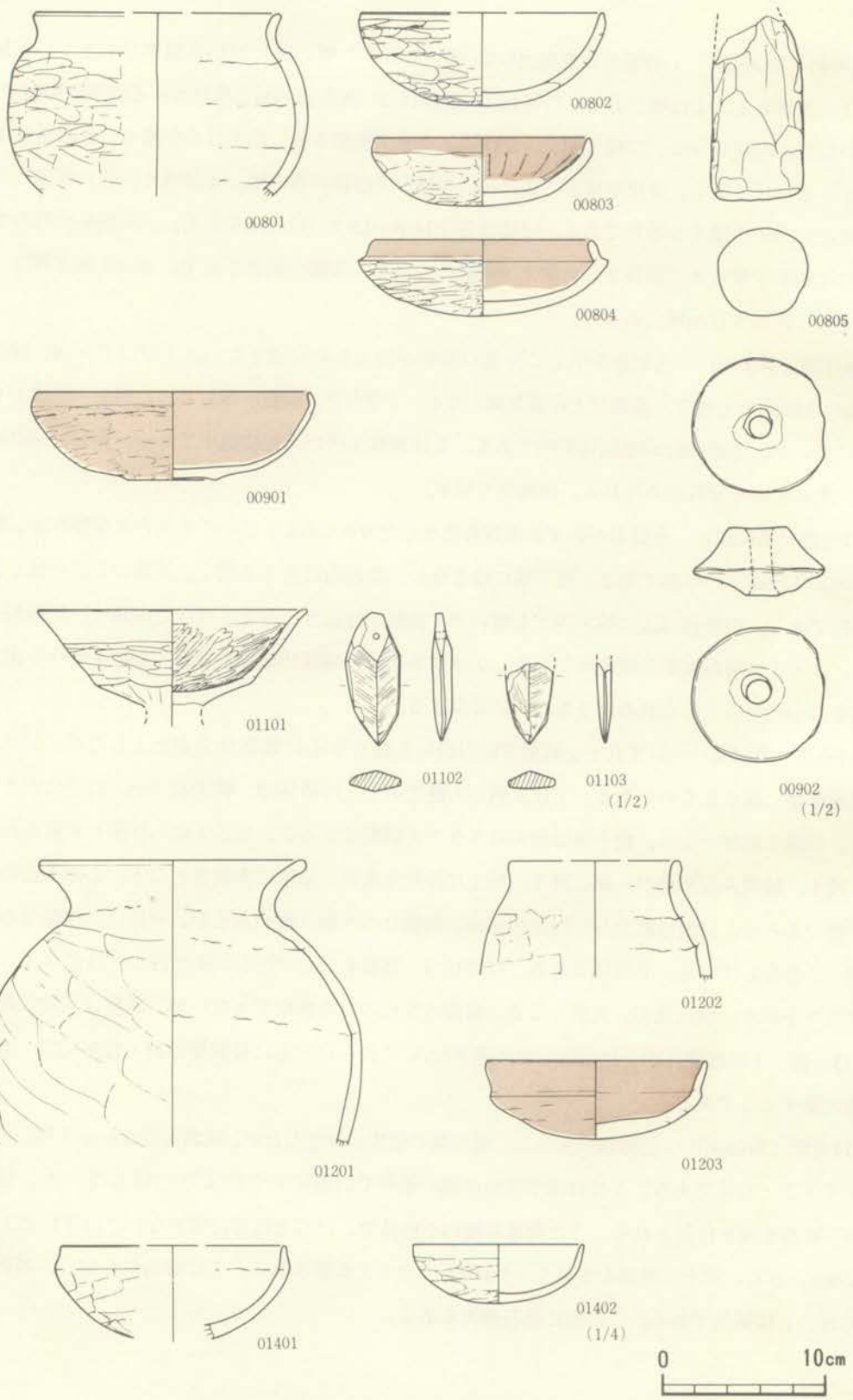
・009号跡（第60図）　土師器を中心に少量の遺物が出土したに過ぎない。１は口径16.6、器高5.3cmの浅鉢様の土器で、底部は上げ底気味となる。丁寧なナデ調整が施される。胎土・焼成ともとくに良いが、赤彩のため地肌は不明である。２は算盤玉状の土製紡錘車である。径40、厚21mmで、中央に８mmの穿孔がみられる。黄褐色を呈す。

・011号跡（第60図）　土師器がわずか数10片出土したのみである。このうち大形丸胴甕片が注視された。１は高坏の坏部である。腹下端に稜を有し、直線的に大きく開く。同類のものに比し深い器形である。口径16.4cm。外・内とも細いナデ調整が行届き、胎土・焼成とも良く、灰褐色を呈す。２・３は滑石製剣形模造品である。２は長さ40mm、剣幅16mmで、両面とも鏑ぎが作り出され頭部に小孔がみとめられる。３もこれに近似する。

・012号跡（第60図）　いずれも土師器で図の他にも甕を中心に数個体分が出土したが、すべて土師器後期に属するものである。１は丸胴の大甕である。口径16.2、胴径23.0cm。口辺は大きく開き、口縁で部厚くなる。胴全体は斜めのヘラナデ調整であるが、その下にヘラ削りの痕もわずかに残す。輪積み成形痕が一部に残り、胎土に砂粒を含み、全体に赤褐色となる。２は小形の長胴形甕であろう。口辺は直立し、口径10.6cm。胴部にヘラ削り痕があるが、全体に二次焼化のため粗く、赤化している。３は坏である。口径13.4、器高4.7cm。中央に稜を残し、口辺はゆるやかに立ち上がり、腹は浅く、丸底となる。器面の荒れのため観察できないが、調整は丁寧である。

・013号跡　土師器甕片が２片出土したに過ぎない。これらはともに長胴甕の胴・底部片で、土師晩期に属すようである。

・014号跡（第60図）　土師器を主とし、相当量の破片が出土したが、実測可能なものは殆んどない。１・２とも坏である。１はほぼ半球形の深い器形で口辺にナデにより内傾している。口径13.8、器高６cmと推計される。２は肉薄の浅い小形品で、口辺と腹部に境がない。口径10.5、器高3.5cm。ともに胎土、焼成とも良く、やや荒いヘラナデ調整される。１は黄褐色を呈し、黒斑がみられ、２は褐色である。この他に砥石残欠もある。



第60図　008・009・011・012・014号跡出土遺物実測図

・015号跡（第61図）　土器が相当量出土したが、周囲よりの混入品と思われるものが殆んどである。このうち土師器晩期に属する甕片が相当数みられ、注視された。

1・2は丸胴の甕である。ともに短かい口縁が大きく開き比較的部厚くなる。口径各々16.4、16.0cm、2の胴径17.6、器高19cmと推計される。ともに全体に荒いヘラ削り整形がなされ、頸部には稜を残す程となる。胎土に砂・石粒をやや含み、焼成は良く、褐色を呈し、2では一部に黒斑をみる。3は埦形を呈す大形のもので、口径21.4、器高5.7cm。肉薄で、外・内とも荒いヘラ削りがなされ、巻き上げ成形の痕も残る。胎土・焼成とも良く、褐色を呈す特異な土器である。4・5は坏で、5は稜を有し、口辺が内傾する浅い器形である。口径13.5、器高4.0cm。外面ヘラナデ内面磨き仕上げののち黒色処理されたようである。6は滑石製の臼玉で、径7、厚さ5㎜。

・016号跡　土師器が相当量出土したが、実測できるものはない。土器のうちには大形丸胴の甕・赤彩の稜を有す坏が各々5～7個体分程度含まれる。この他に手捏土器もある。

・017号跡　土師器が少量出土した。このうち胴部にハケ目のわずかにのこる甕、腹下端に稜を有す高坏片等が含まれるが、ともに土師器中期に属すと思われる。

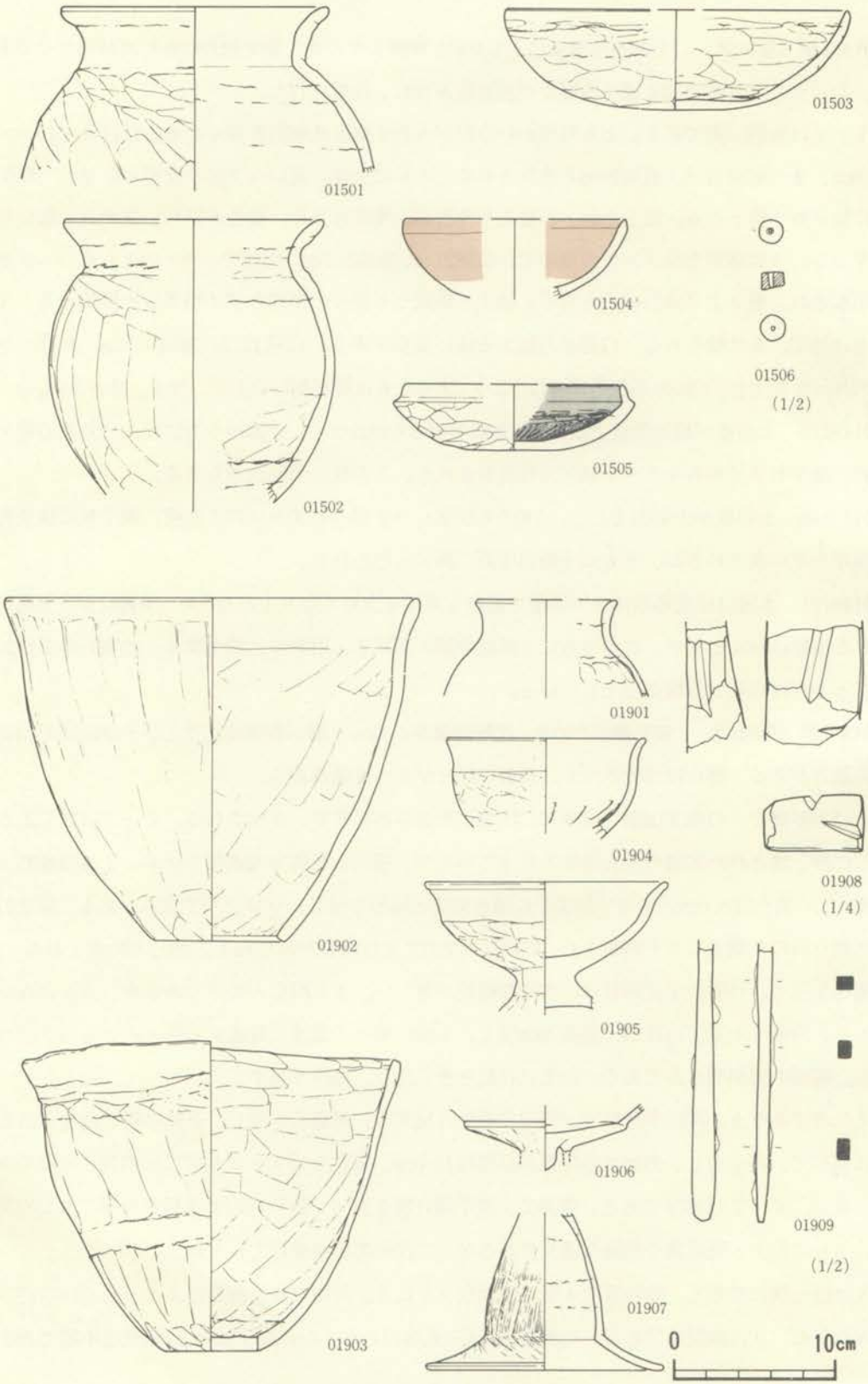
・018号跡　本跡は住居跡自体が不明瞭で遺物も周辺を含めて取り上げたため、本跡に伴うと断定される遺物は殆んどない。このうちに土師器中期の高坏2、坩形の土捏土器1、磨製石斧の残欠などとともに石英の石核が出土している。

・019号跡（第61図）　被災跡のためか、比較的遺存の良い土器が数個体出土し、その他にも相当量の破片がある。甕片は比較的少く、赤彩の坏片が5～6個体ある。

1は小形甕で、口径9㎝弱、全体に二次焼化を受け器面荒廃、赤化される。2・3は甑である。ともに押し潰された状態のため破片となっていたが、複元して約½の遺存を示す。2は口径25.6、器高20.7、底孔径8.0cm。口辺でわずかに開き気味の鉢形を呈し、全体にやや歪みがある。縦位のヘラ削りののち簡単にナデ調整され、内面はヘラナデ上げ調整がみられる。胎土・焼成とも良く、黄褐色を呈す。外面の中位部分は二次的な磨耗が著しい。3も酷似の器形であるが、より歪みが著しく、肉薄である。口径23、器高20cm程で、下端に至って急速に弯曲する外・内ともヘラ削りされ、輪積み痕が明らかである。胎土に石粒を多く含み、褐色を呈す。

4は埦であろう。深い半球形で、口辺でやや外反する。黒褐色を呈し、全体に粗い造りである。5は高坏で、稜を有し、外反する坏部の口径は15.0cm。褐色を呈す。ともに二次的焼化のため器面は荒い。6・7は高坏である。肉薄で、腹下端に稜を有し、脹らみのある脚部は裾で大きく開く。ともに胎土・焼成良く堅緻な造りであるが、二次的焼化は受けていない。

8は砥石残欠である。砂岩質で4面とも面取りされる。各面に金属製品によると思われる切痕がみられる。9は鉄製品である。角棒状を呈し、先端のみわずかに扁平となる。用途は不明である。



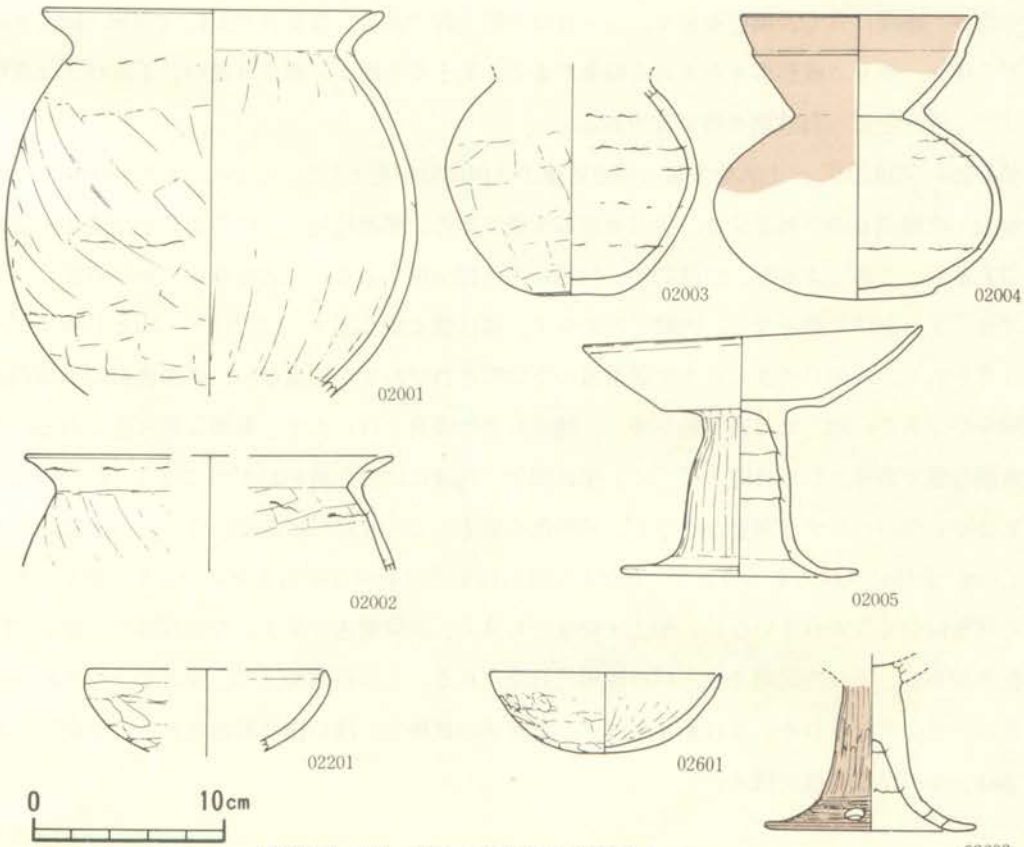
第61図　015・019号跡出土遺物実測図

・020号跡（第62図）　土師器を中心に相当量が出土した。このうち土師器中期と思われるものが多く、図の他に少くとも甕２、高坏１点が含まれる。

１・２は甕である。ともに口辺が「く」字に開き、１は下脹れの丸胴を呈す。口径各々17.8、19.2cm。比較的肉薄で、斜位のヘラ削りののち全体に簡単にナデ調整を施す。３は小形甕で、口辺を欠く。胴径13.2cm。器面荒廃するが、ヘラナデ調整されていると思われる。いずれも胎土に砂粒を含むが、焼成ともに良く、褐色を呈すか、１・２の内面は黒～黒褐色となる。

４は坩形の壺である。口径12.4、頸径6.7、胴径15.1、器高14.7cm。口辺はラッパ状に開き中位に稜を有す。頸は「く」字に接合され、胴は扁平球形を呈し、殆んど丸底となる。器面の厚さは５mm程である。器全面とも荒廃し調整痕を残さず、赤化しているが、胎土は砂粒を多く含み余り良くない。５は高坏である。口径17.7、器高13cm前後で、坏部は傾いている。坏部は広く平坦な底部から直線的に開く浅い器形である。脚部はほぼ円筒形を呈し、裾で大きく開く。坏部は内・外とも丁寧にナデ調整され、脚はヘラナデである。極めて肉薄で、胎土には砂・石粒を多く含むが、焼成とも良く、褐色を呈す。

・022号跡（第62図）　土師器を中心に少量の遺物が出土した。図の他に丸胴の甕などがある。１は半球形の坏である。口径12.4cm。ヘラ削りののちナデ調整される。褐色を呈す。



第62図　020・022・026号跡出土遺物実測図

(1/4)

・023号跡　土師器のみであるが、比較的多量である。このうちに高坏・手捏土器などがあり、甕片も3～5個体分に及ぶ。いずれも土師器後期である。

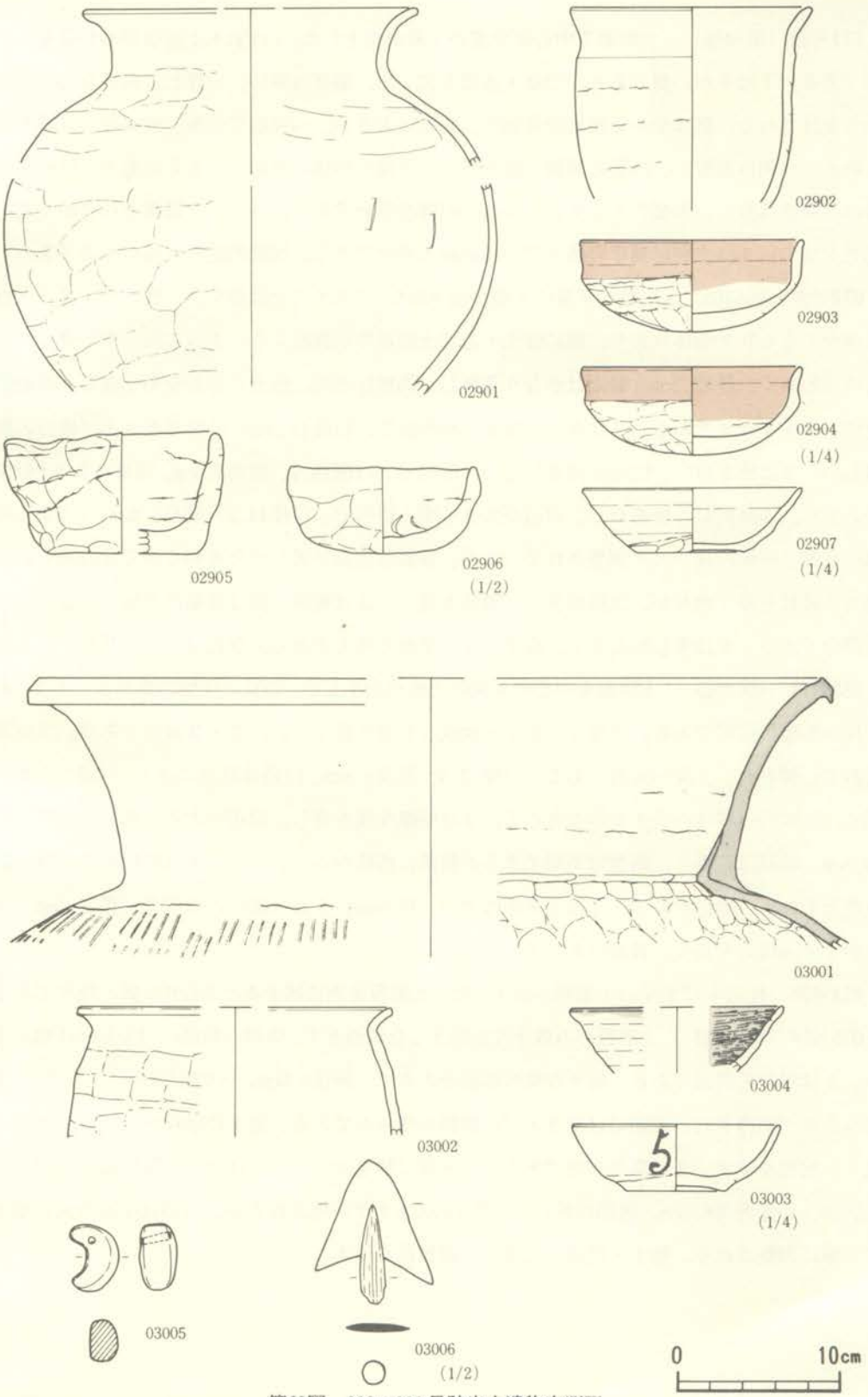
・025号跡　土師器数10片が出土したに過ぎない。やはり土師器後期のものである。

・026号跡（第62図）　土師器が少量出土したに過ぎず、図の他に壺・高坏等の破片が含まれる。1は浅い半球形の坏である。口径12.2、器高4.1cm。外面ヘラナデ、内面磨き仕上げされる。砂粒を含み、焼成良好。2は高坏脚部である。脚柱長く裾も大きく開く。ヘラ磨きが施される。裾部3個所に焼成前の穿孔がみられる点が特異である。胎土は緻密で、焼成は良い。

・028号跡　本跡に伴う遺物は殆んどなく、時期的様相は全く不明である。

・029号跡（第63図）　土師器を中心に多量の土器が出土した。個体数で、50余点を超え、このなかには甕・坏・高坏また須恵器大甕片も含まれる。1は扁平球形胴の大形甕である。上・下接合しないが、口径20.5、胴径30.0、器高27cmと推計される。口辺は短かく大きく開く。ヘラ削りの後、簡単なナデ調整が施される。胎土・焼成とも良く、明るい褐色を呈し、一部に黒斑がみられる。2は長胴の小形甕である。口径14.8cm。胴下半で丸くなる。器面荒廃し調整は不明。3～4は坏である。ともに稜を有し、口辺は直立に近い。丸底で比較的深い器形である。口径13.5、器高5.3～5.5cmと酷似する。ヘラナデ調整され、3では巻き上げ成形の痕が明瞭である。胎土に砂粒を含み、焼成は良く、褐色を呈す。5・6は手捏土器である。器高各々3.7、2.6cm。鉢または坏形を模し、ともに成形痕をみとめる特徴がある。胎土やや粗く、焼成は良い。7はロクロ成形の坏で、破片中にも当該期土器が若干ある。

・030号跡（第63図）　土師器多量と須恵器甕の3個体分が出土した。しかしいずれも破片で、土師器後・晩期のものが混在する。1は須恵器大甕である。頸部約½と、口辺部若干が遺存するのみであるが、これによると、口径約50、口辺の高さ12cm程である。口辺はゆるやかに外反し、口縁では「T」字状に帯をなし、内縁に段を有す。肩は強く張り出す。口辺は外・内とも横ナデがくり返される。肩部分外面にはナデ調整痕の下に叩き目がわずかに遺存し、内面裏当て工具の痕が明らかである。胎土には長石粒が多く、焼成も余り優良とはいえず、器面は暗灰色である。2は長胴の甕である。口辺は短かく「く」字に開き、内縁には段の痕がわずかに残る。口径19.2cm。外面は横の荒いヘラナデ調整がなされ、黄褐色を呈す。3・4は坏である。3は、口径12.8、器高4.0cm。全体に丸味のある器形で、底部の切離しは低速回転の片手引き糸切のようであり、その後の調整は全くなされていない。胎土・焼成とも良く、淡黄褐色を呈す。なお腹部に「与」（？）の墨書がある。4は内面磨き仕上げの後黒色処理される。5は石製勾玉で、長さ20、厚さ8.5mm。穿孔は一方よりなされる。6は無茎平根式三角形式の鉄鏃で、浅い抉りがみられる。身長37、身幅36mm。中央に木柄痕が残る。



第63図　029・030号跡出土遺物実測図

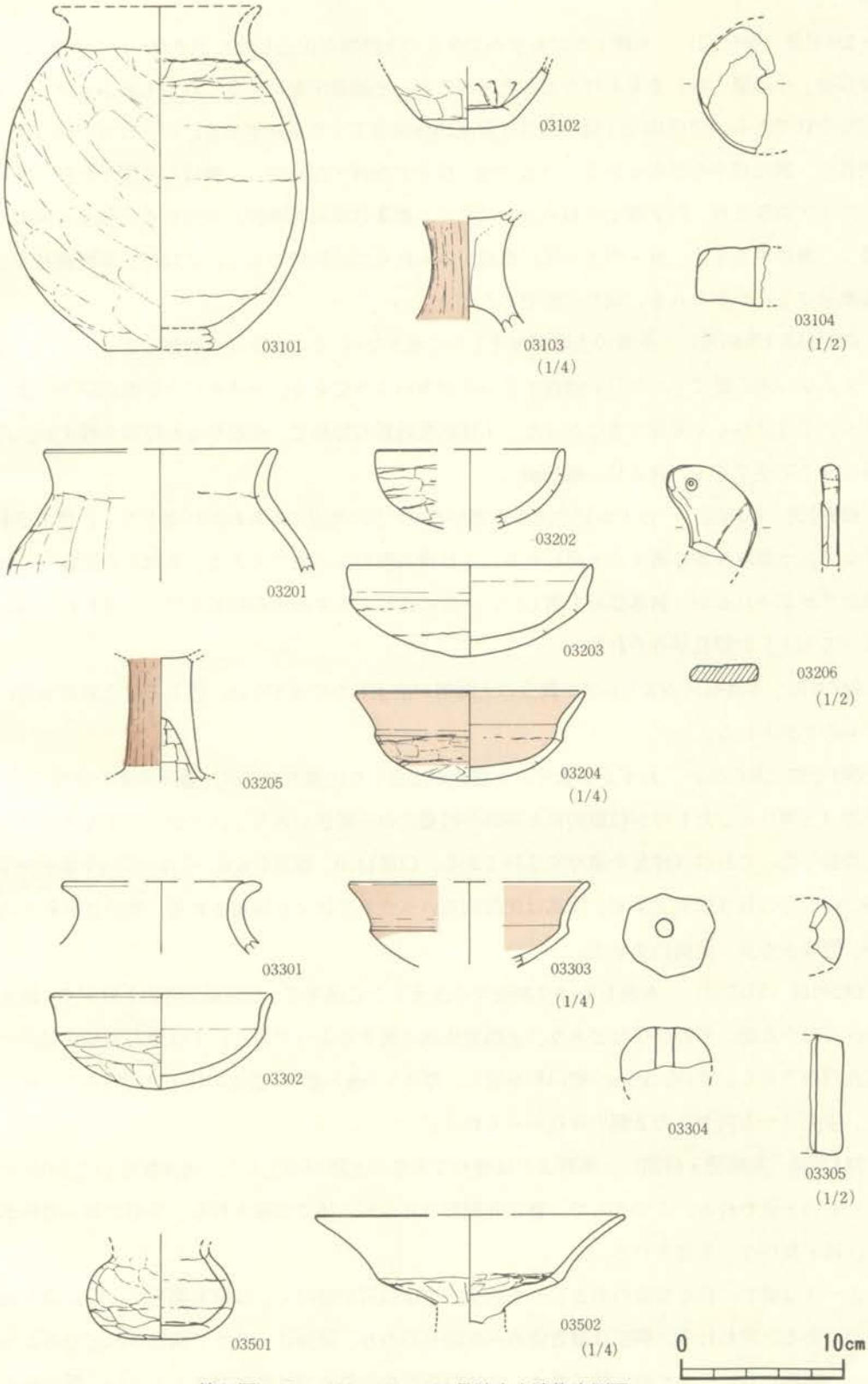
・031号跡（第64図）　土師器を中心に少量の土器が出土した。いずれも土師後期の特徴をもつものである。1は中形の甕である。口縁・底部を欠くが、遺存は良い。口径13、胴径18.5、器高21cmと推計される。胴はやや下脹れの丸胴で、底部は大きい。ヘラ削りの後、簡単なナデ調整が施される。器肉は部厚く、内面に輪積み痕を残す。2は小形甕の底部で、ともに胎土に砂粒を多く含み、焼成は良く、黒褐色を呈す。3は高坏の脚柱部分である。ヘラナデ調整され、胎土密で、褐色を呈す。4は土製紡錘車の残欠で、径42mmと推計できる。比較的造りの良いものである。

・032号跡（第64図）　比較的多量の土器が出土した。このうち土師器では、甕・坏・高坏・甑などが少くとも10余個体分あり、他に弥生・古式土師器片が混在する。1は丸胴の中形甕である。口辺は短かく、径12.2cm。器面はかなり荒廃し、調整は不明。胎土に砂粒を多く含み、赤褐色を呈す。2～4は坏である。2は深い半球形の小形品で、口径12.2cm。肉厚で巻き上げ成形の痕が著しい。3は稜を有し、口辺が直立に近い大形品で、口径15.1、器高5.6cm。同様に巻き上げ成形であろう。4は同じく稜を有し、口辺が大きく開く器形で、口径14.2、器高5.4cm。いずれも腹部はヘラ削り整形の後、ナデ調整されているが、器面の荒廃が著しいため明らかでない面もある。胎土に砂粒を多く含むが、比較的密で、焼成も良く、3は褐色、他は黄褐色を呈す。5は高坏脚柱部分である。6は滑石製勾玉で、扁平「コ」字形の残欠である。穿孔は一方よりなされる。

・033号跡（第64図）　土師器を中心に少量の土器が出土した。赤彩の坏類の数が多いようである。1は小形甕口辺部である。部厚く、胎土・焼成とも余り良くない。2・3は坏である。2はほぼ完形で、稜を有し、深い丸底である。口径13.5、器高5.8cm。口辺は直立に近く、口縁でわずかに開く。比較的丁寧はヘラナデがなされる。3は明瞭な稜を有し、口辺が大きく開く器形で、口径14.8cm。器面は荒廃し、調整は不明であるが腹部に刷痕がみられる。胎土は砂粒を多く含むが、焼成とも良く、褐色を呈す。4は土玉の残欠で、径28mm。5は土錘形の残欠で、長さ35mm。ともに胎土・焼成とも良く、黄褐色を呈す。

・034号跡　柱穴中に2片の土師器が出土した。土師器後期に属すると思われる甕の破片である。

・035号跡（第64図）　土師器のみ数十片が出土したに過ぎず、様相の判別の付くものは殆んどない。1は坩の粗製品である。扁平な球形胴部分のみで、胴径9.0cm。ヘラ削りののち、比較的丁寧なヘラナデが施され、内面には巻き上げの痕跡が明らかである。胎土に砂粒を含むが、焼成とも良く。褐色を呈す。2は高坏坏部である。腹下端に稜をなし、口辺はラッパ状に大きく開く。口径19.0、坏部器高6.5cm。底部は荒いヘラ削りののちナデが施されるが、口辺は不定方向の細ナデで丁寧に調整される。胎土・焼成とも良く、淡黄色を呈す。



第64図　031・032・033・035号跡出土遺物実測図

・**036**号跡（第65図）　本跡よりはわずか10余片の土師器が出土したに過ぎない。このうちには、中形甕、小形甕、鉢、赤彩の坏などが含まれるが、土師器中期に比定されるものがめだつ。1は完形の鉢である。口径10.2、胴径13.7、器高10cm前後でやや歪みがある。口辺は無頸壺のように内弯し、胴は扁平な球形を呈す。口辺は強い横ナデを外・内に施し、胴はヘラ削りの後、簡単にヘラナデ調整され、胴下端より斜め上方に向け、数条の焼成前擦痕がみられる。胎土・焼成とも良く、黒褐色を呈す。外・内上半部に赤彩がみられる点が特徴である。2は滑石製模造品で、中央部分に2孔が穿たれる。双孔円板であろう。

・**037**号跡（第65図）　少量の土器が出土したに過ぎない。その大半は土師器である。器肉の薄い、「く」字口辺の甕で、ハケ目の遺存するものが多いようである。全体的に土師器前期の特徴を有すが、小片ばかりで実測できなかった。1は粘板岩質の製品で、面取りされ擦痕を残すが、用途等は全く不明である。長さ13、幅10㎜。

・**039**号跡（第65図）　わずか10余片の土器がピット上の周辺にみられたに過ぎない。甕・赤彩の坏など、土師器後期に属すると思われる。1は滑石製勾玉の残欠である。各面とも比較的丁寧な面取りがなされるが、剝落部分も著しい。一般に比し、やや長めの形状を示すと思われ、頭部には一方向よりの穿孔がみられる。

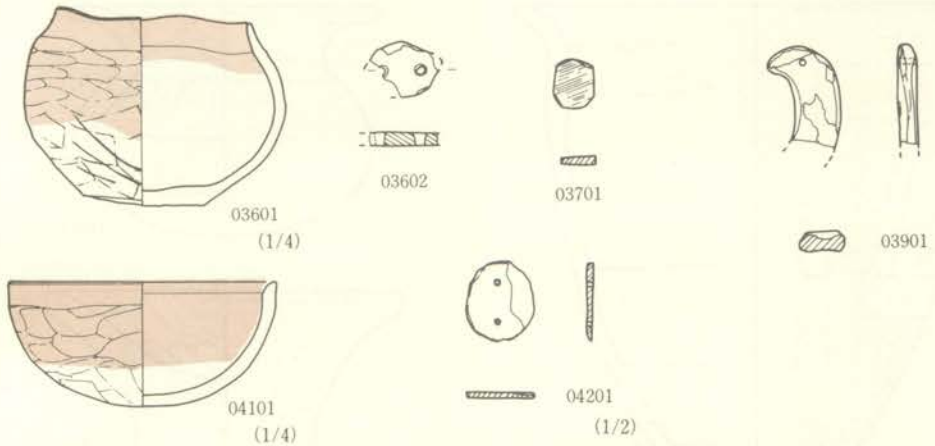
・**040**号跡　本跡柱穴内よりわずか数点の土師器が出土したに過ぎない。恐らくは土師器後期に属すものと思われる。

・**041**号跡（第65図）　わずか30余片の土器片が出土したに過ぎないが、整理作業の過程で、131号跡（土壙）としたものが位置的にも本跡の貯蔵穴の可能性があり、穴内出土の1を本跡分として掲載した。これはほぼ¾を遺存する坏である。口径14.0、器高6.4cm。全体に深い半球形を呈し、短かい口辺のみほぼ直立する。腹部は比較的荒いヘラナデにより調整される。胎土に砂粒を含むが、焼成とも良く黄褐色を呈す。

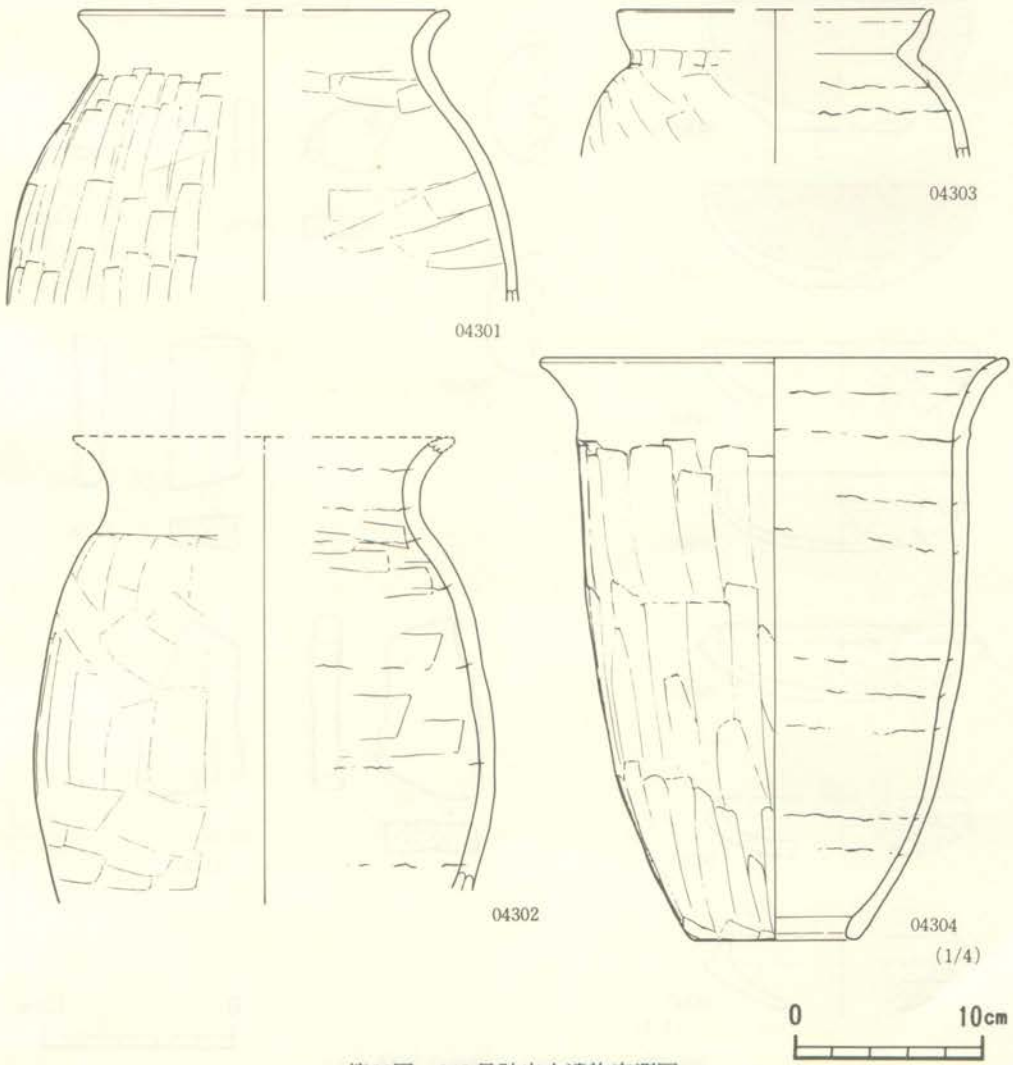
・**042**号跡（第65図）　本跡もやはり30余片が出土したに過ぎず、当該期以外の土器が多く混入する。このうち甕、赤彩の坏などあり、土師器後期に属するようである。1は滑石製模造品のうち双孔円板である。径20、18㎜の楕円形を呈し、厚さ1.5㎜と薄い。各面の仕上げは極めて丁寧である。中央に一方向からの2個の穿孔がみられる。

・**043**号跡（第66図・67図）　本跡よりは極めて大量の土器が出土した。個体数にして150個を超えるものと思われる。このうちで、甕は丸胴形のものが、坏では稜を有し、大形で深い器形が多く、鉢・高坏なども含まれる。

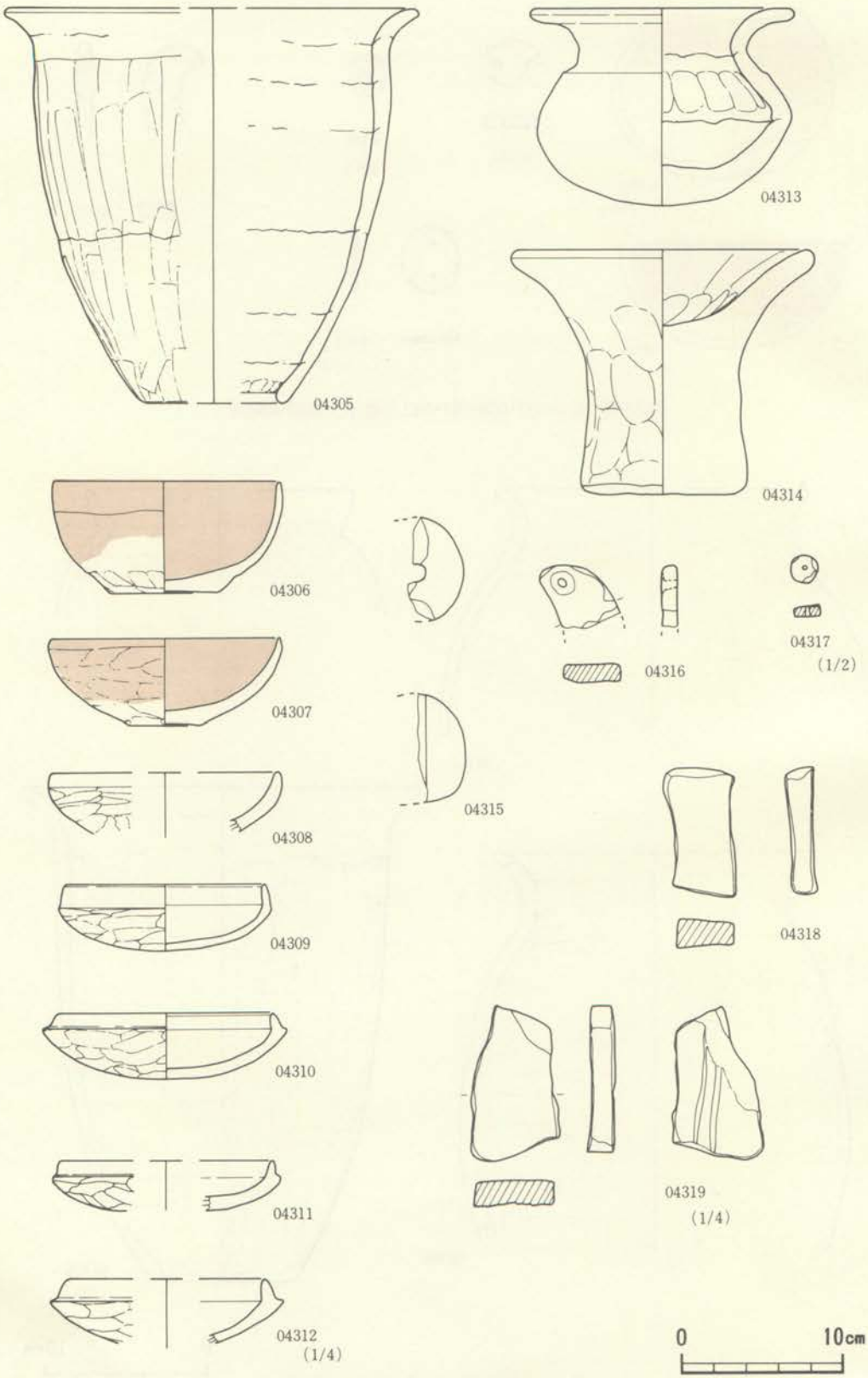
1～3は甕で、各々特徴のある器形を示す。1は口辺が短かく、ほぼ丸胴形で、胴部最大径は中位にあると思われる。胴部は縦方向のヘラ削りののち、簡単にヘラナデ調整されているようである。内面にもヘラナデの痕跡を残す。2は口辺がやや長めで比較的開きも大きい。胴は長めと



第65図　036・037・039・041・042号跡出土遺物実測図



第66図　043号跡出土遺物実測図



第67図　043号跡出土遺物実測図（2）

なりやや下脹れの感じである。胴部は基本的には上方で縦、下方で横のヘラ削りののち、丁寧にヘラナデ調整がなされ、内面もヘラナデ痕がみられる。器肉は厚めで、内面には輪積みの痕が明らかである。3は「く」字に開く短かい口辺で、扁平球形に近い胴形となるようである。口辺の中央は強い横ナデによりやや脹らみをもつ。斜位方向のヘラナデが丁寧である。いずれも胎土に砂粒を含むが、焼成とも良い。

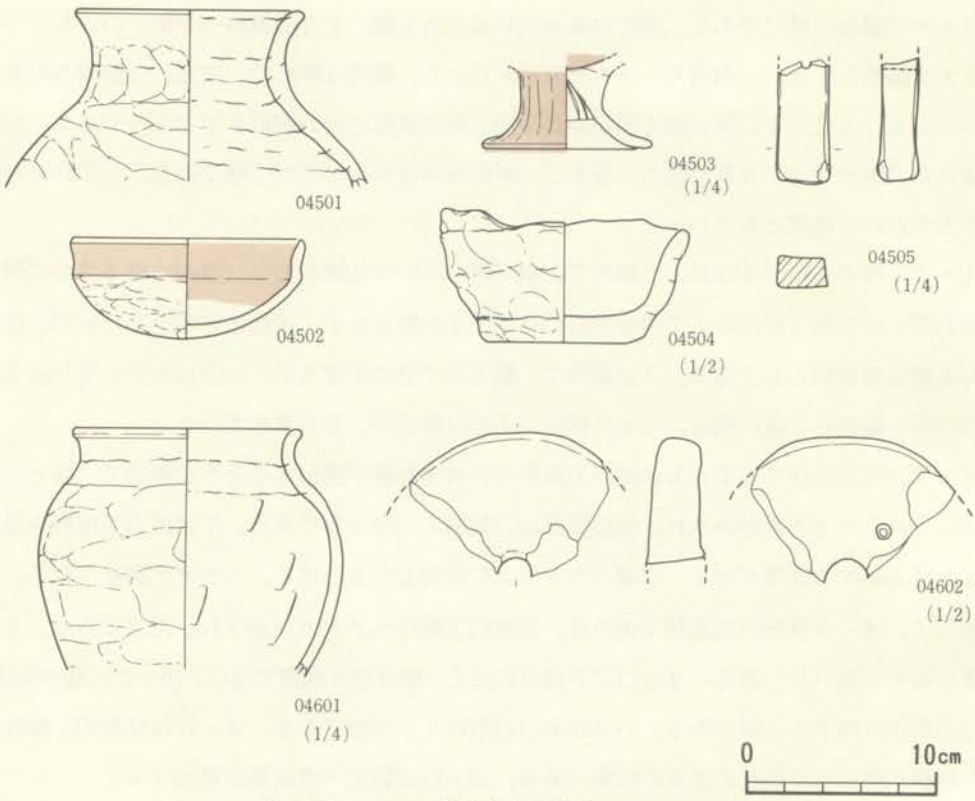
4・5は甑である。4は長い寸胴形で、胴下端のみやや丸味をもつ。口辺はゆるやかに開く。比較的荒いヘラ削りののち、下半を中心にヘラナデが施される。内面には巻き上げ成形の痕と思われる接合痕が明らかである。5は鉢形で、胴下半で急にすぼまる。口辺は大きく反り返る。肉厚で内面に輪積みの痕が残る。ともに胴中～下半の器面が、やや荒れている。

6・7は平底の坏である。6は深い半球形に、大きな底が突出するような器形で、底との接合部分にのみ、ヘラナデがみられ、他の腹部は、指頭ナデのようである。7は浅い半球形を呈し、わずか径4㎝程の底部が付く、口縁はナデにより口唇を引き上げる。ヘラナデ調整される。8はおそらく、浅い半球形の丸底坏であろう。比較的丁寧なヘラナデが施され、肉厚である。9～12は稜を有する浅い坏である。9は口辺が直立に近く、稜は余り明瞭でない。10～12は稜が突出し、口辺がほぼ内傾する一群である。いずれも口辺短かく、大形である。9・10は比較的丁寧なヘラナデ調整、他はヘラ削りのままの状態である。10～12は胎土・焼成等が酷似する。

13・14は手捏土器である。13は坩形を模したと思われるが、口辺は丸味をもって大きく反り返る。胴は扁平球形で丸底となる。器面は荒廃するが、全体にヘラで軽くナデ調整されているようである。内面肩部には指頭圧痕が明らかである。14は上部で坏状に開き、下部は円柱を呈す部厚な造りである。全体に指頭圧痕が残り、"坏„ 部分の内外はナデ調整される。15は土玉の半欠で、中央の孔は径5㎜程である。16・17は滑石製品である。各々勾玉頭部残欠、臼玉である。18・19は砂岩質の砥石で、各面とも使用され表・裏面はとくに凹んでいる。19の裏面には深い溝状の切痕がみられる。

043号跡

番号	法量 cm			観察			番号	法量 cm			観察		
	器高	口径	胴径	胎土	焼成	(外)色調(内)		器高	口径	胴径	胎土	焼成	(外)色調(内)
1	(15.0)	19.4	26.7	緻密	良	淡褐・茶褐	9	4.0	12.0	13.1	緻密	良	赤褐
2	(20.2)	(20.2)	24.4	密	良	褐・茶褐	10	3.9	13.2	15.0	緻密	良	褐
3	(7.5)	16.6	?	密	良	黒褐・褐	11	(3.0)	13.0	14.0	密	良	黒・黒褐
4	28.0	24.8	底 9.0	密	良	褐・黒褐	12	(3.9)	12.0	14.4	緻密	良	黒褐・黒
5	24.1	25.6	底 9.0	緻密	良	淡褐	13	6.1	8.2	7.9	やや密	良	赤褐
6	6.8	14.1	—	密	良	褐	14	7.4	9.4	—	やや密	良	灰黒・赤褐
7	5.3	14.0	—	密	良	褐	15	径 3.2			密	良	黄褐
8	(3.7)	14.4	—	密	良	黒・黒褐							



第68図　045・046号跡出土遺物実測図

・**045**号跡（第68図）　土師器が比較的多量に出土したこのうちには丸胴の大形甕、寸胴の甑・明瞭な稜を残す赤彩の坏が多く含まれる。1は甕である。やや長めの口辺はゆるやかに立ち上がり、ほぼ丸胴となろう。口径12.0cm。頸～胴にかけてヘラ削りの後、ヘラナデが施される。器肉は厚く、巻き上げ成形痕が顕著である。胎土に砂・石粒を含み、焼成は良く、黒褐色を呈す。2は完形の坏で、口径12.2、器高5.2cm。稜もわずかに遺存し、口辺は直立に近く、腹～底部は典型的な丸底となる。丁寧にナデ調整される。3は高坏脚部である。ともに胎土・焼成とも良く、褐色を呈す。4は手捏土器で、鉢形を模す。胎土粗く、黄褐色を呈す。5は頭部に孔のみられる砥石である。長さ7、幅2.5cmの細身で、携帯用であろう。

・**046**号跡（第68図）　土器が多量に出土した。いずれも土師器で、丸胴の甕・浅鉢、坏・高坏は赤彩されるものが多い。1は底部を欠くが遺存の良い中形の甕である。口径12.0、胴径15.9cm。短かい口辺は口縁付近で開き、やや肩の張る丸胴形となる。胴部にはヘラ削りののち、簡単なヘラナデが施される。胎土には砂・石粒を多く含み、焼成は良く、黄褐色を呈す。2は土製紡錘車の残欠であろう。径80、厚さ15㎜と推計される。中央の孔は9㎜で一方向より穿たれる。表面は丁寧にナデ調整され、胎土・焼成とも良く、赤褐色を呈す。一面に竹管刺突の痕が1個認められる点で、051－16と酷似である。

・047号跡（第69図）　土師器を中心に少量の土器が出土した。このうちには大形・丸胴の甕、稜を有する坏・高坏が数個体分含まれる。1は坏である。長い口辺は直立に立ち上がり、強いナデのため中央がわずかに肥厚する。稜は不明瞭で浅い丸底となる。口径13.6、器高5.3cm、極めて丁寧なナデ調整が施される。胎土はやや砂粒を含むが、焼成とも良く、表面灰黒色、内面褐色を呈す。2は土玉である。径31mm、中央の孔径は6mm前後。全面に指頭圧痕を残す。3は土錘状のものである。径21mm、厚29mm。全体に円筒状を呈し、中央孔径7mm。ともに胎土やや粗く、焼成は良い。2は黄褐、3は褐色を呈す。

・049号跡（第69図）　土師器を中心に多量の土器が出土した。総個体数はおそらく100点を超えるであろう。このうちには大形の甕・甑・坏が多く含まれる。

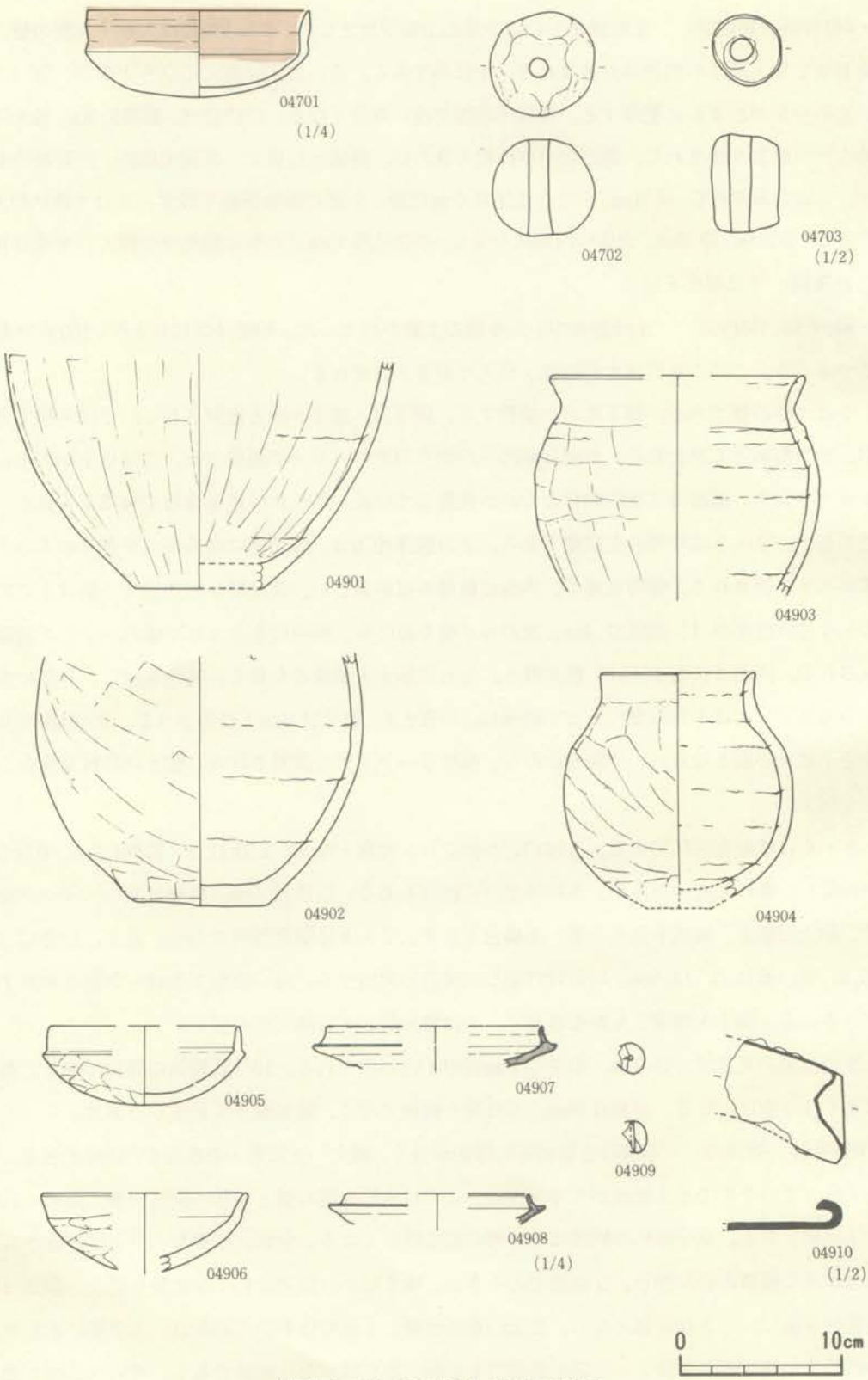
1は大形の甕である。胴下半のみ遺存する。胴径24、底径8cmと推計される。ほぼ丸胴となるが、やや長めとも思われる。外面は縦のヘラ削りののちヘラナデ調整され、内面は下から上にヘラナデされる。器面は二次的焼化のためか荒廃している。胎土に砂粒を含むが焼成とも良く、褐色を呈す。2・3は中形の丸胴甕である。2の胴径20.0cm。胴全体に斜めのヘラ削りののち、丁寧にヘラナデされる。器肉は厚く、内面に輪積み痕が著しい。3は短かい口辺で、胴は上方で最大となる。口径15.1、胴径17.4cm。縦のヘラ削りののち、胴中位を主として横のヘラナデ調整がみられる。内面には巻き上げの痕が残る。ともに胎土・焼成とも良く、褐色を呈し、一部に黒斑がみられる。4は小形の甕である。器高14、口径9.4、胴径14.1cmと推計される。口辺は直立し、やや下脹れの胴となる。ヘラ削りののち、簡単なヘラナデで調整される。胎土に砂粒を含み、褐色を呈す。

5・6は稜を有す坏である。5は口辺が直立し、丸底となる。口径11.8、器高4.7cm。6は口辺が外反し、深い丸底となるが、高坏坏部の可能性もある。口径12.6cm。腹部は荒いヘラナデ調整で、胎土は緻密、焼成も良く、黒～黒褐色を呈す。7・8は須恵器坏である。各々、口径13.4、15.4、受口部15.0、13.5cm。口辺は内傾し、受口は突出する。浅い腹部下半はヘラ削りがわずかにみられる。胎土・焼成ともかなり良く、7は青灰色、8は暗灰色を呈す。

9は土製の丸玉で、径9mm、中央に1mm弱の小孔が穿たれる。10は鉄製鎌の残欠である。基部は丸く折り曲げられる。身幅は26mm。刃は余り鋭利でなく、砥ぎ減りもわずかである。

・051号跡（第70図）　本跡は土器捨場的様相が強く、縄文～土師器・須恵器まで比較的多量に混在する。このうちでも土師器が大半を占め、とくに大形丸胴の甕・高坏の脚部が多く認められる。

1は甕である。扁平球形の胴部はやや肩の張る器形となる。全面に丁寧なヘラナデが施される。器肉は薄く輪積み痕が残る。2は壺であろうか。極く短かい口辺はわずかに反り返り、胴部は扁平球形を呈し、小さな平底となる。器面の荒廃が著しく調整は不明であるが、上半部に赤彩される点で3と異なる。3は2と近似の器形であるが、造りはかなり粗雑である。荒いヘラ削り整形



第69図　047・049号跡出土遺物実測図

のままで、内面にも指頭圧痕が残る。4は寸胴・大形の甕。5は浅鉢であろう。ともにヘラ削りが施され、部分的に器面が荒廃し、二次的焼化のためか、全体に赤化している。

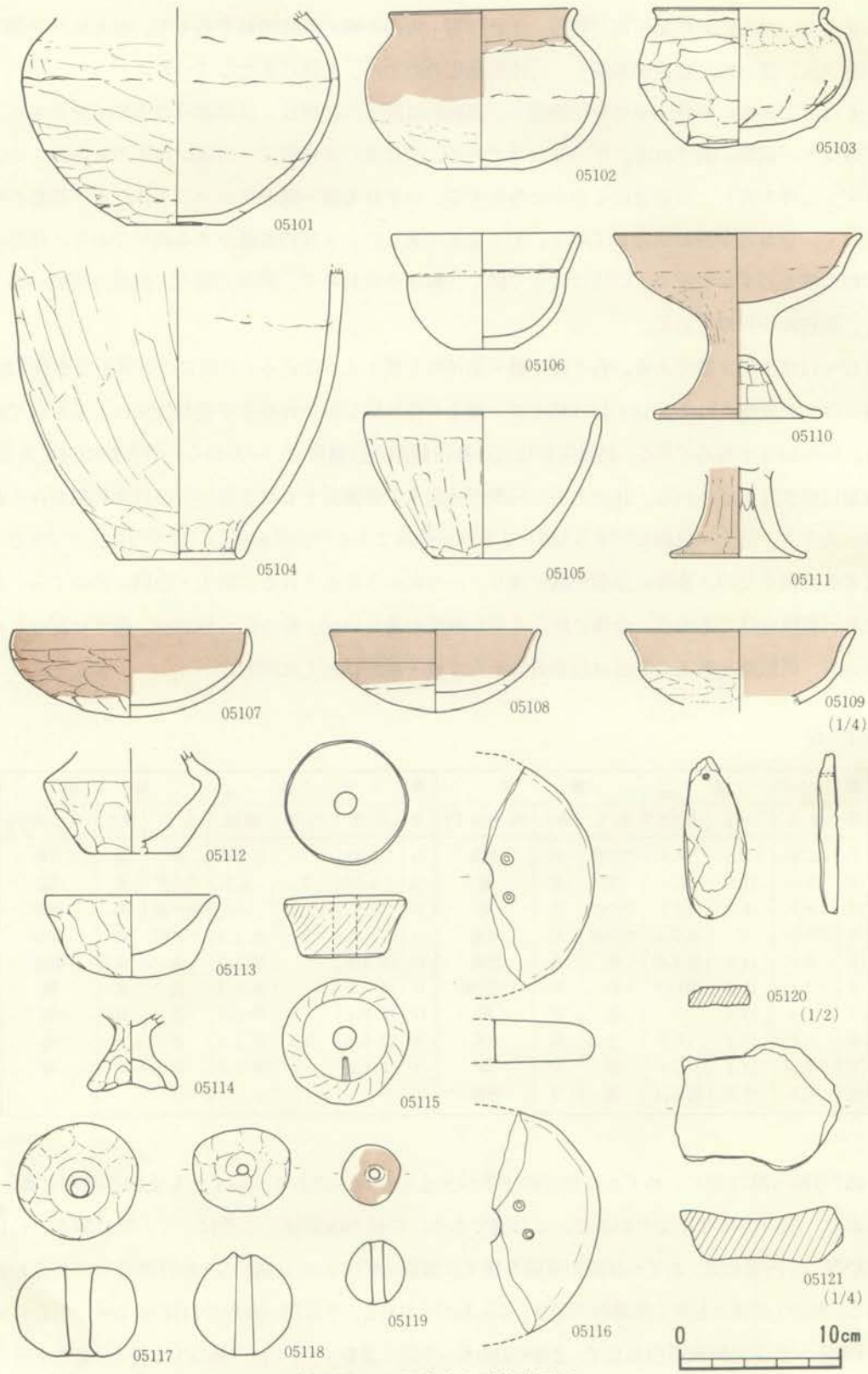
6は坩である。平底、半球形の胴部と、直線的に開く口辺部は、ほぼ器高の中央で接合する。丁寧なナデ調整が施される。7～9は坏である。7は浅い半球形で、口縁がわずかに内弯する。8・9は稜を有し、口辺はゆるやかに外反する。いずれも腹～底部にかけて丁寧なナデ調整が施される。なお器全面が荒廃しており、とくに8で著しい。9は約¾遺存する高坏である。坏部には稜の痕をわずかに留め、口辺は大きく開く。脚はやや長めで、裾部で開く。器面の荒廃が著しく、調整は不明瞭である。

12～14は手捏土器である。各々壺・鉢・高坏形を模すようである。外面には指頭圧痕を残すが、内面はナデ調整される。13・14は粘土の一塊より作り出したいわゆる手捏ね技法によるものである。15～19は土製品である。15は笠形に近い截円錘形の紡錘車で、一方からの穿孔が中央にある。側面は磨き仕上げされる。16は大形の円板形紡錘車で表裏面ともに2個づつの竹管刺突がみられる。大きさ、胎土・色調などより046－2と同一個体である可能性が強い。17～19は土玉である。大きさは種々だが、表面に指頭圧痕が残り、一方向から穿孔される。胎土・色調は酷似する。20は滑石製模造品であろう。全体に卵形を呈し剝落が著しいが、長さ50、幅19㎜。鏑ぎは認められないが、剣形品と考える。21は砂岩質の砥石で表・裏面はとくに凹む。

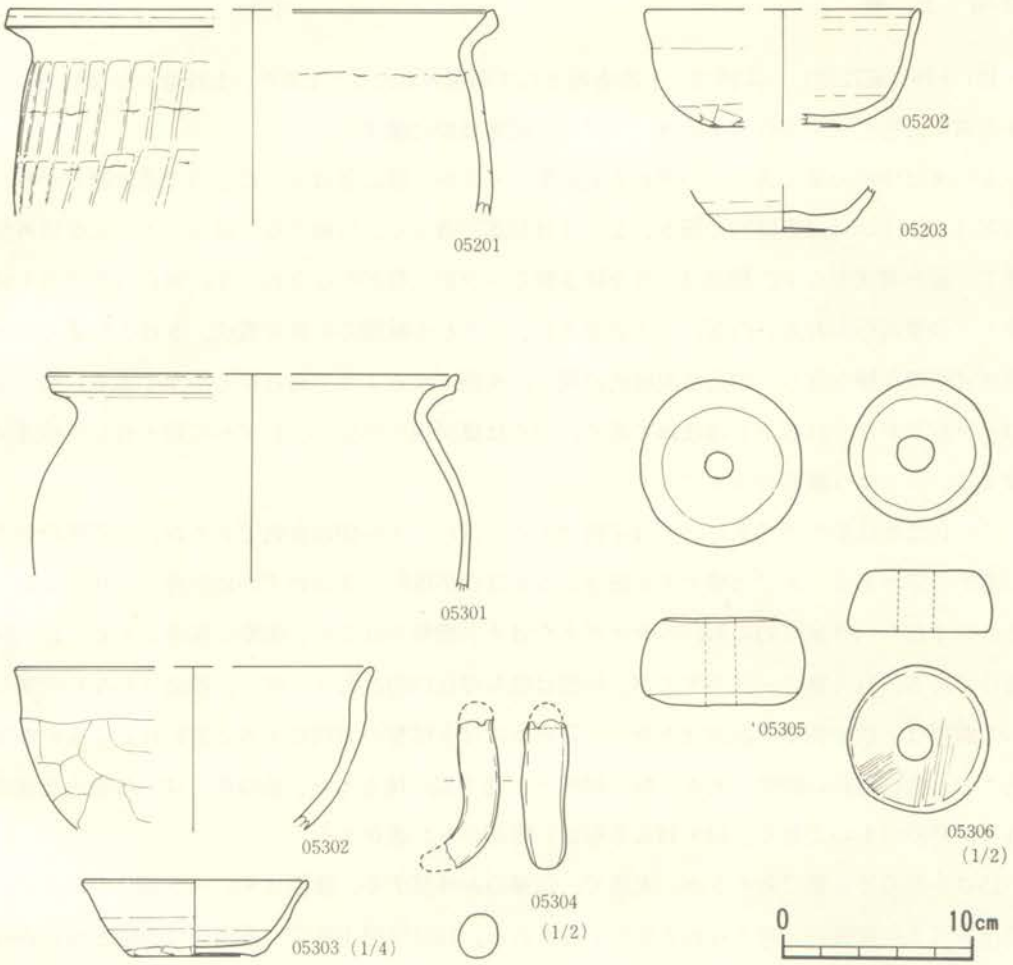
051号跡

番号	法量 cm			観察			番号	法量 cm			観察		
	器高	口径	胴径	胎土	焼成	(外) 色調 (内)		器高	口径	胴径	胎土	焼成	(外) 色調 (内)
1	(13.0)	?	19.5	やや密	良	赤褐	11	(5.4)	?	底 8.3	密	良	赤褐
2	10.0	11.8	15.1	密	良	褐	12	(3.2)	?	5.5	やや密	良	褐
3	8.7	10.8	13.1	やや密	良	褐	13	2.5	5.4	－	やや密	良	黄褐
4	(17.5)	?	底 7.4	やや密	良	赤褐	14	(2.0)	?	底 2.8	やや密	良	黄褐
5	8.9	14.8	底 6.0	密	良	赤褐	15	径 3.9		厚 1.9	密	良	黄褐
6	7.1	11.8	頸10.0	密	良	淡灰褐	16	径 7.4		厚 1.3	密	良	褐
7	5.3	14.4	－	密	良	褐	17	径 3.8		厚 2.6	密	良	褐
8	5.0	13.2	12.5	密	良	赤褐	18	径 3.5	2.5	厚 3.1	密	良	褐
9	(4.5)	14.2	12.4	密	良	褐	19	径 1.8		厚 1.9	密	良	褐
10	11.3	15.4	底10.4	密	良	赤褐							

・052号跡（第71図）　わずかに数片の土器が出土したのみである。いずれも土師器晩期に属するもので、図の他にも坏などがある。1は甕である。口径26cm前後。口辺は「く」字に開き、口縁で肥厚し、内縁には、わずかな段の痕跡を残す。器面の叩きしめは幅1.5cmの板様のものと思われる。胎土・焼成とも良く赤褐色を呈す。2・3は坏である。2は深い器形で口径14.4cm。ともにロクロ整形・低速回転両手引糸切で、2はそののちヘラ削り調整する。胎土・焼成とも長く、褐色を呈す。



第70図　051号跡出土遺物実測図



第71図　052・053号跡出土遺物実測図

・053号跡（第71図）　土師器・須恵器が少量出土した。須恵器は叩きしめの大きな平底となる甕を主とする。1は甕である。口辺で「く」字に大きく開き、口縁は帯状をなし、内縁には明瞭な段を有す。胴部は上端で肩が張り出す器形となる。口径21.6cm。胴全体は工具不明のナデ調整が施される。胎土は石英・長石粒をやや多く含み、焼成は良く、淡黄褐色を呈す。2は鉢で、口径18.8、器高9cmと推計できる。半球形を呈し、口辺はやや外反する。荒いヘラ削りが残り、胎土は粗く、赤褐色を呈す。3はロクロ整形の坏である。中央でわずかに脹らむが、ほぼ直線的に開く。口径11.8、器高3.9cm。底部は高速回転片手引糸切ののち周囲を手持ちヘラ削りする。胎土・焼成とも良く、淡褐色を呈す。4は土製勾玉で頭部に径1.5mmの孔がみられる。5は土製紡錘車で、径43mm。ヘラナデ調整がみられ、真黒色を呈す。6は滑石製紡錘車で、径38mm。わずかに截円錘形となるが造りは悪い。

2項　土　壙

・101号跡（第72図）　本跡は、土器捨場として利用されたようであり、土器量もかなりある。しかし若干の弥生式土器片等を除き、大半は土師器後期に属する。

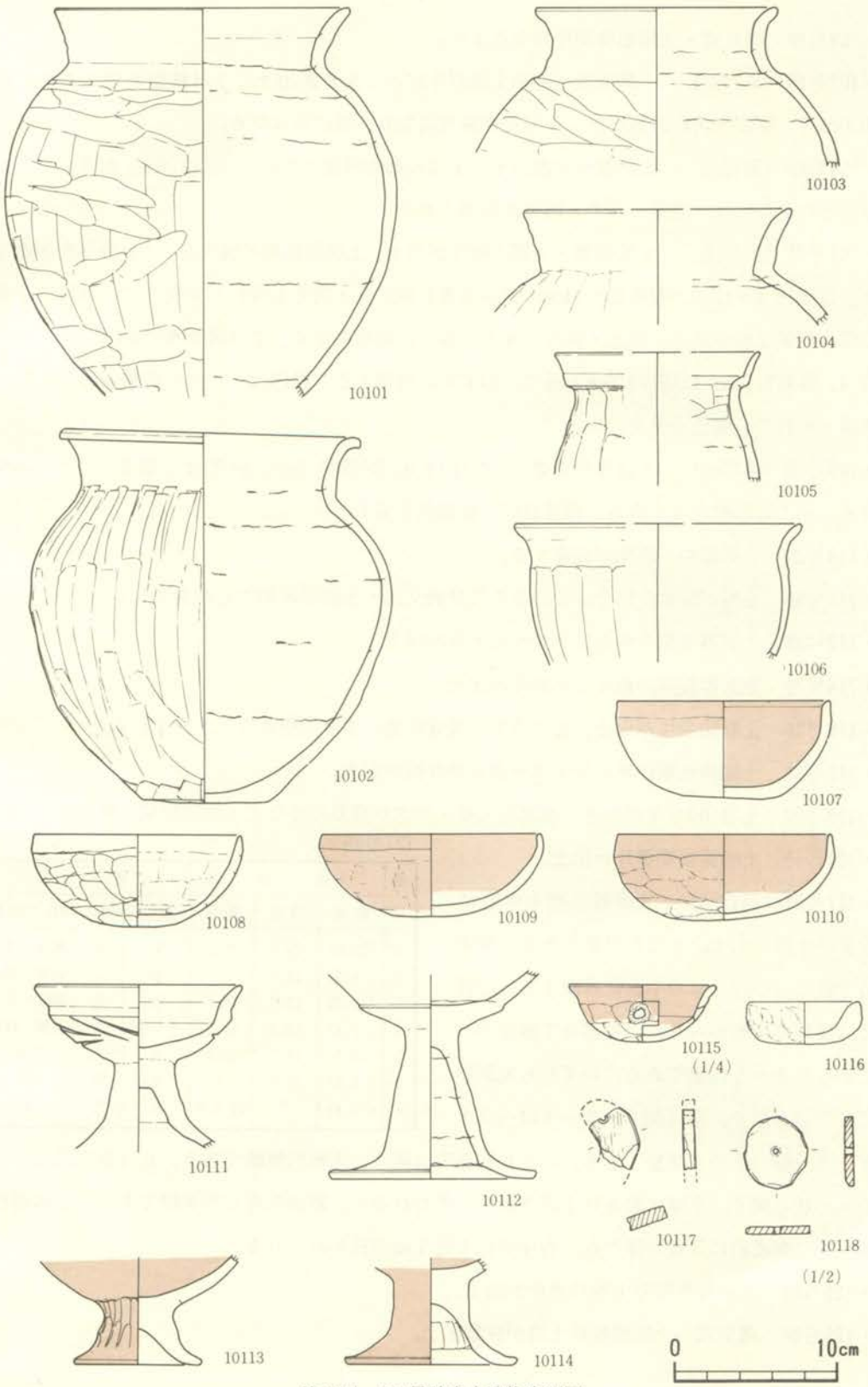
1～4は中形の甕である。いずれも丸胴形を呈すが、前二者はとくに上方で最大径となる。口辺部は1・4がほぼ直線的に開き、2・3は頸部で直立し、口縁で反り返る。とくに2は外反が急で口縁が帯状をなす。胴部は、3を除き縦のヘラ削り整形がなされ、1の場合はそののちにヘラナデ調整が行われる。内面はナデ調整され、いずれも輪積みの痕を残す。5は小形甕である。外面に明瞭な稜を有し、口辺は直線的に開く。長胴となるようで肩はゆるやかである。胴には荒いヘラ削りがなされる。6は浅鉢である。口辺は甕同様に外反し、わずかに肩を有して急速にすぼまる。ヘラ削り整形のままである。

7～10は半球形の坏である。7は平底でとくに深い。8～10は丸底であるが、口辺部分の造りに若干の差がある。8では横ナデが施されるがほぼ半球形、9はわずかに内弯し、10では直立する。いずれもヘラ削りののち、ヘラナデまたはナデ調整されるが、調整に粗密がある。11～14は高坏である。11は裾の一部を欠くが、坏部は稜を境に口辺は大きく開く。器面はかなり荒廃していて調整は不明である。器肉は部厚く、器表面には金属製の刃物によると思われる4条の擦痕がのこる。12は細長い脚柱、大きく開く裾部と、腹下端に稜をもち、直線的に開く坏部とで構成される前時期のものである。13・14とも短かい脚部のみが遺存する。

15は小形の坏の類であろうか。丸底で、口縁のみ外反する。腹部は荒いヘラ削りのままで、焼成後表面より意識的と考えられる穿孔がなされる。16は手捏土器で、表面には指頭圧痕がみられる。17・18は滑石製品である。17は勾玉で頭部に一方向よりの穿孔がみられる。幅12㎜。18は円板形で、中央に単孔が穿たれる。径20～21㎜。

101号跡

番号	法量 cm 器高	口径	胴径	観察 胎土	焼成	(外) 色調 (内)	番号	法量 cm 器高	口径	胴径	観察 胎土	焼成	(外) 色調 (内)
1	(23.8)	18.0	23.9	密	良	茶褐・褐	9	5.0	13.4	—	密	良	灰褐
2	22.7	18.4	22.1	密	良	灰褐・黒褐	10	5.2	12.9	13.6	密	良	淡褐
3	(9.0)	14.8	?	密	良	褐・茶褐	11	(9.5)	12.6	底 ?	やや密	良	淡褐
4	(6.5)	16.4	?	密	良	褐	12	(12.3)	?	底12.4	密	良	灰褐
5	(7.5)	12.6	?	密	良	褐	13	(6.6)	?	底 9.8	密	良	灰褐
6	(8.0)	17.6	16.0	やや密	良	黒褐	14	(6.5)	?	底10.6	密	良	黒褐
7	6.0	13.0	底 4.8	密	良	褐・赤褐	15	3.5	9.0	—	やや密	良	褐・灰黒
8	5.5	12.8	—	やや密	良	褐	16	1.3	3.6	—	密	良	褐



第72図　101号跡出土遺物実測図

・102号跡　縄文式・土師器後期片10余点出土。

・103号跡（第73図）　土師器後・晩期土師器片がかなり多数出土。1は鉄製利器である。長さ10.0cmで、断面三角形の刃が付く。刃先は鋭利に尖り、身は反り反る。

・104号跡（第73図）　土師器が少数出土。1は灰釉陶器皿である。口径13.9cm。丸味をもって口唇のみわずかに反り返る。外半・内全面施釉される。

・107号跡（第73図）　土師器甕・支脚の破片が出土。土師器後期に属する。1は浅鉢形の甑である。口径18.4～17.0、器高13～14cmと歪みが著しい。外・内とも荒いヘラ削りで、表面には成形の際の指頭圧痕が残る。胎土・焼成ともやや雑で、褐色を呈す。2は稜を有する深い坏で、口径12.4、器高5.2cm。口辺は2.5cmと長く、わずかに内傾する。腹部はヘラナデ調整される。胎土・焼成とも良く、褐色を呈す。

・109号跡（第73図）　1は丸胴の甕で、口径19.0、胴径26.0cm。胴部は丁寧なヘラナデ調整される。胎土に砂粒を多く含み、焼成良好、淡褐色を呈す。

・110号跡　土師器中～晩期が混在する。

・111号跡　土器が50余片出土。このうちには縄文式・土師器晩期などが含まれる。

・112号跡　土師器後期を中心に30余片の土器が出土。

・114号跡　土師器後期の甑片など10片が出土。

・116号跡　土器30余片が出土。このうちに焼成の悪い須恵器甕片などが含まれる。

・117号跡　土師器後期の赤彩坏1点を含み10片程が出土。

・118号跡　土器100余片が出土。須恵器大甕・ロクロ整形の坏など土師器晩期に属する。

・124号跡　土師器後期甕片が出土。

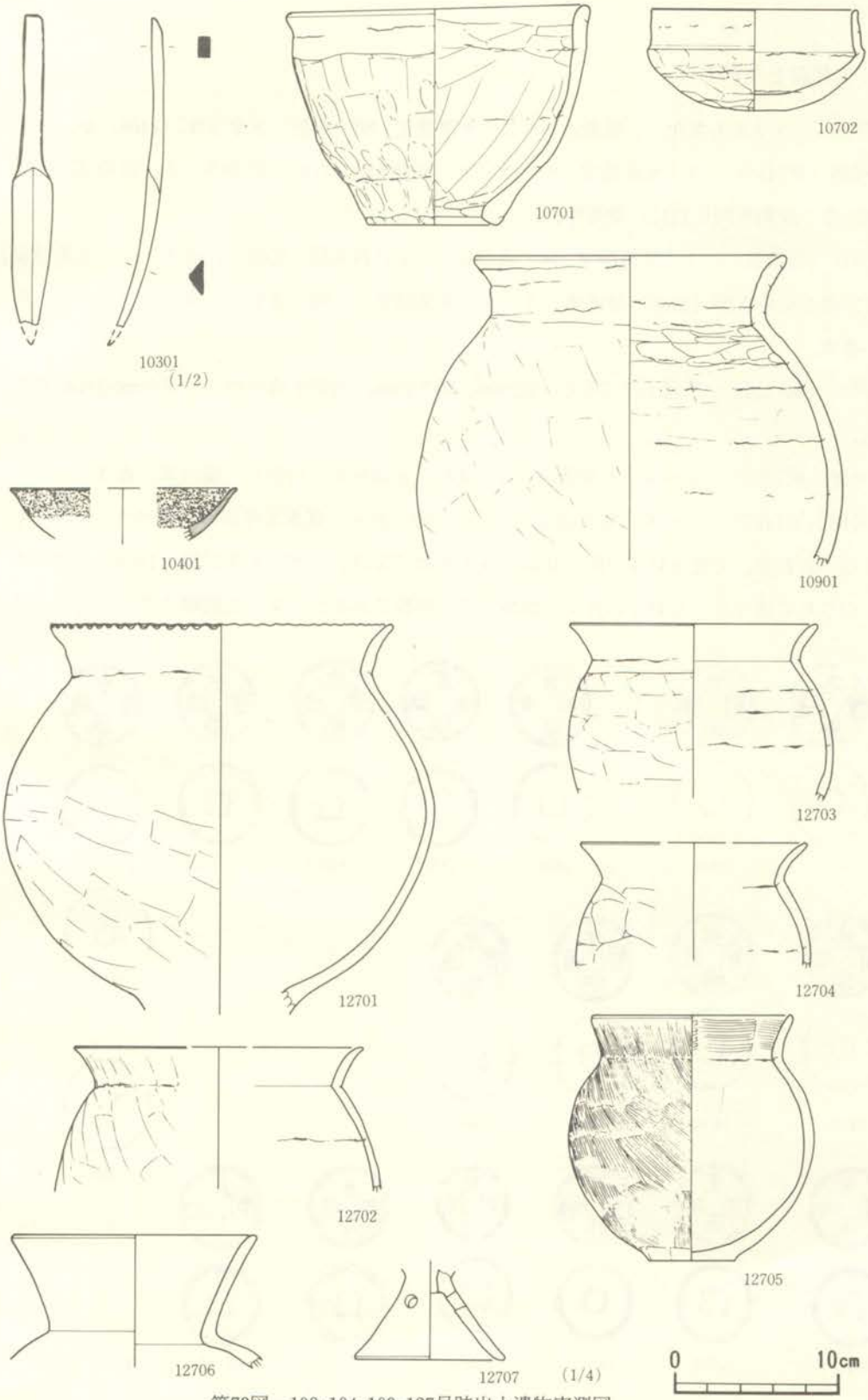
127号跡

番号	法量 cm			観察		
	器高	口径	胴径	胎土	焼成	(外) 色調 (内)
1	(23.0)	20.8	26.3	密	良	黒褐・茶褐
2	(8.5)	17.6	?	密	良	淡褐・黒褐
3	(10.5)	15.0	16.1	密	良	黒褐・茶褐
4	(7.4)	13.8	14.3	やや密	良	茶褐・淡褐
5	14.7	12.2	15.0	密	良	灰褐
6	(8.0)	15.0	?	密	優	褐
7	(5.4)	?	底 9.2	密	良	褐

・127号跡（第73図）　土師器前期を中心に少量の土器が出土。1は台付甕である。胴中位で脹り、口辺はゆるやかに外反する。口唇には棒様具押捺がみられ、胴部は丁寧なナデである。2～5は甕である。いずれも丸胴形で、口辺が「く」字に開く。2～4はヘラナデ。5は細ハケナデ調整である。いずれも器肉は薄く、比較的堅緻である。6は壺口辺で、ほぼラッパ状に開く。丁寧に磨き仕上げされたと思われるが、器面荒廃し不明瞭である。7は器台で、脚上部に焼成前に3孔が穿たれ、台中央にも径5㎜の孔がみられる。

・128号跡　土師器後期の土器10余片が出土。

・129号跡　縄文式～土師器晩期土器が少数出土。



第73図　103・104・109・127号跡出土遺物実測図

3項　火葬跡と土葬墓

・**132**号跡　1・2とも焼化し、吸着。ともに「永楽通宝」明　成祖　永楽9年（1408）か。

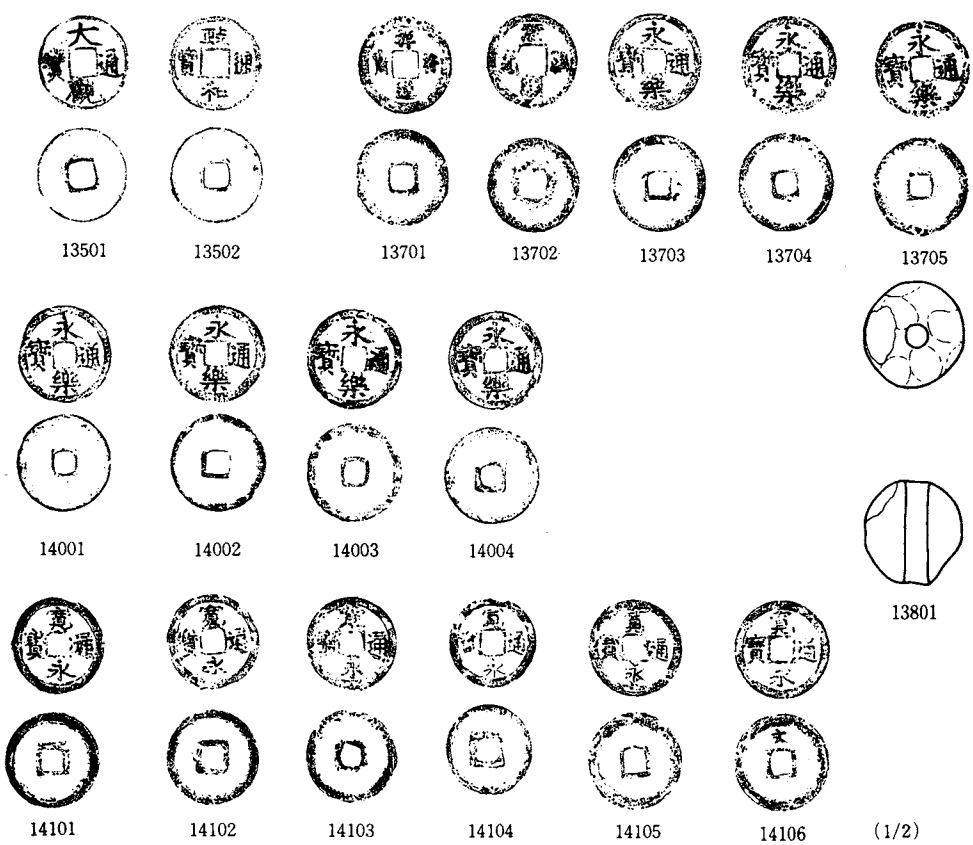
・**135**号跡（第74図）　1「大観通宝」宋　徽宗帝　大観年間（1107）楷書体　2「政和通宝」宋　徽宗帝　政和年間（1111）隷書体。

・**137**号跡（第74図）　1「祥符通宝」宋　真宗帝　大中祥符年間（1008）行書体　2「元祐通宝」宋　哲宗帝　元祐年間（1086）隷書体　3～5「永楽通宝」　明　成祖　永楽9年（1408）　楷（真）書体。

・**138**号跡（第74図）　1は土玉である。径26㎜、厚さ26㎜。指頭圧痕が残り、径6㎜の孔がある黄褐色。

・**140**号跡（第74図）　1～4「永楽通宝」明　成祖　永楽9年（1408）　楷（真）書体

・**141**号跡（第74図）　1～6「寛永通宝」　江戸　徳川家光　寛永3年以降（1626～）このうち1～3は“古寛永„で寛永13年以降（1636）5・6は“文銭„で寛文8年以降（1668）4は“新寛永„のうちに属する。なお5の背文は磨滅して不明瞭であるが「文」と読解できる。



第74図　135・137・138・140・141号跡出土遺物実測図

4項　その他の遺物

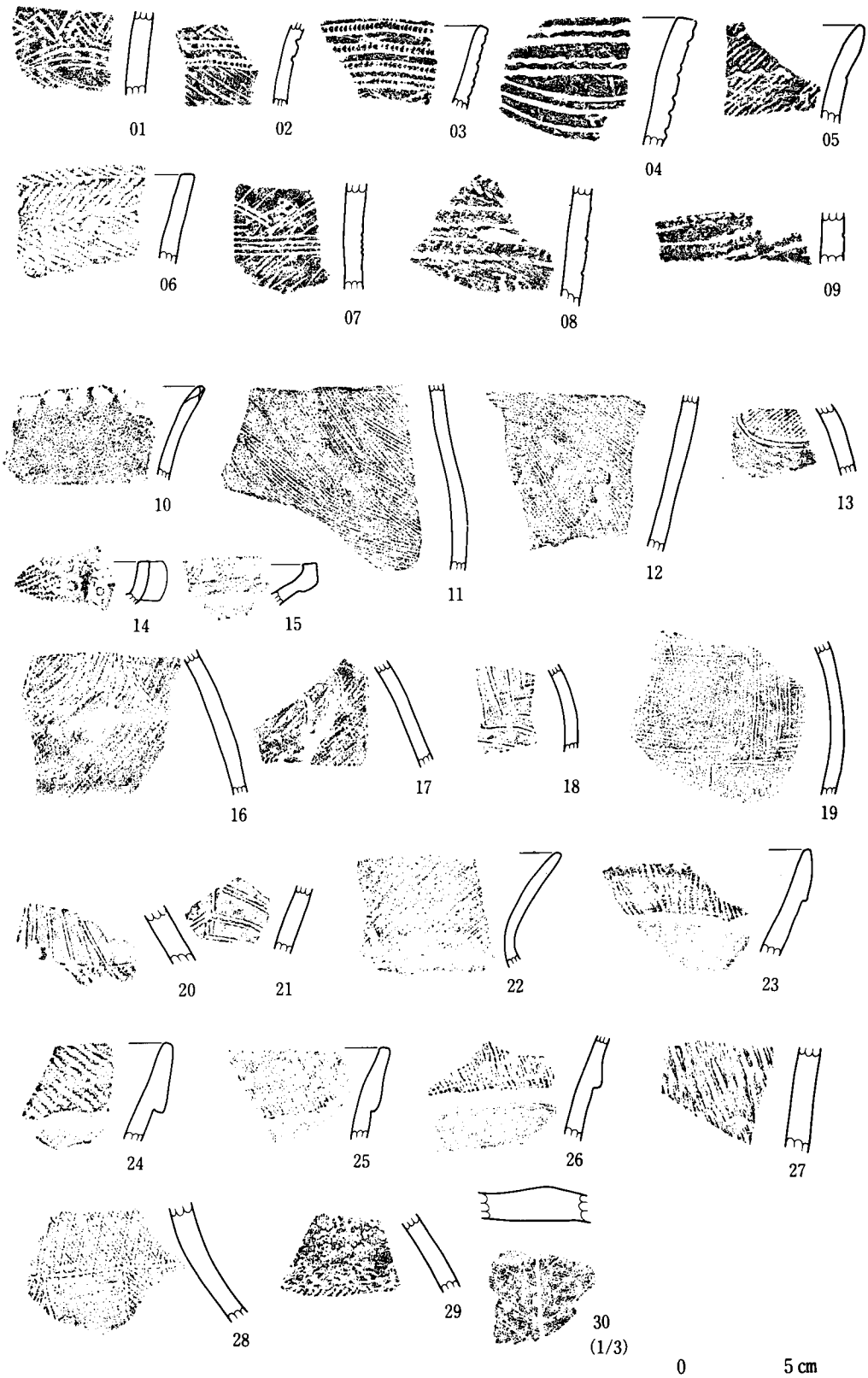
本遺跡で検出された遺構の中心は、前述したごとく古墳時代の住居跡であった。だが、住居跡の営まれる以前の遺物も若干出土しているため、一応類別して簡単に触れておきたい。

・第1類　土　器（第75図1～9）　これらは縄文時代前期に属する土器群である。1～4は、その文様構成から諸磯A式と見做される。半截竹管を主要な施文具として使用し、連続爪形文、山形文、平行線文などを描く。2は地文に粗い縄文が認められるが、撚糸ではなく、付加条縄文であろう。7～9は浮島系土器群である。7は地文に粗い撚糸文をもつ。8・9は連続して刺突文が平行に配され、8の下部で縦方向に貝殻腹縁が押圧されている。5・6は前期終末に位置する土器群となろう。ともに口縁部片で、5は外反が著しい。原体はLで、結節によるS字状の連続文をもつ。6は口唇部にも縄文をもち、原体の異なる2本の撚紐により、羽状の効果をもたせている。

・第2類　土　器（第75図10～19）　これら弥生時代中期に属する土器群であるが、比較的新しいタイプであり、後期直前としてよいものもある。10～12は宮ノ台式の甕形土器であり、10の口縁の作り方はその典型と言える。11・12の細かな刷毛目から宮ノ台式でも新しいタイプであろう。13は宮ノ台式の壺形土器である。14・15は口縁部であるが、宮ノ台式土器に属するか、16以下の仲間か明確ではない。16・17は壺形土器の上半部となろう。半截竹管により施文されている。18・19も同様に半截竹管が用いられ、重四角文をもつ。16以下は宮ノ台式土器に平行する土器群で、県下でも若干の類例が知られるにすぎない。

・第3類　土　器（第75図20～29）　これらは弥生時代後期に属するものであり、20～28はいわゆる北関東系の土器群と言える。頸部に文様を有するものもあるが、20・21は後期でも比較的古く位置づけられよう。また、28はその文様の配置から十王台式土器に近い。他の土器は口縁部片が多く、23の縄文はRLで他と比べて節が大きくはっきりとしている。他は細い原体を使用し、27などは撚りもどしがかかり雑然としている。29は南関東の土器であり、弥生町式としてよいであろう。壺形土器の肩部の破片である。30は底部片で木葉痕が認められる。おそらく後期に属するものであろう。

以上、縄文式土器と弥生式土器について述べたが、縄文式土器はともかく、弥生式土器については、中期に属する土器群が検出されている。成田市周辺での発見例は少なく、まだ、その内容について具体的な把握はなされていない。その意味では貴重な資料と言えよう。しかも、宮ノ台式以外の土器も含まれており、非常に注目すべき内容をもつものであるが、出土量も少なく、遺構に伴なわなかったことがおしまれる。いずれにせよこれだけで多くは語り得ない。資料の蓄積を待ち、これらの土器群のあり方を追求していきたい。



第75図　その他の出土遺物拓影図

第4節　まとめ

本跡より、住居跡49軒、土壙30基、土壙墓等10基、溝状遺構2本が検出された。

住居跡については、台地全体の削平・攪乱が著しいため、その遺存状態もかなり悪いものが多い。49軒のうちには、010・024・048・050号跡の如く、カマドまたは炉跡をわずかに残すもの、また004・034～037・039～042号跡のように殆んど削平され、わずか柱穴等の位置でそれと判別できるに過ぎないものも含まれる。

他の住居跡の場合でも重複の著しいものが多く、不分明な点が多々みられる。とくに043号跡を中心とした重複は極めて複雑である。

図式して重複関係を示すと下図となる。（なお021・027・038・044号跡は欠番とする。）

003 ＞ 002 ＞ 005
006 ＞ 007 ＞ 018 ＜ 020 ＜ 019 ＜ 046
008 ＞ 009 ＞ 012 ＞011
015 ＞ 014 ≒ 016 ＞017
026 ＜ 025 ＜ 023 ＜ 043 ＞ 022 ≒ 014
045 ＜ 033 ＞ 034
052 ＞ 029 ≒ 049 ＞ 028　　（旧 ＜ 新、 ≒ 不明）

住居の形態は、方形で各対角線上に4個の主柱穴を有し、北壁にカマドまたは、その付近に炉を設置するものが基本の形である。また貯蔵穴を持つものも比較的多い。前述のように完掘できた例に乏しいため、形態を類型的に記すことは難しいが、少くとも炉とカマドの違いは分別できよう。

炉を有す住居跡は以下の12軒である。

001・009・011・012・014・016・020・026・028・030・035・037号跡。

また火床のみ遺存する住居跡で、034・042号跡も炉の可能性がある。これらのうち011号跡を除き、他は北に扁って位置し、016・020号跡は中央付近となる。

カマドを有する住居跡は以下の22軒である。

002～008、013・015・019・031～032、040・041・043・046・047・049・051～053号跡。

また010・024・048・050号跡も一応カマドと考えられよう。このうち柱穴とカマドのみ遺存する004号跡を除き、他はすべて北にカマドを構築している。

次に貯蔵穴を有する住居跡について若干述べる。全部で14軒あるが、このうち炉を有す

る住居跡例は6軒である。いずれも炉の反対側の隅に位置するが、030・042号跡では右下隅、001・016・036号跡では左下隅、011号跡では両下隅に認められる。カマドを有する住居跡例では8軒である。カマドの反対側右下隅に位置する例は、040・041号跡であるが、ともにこの突が本跡に伴う確証がない。次にカマド右脇に位置する例は031・033・043・046・047号跡である。また張出を設けた特異な例は002号跡である。

出土遺物は、量的にもあまり多くないが、002・051号跡等集中して出土した例がある。このうち出土状態および遺存の良好な例をいくつか註出して集成したのが第76～78図である。

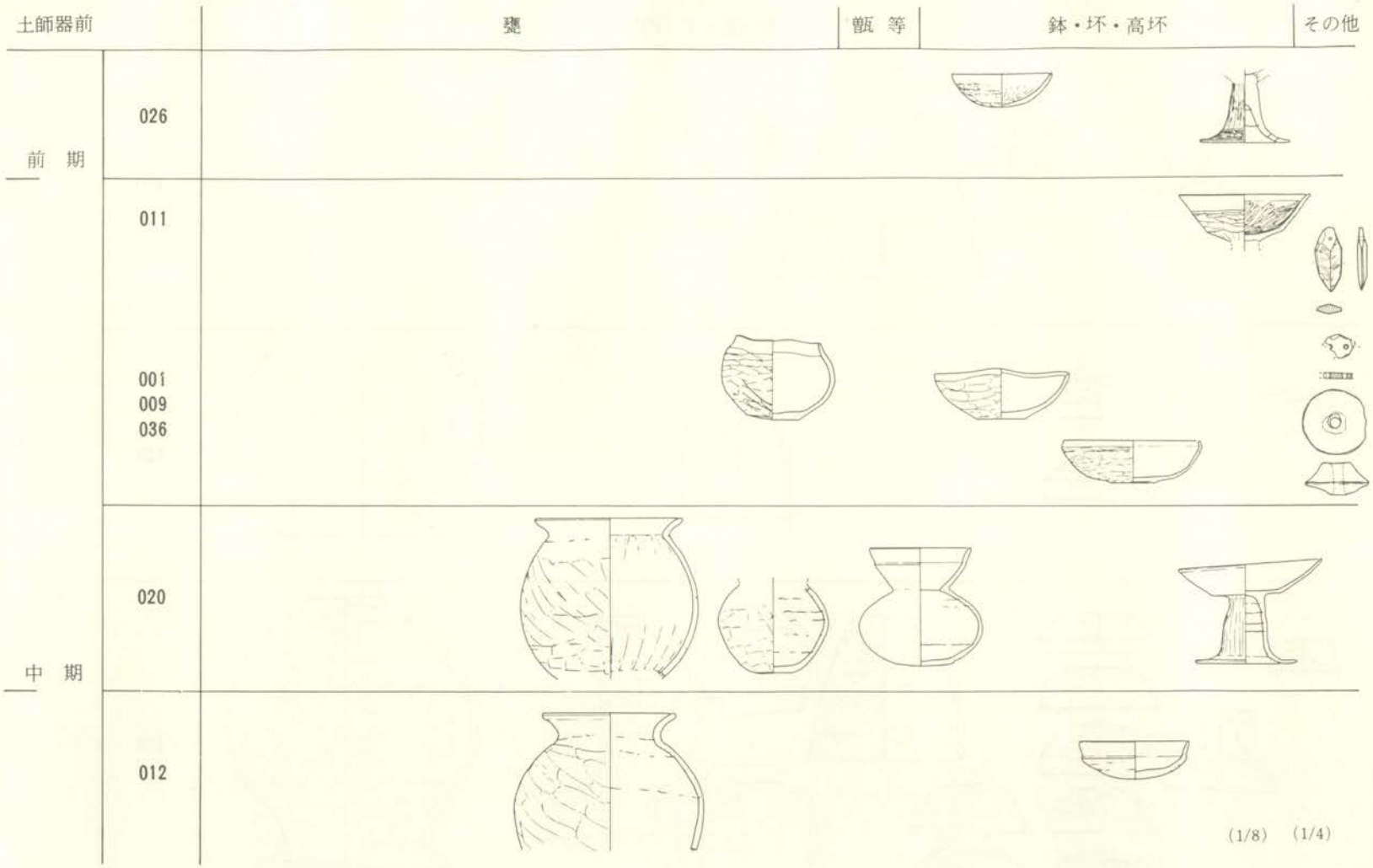
図の026～012号跡は炉を有す住居跡である。土師器中期に属すると思われるもののうちには滑石製模造品を伴出する例もある。また020号跡の甕は次期の特徴を強く感じさせるものである。

002号跡出土の土器は同後期として大過なかろう。しかし、坏の形態をみるなら、椀形のものから、受口部分の内弯するものまで種々である。甕のうち大形のもの(1)はその胎土・整形・調整などに他にない特徴のあることは前述した。いずれの甕も丸味のある器形で、また甑も019号跡出土例を含め鉢形の歪みのある形を呈す。

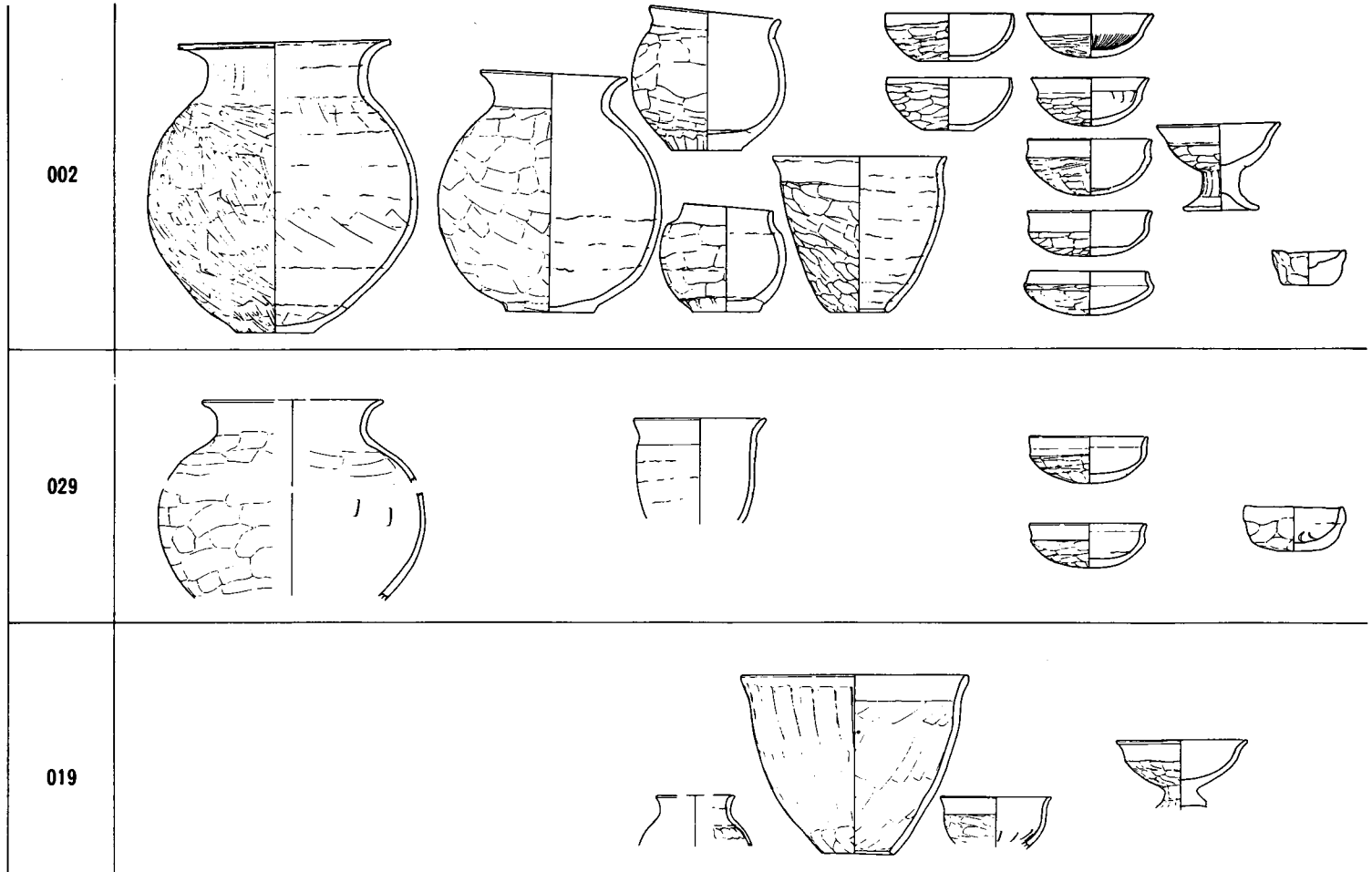
043号跡出土の甕・甑は、長胴傾向を示し、坏のうちにも後期後半的な特徴を見ることができよう。

土師器晩期のうち、所謂真間式土器はない。030号跡以下は国分式土器である。この時期に通有に認められる〝土師質の須恵器〟は本跡では主体的でない。掲載したものの他にも005・052号跡等より本期に属すると考えられる土器が出土した。

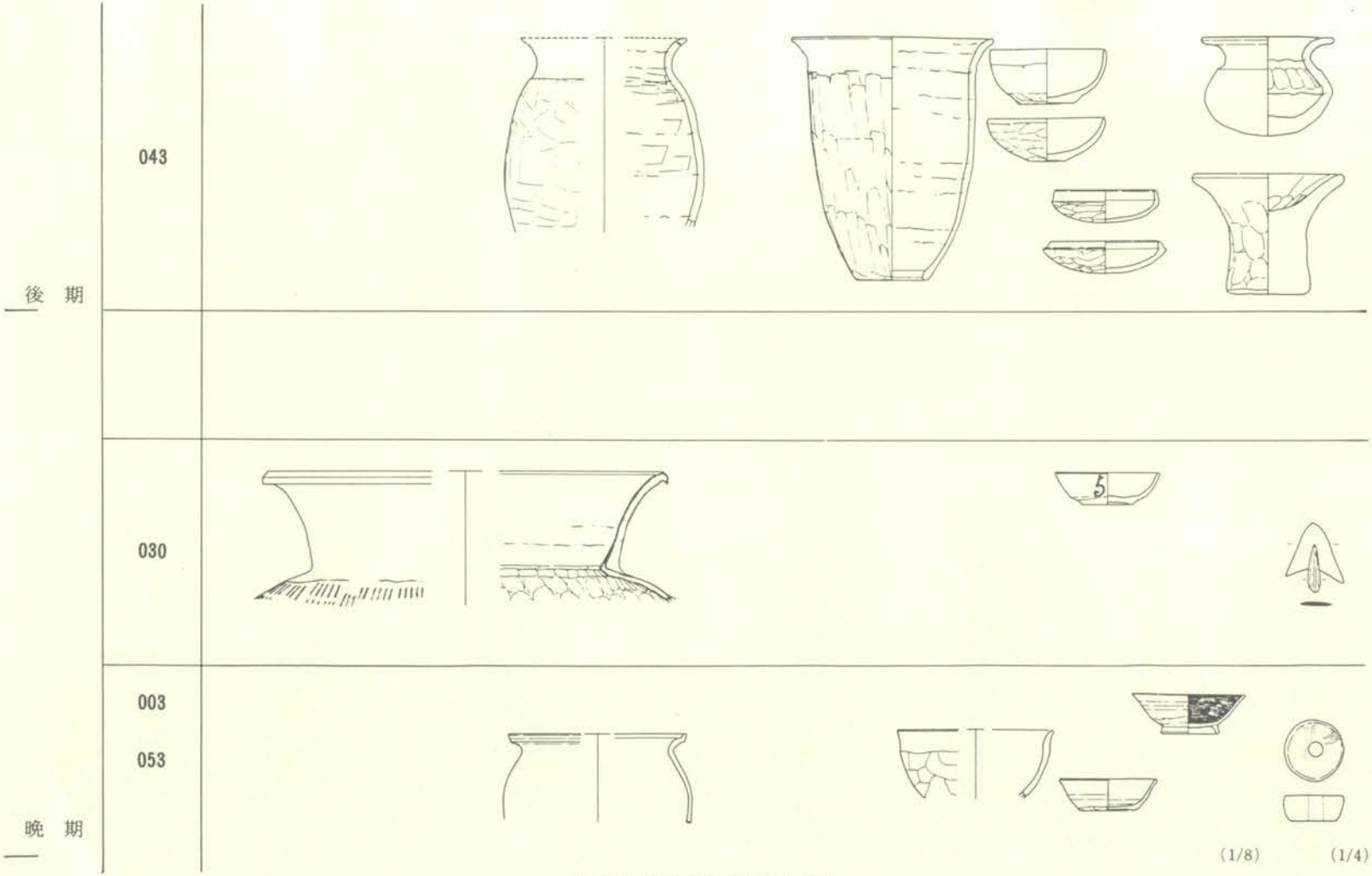
以上本跡の集落に関する概要を説明したが、時期決定の基準となる遺物の原属性に問題を残す点が、今回の調査の気掛りでもある。後日、諸賢の御批評をあおぎたい。



第76図　出土遺物集成図（1）

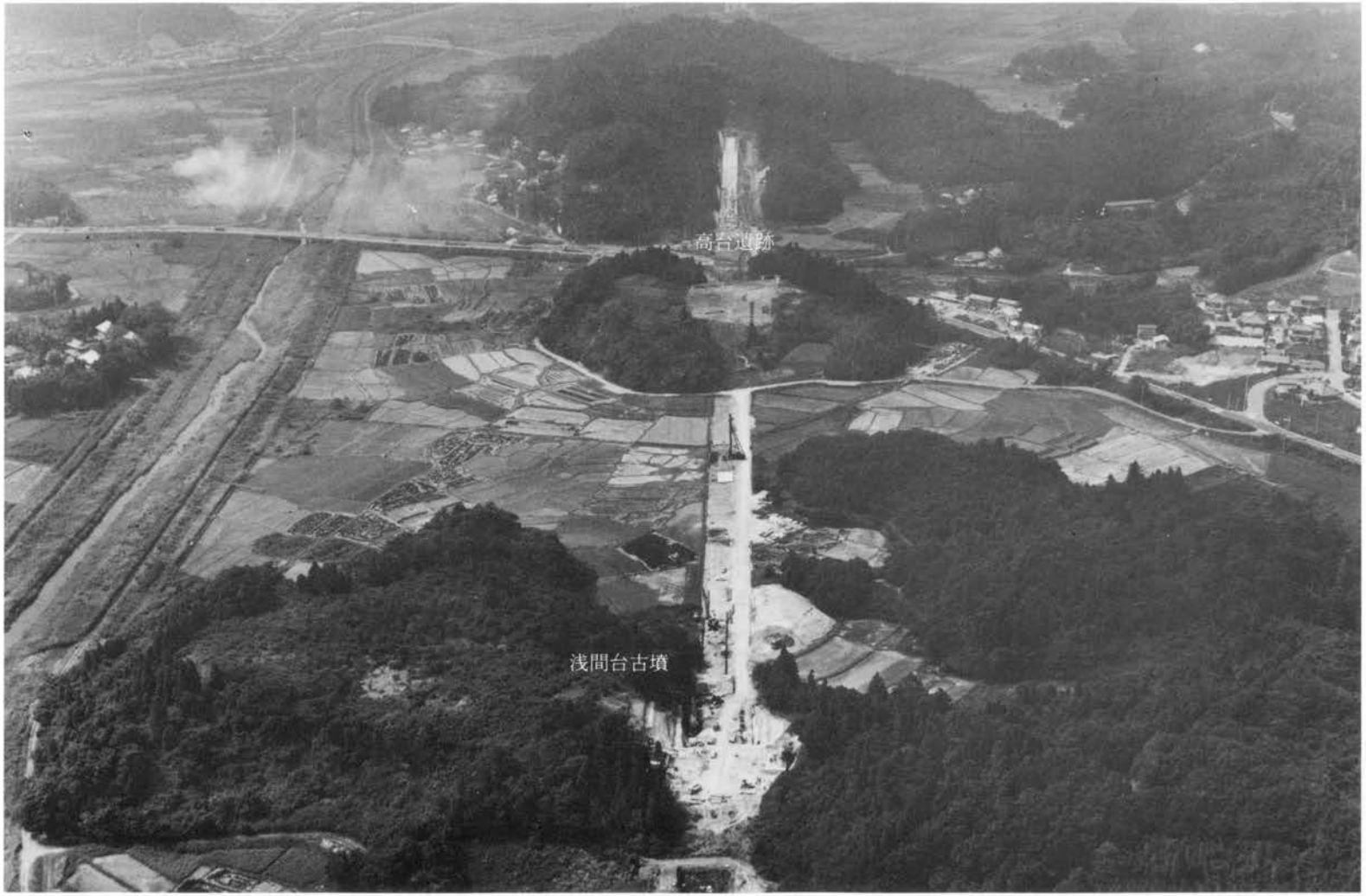


第77図　出土遺物集成図（２）



第78図　出土遺物集成図（3）

写真図版

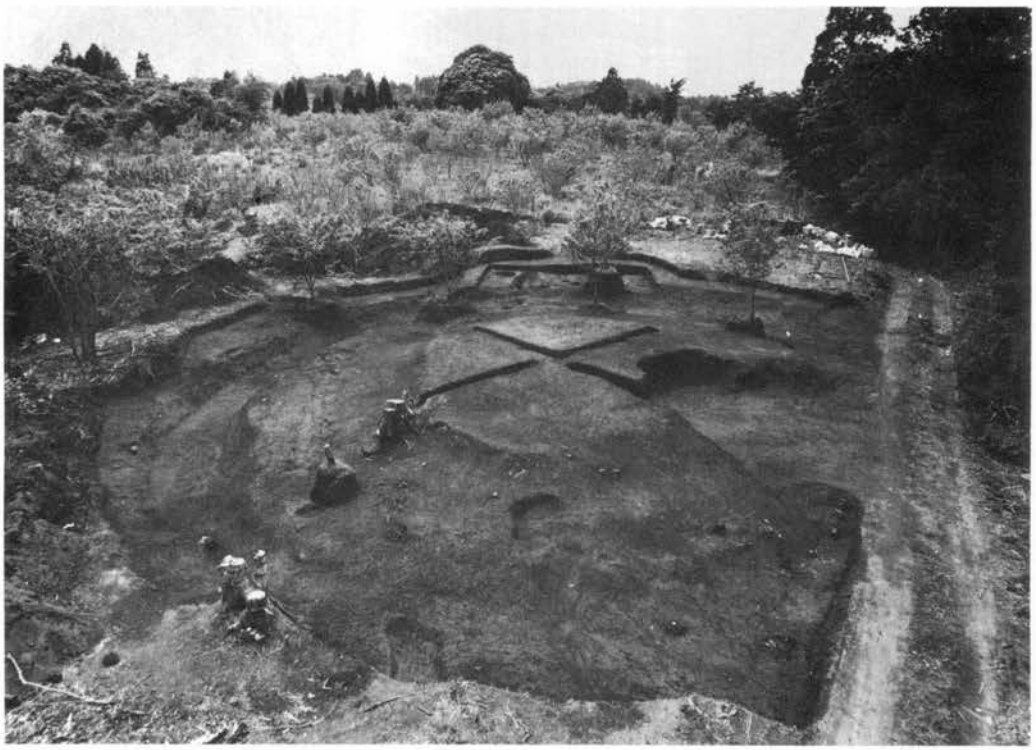


成田新線関係遺跡航空写真　　東上空より

1．調査前全景　　南より

2．調査前全景　　西より

図版　3



1．調査後全景　　北東より

2．調査後全景　　南西より

図版　4

1．墳丘断面（北―南）　　西より

2．墳丘断面（西―東）　　南より

3．墳丘断面（西および南）　　南西より

図版　5

1．　周溝（南西部分）　　南より

2．　周溝（南東部分）　　南西より

図版　6

1.　周溝内遺物出土状況（北東部分）　　西より

2.　周溝内遺物出土状況（南東部分）　　南より

図版　7

1．内部施設検出状況　　南東より

2．同　完了全景　　南東より

図版　8

1．　002号跡完了全景　　南西より

2．　同　土層断面　　南東より

図版　9

00102

00105

00104

00103

00107

00108

00111

00112

00109

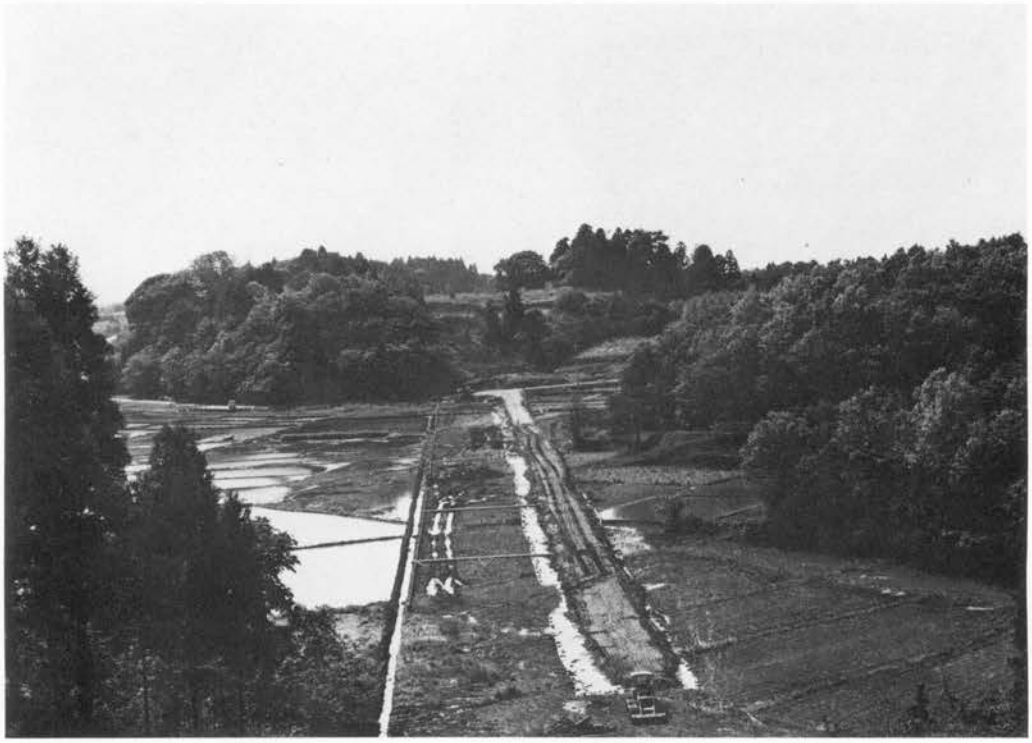
00113

00201

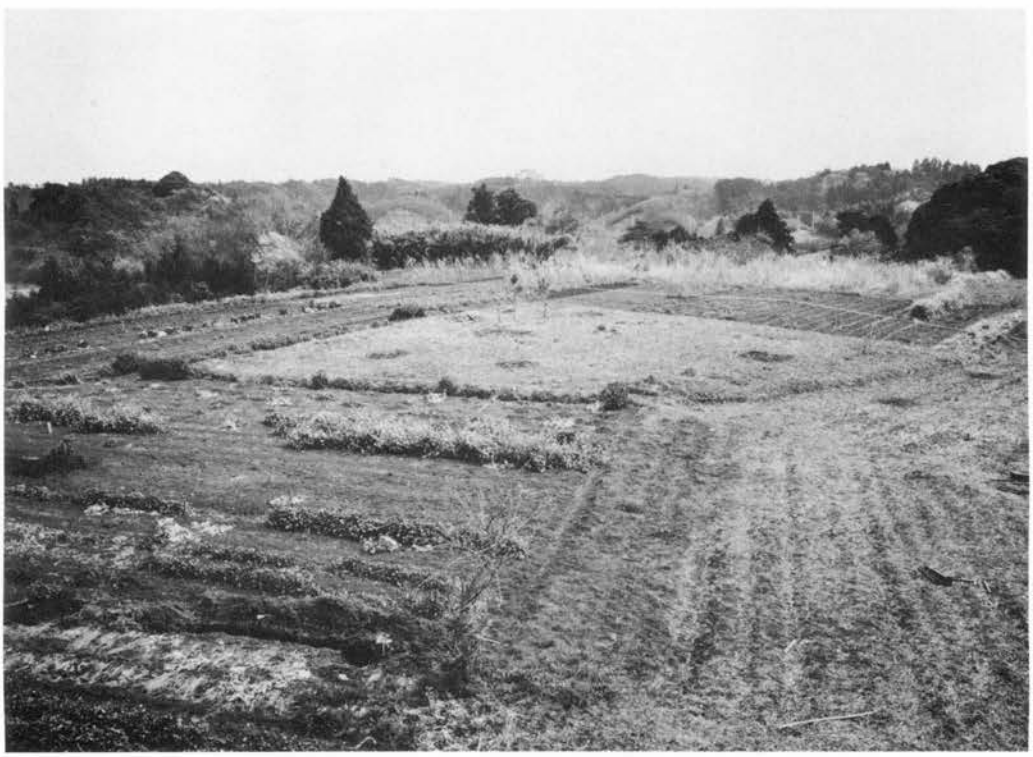
00203

00204

遺構出土遺物

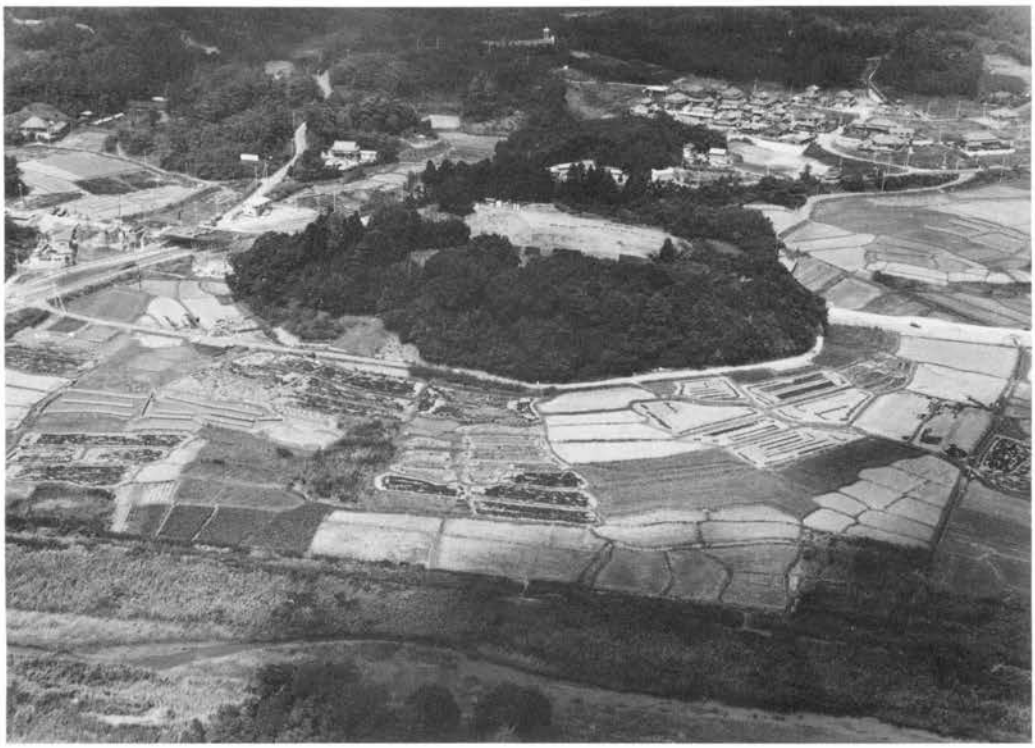


1．調査前遠景　　東（浅間台古墳）より

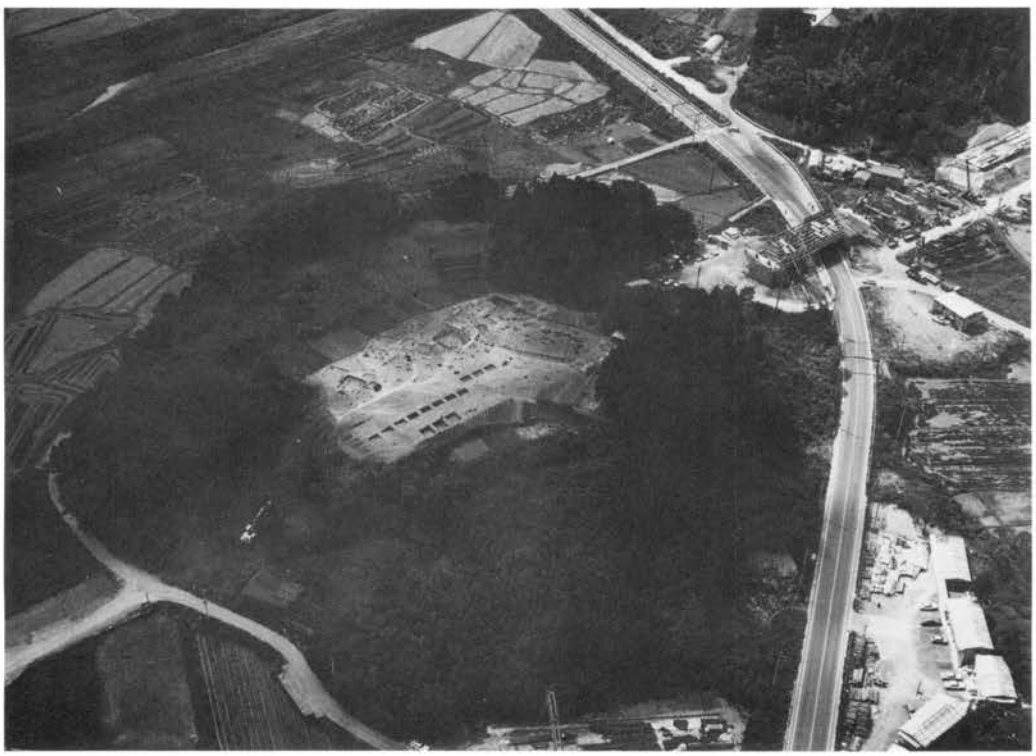


2．調査前近景　　北西より

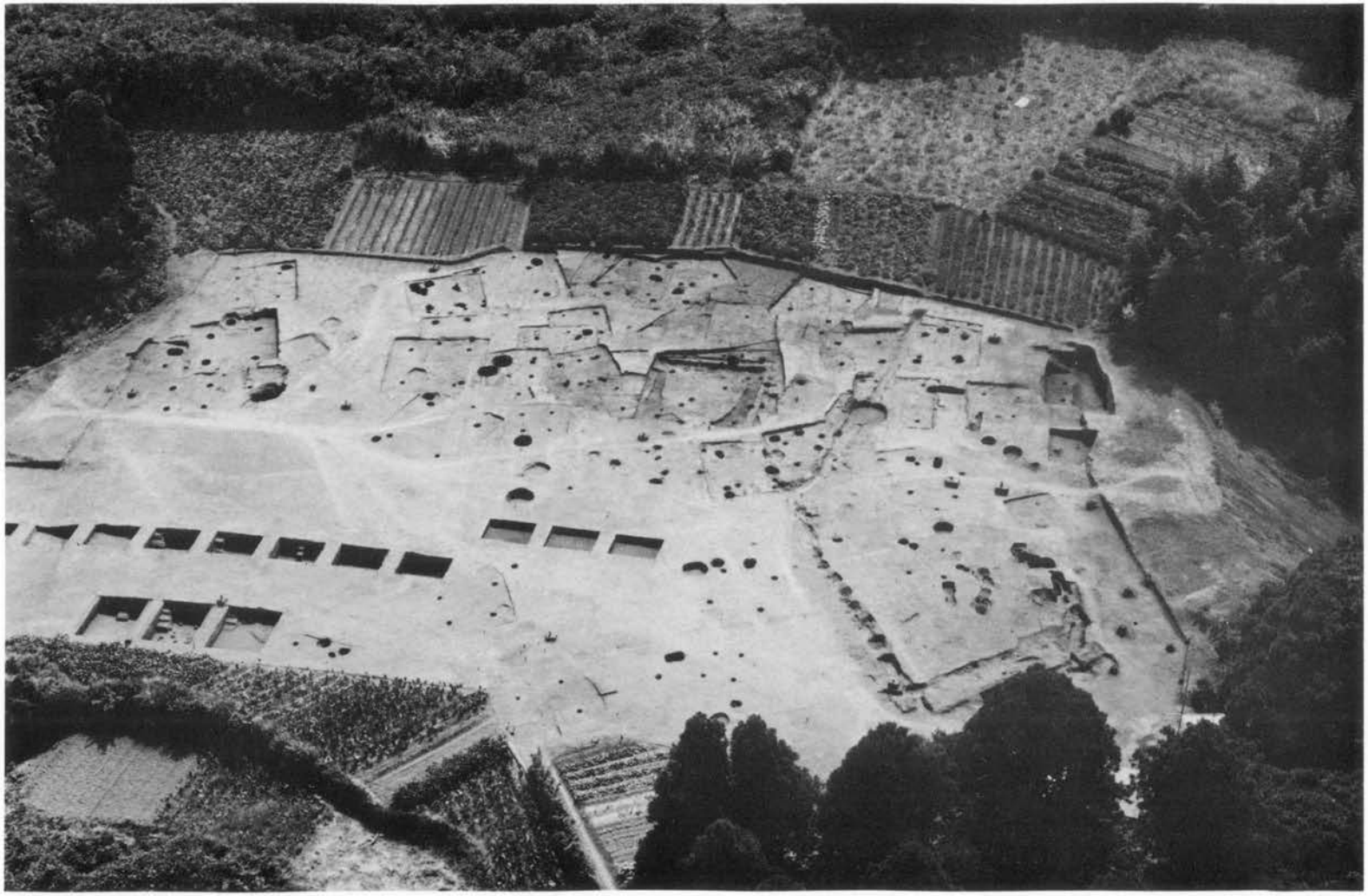
図版　11



1.　調査後遠景　　南上空より



2.　調査後遠景　　北東上空より



調査後全景

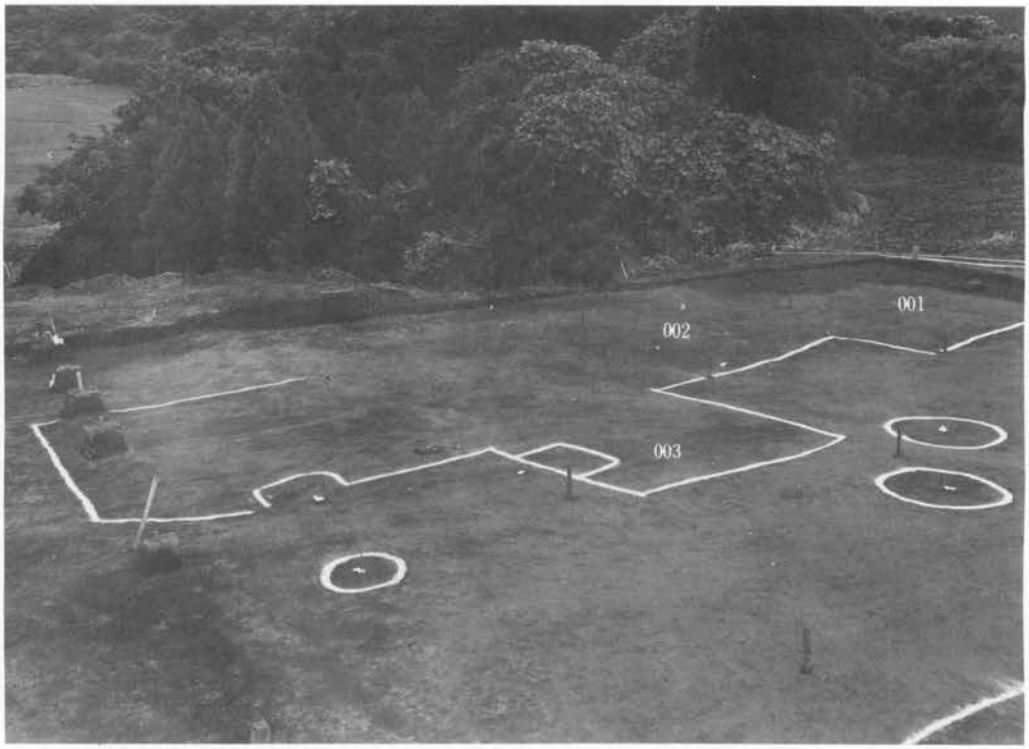
北上空より

図版　13

1.　東端崖面トレンチ（Tr.1）　　北より

2.東端崖面トレンチ（Tr.2）　　南より

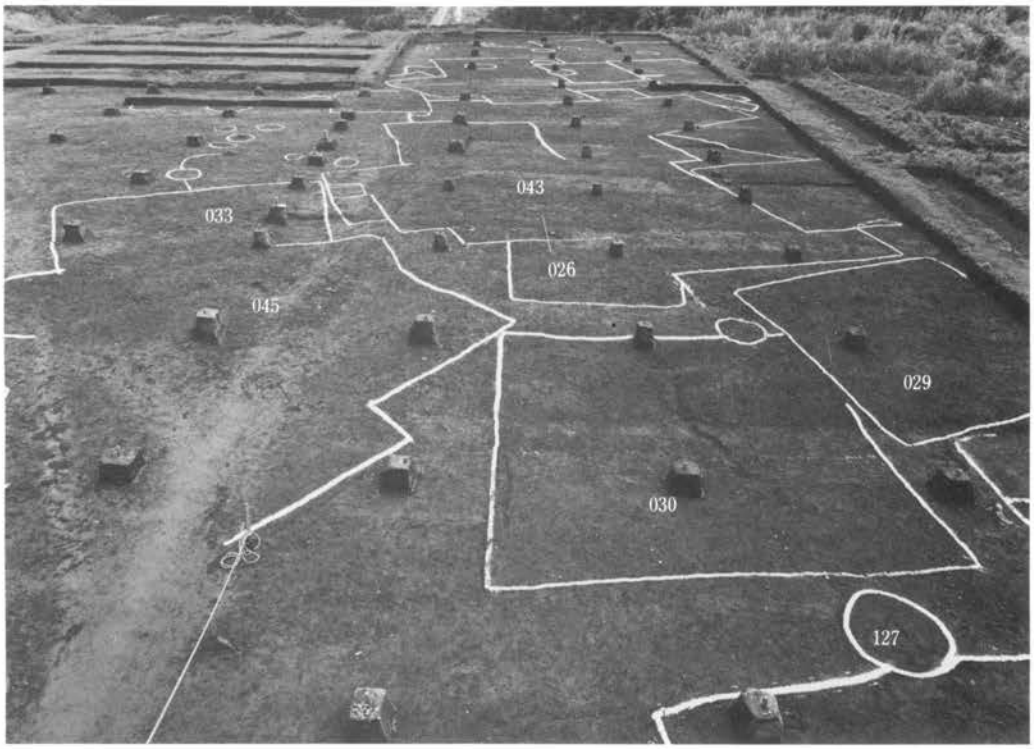
図版　14



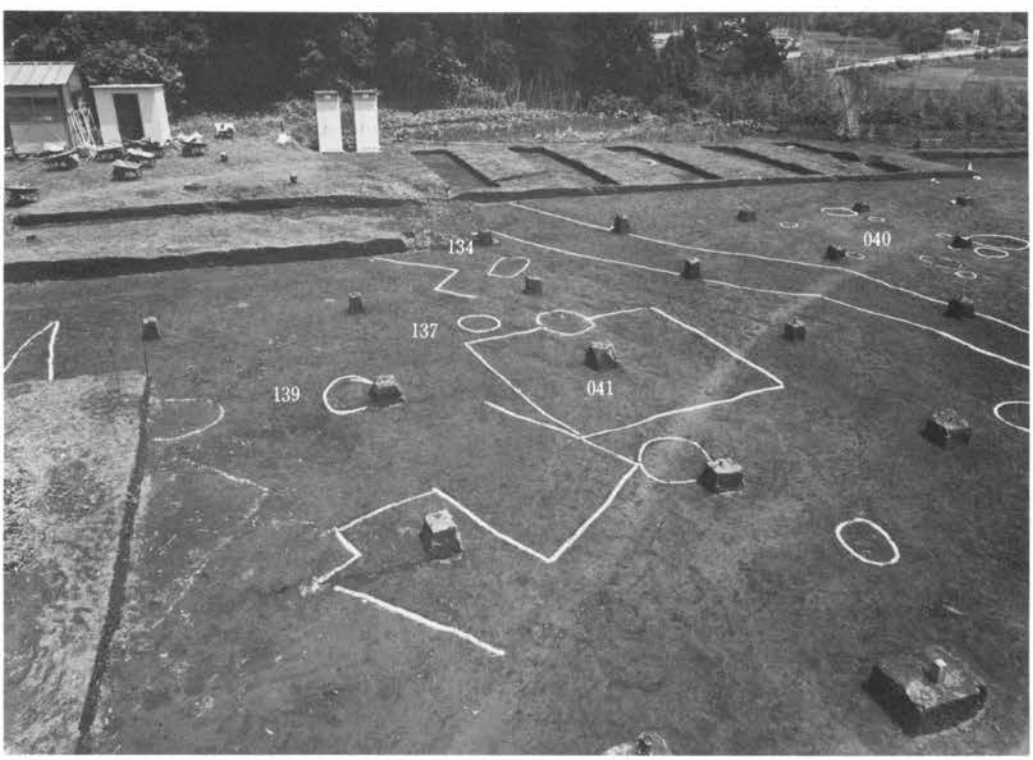
1.　遺構検出状況　　北西より

2.　遺構検出状況　　北より

図版　15



1．　遺構検出状況　　西より



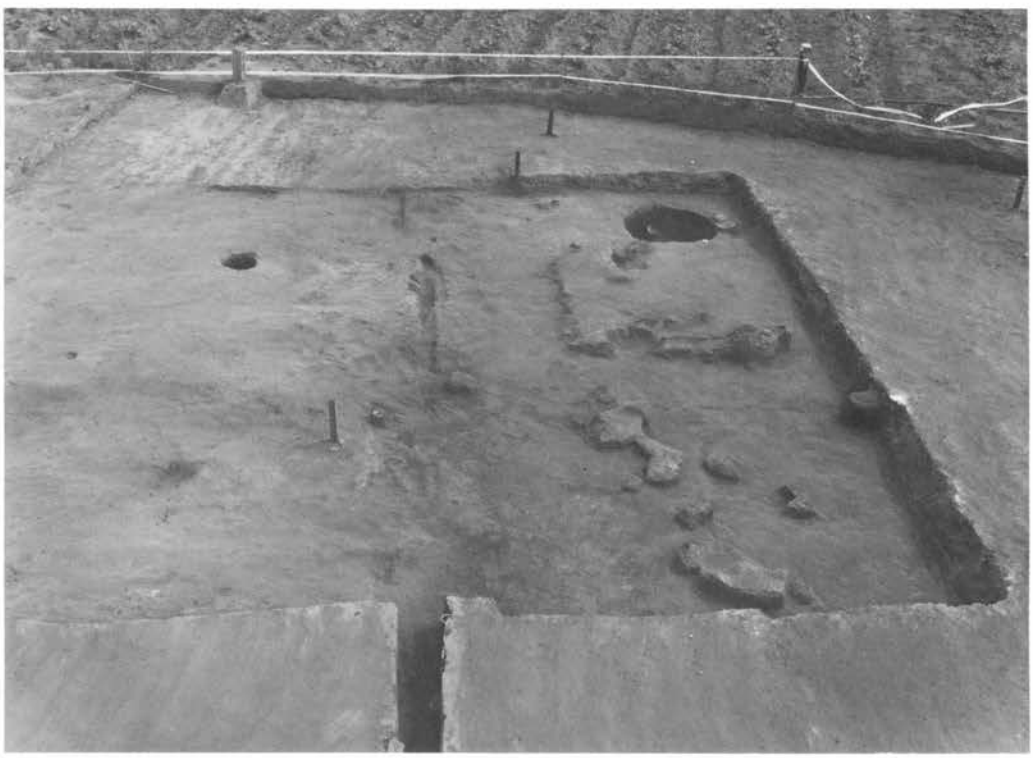
2．　遺構検出状況　　南より

図版　16

1.　調査後近景（部分）　　西より

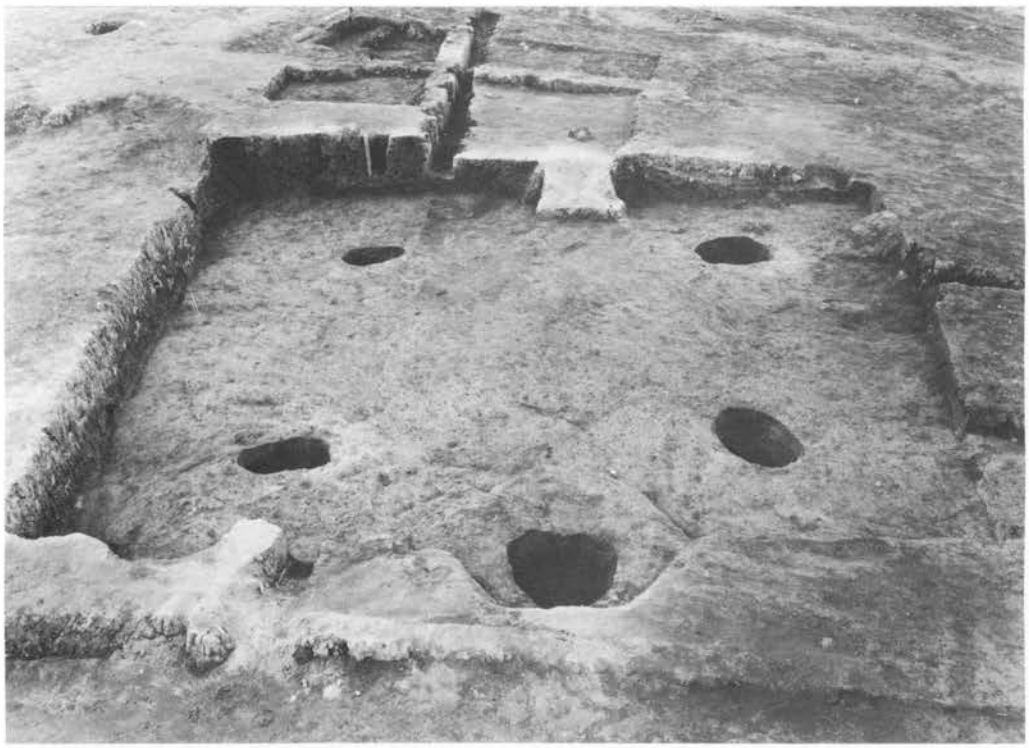
2.　調査後近景（部分）　　東より

1.　001号跡完了全景　　北より

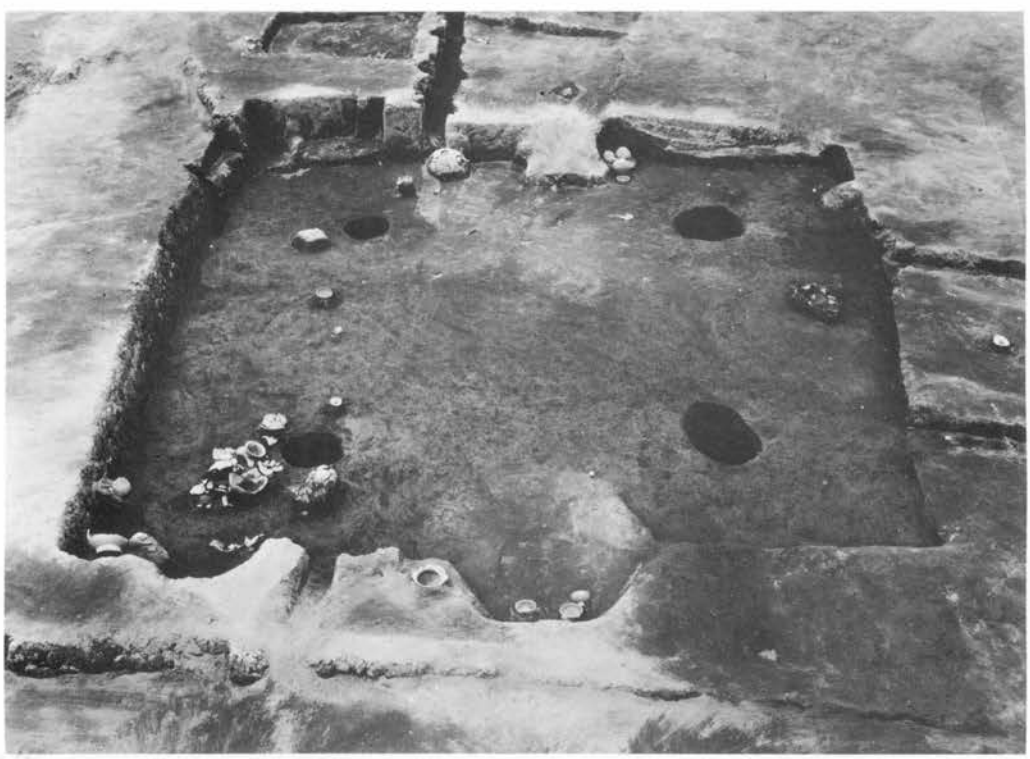


2.　同　遺物出土状況　　北より

図版　18



1．　002号跡完了全景　　南より



2．　同　遺物出土状況　　南より

図版　19

1．　002号跡遺物出土状況（カマド右脇）　　東より

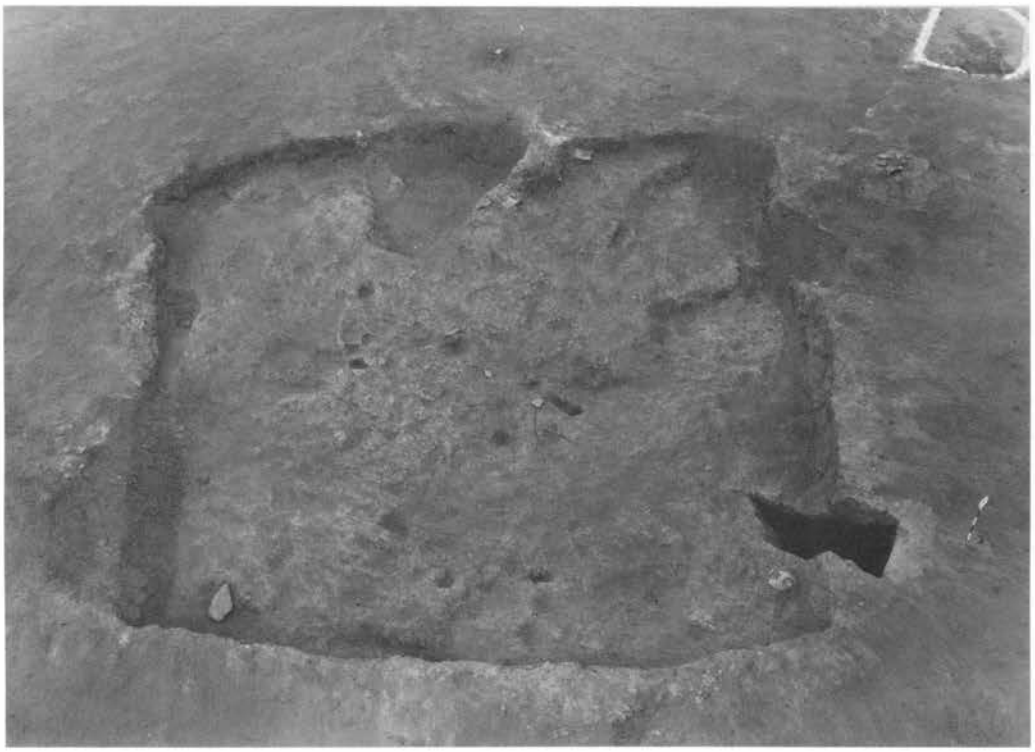
2．　同　（カマド左脇）　　南西より

図版　20

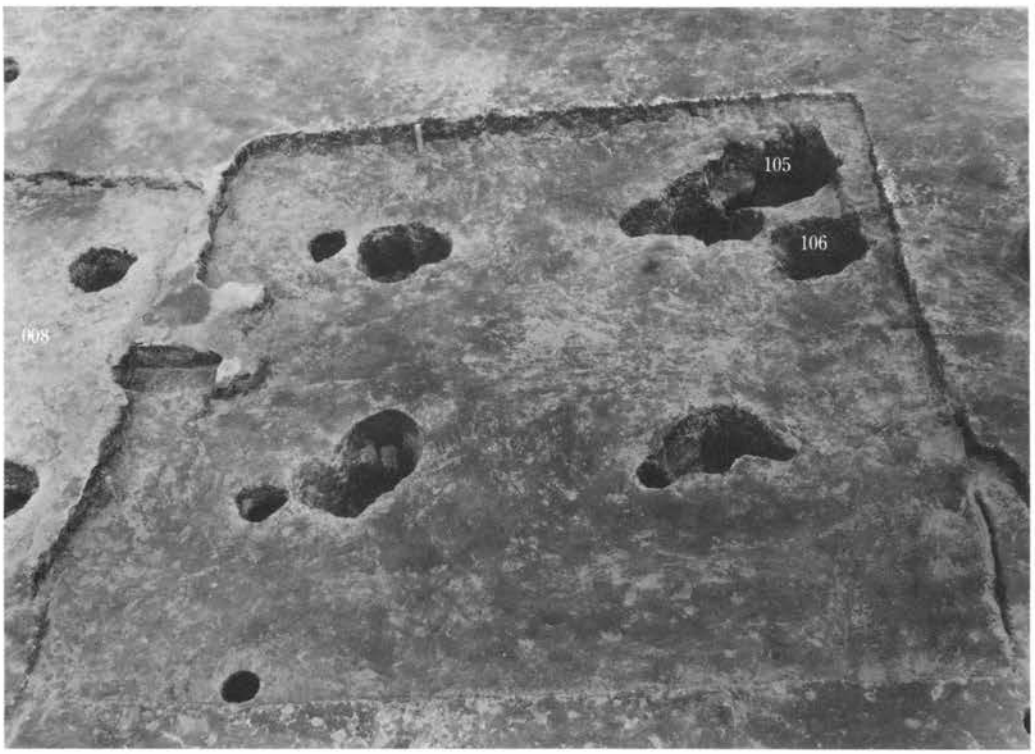
1．　002号跡遺物出土状況（貯蔵穴上）　　北西より

2．　同　（南西隅）　　北より

図版　21



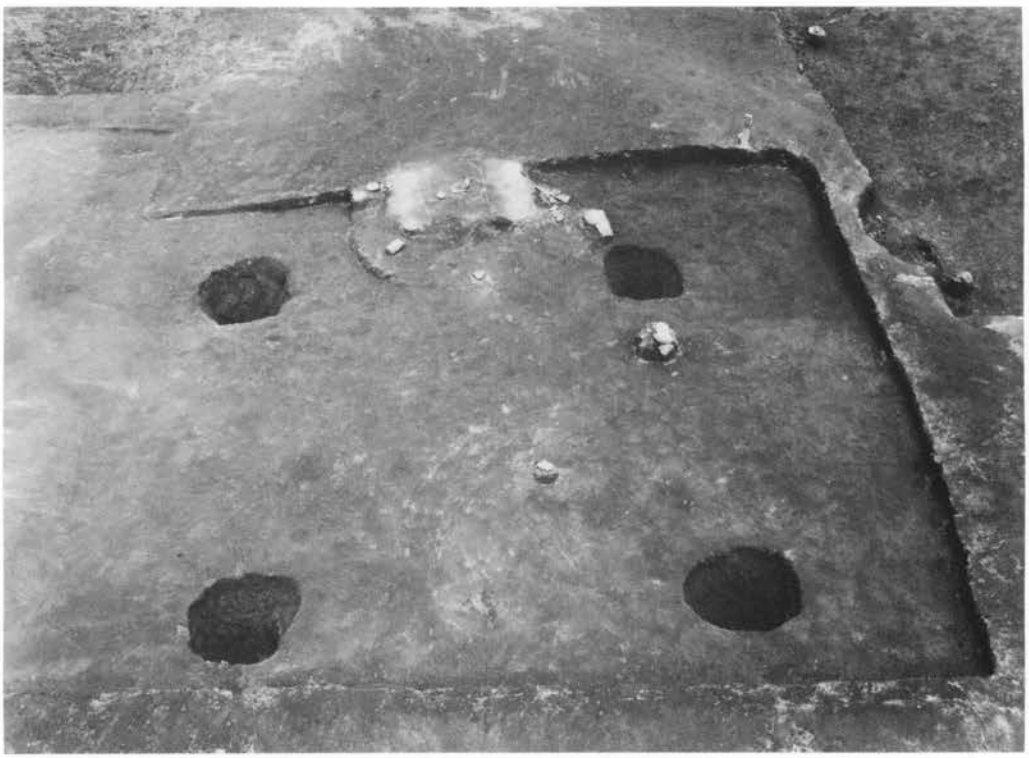
1．　003号跡完了全景　　南東より



2．　006号跡完了全景　　西より

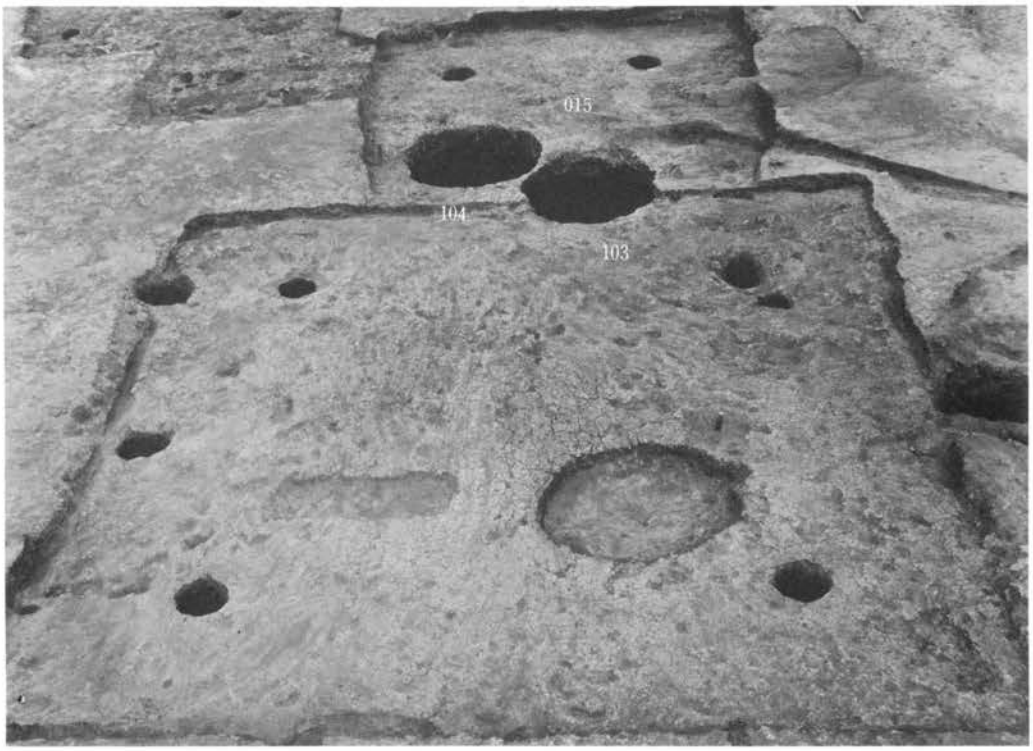
図版　22

1．　007号跡完了全景　　東より

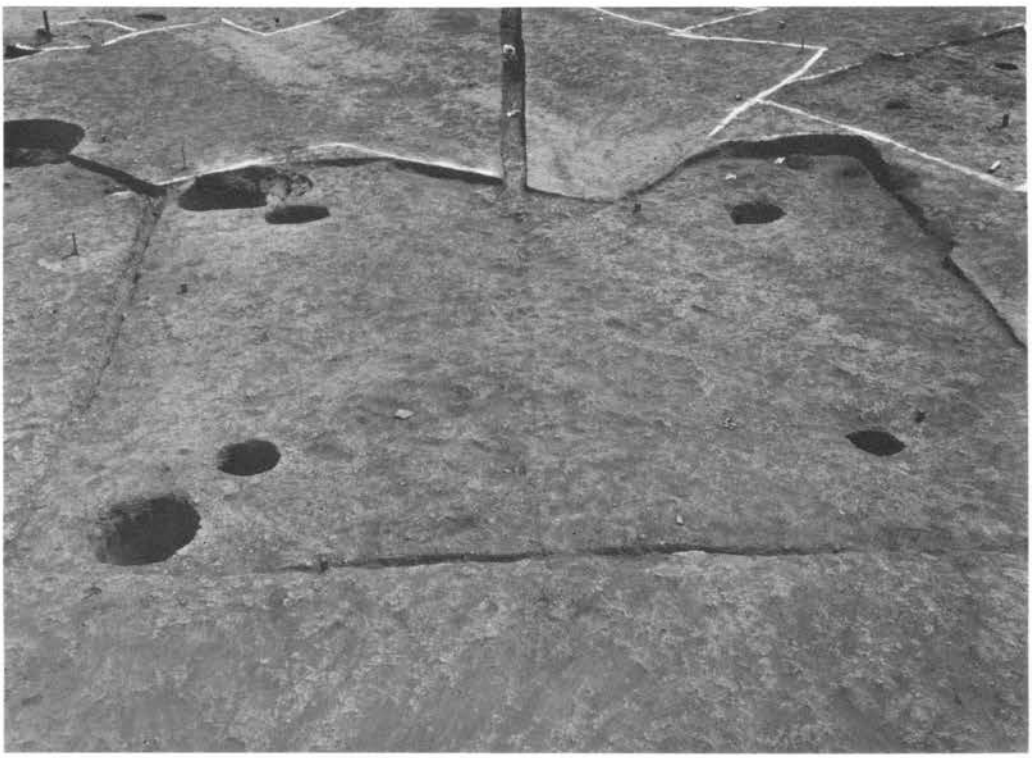


2．　008号跡完了全景　　南より

図版　23

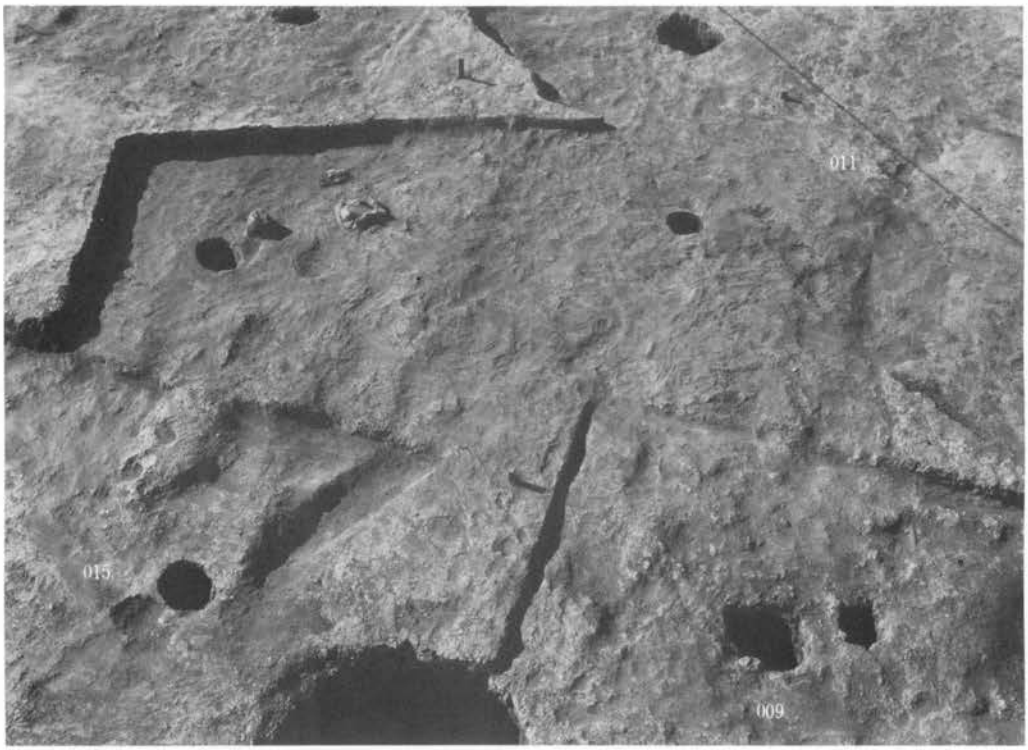


1．　009号跡完了全景　　東より

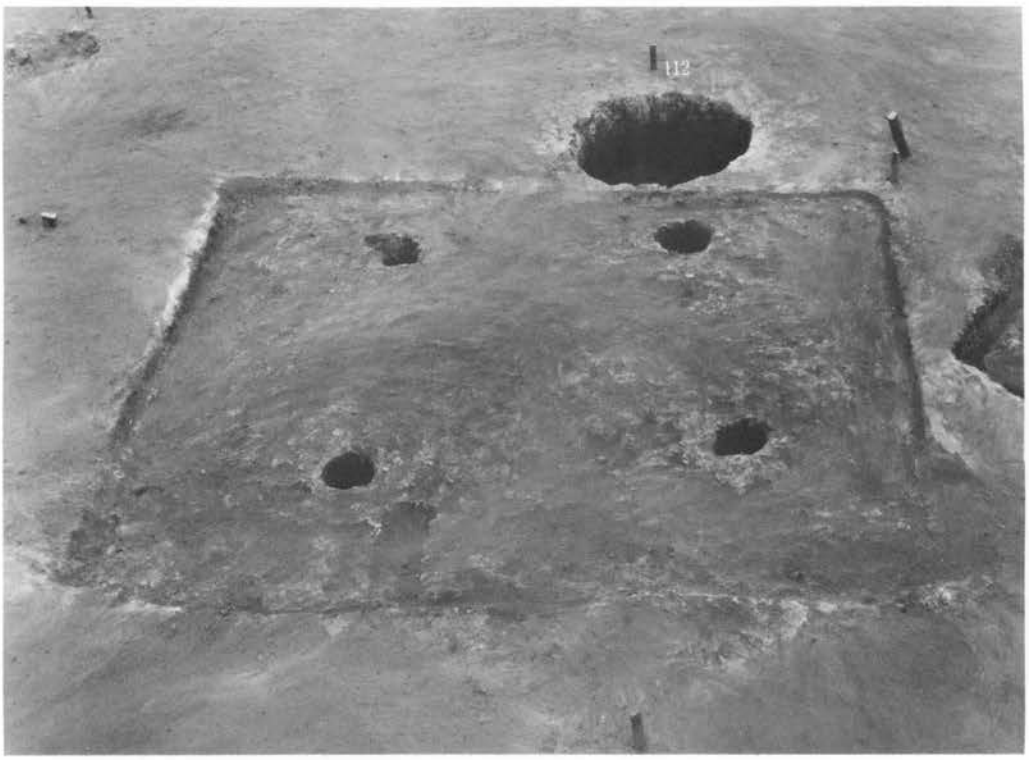


2．　011号跡完了全景　　北東より

図版　24



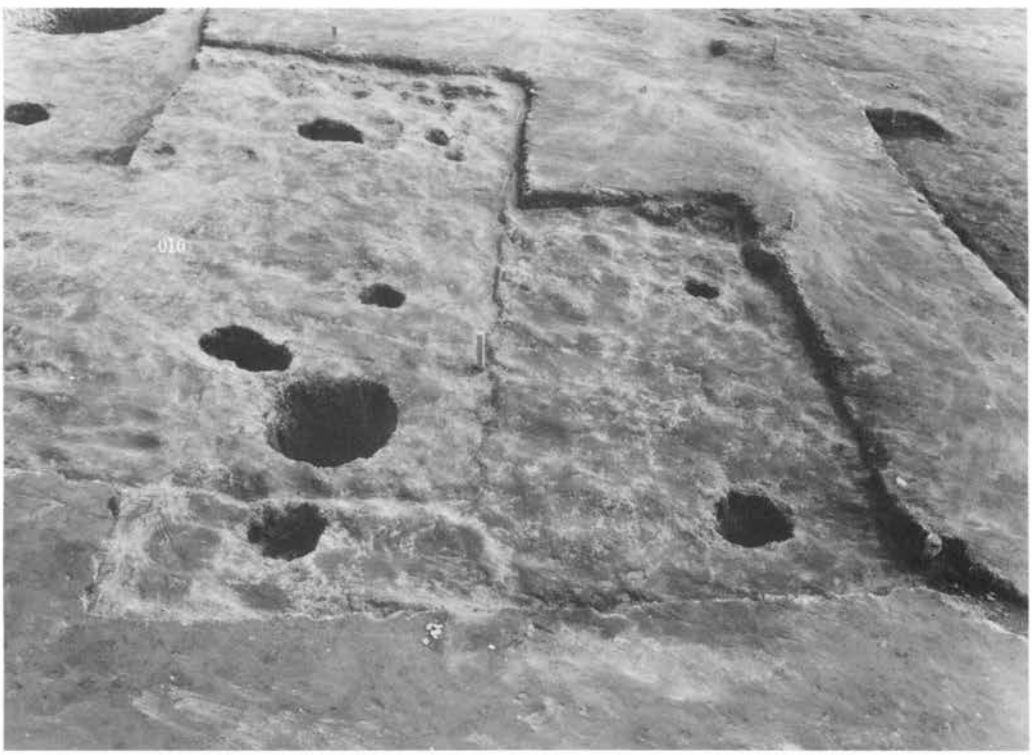
1.　012号跡完了全景　　南より



2.　013号跡完了全景　　南より

図版　25

1.　015・016号跡完了全景　　西より

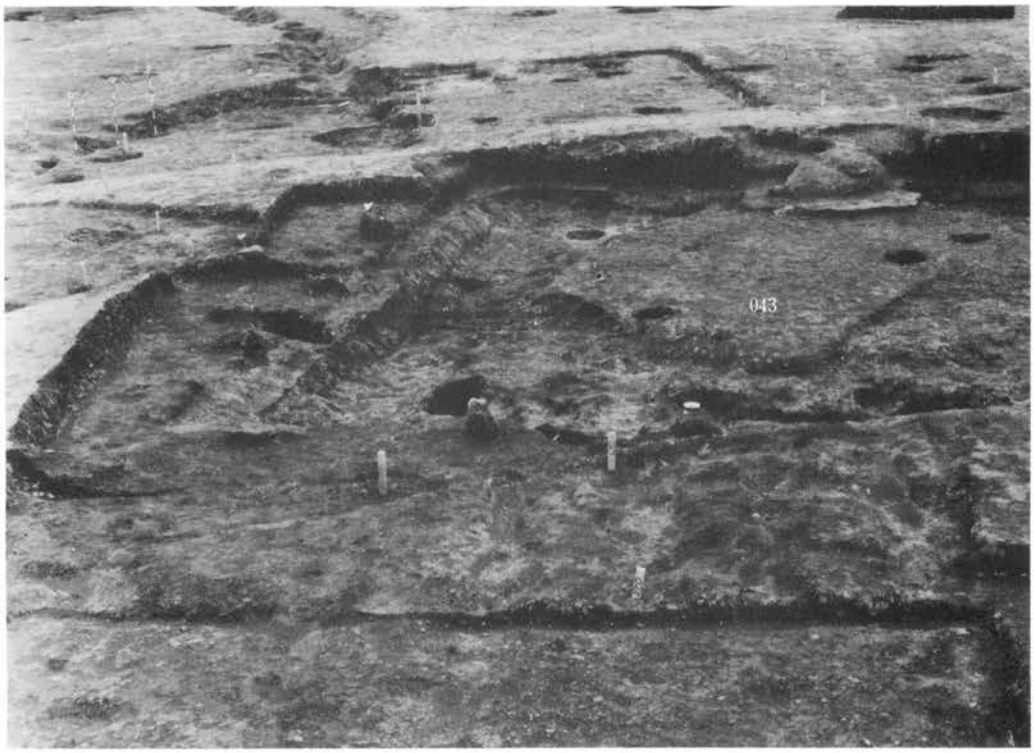


2.　017号跡完了全景　　西より

1．　018・020号跡完了全景　　西より

2．　019号跡完了全景　　南西より

図版　27

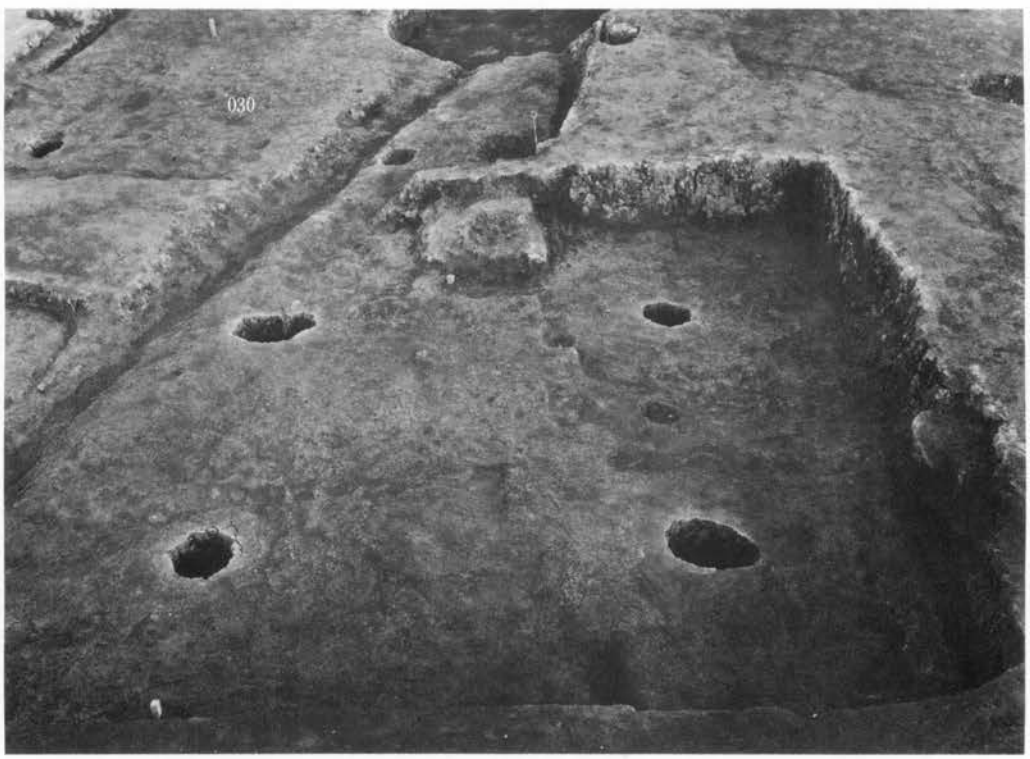


1.　023・025号跡完了全景　　南より

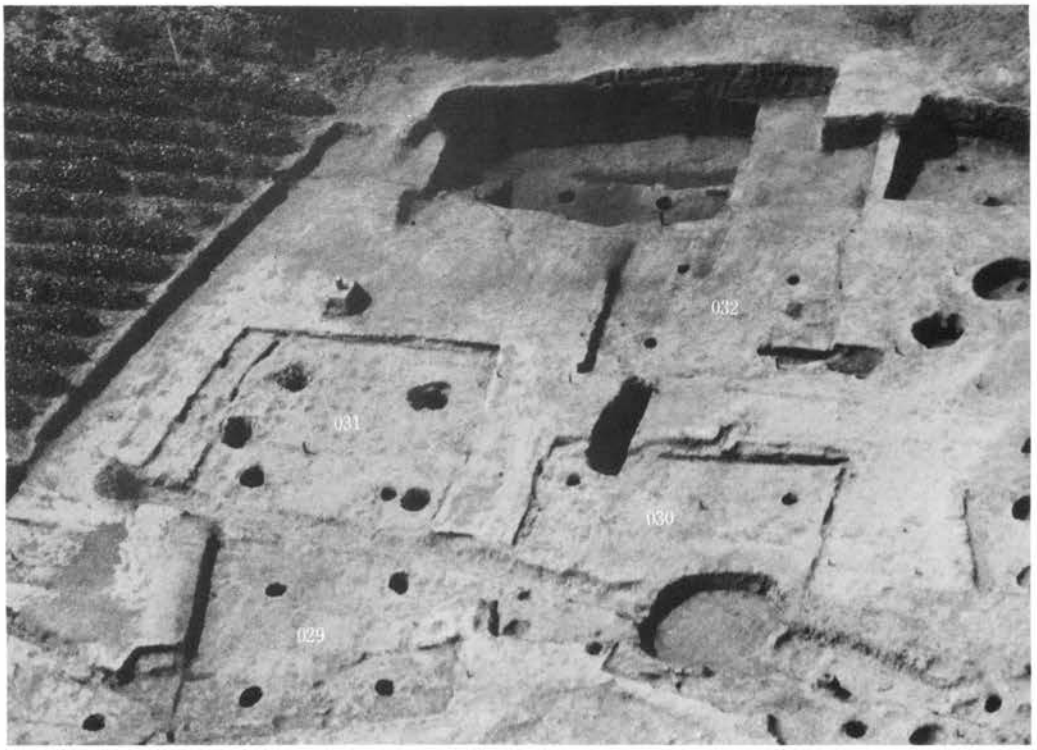
2.　026号跡完了全景　　南東より

図版　28

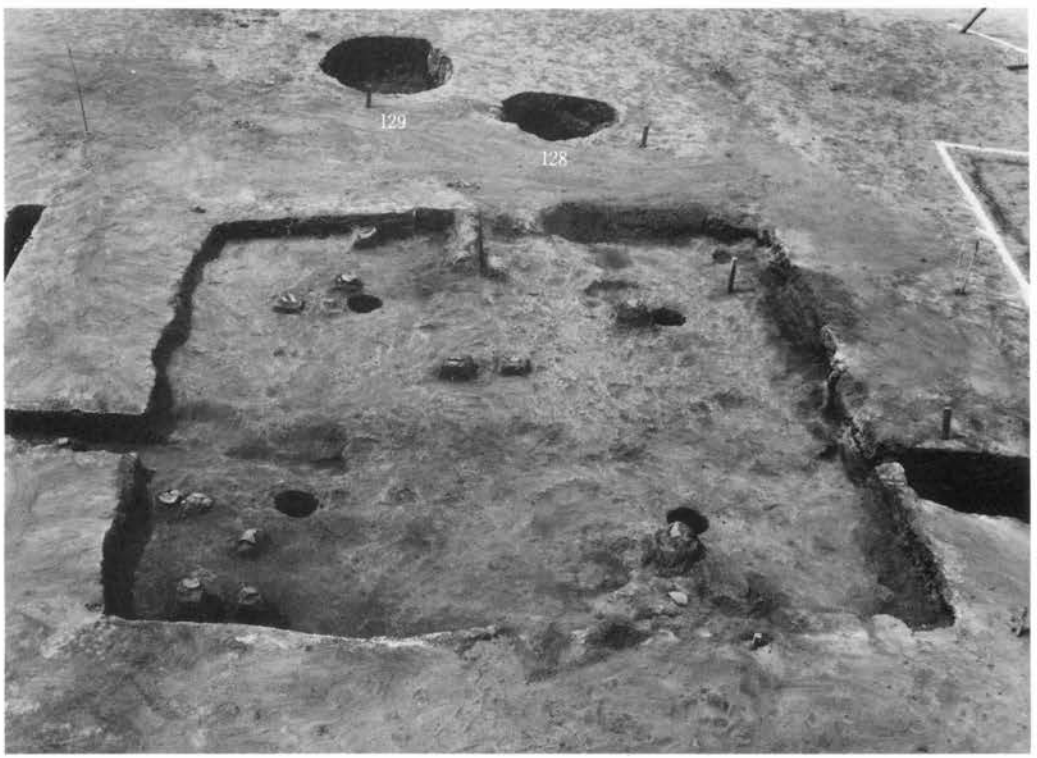
1．　028号跡完了全景　　東より



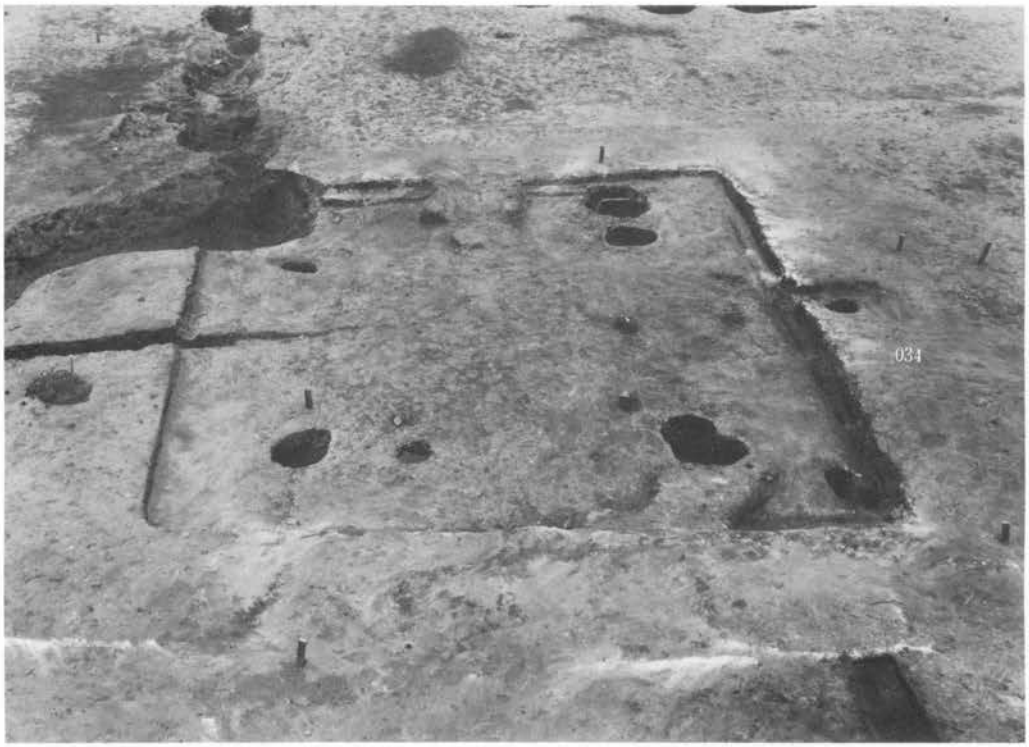
2．　029号跡完了全景　　南より



1.　030・031号跡完了全景　　東より



2.　032号跡完了全景　　南より

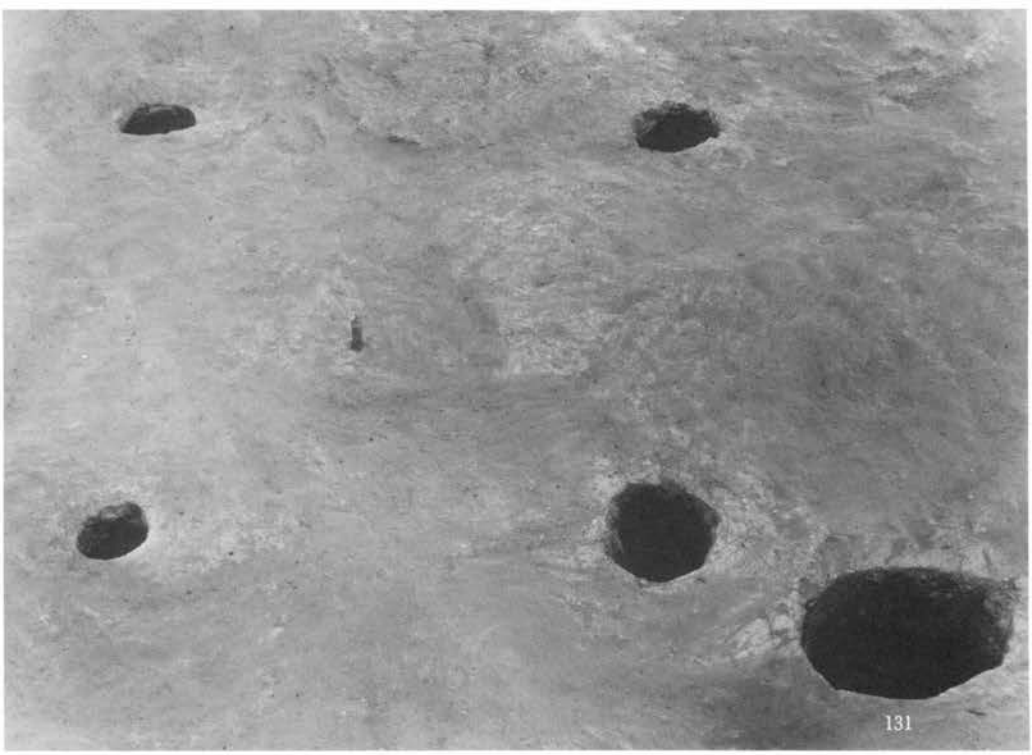


1.　033号跡完了全景　　南より

2.　035・037号跡完了全景　　南東より

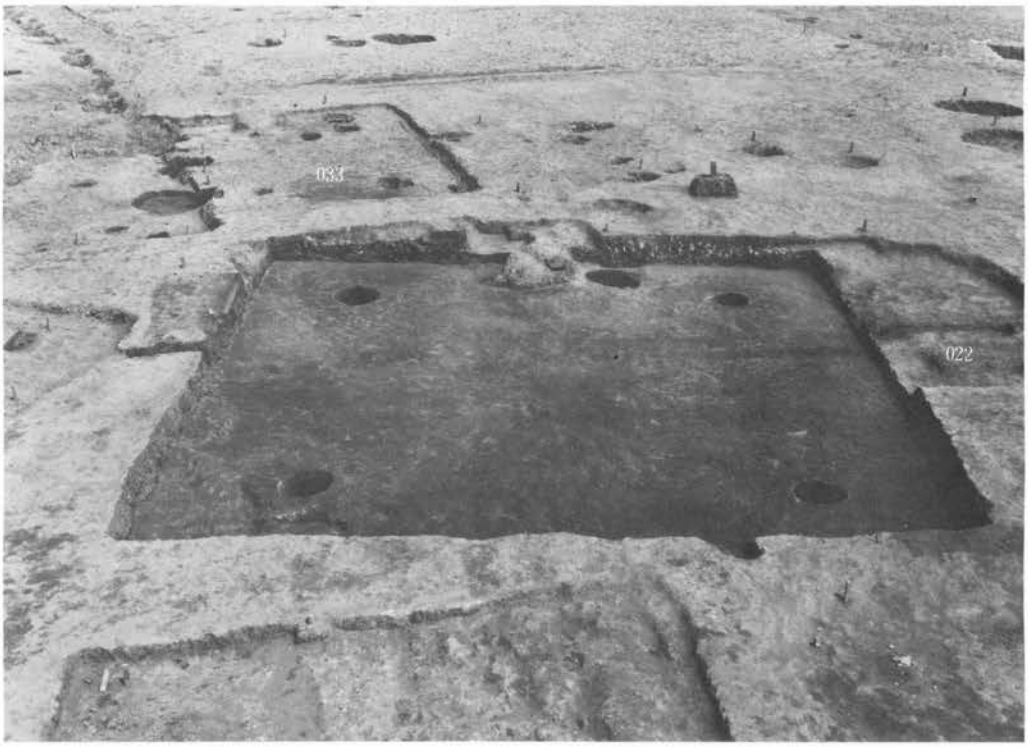
図版　31

1．　040号跡完了全景　　南より

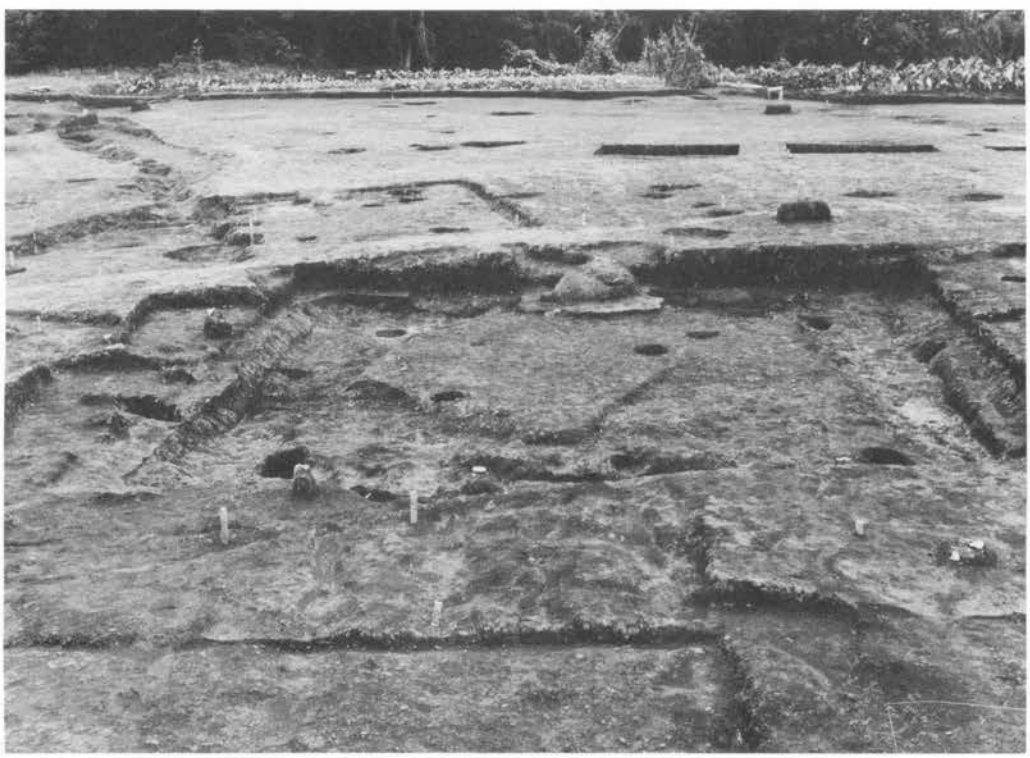


2．　041号跡完了全景　　南より

図版　32



1．　043号跡完了全景　　南より



2．　同　掘形検出状況　　南より

図版　33

1．　046号跡完了全景　　北東より

2．　047号跡完了全景　　南東より

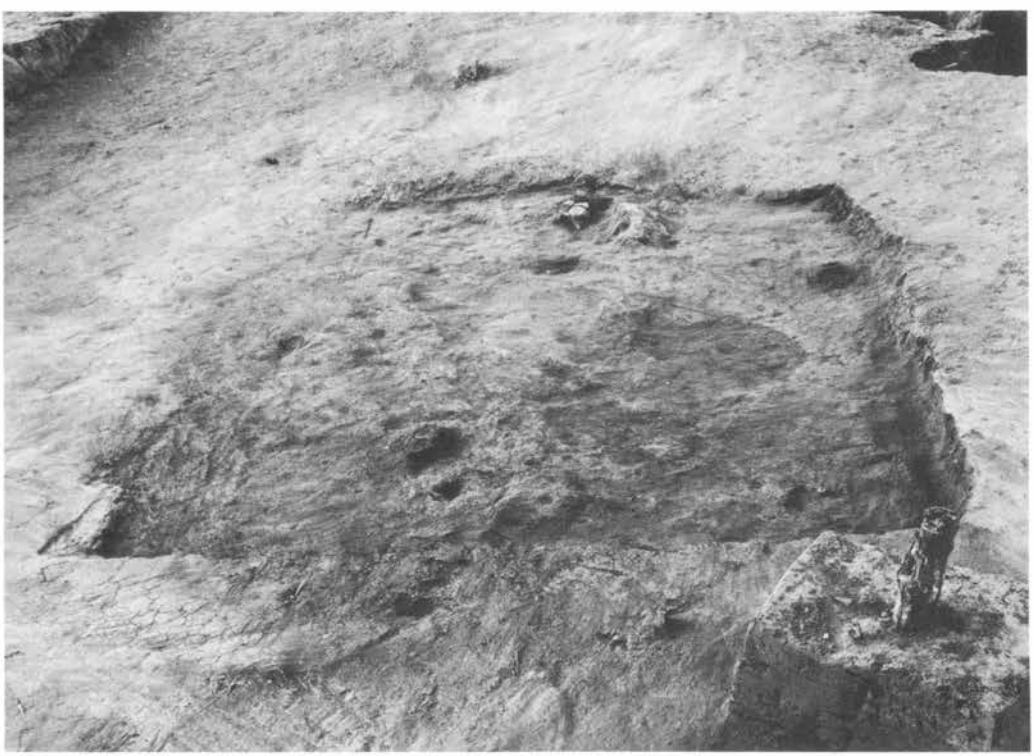
図版　34

1.　049号跡完了全景　　東より

2.　051号跡完了全景　　西より

図版　35

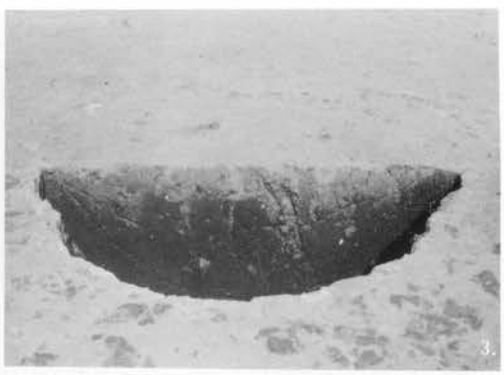
1．　052号跡完了全景　　南より

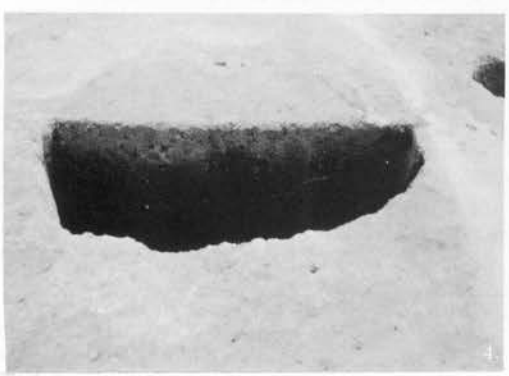


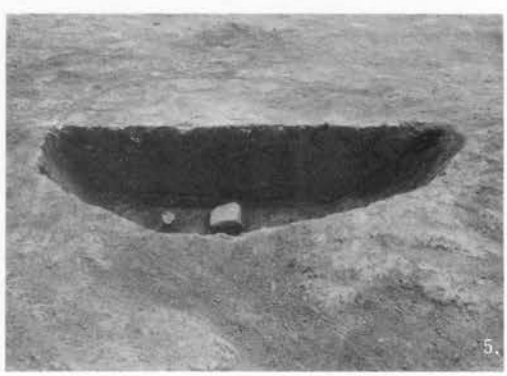
2．　053号跡完了全景　　南東より

図版　36

1.　101号跡遺物出土状況　　南東より







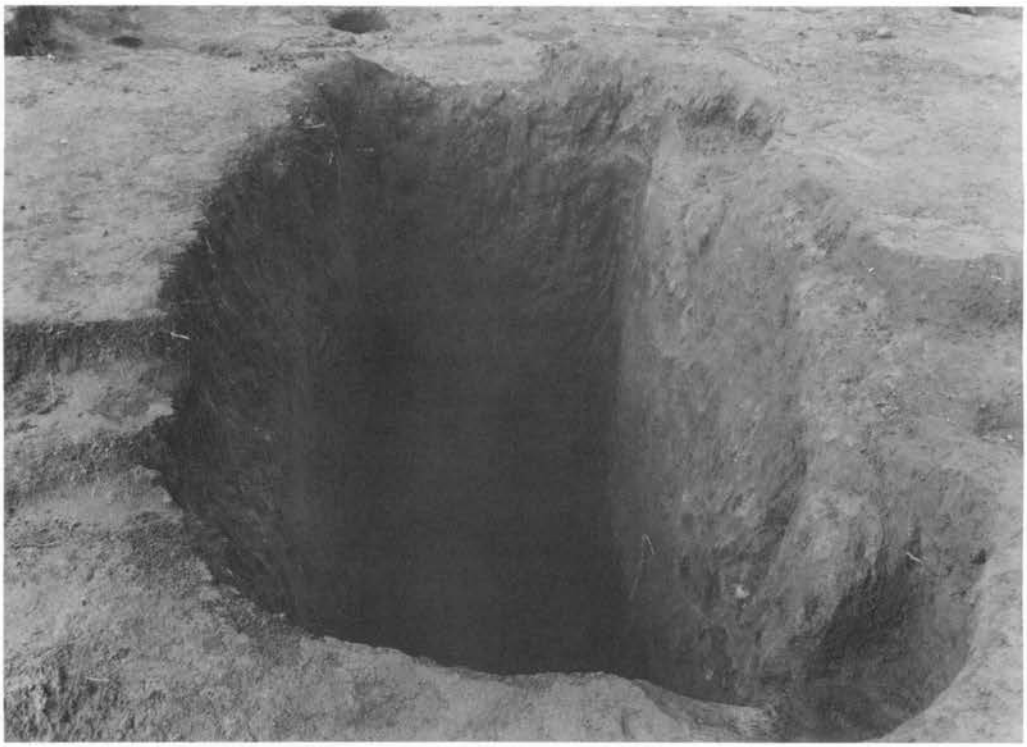
2.　109号跡遺物出土状況　3.　110号跡　4.　112号跡　5.　116号跡　各土層断面

図版　37

1．126号跡完了全景　　北西より

2．同　土層断面　　西より

図版　38



1．　127号跡完了全景　　東より

2．　130号跡完了全景　　南より

図版　39

1．　132号跡遺物出土状況　　北東より

2．　133号跡遺物出土状況　　南より

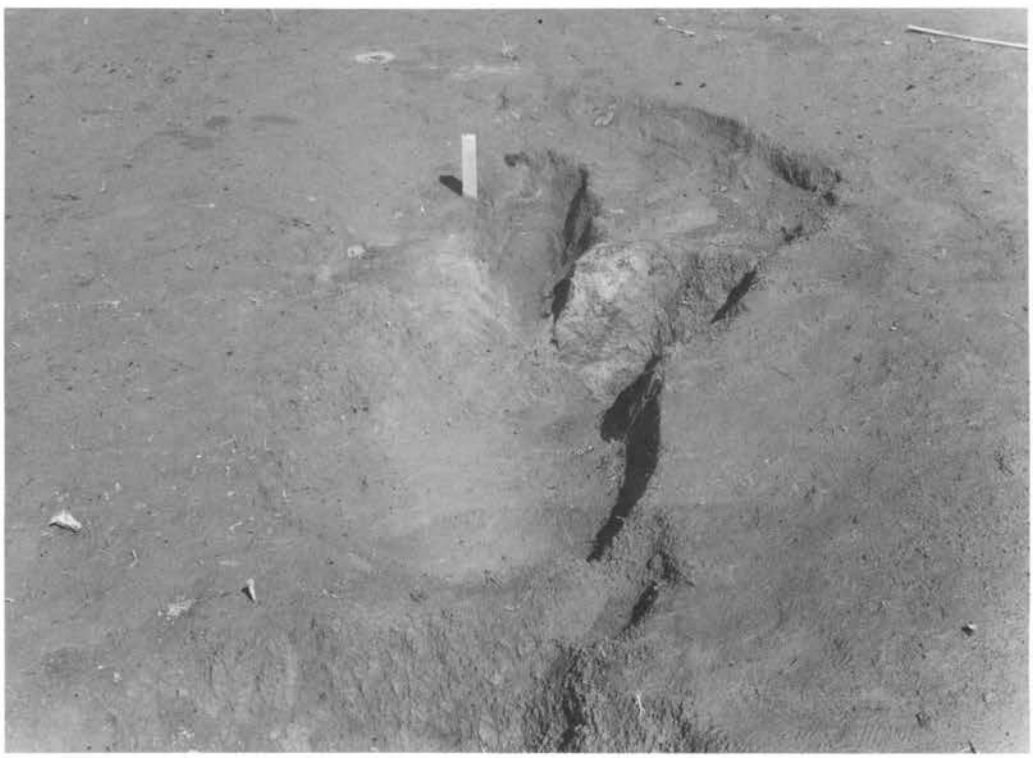
図版　40

1．　134～139号跡遠景　　南より

2．　134号跡遺物出土状況　　北西より

図版　41

1．　135号跡完了全景　　南東より



2．　136号跡完了全景　　南より

図版　42

1．　137号跡完了全景　　北より

2．　同　遺物出土状況　　東より

1．　138号跡遺物出土状況　　西より

2．　139号跡完了全景　　南東より

図版　44

1.　140号跡人骨出土状況　　西より

2.　141号跡人骨出土状況　　南より

図版　45

00201

00206

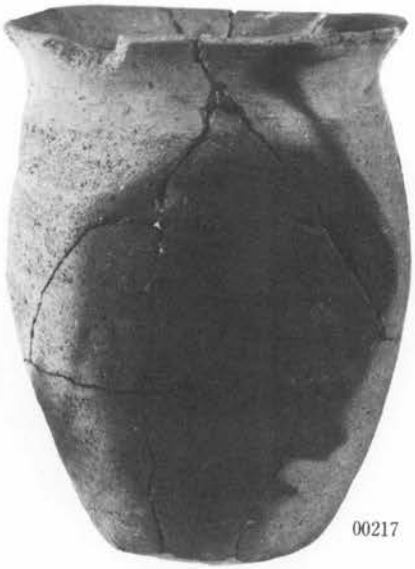
00207

00202

00220

00221

002号跡出土土器


00217

00218

00223

00224

00222

00226

002号跡出土土器

図版　47

00231

00233

00232

00234

00227

00246

00230

00219

00229

002号跡出土土器

図版　48

00235

00241

00237

00242

00238

00243

00239

00244

00240

00245

00101

00303

001・002・003号跡出土土器

00604

00901

00803

01203

00804

01402

01903

02601

01101

01902

01905

006・008・009・011・012・014・019・026号跡出土土器

図版　50

02903

03003

02904

03203

03204

02005

03302

02001

02004

020・029・030・032・033号跡出土土器

図版　51

04101

04306

03601

04304

04309

04310

04502

04313

04601

036・041・043・045・046号跡出土土器

図版　52

05107

04701

05108

05110

05109

05106

05103

05104

05102

047・051号跡出土土器

05303

10109

10107

10110

10108

10111

10115

10102

10101

053・101号跡出土土器

10702

10701

12701

12705

12708

04504

00252

00253

107・127号跡出土土器・遺構出土土製品

00706

02908

04702

05117

05118

05119

13801

04703

03005

05304

05116

04602

00902

05115

05305

図版　56

01102

01103

02009

04201

10118

00707

03206

03901

04316

01506

04317

03701

05120

04505

05306

遺構出土石製品

図版　57

132

135

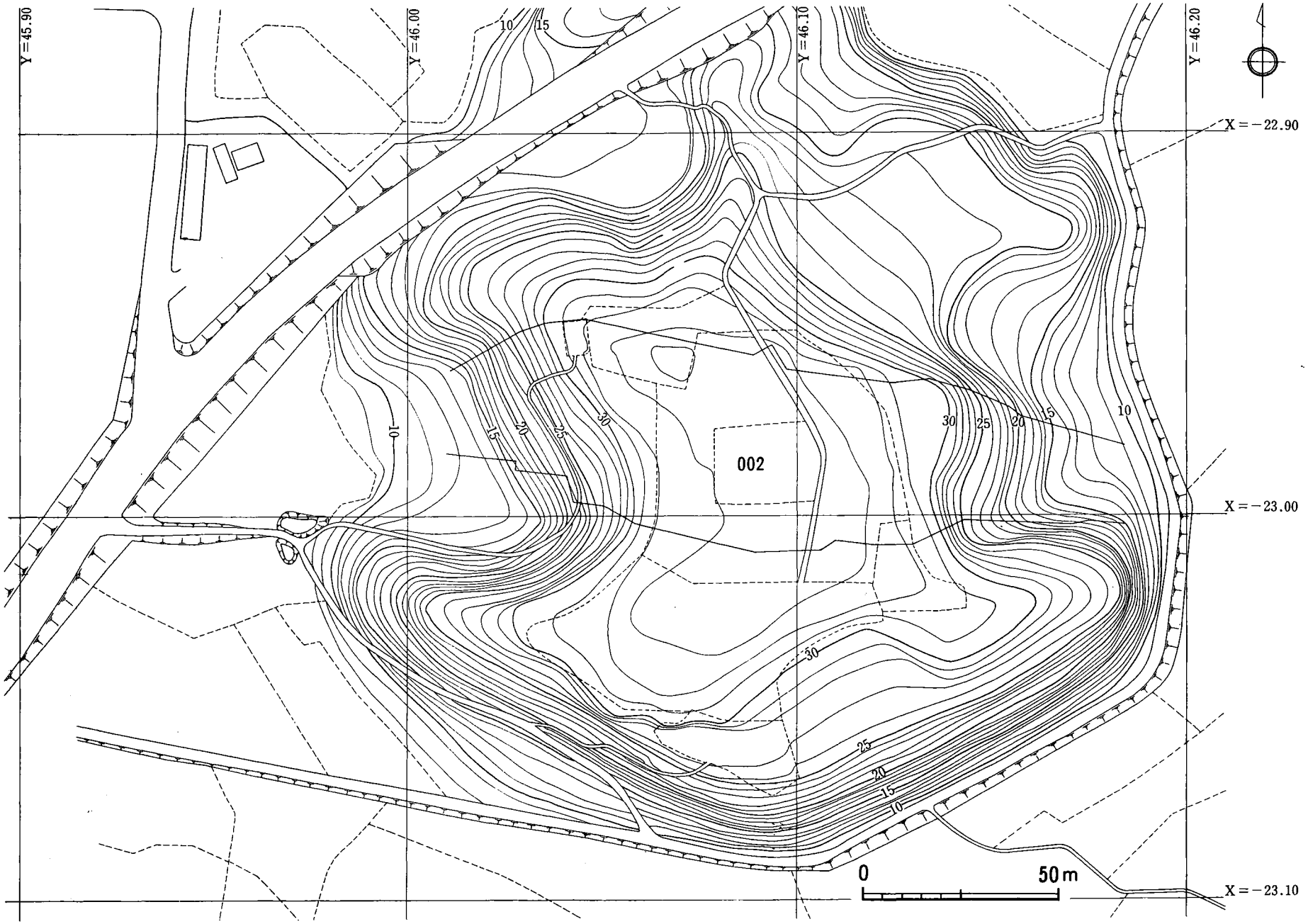
137

140

141

048

遺構出土古銭



第10図　野毛平高台遺跡周辺地形図

第12図　野毛平高台遺跡全体図

昭和55年3月29日　印刷
昭和55年3月31日　発行

成田新線建設事業地内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ

発行　日本鉄道建設公団　東京支社
東京都港区芝5－33－8
財団法人　千葉県文化財センター
千葉県千葉市亥鼻1－3－13
電話　0472（25）6478

印刷　株式会社　弘　文　社
千葉県市川市市川南2－7－2

正　誤　表

頁	行	誤	正
例言	2	浅間台古墳・野毛平高台遺跡	浅間台古墳・野毛平高台遺跡
4	13	(註6)	(註7)
10	6	「U)	「U」
13	20	截円錘状	截円錐状
21	13	主要は	主要な
41	32	程正方形	ほぼ正方形
62	4	1.	4.
62	5	2. 3. 4. 5.	5. 6. 7. 8.
74	28	平面	底面
76	2. 3の間	脱落	・125号跡（第47図）
83	22	わずがに	わずかに
97	15	坩形の土担土器	坩形の手担土器
111	11	截円錘形	截円錐形
113	9	截円錘形	截円錐形